東京大学構内遺跡調査研究年報 12

2017・2018 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学構内遺跡調査研究年報 12

2017・2018 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

例　　言

1．本書は 2017 年 4 月 1 日から 2019 年 3 月 31 日までに東京大学埋蔵文化財調査室が実施した、埋蔵文化財発掘調査およびそれに関わる研究、教育、普及などの諸活動をまとめた東京大学構内遺跡調査研究年報である。

2．上記期間に行った発掘調査のうち、埋蔵文化財が確認できたものについてその略報を第 1・2 部に掲載した。

3．遺構の略号は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所で採用している方式を参照し、前に遺構の性格、後ろに各調査地点ごとに 1 から通し番号を付与した。前に付した遺構番号の性格の略称は、個々の報告の凡例を参考にされたい。

4．本年報の作成は室員があたり、追川吉生が編集を行った。

5．本年報に添付した CD-ROM には、印刷本と同内容の電子版（PDF 形式）を収録している。

6．本書掲載・収録の諸データは、営利を伴わない学術目的の個人論文などを除いて無断転載を禁止する。

7．発掘調査に伴う出土遺物等は、東京大学埋蔵文化財調査室が、東京大学駒場Ⅰキャンパス（東京都目黒区駒場 3-8-1）、東京大学駒場Ⅱリサーチキャンパス（東京都目黒区駒場 4-6-1）、東京大学工学系研究科柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡 414）において管理、運用、保管を行っている。

目　　次

例　　言
目　　次
年報編
東京大学構内遺跡の調査 …… 1
東京大学構内遺跡調査一覧 …… 2

第１部　2017 年度調査室事業概要
第Ⅰ章　埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）…… 15
第１節　本郷地区の事前調査
1. 本郷 125　クリニカルリサーチセンター A 棟（16 区・17 区）（HCRA12） …… 17
2. 本郷 244　基幹環境整備（言問通り横断管路）（HKO18） …… 25
第２節　駒場Ⅰ構内の事前調査
1. 駒Ⅰ 37　駒場仮体育館（KKT18） …… 28
第３節　駒場Ⅰ構内の試掘調査
1. 駒Ⅰ 38　駒場体育館 …… 32
第Ⅱ章　調査資料の整理・研究および公開・活用
第１節　調査資料の整理
1. 整理事業概要 …… 37
2. 外部委託 …… 37
第２節　調査・研究成果の公開・活用
1. 報告書・年報 …… 37
2. 広報活動 …… 37
3. 研究活動 …… 37
4. 資料の提供・貸出 …… 38
附　埋蔵文化財調査室要項
埋蔵文化財調査室規則 …… 42
埋蔵文化財調査室組織表 …… 42

第２部　2018 年度調査室事業概要
第Ⅰ章　埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会） …… 45
第１節　本郷地区の事前調査
1. 本郷 245　クリニカルリサーチセンター B 棟（HCRB18） …… 47
2. 本郷 266　基幹環境整備（電気管路）（HKD18） ……53
第２節　駒場Ⅰ構内の事前調査
1. 駒Ⅰ 42　駒場新体育館（仮称）新営に伴う機械設備支障配管切廻し（KTS18） …… 57
2. 駒Ⅰ 43　駒場新体育館新営（KSK18） …… 60

第Ⅱ章　調査資料の整理・研究および公開・活用
第１節　調査資料の整理
1. 整理事業概要 …… 70
2. 外部委託 …… 70
第２節　調査・研究成果の公開・活用
1. 報告書・年報 …… 70
2. 広報活動 …… 70
3. 教育普及活動 …… 70
4. 研究活動 …… 71
5. 資料の提供・貸出 …… 72
附　埋蔵文化財調査室要項
埋蔵文化財調査室規則 …… 75
埋蔵文化財調査室組織表 …… 75

報告編
東京大学構内遺跡発掘調査報告
東京大学駒場Ⅰ構内の遺跡　駒場コミュニケーションプラザ地点発掘調査報告 …… 79

紀要編
加賀藩龍口上屋敷の絵図について　増田晴夫 …… 169

年　報　編

2017・2018 年度

東京大学構内遺跡の調査

東京大学は、農学生命科学研究科附属演習林を併せると全国 21 都道県におよび、326,809,180㎡を所有（一部借入）している。このうち本郷（東京都文京区）、駒場（東京都目黒区）、柏（千葉県柏市）の 3 地区を拠点キャンパスと位置付けている。本郷地区は本郷、弥生、浅野の 3 キャンパス全体で 559,176㎡、駒場地区はⅠ（教養学部）、Ⅱ（リサーチキャンパス）全体で 352,180㎡、柏地区は 412,291㎡を所有している。また、その他周知の遺跡として登録され、現在までに試掘を含め調査を実施した所有地に、研究関連施設では理学系研究科附属植物園本園、農学生命科学研究科附属小石川樹木園、総合研究博物館小石川分館が所在する白山地区（東京都文京区、160,787㎡）、医科学研究所が所在する白金地区（東京都港区、68,906㎡）、理学系研究科附属臨海実験所（神奈川県三浦市、68,737㎡）、福利厚生関連施設では追分国際学生宿舎（東京都文京区、1576㎡）、白金学寮（東京都港区、2,453㎡）、三鷹市国際学生宿舎（東京都三鷹市、29,438㎡）、検見川総合運動場（千葉県千葉市、273,027㎡）、目白台国際宿舎（仮称　東京都文京区、28,509.35㎡ ）がある。

本郷地区では旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代（早期末～前期集落・後晩期包蔵地）、弥生時代（後期集落）、古墳時代（前～後期集落）、平安時代（集落）、江戸時代（大名屋敷・武家地・町地・寺社地）、近代にわたる大規模複合遺跡群で、「文京区 No.47 本郷台遺跡群」として登録されている。また、その一部（浅野地区内）は、「文京区 No.28 弥生町遺跡群」として登録され、1975 年に文学部考古学研究室、理学部人類学教室が合同調査を行った「向ヶ岡貝塚」（No.28-C 地点）は、1976 年に国史跡に指定されている。

駒場地区のうち駒場Ⅱキャンパスは、近年の再開発に伴い構内の試掘調査を実施しているが、遺跡は確認されていない。駒場Ⅰキャンパスは、旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代（早期集落）、平安時代、近世（農村）の遺跡が確認され、キャンパス全体が「目黒区 No.1　東京大学駒場構内遺跡」として登録されている。

柏地区（現状所有範囲）は開発前に千葉県教育委員会による試掘調査が行われたが、遺跡は確認されていない。

白山地区は、すでに明治初頭、エドワード・S・モースによって貝塚の存在が紹介されており、「小石川植物園内貝塚」として周知されてきた。また、1918 年には東京府の旧跡として指定された歴史を持つ。現在では構内全域が縄文時代（前～晩期集落・貝塚）、江戸時代（大名屋敷・幕府御用地・武家地）の複合遺跡「文京区 No.81 小石川御薬園跡」、その一部が「文京区 No.21 小石川植物園内貝塚・原町遺跡」として登録されている。2012 年 9 月 19 日には「小石川植物園（御薬園跡及び養生所跡）」として、161,588.4㎡が国の史跡名勝に指定された。

医科学研究所は、旧石器時代（ブロック）、江戸時代（大名屋敷）の遺跡が確認され「港区 No.135 遺跡」として登録されている。

東京大学構内遺跡調査一覧

本郷地区調査一覧

地区	番号	年度	略称	調査名（旧略称）	調査種別	調査期間	面積（㎡）	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	1	1983	－	山上会館(U)	事前	1984.3.7～1986.7.17	1500	西田・谷・大貫	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	2	1984	HHB	法学部4号館(法)・文学部3号館(文)	事前	1984.4.1～1985.3.31	2500	大塚	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
本郷	3	1985	HGS	御殿下記念館(G)	事前	1985.7.29～1987.6.30	6000	寺島・大貫・倉林	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	4	1984	HHC	医学部附属病院中央診療棟(病中)・設備管理棟(エネセン)・給水設備棟(給水)・共同溝(共同溝)	事前	1984.10.1～1987.3.31	7700	藤本・小川	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 医学部附属病院地点』
本郷	5	1984	HS7	理学部7号館(理D)	事前	1985.2.1～10.8	750	羽生	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 理学部7号館地点』
本郷	6	1986	－	文京区湯島4丁目～弥生2丁目地先間 配水管布設替	立会	1986.5.12～7.20	－	寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	7	1987	－	新タンデム棟(タンデム)	試掘	1988.2.15～17	28	成瀬・武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	8	1987	－	弥生門脇変電施設	立会	1987.12.15～16	－	武藤	近世
本郷	9	1985	－	農学部家畜病院	試掘	1985.8.1～26	87	西田	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	9	1989	VMC	農学部家畜病院	事前	1990.1.31～3.14	1040	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	10	1990	HG	医学部附属病院外来診療棟	事前	1990.6.27～1991.2.21	5500	成瀬・堀内・武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 医学部附属病院外来診療棟地点』
本郷	11	1991	－	農学部ガラス室	試掘	1991.8.12～13	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	12	1992	－	農学部図書館	試掘	1992.10.21	4	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	12	1992	FAL	農学部図書館	事前	1993.3.9～3.25	408	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	13	1990	－	農学部7号館A棟Ⅰ期	試掘	1991.1.6～7	8	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	13	1992	FA792	農学部7号館Ⅰ期	事前	1992.10.6～11.16	1170	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	14	1992	K14	工学部14号館(工14)	事前	1992.11.26～1993.2.23	1785	成瀬・堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 工学部14号館地点』
本郷	15	1988	－	薬学部新館	試掘	1988.8.3～5	－	寺島	近世
本郷	15	1992	YS	薬学部新館	事前	1992.10.21～12.18	1300	堀内・寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	16	1993	－	農学部7号館Ⅱ期	試掘	1993.4.27	15	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	16	1993	FA793	農学部7号館Ⅱ期	事前	1993.11.3～26	1000	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	17	1993	－	工学部1号館	試掘	1993.5.25	16	武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6 工学部1号館地点』
本郷	17	1993	FE1	工学部1号館	事前	1993.12.6～1994.2.10	616	武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6 工学部1号館地点』
本郷	18	1993	－	教育学部総合研究棟	試掘	1993.4.28	15	武藤	近世
本郷	18	1993	SK	教育学部総合研究棟	事前	1993.11.18～12.28	1007	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・IML地点』
本郷	19	1993	HN	医学部附属病院看護師宿舎	事前	1993.8.4～1994.1.17	746	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	20	1993	TUM	総合研究博物館新館	事前	1994.2.14～4.8	600	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書11 総合研究博物館新館地点』
本郷	21	1993	MRI	医学部附属病院MRI-CT棟	事前	1994.1.18～3.12	400	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	22	1994	－	山上会館龍岡門別館	試掘	1994.4.15	3	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	22	1994	HF	山上会館龍岡門別館	事前	1994.8.17～10.17	593	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	23	1994	－	医学部附属病院病棟Ⅰ期(HWⅠ)	事前	1994.4.21～11.16	2716	成瀬・原・鮫島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	23	1994	－	医学部附属病院病棟Ⅱ期(HWⅡ)	事前	1995.1.31～1996.5.31	3380	成瀬・原・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	23	1994	HW	医学部附属病院入院棟A(病棟)	事前	1994.4.21～11.16、1995.1.31～1996.6.6	6096	成瀬・原・鮫島・大成	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	24	1994	－	医学部教育研究棟1次	試掘	1994.5.18～19	17	武藤・鮫島	近世
本郷	24	1994	－	医学部教育研究棟1次(医研1)	事前	1994.11.17～1995.4.28	1188	堀内・鮫島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	24	1996	－	医学部教育研究棟2次(医研2)	事前	1997.3.10～4.25	416	堀内・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	24	1998	－	医学部教育研究棟3次(医研3)	事前	1998.11.～12.25	180	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	24	2002	－	医学部教育研究棟4次(医研4)	事前	2002.9.3～12.25	631	堀内・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	24	1994	HIKN	医学部教育研究棟(医研)	事前	1994.11.17～1995.4.28、1997. 3.10～ 4.25、1998.11. 2～12.25、2002. 9. 3～12.25	2901	堀内・鮫島・大成	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書14 医学部研教育究棟地点』
本郷	25	1994	HND	医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場	事前	1995.1.30～3.3	45	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	26	1994	－	法文十字路外灯	立会	1994.9.5	－	成瀬・鮫島	近世
本郷	27	1994	－	理学部1号館	立会	1994.10.3～18	－	寺島	遺構・遺物なし
本郷	28	1995	FPS	薬学部資料館	事前	1995.7.24～9.1	600	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	29	1995	ACC	情報基盤センター変電室1	事前	1995.7.18～31	78	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区Ⅰ』
本郷	30	1995	AFC	工学部風工学実験室支障ケーブル地点	事前	1995.8.22～9.22	63	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区Ⅰ』
本郷	31	1995	－	ATMネットワーク施設整備	立会	1995.11.20～24	－	武藤・堀内鮫島・原	近世
本郷	32	1994	－	医学部附属病院看護師宿舎電気ケーブル埋設	立会	1995.3.2	－	原	遺構・遺物なし
本郷	33	1995	－	地震研テレメタリング地震観測施設	試掘	1995.10.18	6	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	33	1996	EQL	地震研テレメタリング地震観測施設	事前	1996.4.15～5.2	360	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	34	1996	－	野球グランド	立会	1996	－	寺島	遺構・遺物なし
本郷	35	1993	－	経済学部前路面陥没	立会	1993.9.28、1994.5.14	－	成瀬	近世
本郷	36	1993	－	農学部ガス管埋設	立会	1993.10.15	－	成瀬	近世
本郷	37	1994	－	屋外環境整備等　龍岡門～附属病院	立会	1994.10.13	－	成瀬・原	近世
本郷	38	1994	－	医学部附属病院内エアタンク設置	立会	1994.12.18	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	39	1994	－	史料編纂所前埋設	立会	1995.3.10	－	成瀬	近世
本郷	40	1995	AFL	工学部風工学実験室	事前	1996.1.22～3.7	252	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区Ⅰ』

地区	番号	年度	略称	調査名（旧略称）	調査種別	調査期間	面積（㎡）	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	41	1996	IML	インテリジェント・モデリング・ラボラトリー	事前	1996.4.15～6.20	626	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・IML地点』
本郷	42	1996	－	医学部附属病院基幹整備に伴う樹木移植	立会	1996.4	－	成瀬	近世
本郷	43	1996	HWK1	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.5.12～5.18	20	成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	44	1996	HWK2	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.5.27 ～6.27	102	成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	45	1996	HWK3	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.6.3～6.20	184	大成	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	46	1994	－	龍岡門門衛所移築	立会	1994.8.24	－	成瀬	近世
本郷	47	1996	HWK4	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.6.24～6.28	5	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	48	1996	HNⅡ	医学部附属病院看護師宿舎Ⅱ期	事前	1996.11.5～1997.1.31	525	原・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	49	1997	－	外灯整備1	立会	1997.4.13～30	－	原	近世
本郷	50	1997	－	外灯整備2	立会	1997.4.13～30	－	原	近世
本郷	51	1997	－	外灯整備3	立会	1997.4.13～30	－	原	近世
本郷	52	1997	－	農学部（21世紀館）木質ホール	試掘	1997.7.14～18	50	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	53	1998	－	工学部風環境シミュレーション風洞実験室	試掘	1998.12.22～23	30	原	近世
本郷	53	1998	AFⅣ	工学部風環境シミュレーション風洞実験室	事前	1999.1.7～25	300	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区Ⅰ』
本郷	54	1998	－	総合研究棟	試掘	1999.1.6～8	28	堀内	近世
本郷	54	1999	HES99	総合研究棟（文・経・教・社研）	事前	1999.5.24～11.2	1000	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	55	1999	－	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅰ期	試掘	1999.7.14	3	成瀬	近世
本郷	55	1999	2中Ⅰ	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅰ期（2中Ⅰ）	事前	1999.10.12～2000.2.25	1270	成瀬・原・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	55	2000	－	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅱ期	試掘	2000.10.2～16	6	成瀬	古代・近世
本郷	55	2001	2中Ⅱ	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅱ期（2中Ⅱ）	事前	2001.7.23～2002.12.19	2747	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	55	1999	HHC299	医学部附属病院第2中央診療棟（2中）	事前	1999.10.12～2000. 2.25、 2001. 7.23～2002.12.19	4017	成瀬・原・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	56	1999	－	文系4研究所等暫定建物	試掘	1999.12.16～17	16	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	57	1999	－	環境安全センター	立会	2000.1.17	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	58	1999	－	医学部附属病院受変電設備棟Ⅱ期	試掘	2000.2.3～4	30	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書12 医学部附属病院受変電設備棟地点』
本郷	58	1999	YM	医学部附属病院受変電設備棟Ⅱ期	事前	2000.2.5～3.31	300	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書12 医学部附属病院受変電設備棟地点』
本郷	59	2000	KK	工学部基幹整備共同溝地点	事前	2000.7.3～ 7.12、10.11～ 10.14、2001. 2.21～ 2.28	900	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	60	2000	HWK6	医学部附属病院基幹整備外構施設等	事前	2000.9.21～11.14	200	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	61	2001	TS	工学部武田先端知ビル	事前	2001.6.4～8.7、 2001.11.28～12.28	740	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区Ⅰ』
本郷	62	2000	－	農学部生命科学総合研究棟	試掘	2001.3.27	100	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	62	2001	NSK01	農学部生命科学総合研究棟	事前	2001.9.21～10.19	1800	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	63	2001	－	薬学部暫定建物	立会	2002.2.5～6	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	64	2001	－	情報学環暫定建物	立会	2002.2.7	－	成瀬	近世
本郷	65	2001	－	法学系総合研究棟	試掘	2002.3.18～20	136	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	65	2002	LS03	法学系総合研究棟	事前	2003.2.17～4.18	946	成瀬・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	66	2001	－	薬学系総合研究棟	試掘	2002.3.17～20	63	原	近世
本郷	66	2002	YGS02	薬学系総合研究棟1期	事前	2002.8.1～2003.2.28	1260	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	66	2004	YGS04Ⅰ	薬学系総合研究棟2期1次（YGS04Ⅰ）	事前	2004.7.26～8.4	90	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	66	2004	YGS04Ⅱ	薬学系総合研究棟2期2次（YGS04Ⅱ）	事前	2004.11.17～2005.2.4	450	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	66	2004	YGS04	薬学系総合研究棟2期	事前	2004.7.26～8.4、 2004.11.17～2005.2.4	540	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	67	2002	－	地震研究所総合研究棟	試掘	2002.5.9～17	32	堀内	縄文・弥生・古墳・近世・近代
本郷	68	2002	－	インキュベーション施設	試掘	2002.6.17～19	38	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	68	2002	INC	インキュベーション施設	事前	2003.3.6～6.7	1051	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	69	2002	－	地震研仮設建物	立会	2002.5.14～16	－	堀内	遺構・遺物なし
本郷	70	2002	－	工学系総合研究棟	立会	2003.2.28	－	堀内	遺構・遺物なし
本郷	71	2004	HEQ04	地震研究所総合研究棟	事前	2004.8.30～2005.2.28	1474	追川・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	72	2004	SC1	理学部1号館前	事前	2004.11.29～12.3	32	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	73	2004	－	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期 （旧名：疾患生命研究センター）	試掘	2004.11.29～12.1	24	成瀬	古墳・近世
本郷	74	2005	－	医学部附属病院立体駐車場	試掘	2005.07.12～14	40	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	74	2008	HHN308	医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期	事前	2008.4.1～8.1	550	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	75	2005	KOS05	工学系総合研究棟立坑	事前	2005.9.13～14	17	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	76	2005	－	ベンチャープラザ	試掘	2005.12.5～6	37	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	76	2005	HVP06	ベンチャープラザ	事前	2006.3.6～5.16	760	追川・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	77	2005	－	農学部弥生講堂アネックス	立会	2006.1.12	5	大成	近世
本郷	78	2005	－	情報学環・福武ホール1次	試掘	2006.2.13～15	152	大成・成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	78	2006	HJF06	情報学環・福武ホール	事前	2006.6.5～12.8、 2007.2.5～23	1766	大成・成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	79	2006	－	農学部コイトトロン温室	立会	2007.1.16	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	80	2006	－	工学部もの作り実験工房	立会	2007.2.22	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	81	2006	－	経済学研究科学術交流棟	試掘	2007.2.27～3.1	50	成瀬・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	81	2007	HEA07	経済学研究科学術交流棟	事前	2008.3.17～7.11、9.11～ 24、2009.2.2～10	451	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	82	2007	HKM07	懐徳門	事前	2007.6.20～7.20	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	83	2007	－	向ヶ丘ファカルティハウス	試掘	2007.10.22～25	50	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	84	1984	NK84	農学部共同溝	事前	1984.7.9～23	50	今村啓爾	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	85	2007	－	薬学部東法面階段設置	立会	2008.3.14	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	86	2008	－	雨水管改修	立会	2009.2.2～16	－	成瀬	遺構・遺物なし

地区	番号	年度	略称	調査名（旧略称）	調査種別	調査期間	面積（㎡）	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	87	2008	HTG08	東京都下水道	事前	2008.12.7～12.25、2009.11.27～12.8	39	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7、8所収
本郷	88-1	2008	－	耐震対策事業ガス管改修	立会	2008.11.19、11.20	26	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	88-2	2009	－	耐震対策事業ガス管改修	立会	2009.5.11～13、15、23、31、6.18、8.27	－	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	89	2008	－	弥生地区屋外ガス配管改修	立会	2008.11.25～12.17	193	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	90	2009	－	薬学部研究実験棟	試掘	2009.4.16	10	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	91	2009	－	医学部附属病院立体駐車場	試掘	2009.9.16～9.17	40	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	91	2009	HHP09	医学部附属病院立体駐車場	事前	2009.12.13～2010.2.25	3034	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	92	2009	HGG09	学生支援センター	事前	2009.7.21～7.30	440	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	93	2009	H7I09	伊藤国際学術研究センター	事前	2009.7.30～2010.2.12、5.17～5.31、2011.7.21～26、9.16～10.28	1710	成瀬・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	94	2009	－	分生研・農学部総合研究棟	試掘	2009.9.1～9.2	32	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	94	2009	HNS09	分生研・農学部総合研究棟	事前	2010.1.25～3.31、2010.7.28～8.11	1731	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	95	2009	－	農学生命科学研究科フードサイエンス棟	立会	2009.10.22、11.2	－	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	96	2009	－	工学部新3号館建替時待避用仮設建物	試掘	2009.12.14～12.17	64	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	97-1	2009	HKS09	基幹整備（流域Ⓢ排水）A区	事前	2010.3.3～3.19	26	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	97-2	2010	HKS09	基幹整備（流域Ⓢ排水）B区	事前	2010.11.27～12.6	42	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	98	2010	－	原子動力実験棟	試掘	2010.4.9	16	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	99	2010	－	法学部3号館増築	試掘	2010.5.10～5.13	9	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	99	2010	HLS10-1	法学部3号館増築（HLS10-1）	事前	2010.7.20～8.23	60	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	99	2010	－	法学部3号館増築	立会	2010.12.27	30	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	99	2010	HLS10-2	法学部3号館増築（HLS10-2）	事前	2011.1.18～26	268	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	99	2011	－	法学部3号館増築	試掘	2011.4.13～4.19	－	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	99	2011	HLS10-3	法学部3号館増築（HLS10-3）	事前	2011.5.16～7.26	406	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	99	2011	－	法学部3号館増築工事に伴う外構	立会	2011.1.23～24、30～31	－	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	99	2010	HLS10	法学部3号館増築	事前	2010.7.20～8.23、2011.1.18～26、5.16～7.26	734	追川・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8、9所収
本郷	100	2010	HK311	工学部新3号館	事前	2011.1.4～10.11	4595	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	101	2010	－	ドナルド・マクドナルド・ハウス東大	試掘	2010.10.25～10.29	33	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	101	2010	HMH10	ドナルド・マクドナルド・ハウス東大	事前	2010.12.9～2011.1.26	30	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	102	2010	－	本郷通り囲障改修	立会	2010.12.2、12.13	－	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	103	2010	－	春日門横教育研究棟	試掘	2011.3.14～18	－	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	103	2011	HKK11	春日門横教育研究棟	事前	2011.12.1～2012.7.20	949	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8、9所収
本郷	104	2010	－	防犯用ネットワークカメラ賃貸借	立会	2010.7.30～8.11	－	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	105	2010	－	弥生地区屋外ガス配管改修	立会	2010.8.31～9.11	－	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	106	2010	－	薬学ゲート前舗装改修	立会	2011.2.7、9、15～16、18、21～22	－	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	107	2011	－	総合図書館前クスノキ移植	立会	2011.6.9～15	－	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	108	2011	－	旧原子力センター別館改修	立会	2011.6.22	16	堀内	遺構・遺物なし
本郷	109	2011	－	仮設キュービクル設置	立会	2011.9.1	18	大成	遺構・遺物なし
本郷	110	2011	－	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期	試掘	2011.11.29～12.2	6	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	111	2011	－	総合図書館西側道路構造調査	立会	2011.10.18	4	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	112	2011	－	クリニカルリサーチセンターB棟	試掘	2011.11.29～12.2	25	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	113	2011	HHWB12	医学部附属病院入院棟Ⅱ期	事前	2012.3.1～11.30、2013.8.19～10.3、2014.2.5～2015.2.19	4391	成瀬・香取・小川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	114	2010	－	下水本管改修	立会	2010.6.17、21	－	原	遺構・遺物なし
本郷	115	2012	HTP12	図書館前クスノキ移植に伴う事前調査	事前	2012.5.7～6.18	60	追川	近世
本郷	116	2011	－	旧原子力研究総合センター別館電気設備	立会	2011.9.20、10.25	－	原	遺構・遺物なし
本郷	117	2011	－	農学部3号館西側舗装改修	試掘	2011.12.14～2012.1.13	14	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	118	2011	－	ガス管改修	試掘	2011.9.5～9.19	18	原	遺構・遺物なし
本郷	119	2011	HNS09	分生研・農学部総合研究棟	事前	2011.7.26～27	7	原	遺物のみ
本郷	120	2011	－	分生研・農学部総合研究棟基幹整備	試掘	2011.9.10～17、11.20～21	9	原	遺構・遺物なし
本郷	121	2012	－	農学部1号館北側舗装改修	立会	2012.7.10～14	2	原	近代
本郷	122	2012	－	伊藤国際舗装改修	立会	2012.7.14	1	原	遺構・遺物なし
本郷	123	2012	－	春日門門扉やりかえ	立会	2012.9.4、10	5	大成	遺構・遺物なし
本郷	124	2012	－	農学生命科学研究科閉鎖系温室	立会	2012.9.26～27	31	原	遺構・遺物なし
本郷	125	2012	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期	事前	2012.12.17～2014.9.12	3341	追川・小川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	126	2012	－	原子力別館北側雨水配管改修その他	立会	2012.12.17～20	21	原	遺構・遺物なし
本郷	127	2012	－	工学部4号館屋外排水管改修	試掘	2012.2.20	10	原	遺構・遺物なし
本郷	128	2012	－	農学部1号館北側他舗装改修	立会	2013.1.21、2.1、20、3.7、11、12、14、15、18、19	2750	原	遺構・遺物なし
本郷	129	2012	－	理学部2号館舗装改修	立会	2012.12.25、26、2013.1.21、2.1、3	1000	原	遺構・遺物なし
本郷	130	2012	－	工学部3号館施設整備（ガス）	事前	2012.11.5、13	－	成瀬・堀内	遺構・遺物なし
本郷	131	2012	－	医学部モニュメント	立会	2013.3.25	11	追川	近代
本郷	132	2013	－	タンデム加速器研究棟北側側溝改修	立会	2013.4.8	16	原	遺構・遺物なし
本郷	133	2013	－	工学部9号館西側舗装改修	立会	2013.4.10	23	原	遺構・遺物なし
本郷	134	2012	－	工学部3号館施設整備（下水他）	事前	2013.3.18、27、4.1、8～10、22、23、30、5.1、9、10、13、14、21～23、6.15、17、18、24～26、28、7.1～3、5	490	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	135	2013	－	農学部水田取設	試掘	2013.6.4, 5、7、8、10	101	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	136	2013	－	農学部正門舗装改修	試掘	2013.6.17	3	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	137	2013	－	浅野民間地工事に伴う調査	試掘	2013.7.18	44	原	遺構・遺物なし
本郷	138	2013	－	工学部3号館施設整備（雨水）	立会	2013.7.22、26、31	41	堀内	近世遺構面確認
本郷	139	2013	－	保育園前歩道植栽	立会	2013.8.4	42	堀内	遺構・遺物なし

地区	番号	年度	略称	調査名（旧略称）	調査種別	調査期間	面積（㎡）	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	140	2013	－	春日門総合研究棟に伴う外構	立会	2013.7.29、31、8.1、5、2014.1.29、2.4	107	大成	近世遺構面確認
本郷	141	2013	－	工学部3号館施設整備（下水2）	立会	2013.8.24	－	堀内	遺構・遺物なし
本郷	142	2013	－	農学部東側外構	試掘	2013.9.10	7	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	143	2013	－	講堂改修	事前	2013.9.26、10.21～25、11.5、11、12.12、13、16、2014.11.11、13～15、18、19、27、28、12.5、9、11、13、15、17	539	原・清水	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	144	2013	－	看護職員等宿舎5号棟擁壁	試掘	2013.9.2、3	13	香取	近世・近代整地層
本郷	145	2013	－	医学部中央総合館前誘導ブロック設置	立会	2013.9.27	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	146	2013	HAC13	アカデミックコモンズ	事前	2013.9.10～2014.3.31	1200	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	147	2013	－	国際科学イノベーション総括棟新営	試掘	2013.7.23～7.26	48	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	148	2013	HIN14	国際科学イノベーション総括棟新営	事前	2014.1.14～7.23、2014.8.18～8.21	1480	大成・香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	149	2013	－	（弥生）テニスコート夜間照明設置	立会	2013.12.20	4	大成	遺構・遺物なし、時期不明硬化面
本郷	150	2013	－	農学部正門舗装改修	立会	2014.1.29、2.3、16～18	510	原	遺構・遺物なし
本郷	151	2013	－	農学生命科学研究科閉鎖系温室	試掘	2014.1.29	18	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	152	2013	－	地震研究所北側囲障改修	試掘	2014.2.13、17、21	40	原	遺構・遺物なし
本郷	153	2014	－	理学部1号館（Ⅲ期）新営	試掘	2014.5.16、19	21	原・清水	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	154	2013	－	保育園前漏水	立会	2014.1.10、14	1	堀内	遺構・遺物なし
本郷	155	2013	－	懐徳門舗装	立会	2014.1.29、2.5、2.10	277	堀内	遺構・遺物なし
本郷	156	2013	－	博物館AMSラボ電気改修	立会	2014.2.6	2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	157	2013	－	第2本部棟外構	立会	2014.2.22～23	4	堀内	遺構・遺物なし
本郷	158	2013	－	街灯整備	立会	2014.3.11～14	46	堀内	遺構・遺物なし
本郷	159	2014	－	弓道場脇フェンス	立会	2014.4.7	5	堀内	遺構・遺物なし
本郷	160	2014	HEK14	文系総合研究棟	試掘	2014.4.9～11	27	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	161	2014	－	懐徳館庭園給水引き込み	立会	2014.4.22	－	原・清水	遺構・遺物なし
本郷	162	2014	－	工学部4号館改修その他	試掘	2014.6.23、27、7.3、4、10、8.12	47	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	163	2014	－	法文2号館給水管改修	立会	2014.6.4	8	堀内	遺構・遺物なし
本郷	164	2014	－	イノベーション棟現場事務所	立会	2014.6.5	－	追川	遺構・遺物なし
本郷	165	2014	－	弓道場テント基礎移設	立会	2014.7.3	1	清水	遺構・遺物なし
本郷	166	2014	－	農学部門衛所漏水対応	立会	2014.7.15	－	原	遺構・遺物なし
本郷	167	2014	－	安田講堂花壇漏水対応	立会	2014.7.30	1	小川	遺構・遺物なし
本郷	168	2014	－	アカデミックコモンズ 2次調査	事前	2014.8.13～10.31、11.25、12.10、12	475	堀内・清水	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	169	2014	－	文系総合研究棟	事前	2014.10.14～11.5	180	堀内・香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	170	2014	－	七徳堂改修外構	立会	2014.11.21、2015.1.13、14	130	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	171	2014	－	図書館横仮設建物建設に伴う舗装石除去	立会	2014.9.4	930	堀内	遺構・遺物なし
本郷	172	2014	－	第二食堂前カーゲート付近舗装改修	立会	2014.11.21	78	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	173	2014	－	医学部附属病院第二中央診療棟前車道バリカー設置	立会	2014.12.19	1	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	174	2014	－	本郷キャンパスバリアフリー関係整備	立会	2014.12.22、2015.1.20、21	169	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	175	2014	－	図書館仮設キュービクル設置	立会	2014.11.26	8	清水	遺構・遺物なし
本郷	176	2014	－	ネットワーク監視カメラ設置	立会	2014.12.2	5	清水	遺構なし、近世磁器1点
本郷	177	2014	－	工学部1号館前広場シダレザクラ移植	試掘	2015.1.6、7	5	香取	近世遺構・遺物
本郷	178	2014	HN614	農学部6号館改修	事前	2015.1.7～9、4.27、28	38	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	179	2014	－	安田講堂前広場の整備	試掘	2015.1.6、7、2.18	405	香取	近現代
本郷	180	2014	－	生物環境ガラス温室	立会	2015.1.16	9	原	遺構・遺物なし
本郷	181	2014	－	農学部グランド門扉改修	立会	2015.1.21、2.3	3	香取	近世
本郷	182	2014	HCRG15	医学部附属病院CRC棟ほか外構設置	事前	2015.3.16～9.25	162	追川	近世
本郷	183	2014	－	地震研究所北側囲障改修	立会	2015.2.6	153	原	遺構・遺物なし
本郷	184	2014	－	上野英三郎博士とハチ公（仮）台座	立会	2015.2.6	3	原	遺構・遺物なし
本郷	185	2014	－	バス通り誘導ブロック整備その他	立会	2015.2.20、23、24	25	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	186	2014	－	薬学本館埋設配管	立会	2015.2.23、24	14	小川	遺構・遺物なし
本郷	187	2014	－	工学部船舶運動性能試験水槽埋設配管	立会	2015.3.16	5	清水	遺構・遺物なし
本郷	188	2015	－	総合研究棟（理学系）新営	試掘	2015.4.7、9、10	36	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	189	2015	－	上野英三郎博士とハチ公（仮）解説板	立会	2015.5.11	5	原	遺構・遺物なし
本郷	190	2015	－	農学部正門守衛所掘削	立会	2015.5.1	1	原	遺構・遺物なし
本郷	191	2015	－	情報学環・福武ホール漏水補修	立会	2015.5.2	3	清水	遺構なし、近世磁器1点
本郷	192	2015	－	安田講堂監視カメラ	立会	2015.5.25	52	原	遺構・遺物なし
本郷	193	2015	－	中央食堂第二購買部散水栓修理	立会	2015.6.28	0.3	原	遺構・遺物なし
本郷	194	2015	－	理学部1号館新営に伴う支障排水管盛替	立会	2015.6.25	4	原	遺構・遺物なし
本郷	195	2015	－	農学部東別館漏水補修	立会	2015.5.4	1	香取	遺構・遺物なし
本郷	196	2015	－	総合研究博物館裏街灯取替	立会	2015.6.8	2	小川	遺構・遺物なし
本郷	197	2015	－	文系総合研究棟仮設電気	立会	2015.7.15～7.17	2	平石・香取	遺構・遺物なし
本郷	198	2015	HR115	理学部1号館	事前	2015.8.17～12.9	530	原・小川・平石	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	199	2015	－	御殿下グラウンド北側チェーンゲート取設	立会	2015.8.20、21	9	原	遺構・遺物なし
本郷	200	2015	－	農学部1号館西側外構整備	立会	2015.9.1、15	20	原	遺構・遺物なし
本郷	201	2015	－	浅野街灯整備	試掘	2015.9.7	2	香取	遺構・遺物なし
本郷	202	2015	－	安田講堂マンホール	立会	2015.11.27	1	原	遺構・遺物なし
本郷	203	2015	－	国際科学イノベーション総括棟外構	立会	2015.12.14	82	大成	遺構・遺物なし
本郷	204	2015	－	農学部漏水	立会	2016.1.12	0.6	香取	遺構・遺物なし
本郷	205	2015	－	理学系総合研究棟仮設電気	立会	2016.1.19	0.6	小川	遺構・遺物なし
本郷	206	2015	HR115	理学部1号館（Ⅲ期）外構	事前	2016.1.19、22、25、28、2016.2.12、16、17、19	175	原・小川・平石	『東京大学構内遺跡調査研究年報11』所収
本郷	207	2015	HMK16	各門サイン設置	事前	2016.2.1～3	8	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報11』所収
本郷	208	2015	－	工学部3号館外周道路舗装部補修	立会	2016.2.19	36	平石	遺構・遺物なし

地区	番号	年度	略称	調査名（旧略称）	調査種別	調査期間	面積（㎡）	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	209	2015	―	医学部総合中央館西側駐車場改修	立会	2016.3.4	218	平石	遺構・遺物なし
本郷	210	2015	―	環境安全研究センター漏水	立会	2016.2.10	0.5	堀内	遺構・遺物なし
本郷	211	2015	―	附属図書館（教育学部等）改修	立会	2016.1.6、9、2.15、16、2.29～3.2	81	清水	近世陶器数点。遺構なし
本郷	212	2015	―	安田講堂南側舗装改修	立会	2016.3.1、8	38	香取	遺構・遺物なし
本郷	213	2015	―	理学部2号館前生垣	立会	2016.3.14	2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	214	2016	―	低温センターA004室アース	立会	2016.4.19	3	原	遺構・遺物なし
本郷	215	2016	―	第一研究棟西側囲場整備	立会	2016.6.3	21	平石	遺構・遺物なし
本郷	125	2015	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期（13区）	事前	2016.3.28～4.14	9	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	125	2016	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期（ガス配管）	立会	2016.4.26	31	追川	遺構・遺物なし
本郷	125	2016	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期（14区）	事前	2016.8.26～9.2	124	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	125	2016	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期（ガス配管竪坑）	立会	2016.5.26	0.4	追川	遺構・遺物なし
本郷	125	2016	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期（15区）	事前	2016.5.19	23	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	216	2016		教育学部機械設備改修	立会	2016.7.4	7	小川	遺構・遺物なし
本郷	217	2016		附属図書館(教育学部等)改修電気設備	立会	2016.8.29	3	平石	遺構・遺物なし
本郷	218	2016		農学部正門ステンレスポール更新	立会	2016.10.19	0.2	原	遺構・遺物なし
本郷	219	2016		構内各所サイン設置	立会	2016.11.16～19、21	10	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	220	2016		育徳園内倒木樹木の撤去作業	立会	2016.10.22	1	原	遺構・遺物なし
本郷	221	2016		安田講堂北側誘導ブロック	立会	2017.1.12、13	8	原	遺構・遺物なし
本郷	222	2016		附属図書館（教育学部等）改修機械設備	立会	2017.1.11	7	原	遺構・遺物なし
本郷	223	2016		朱舜水碑現設置場所	立会	2017.2.7、8、16	86	原	遺構・遺物なし
本郷	224	2016		朱舜水碑移転先	立会	2017.2.17、20、25	32	原	遺構・遺物なし
本郷	225	2016		医学部附属病院内駐輪場	立会	2017.2.13	10	追川	遺構・遺物なし
本郷	226	2016		附属図書館ダムウェーター新設	立会	2017.1.24	16	堀内	遺構・遺物なし
本郷	227	2016		正門整備	立会	2017.3.9、13、15、16	209	原	遺構・遺物なし
本郷	228	2016		医学部本館脇樹木	立会	2017.2.23	0.2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	229	2016		農学部サッカー部室	立会	2017.3.1、4.17、8.29	109	堀内・大成	遺構・遺物なし
本郷	230	2016		育徳園柵修理	立会	2017.3.22～24、28、30	(35)	原	遺構・遺物なし
本郷	125	2017	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期（16区・17区）	事前	2017.4.1～7.28	3621	追川	江戸
本郷	231	2017		理学部1号館Ⅲ期南側外構	事前	2017.5.10、29	16	原	遺構・遺物なし
本郷	232	2017		動物センター前土質調査	立会	2017.4.25	1	原	遺構・遺物なし
本郷	233	2017		アカデミックコモンズ雨水排水管	立会	2017.4.12・13	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	234	2017		アカデミックコモンズ補給水管盛替え	立会	2017.5.25	11	大成	遺構・遺物なし
本郷	235	2017	HNY	看護師宿舎擁壁	事前	2017.7.3	53	原	近世・近代
本郷	236	2017		野球場ブルペン改修	立会	2017.7.14.15.22.23	376	原	遺構・遺物なし
本郷	237	2017		理学部1号館ガス管・配水管（仮）	立会	2017.8.23.29	15	原	遺構・遺物なし
本郷	238	2016		第一研究棟中庭排水切り替え	立会	2016.5.19、20	13	追川	近世
本郷	239	2017		御殿下グラウンド西側舗装改修	立会	2017.9.16	4.7	清水	遺構・遺物なし
本郷	240	2017		工学部6号館北立ち枯れ樹木伐採	立会	2017.9.19	8	堀内	遺構・遺物なし
本郷	241	2017		列品館西側舗装改修	立会	2017.9.20	13	原	遺構・遺物なし
本郷	242	2017		入院棟B棟東側道路改修	立会	2017.9.14	500	追川	遺構・遺物なし
本郷	243	2017		中央食堂その他改修（EV新設）他	立会	2017.12.4	12	原	遺構・遺物なし
本郷	244	2017	HKO18	基幹環境整備（言問い通り横断管路）	事前	2018.3.30～4.2、5、12、16、5.10、16、17、12.17	203	大成	遺構・遺物なし
本郷	245	2017	HCRB17	クリニカルリサーチセンターB棟	事前	2018.1.15～4.4	93	追川	近世
本郷	246	2017		育徳園石組補修	立会	2017.12.6	0.6	原	近代（裏込から磁器、レンガ）
本郷	247	2017		中央食堂改修機械設備	立会	2018.1.18、19	7	原	遺構・遺物なし
本郷	248	2017		農学部グラウンド防球フェンス新設	立会	2018.1.16	5	堀内	遺構・遺物なし
本郷	249	2017		医学部総合中央館1階改修・既設管接続	立会	2018.2.15	4	大成	遺構・遺物なし
本郷	250	2017		山上会館龍岡門別館東側及び広報センター東側実生木伐採・抜根作業	立会	2018.3.20	8	香取	遺構・遺物なし
本郷	251	2017		医学部総合中央館中庭照明改修	立会	2018.3.22	1	香取	遺構・遺物なし
本郷	252	2017		旧東大出版会北側植栽整備	立会	2018.3.23	3	堀内	遺構・遺物なし
本郷	253	2017		外来診療棟西側配管	立会	2018.3.23～24	6	小川	遺構・遺物なし
本郷	254	2017		育徳園低木撤去植替え	立会	2018.3.27	50	大成	遺構・遺物なし
本郷	255	2018		外来診療棟南側こいのぼり基礎	立会	2018.4.6	0.6	小川	遺構・遺物なし
本郷	256	2018		医学部附属病院バス停渡り配管	立会	2018.5.2	10	小川	遺構・遺物なし
本郷	257	2018		学生第二食堂横広場整備	立会	2018.5.10	15	大成	遺構・遺物なし
本郷	258	2018		学生第二食堂前外構	立会	2018.6.22	506	大成	遺構・遺物なし
本郷	259	2018		医学部附属病院南研究棟外構その他	立会	2018.7.23	53	追川	遺構・遺物なし
本郷	260	2018		農学部7号館西側道路漏水	―	2018.10.9	2	堀内	遺構・遺物なし（写真をもらう）
本郷	261	2018		工学部11号館南側ハンドホール補修	立会	2018.10.22	0.2	小川	遺構・遺物なし
本郷	262	2018		プレハブ研究A棟案内表示板設置	立会	2018.10.25	0.5	小川	遺構・遺物なし
本郷	263	2018		育徳園倒木	立会	2018.10.01、16、17	7	原	近代盛土、遺物なし。届出無し。
本郷	264	2018		向ヶ丘ファカルティハウス中庭整備	立会	2018.11.5	96	香取	遺構・遺物なし
本郷	265	2018		最先端臨床研究センター西側喫煙所衝立設置	立会	2018.121	3	香取	遺構・遺物なし
本郷	266	2018	HKD18	基幹環境整備（電気管路）	事前	2018.12.17～21、2019.1.28～2.5	57	大成	19世紀初の大形土坑をはじめ計4基の遺構検出。大形土坑からは遺物収納箱11分の遺物出土。
本郷	267	2018		東御長屋井戸跡サイン板設置	立会	2019.1.24	0.5	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	268	2018		育徳園路等補修工事	立会	2019.1.21、22、23、25、28、29、30、31、2.1	―	原	池底確認、遺物なし。届出無し。一段目 護岸杭列園路側10.5m、二段目 護岸杭列池側21m
本郷	269	2018		農学部ファカルティハウス外構ブロック塀補強工事	立会	2019 .1.31、2.1	9	原	遺構・遺物なし
本郷	270	2018		野球場防球ネット増設	立会	2019.2.20、21、27	6	香取	遺構・遺物なし
本郷	271	2018		東洋文化研究所北側外構スロープ手摺撤去他	立会	2019.2.28	1	小川	遺構・遺物なし
本郷	272	2018		野球場フェンス補修工事	立会	2019.3.6	2	原	遺構・遺物なし
本郷	273	2018		学生第二食堂前植栽帯改修	立会	2019.3.8	105	小川	遺構・遺物なし
本郷	274	2018		本郷通り囲障改修	立会	2019.3.20	8	堀内	遺構・遺物なし

駒場Ⅰ地区調査一覧

地区	番号	年度	略称	調査名（略称）	調査種別	調査期間	面積（㎡）	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
駒Ⅰ	1	1991	－	教養学部保健センター	試掘	1992.3.19	28	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	2	1993	FGE	教養学部情報教育棟	事前	1993.8.10～10.20	940	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒Ⅰ	3	1993	－	数理科学研究科棟	試掘	1993.5.8～15	350	堀内	縄文
駒Ⅰ	4	1994	－	数理科学研究科棟擁壁	立会	1995.1.20～27	－	武藤	近代
駒Ⅰ	5	1994	－	数理科学研究科棟関連東電マンホール増設・管路新設	立会	1995.1.24～4.12	－	武藤	縄文・平安
駒Ⅰ	6	1995	－	教養学部伝統文化活動施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	7	1995	－	教養学部学生用浴室・シャワー施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	8	1995	－	数理科学研究科棟ガス・水道管埋設	立会	1995.5.17～18、6.27～28	－	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	9	1996	数理	数理科学研究科Ⅱ期棟	事前	1996.12.12～1997.2.6	1160	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
駒Ⅰ	10	1997	－	教養学部キャンパス・プラザ	試掘	1997.4.24	41	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	11	1999	－	教養学部総合研究棟	試掘	1999.7.26～8.3	130	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	12	1999		駒場図書館	試掘	1999.7.26～8.3	200	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
駒Ⅰ	12	2000	KL	駒場図書館	事前	2000.7.27～8.30	1778	大成・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
駒Ⅰ	13	2001	－	教養学部総合研究棟	試掘	2001.10.24～25	60	堀内	遺物・遺構なし
駒Ⅰ	14	2001	－	教養学部総合研究棟	試掘	2002.3.25～26	53	大成	遺物・遺構なし
駒Ⅰ	15	2002	－	コミュニケーションプラザ	試掘	2002.11.5～12	56	成瀬	縄文
駒Ⅰ	15	2004	－	コミュニケーションプラザ和館	試掘	2004.12.6～7	80	成瀬	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	15	2005	KCP	コミュニケーションプラザ	事前	2005.4.22～7.21	4327	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
駒Ⅰ	16	2002	－	国際学術交流棟	試掘	2003.2.10～2.14	144	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
駒Ⅰ	16	2003	KGK	国際学術交流棟	事前	2003.5.16～7.9	620	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
駒Ⅰ	17	2005	－	教養学部5号館他改修	立会	2005.8.10、17、19	300	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	18	2006	－	教養学部8号館エレベーター敷設	立会	2006.10.20	－	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	19	2006	－	教養学部ロッカー棟	試掘	2006.11.13～16	21	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	20	2007	－	初年次活動センター新築	立会	2007.12.20	85	追川	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	21	2009	－	基幹整備（排水）	立会	2010.1.14、21、28	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒Ⅰ	22	2009	－	理想の教育棟	試掘	2010.2.1～5	220	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒Ⅰ	23	2011	－	巻藁練習場	立会	2012.1.23	12	成瀬	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	24	2012	－	屋外トイレ新営工事	立会	2012.7.23～25	42	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	25	2012	－	理想の教育棟Ⅱ期棟	試掘	2012.7.30～8.3	49	堀内	遺構なし・近代遺物あり
駒Ⅰ	26	2012	－	コミュニケーションプラザ横共同溝埋設	試掘	2012.9.24～27	34	小川	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	27	2012	－	倉庫新営工事	立会	2013.2.28	40	香取・堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	28	2014	－	教養学部並木通り根上り対策	立会	2014.9.4、8、10	64	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	29	2014	－	電話交換機設備更新	立会	2014.11.29	7	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	30	2014	－	教養学部並木通り舗装改修	立会	2015.2.3、12、23、3.10	77	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	31	2015	－	6号館改修に伴う埋設管敷設	立会	2015.7.23	4	小川・平石	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	32	2015	－	正門前排水改修	立会	2015.8.21、25	50	香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
駒Ⅰ	33	2015	－	並木通り舗装改修（Ⅱ期）	立会	2016.2.4、15、17、22、3.10, 14	824	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	34	2016	－	野球場排水改修	立会	2017.2.8、14	121	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	35	2016	－	教養学部5号館引込幹線	立会	2017.3.6～8	28	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	36	2017	－	並木通り舗装改修工事（Ⅲ期）	立会	2018.1.30	481	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	37	2017	KKT18	駒場仮体育館	事前	2018.2.5～16	376	堀内	縄文、近代
駒Ⅰ	38	2017		駒場体育館新営	試掘	2018.3.5～3.26	155	原	縄文、近代
駒Ⅰ	39	2018		大隈良典博士ノーベル賞受賞記念碑	立会	2018.4.16	0.4	成瀬	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	40	2018		駒場体育館新営電気配管掘削	立会	2018.5.3～5、15、21、6,6、7、22、25～27、7,26	183	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	41	2018	KKT18	駒場仮設体育館外構	立会	2018.6.6、6.8	38	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	42	2018	KTK18	駒場新体育館（仮称）新営に伴う機械設備切廻	事前	2018.6.28、7.2、3、18	25	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	43	2018	KTS18	駒場体育館新営	事前	2018.7.2～8.27	430	原	縄文、近代
駒Ⅰ	44	2018		7号館西側排水管破損修理	立会	2018.10.18	22	小川	緊急対応。遺構・遺物なし
駒Ⅰ	45	2018		テニスコート夜間照明設置	立会	2018.11.30	36	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	46	2018		野外トイレ解体工事	立会	2018.12.20、21、25、2019.2.4、4.24	90	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	47	2018		体育館（仮）	立会	2019.2.27、3.8、4.5	416	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	48	2018		第一グランド改修	立会	2019.2.6	1	香取	遺構・遺物なし

駒場Ⅱ地区調査一覧

地区	番号	年度	略称	調査名（略称）	調査種別	調査期間	面積（㎡）	担当者	遺構・遺物の年代
駒Ⅱ	1	1996	―	生産技術研究所校舎	試掘	1996.5.14	25	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	2	1996	―	先端科学技術研究センター校舎4号館	試掘	1996.5.15～17	92	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	3	1996	―	生産技術研究所校舎	試掘	1996.10.24～25	20	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	4	1998	―	設備センター	試掘	1998.4.27	13	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	5	1998	―	国際・産学共同研究センター	試掘	1998.8.5	90	原	縄文
駒Ⅱ	6	1998	―	生産技術研究所事務図書棟暫定施設	試掘	1998.12.13～15	50	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	7	2002	―	駒場オープンラボラトリー	試掘	2002.12.5	55	成瀬	縄文土器(阿玉台)
駒Ⅱ	8	2003	―	総合研究実験棟	試掘	2003.8.6	34	迫川	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	9	2008	―	保育施設	立会	2008.7.9～14	―	大成	遺構・遺物なし

白山地区調査一覧

地区	番号	年度	略称	調査名（略称）	調査種別	調査期間	面積（㎡）	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
白山	1	1991	―	理学部附属植物園研究温室Ⅰ期[原町遺跡]	試掘	1991.7.24～25	5	武藤	縄文
白山	2	1992	KO	理学部附属植物園研究温室Ⅱ期[原町遺跡]	事前	1992.5.25～6.6	200	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
白山	3	2000	KI	総合研究博物館小石川分館増築	事前	2000.11.27～12.4	70	成瀬・迫川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
白山	4	2002	―	農学生命科学研究科附属小石川樹木園・根圏観察室	試掘	2002.9.2	21	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	4	2002	KNK	農学生命科学研究科附属小石川樹木園・根圏観察室	事前	2002.9.24～10.7	91	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	5	2007	BGY07	理学系研究科附属植物園・医学部創設150周年記念(小石川養生所復元)建物	試掘	2007.9.3～4	43	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
白山	6	2010	KBG10	理学系研究科附属植物園本園・下水・電源ケーブル埋設枡・埋設溝地点	事前	2010.9.6～15	102	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
白山	7	2010	―	理学系研究科附属植物園本園・旧小石川養生所井戸柵改修	立会	2011.1.17	―	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	8	2011	―	農学生命科学研究科小石川樹木園・万年塀改修	立会	2011.4.1	30	成瀬	遺構・遺物なし
白山	9	2016	B-KSH-H28	国指定名勝及び史跡 小石川植物園(御薬園跡及び養生所跡)第1地点	事前	2016.9.24～2018.1.31	2,715	成瀬・香取・小川・平石	文京区支援事業 縄文・近世・近代・現代
白山	10	2017	B-KSH-3T	国指定名勝及び史跡 小石川植物園(御薬園跡及び養生所跡)第3地点	試掘	2018.1.22～2.2	111	成瀬・香取・小川	文京区支援事業 近世・近代・現代

他地区調査一覧

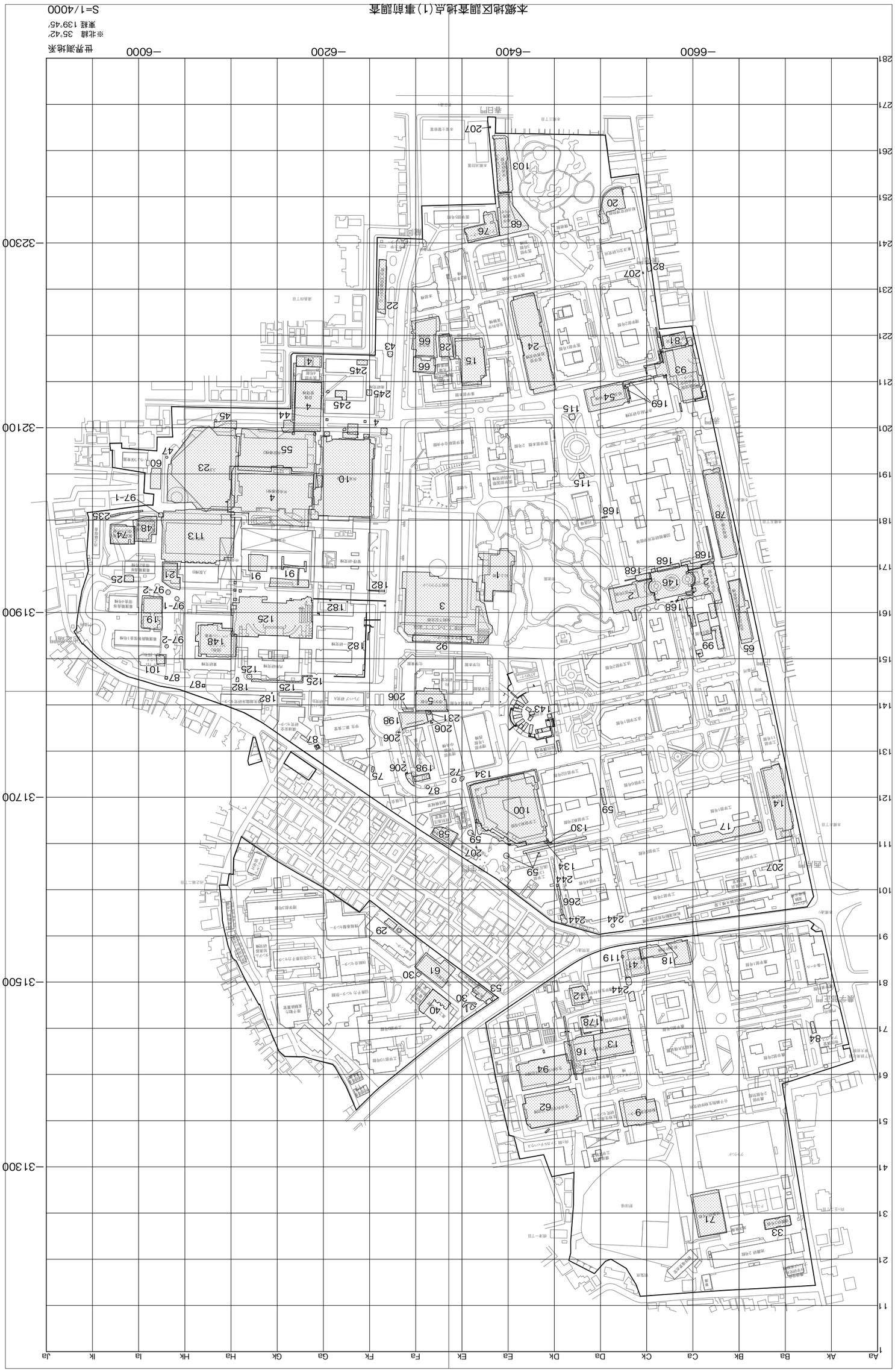
地区	番号	行政区	年度	略称	調査名（略称）	調査種別	調査期間	面積（㎡）	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
他	1	三浦市	1988	―	理学部附属臨海実験所新研究棟[新井城]	試掘	1988.7.4～8.2	80	寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
他	2	文京区	1991	―	追分学寮	試掘	1991.8.23～24	16	成瀬	近世
他	3	豊島区	1991	―	豊島学寮	試掘	1991.8.26～30	29	武藤	遺構・遺物なし
他	4	三鷹市	1991	―	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]	試掘	1991.9.15～30	350	堀内・成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	5	三鷹市	1991	―	井の頭学寮	試掘	1991.9.30～10.15	20	成瀬	遺構・遺物なし
他	6	港区	1991	―	白金学寮	試掘	1991.11.25～26	10	武藤	近世
他	7	三鷹市	1992	三广1	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅰ期	事前	1992.6.29～9.19	2100	堀内・成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	8	港区	1992	―	医科学研究所看護師宿舎	試掘	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
他	9	三浦市	1992	MMBS	理学部附属臨海実験所新研究棟[新井城](MMBS)	事前	1992.7.20～9.25	1700	武藤・寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
他	10	三浦市	1993	―	理学部附属臨海実験所新研究棟関連電機・水道管路新設	立会	1993.4.20～23	―	武藤	中世
他	11	三浦市	1993	―	理学部附属臨海実験所新研究棟関連海水循環水路新築	立会	1993.5.7～8	―	武藤	中世
他	12	三鷹市	1993	三广2	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅱ期	事前	1993.5.28～11.8	3280	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	13	三鷹市	1994	三广3	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅲ期	事前	1994.5.13～8.17	1950	堀内・鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	14	千葉市	1994	―	検見川運動場体育セミナーハウス[玄藩所遺跡]	試掘	1994.7.11～18	930	堀内・鮫島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
他	15	千葉市	1994	GMB	検見川運動場体育セミナーハウス[玄藩所遺跡]	事前	1994.7.19～8.21	496	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
他	16	港区	1994	―	医科学研究所MRI-CT棟装置棟	試掘	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
他	17	港区	1995	―	医科学研究所ヒトゲノム解析センター棟	試掘	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
他	18	柏市	1996	―	柏キャンパス校舎	試掘	1996.10.28～29	125	武藤	遺構・遺物なし
他	19	港区	2000	SBS00	医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟	事前	2000.10.27～2001.3.9	4280	堀内・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
他	20	文京区	2007	―	追分国際学生宿舎	試掘	2007.8.27～31	84	原・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
他	21	文京区	2007	―	追分国際学生宿舎	事前	2007.12.3～2008.3.25	776	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
他	22	文京区	2015	メジロ15	目白台国際宿舎	試掘	2015.5.11～6.1	1142	大成・香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
他	23	文京区	2016	メジロ15	目白台国際宿舎	事前	2016.6.17、21、 2016.7.20～2017.4.4	9373.1	大成、小川平石	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
他	24	文京区	2018		目白台国際宿舎・外構樹木	立会	2018.9.26	14.58	大成	遺構・遺物なし

本郷地区調査地点(1)事前調査

S=1/4000

※北緯 35°42′
東経 139°45′

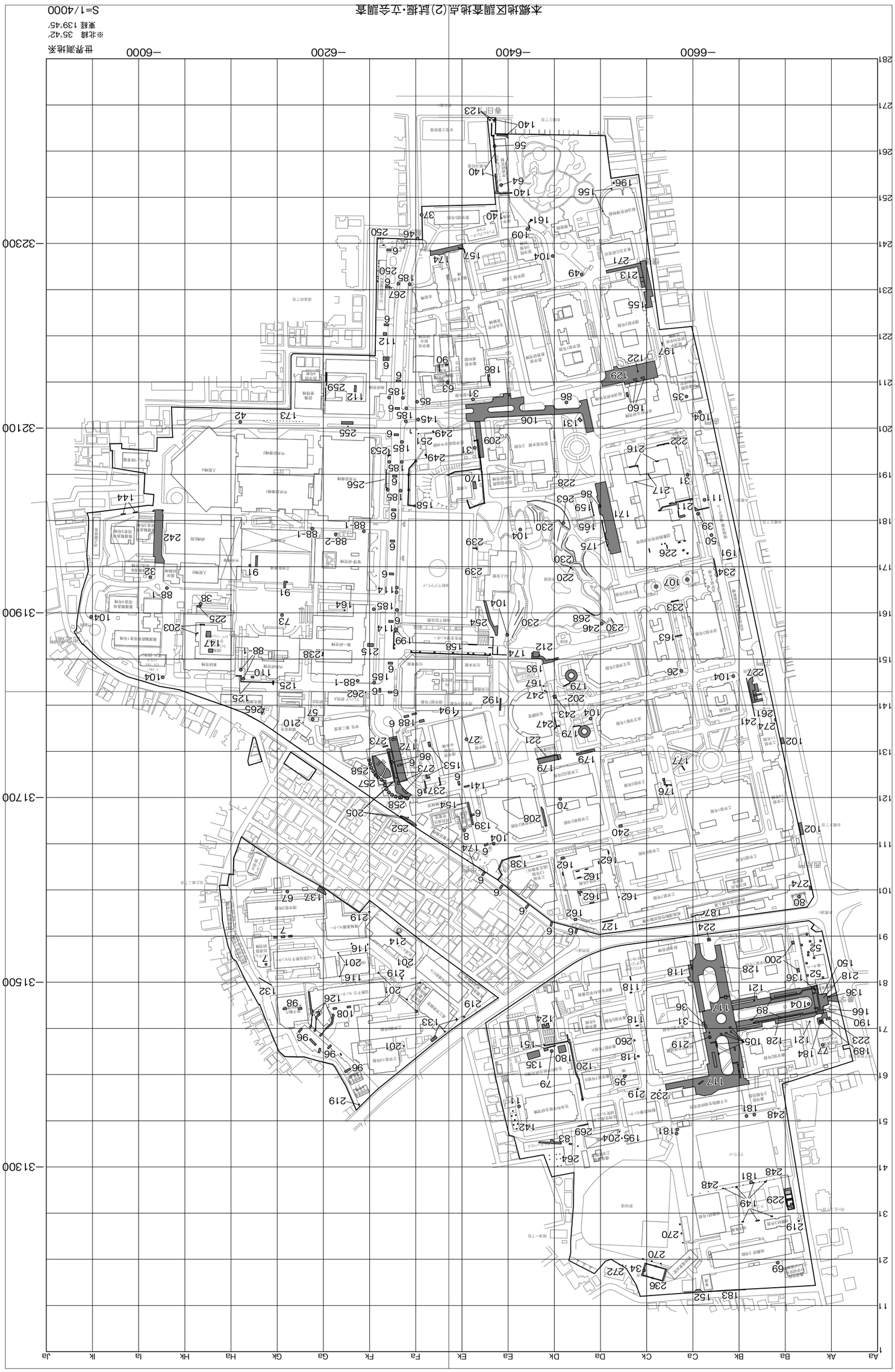
世界測地系



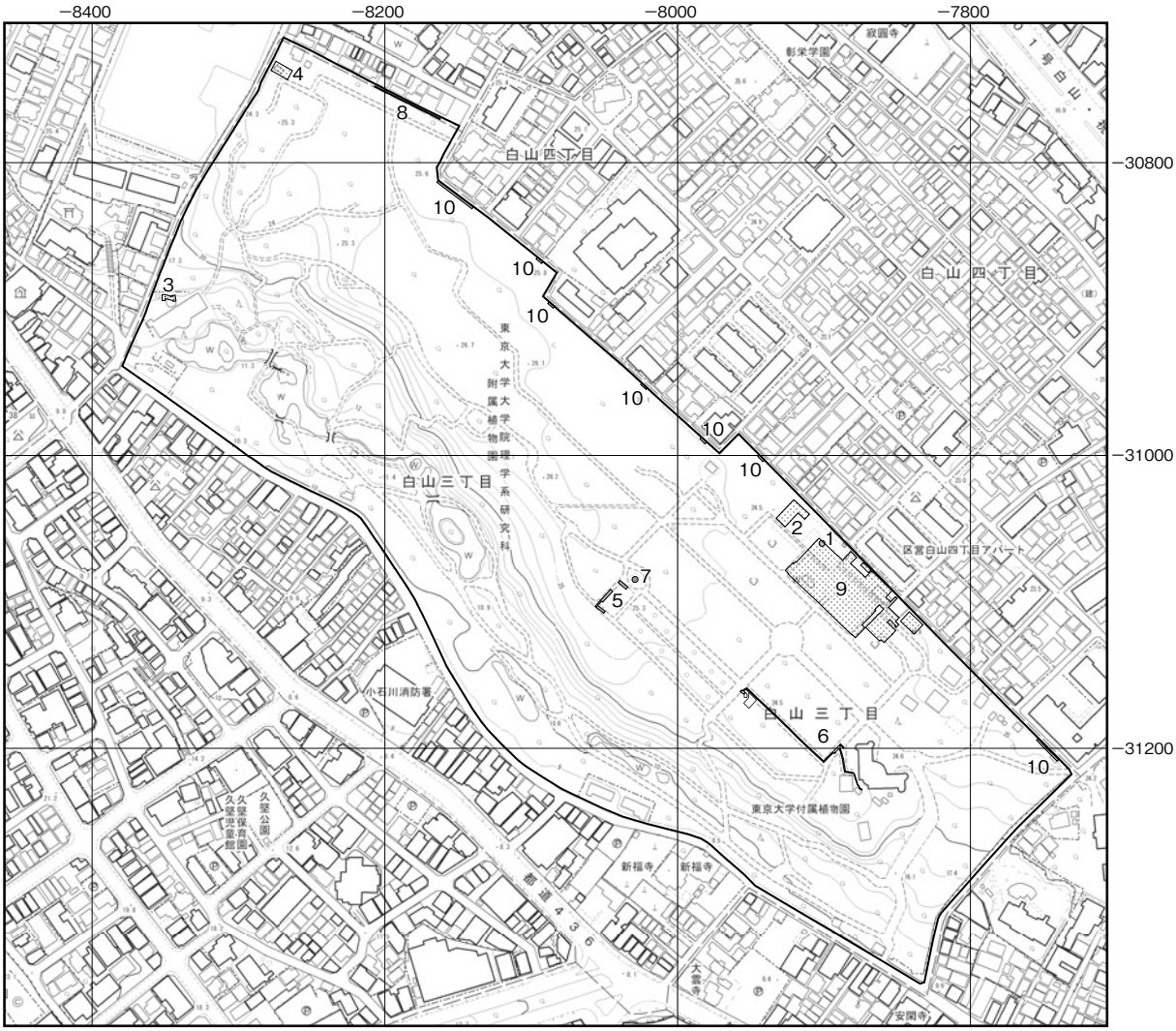
本郷地区調査地点(2)試掘・立会調査

S=1/4000

※北緯 35°42′
東経 139°45′



駒場I地区調査地点



白山地区調査地点

世界測地系

第１部　2017年度調査室事業概要

第Ⅰ章　埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）

2017 年度は、本郷地区、駒場Ⅰ構内において、以下の通りの調査を室員 6 名で対応した。

本郷地区では事前調査が 2012 年度から継続中の本郷 125 クリニカルリサーチセンターＡ棟、および本郷 245 クリニカルリサーチセンターＢ棟など 5 件、立会調査 20 件を実施した。

事前調査を実施した本郷 125 クリニカルリサーチセンターは 16 区・17 区を実施した。旧内科研究棟跡地にあたり、これまで実施した調査区に比べて遺構面の削平が著しかったが、底部の一部とはいえ、地下室や井戸などを検出した。2012 年度から実施した本地点の調査はこれで全て終了した。本郷 245 クリニカルリサーチセンターＢ棟は本郷キャンパス南端にある医学部附属病院南研究棟の改修工事に伴う発掘調査である。調査面積は狭小だが、越後高田藩邸の長屋や屋敷境と考えられる堀などを検出した。また本郷 4 医学部附属病院給水設備棟の調査以来、これまで数地点の調査で検出した埋没谷をここでも確認し、その流路をより具体的に明らかにすることができた。

駒場Ⅰ構内では駒場仮体育館の事前調査を実施したほか、試掘調査 1 件、立会調査 1 件を行った。駒場仮体育館は同キャンパスの体育館の建て替え工事に伴うもので、本調査は工事期間中に使用される仮設体育館が建てられる正門隣接地を対象とした。調査では駒場農学校に関係すると推測される黒褐色土や、縄文時代に帰属する遺構を検出した。

また白山地区において史跡小石川植物園（御薬園跡及び養生所跡）第 3 地点の試掘調査を、文京区支援事業として実施した。

本郷地区

＜事前調査＞5 件

2017 年 4 月 1 日～7 月 28 日　本 125　クリニカルリサーチセンターＡ棟（16 区・17 区）（担当：追川）

2017 年 5 月 10 日、29 日　本郷 231 理学部 1 号館Ⅲ期南側外構（担当：原）

2017 年 7 月 3 日　本郷 235 看護師宿舎擁壁（担当：原）

2018 年 1 月 15 日～4 月 4 日　本郷 245 クリニカルリサーチセンターＢ棟（担当：追川）

2018 年 3 月 30 日～4 月 2 日、5 日、12 日、16 日、5 月 10 日、16 日、17 日、12 月 17 日　本郷 244 基幹環境整備（言問い通り横断管路）（担当：大成）

＜立会調査＞20 件

2017 年 4 月 25 日　本郷 232 動物センター前土質調査（担当：原）

2017 年 4 月 12、13 日　本郷 233 アカデミックコモンズ雨水排水管（担当：堀内）

2017 年 5 月 25 日　本郷 234 アカデミックコモンズ補給水管盛替え（担当：大成）

2017 年 7 月 14、15、22、23 日　本郷 236 野球場ブルペン改修（担当：原）

2017 年 8 月 23、29 日　本郷 237 理学部 1 号館ガス管・配水管（仮）（担当：原）

2017 年 9 月 16 日　本郷 239 御殿下グラウンド西側舗装改修（担当：清水）

2017 年 9 月 19 日　本郷 240 工学部 6 号館北立ち枯れ樹木伐採（担当：堀内）

2017 年 9 月 20 日　本郷 241 列品館西側舗装改修（担当：原）

2017 年 9 月 14 日　本郷 242 入院棟Ｂ棟東側道路改修（担当：追川）

2017 年 12 月 4 日　本郷 243 中央食堂その他改修（EV 新設）他（担当：原）

2017 年 12 月 6 日　本郷 246 育徳園石組補修（担当：原）

2018 年 1 月 18、19 日　本郷 247 中央食堂改修機械設備（担当：原）

2018 年 1 月 16 日　本郷 248 農学部グラウンド防球フェンス新設（担当：堀内）

2018 年 2 月 15 日　本郷 249 医学部総合中央館 1 階改修・既設管接続（担当：大成）

2018 年 3 月 20 日　本郷 250 山上会館龍岡門別館東側及び広報センター東側実生木伐採・抜根作業（担当：香取）

2018 年 3 月 22 日　本郷 251 医学部総合中央館中庭照明改修（担当：香取）

2018 年 3 月 23 日　本郷 252 旧東大出版会北側植栽整備（担当：堀内）

2018 年 3 月 23、24 日　本郷 253 外来診療棟西側配管（担当：小川）

2018 年 3 月 27 日　本郷 254 育徳園低木撤去植替え（担当：大成）

駒場Ⅰ構内
＜事前調査＞1 件
2018 年 2 月 5 日～ 16 日　駒Ⅰ 37 駒場仮体育館（担当：堀内）

＜試掘調査＞1 件
2018 年 3 月 5 日～ 26 日　駒場Ⅰ 38 駒場体育館（担当：原）

＜立会調査＞1 件
2018 年 1 月 30 日　駒場Ⅰ 36 並木通り舗装改修（Ⅲ期）（担当：原）

他地区
＜試掘調査＞1 件
2018 年 1 月 22 日～ 2 月 2 日　白山 10 史跡小石川植物園（御薬園跡及び養生所跡）第 3（文京区支援事業、担当：成瀬・香取・小川）

第１節　本郷構内の事前調査

1. 本郷 245　クリニカルリサーチセンター A 棟 (16 区・17 区)（HCRA12）

所 在 地　東京都文京区本郷 7-3-1（文京区№ 47　本郷台遺跡群内）
調査期間　2017 年 4 月 1 日～ 7 月 28 日
調査面積　3,620.68㎡
調査担当　追川　吉生

1. 調査の経緯

東京大学では、文京区本郷３丁目に所在する医学部附属病院（本郷キャンパス）に臨床研究棟の新営を予定している（図１）。本計画は当初、内科研究棟や臨床講堂周辺の A 棟と、南研究棟周辺の B 棟の二棟からなっており、それぞれクリニカルリサーチセンター A 棟地点（CRC-A 地点）、同 B 棟地点（CRC-B 地点）と命名した。試掘調査は CRC-A 地点が 2004 年 11 月（クリニカルリサーチセンターＡ棟Ｉ期・旧名疾患生命研究センター）と 2011 年 11 月（クリニカルリサーチセンターＡ棟Ⅱ期）に実施し、CRC-B 地点は 2011 年 11 月（クリニカルリサーチセンターＢ棟）に行った。

CRC-A 地点の事前調査は新営工事の進捗に合わせて実施した。Ｉ期工事として建築される南棟予定地での調査（1 ～ 12 区）を先行し（2012 年 12 月から 2014 年 9 月）、Ⅱ期工事となる北棟予定地およびインフラ整備に伴う調査（13 ～ 17 区）を 2016 年 6 月から 2017 年 7 月にかけて実施した（図２・図 5）。本稿では北棟予定地である 16 区と、インフラ整備に伴う 17 区の発掘調査の概要を報告する。調査期間は 2017 年 4 月 1 日～ 7 月 28 日、調査面積は 3,620.68㎡である。

16 区は内科研究棟跡地である（北東側の一部にインフラ整備に伴う拡張部を含む）。内科研究棟は、内科小児科研究室として 1938 年（昭和 13）に建築された。建物内にある中庭部分を除いて地階が設けられている。Ｉ期調査では現地表面下およそ 1m で江戸時代の生活面を確認し、関東ローム層上面までの間に 5 枚前後の生活面を検出した。しかし本区は内科研究棟によってローム層まで削平されていた。加えて調査区内の広い範囲で汚染土壌が確認されたため、その対策に伴って大幅な掘削が行われた。そのため発掘調査はローム層内に残る遺構のみが対象となった。

17 区はインフラ整備に伴い 16 区の北西側に設定した調査区で、南北 12.5m、東西 2m と狭小である。16 区と連続する調査区東側を除き、17 区は工事塀のほぼ直下という状況のため、遺構の面的なひろがりについては明らかにできなかった。

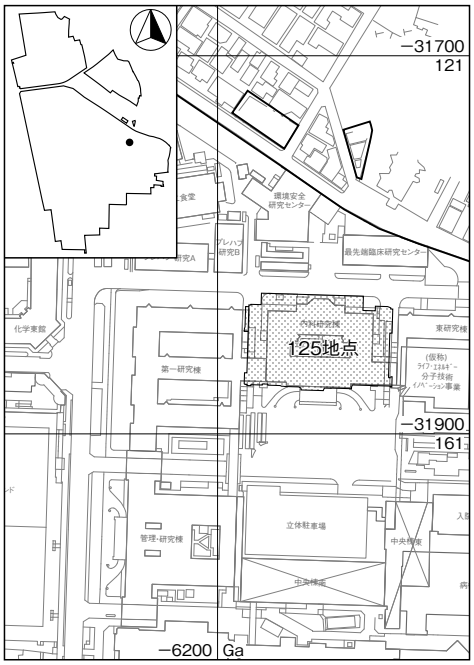


図１　調査地点位置図

図２　調査箇所位置図
※1Grid 5m×5m

２. 調査の概要

(1) 16 区

調査地に建っていた内科研究棟の基礎と汚染土壌の除去作業による削平が、ローム層中にまで及んでおり、江戸時代の盛土層は全て失われていた。103 基の遺構を検出したが、いずれもローム層中での検出である。主な遺構には地下室 33 基、土坑 30 基、井戸 14 基、溝 10 基である。これらは遺構の底部がローム層中に達していたことで検出が可能だったものである。Ⅰ期調査では約 1,500 基の遺構を検出しているので、本来は 16 区にも相当数の遺構があったものと推測される。

本区のうち土壌汚染の影響が特に著しい 151 ライン以北では、検出遺構の大部分を井戸が検占めている（図 3)。一方、151 ライン以南では、Ｇｆ―Ｇｊグリッドおよび Ｇｎ―Ｇｑグリッドの範囲で大規模な削平を免れており、地下室にも天井部や開口部の一部が残っていたほか、溝の底部を検出した（図 4)。

地下室

SU13085　開口部の一部と巾着状にオーバーハングする天井部が残る地下室である（図 6・図 7)。本区で検出した地下室の中では遺存状況が最もよいものだが、出土遺物は収納コンテナ 1 箱（以下同じ）にも満たない。

SU13082・SU13086　天井の一部が残っているため、巾着状を呈していたことがわかる地下室である (図 8)。底部が切り合っているが、新旧関係は詳らかでない。SU13086 の形状はいびつな不整形を呈している。これは SU13086 の構築時に、隣接した SU13082 を掘り当ててしまい、そこで掘削を止めたことを示すものかもしれない。その場合、SU13082 と SU13086 との間に旧－新という関係がなりたつ。出土遺物は 4 箱分あり、SU13086 の覆土には混土貝層も認められる。

SU13097　西側に階段を伴う地下室で、北側と西側は撹乱によって壊されているため本来の形状は不明 (図 9)。現状では地下室本体は東西 3.0m、南北 1.5m。西側の階段には両側に工具痕が著しく残るスロープ状の掘り込みが伴う。出土遺物は 2 箱分出土した。底部には厚さ約 10㎝の炭化物層が堆積しており、その上には極めて硬化した層が堆積している。炭化物層中には焼土や食物残滓は認められない。

SU13076　調査区南側中央で検出した。この周辺は内科研究棟解体時の掘削が大きく、調査区南側の中でも特に遺存状況が悪い部分である。SU13076 も本来の形状は不明だが、現状で南北 3.5m、東西 1.8m、深さは 76㎝である。覆土は砂で、礫石大の石が多量に含まれている（図 10)。この石とともにレンガ片が出土したことから、これらは何れも近代以降に遺構内に廃棄されたものであることが推測される。

溝

SD13092 など　SD13092 は南北方向に延びる素掘りの溝である。現状で南北 7.5m、東西 0.6m である。表土掘削の際に、内科研究棟に起因するコンクリ片などが含まれていたことから撹乱として扱ったが、調査を進めていく中で、SU13085 や SU13086 などの地下室によって切られていることが判明した（図 11)。

南側の延長上には 1 区で検出した SD12081・12089・12087・1209 などがある。これらは土坑を伴う溝という形態から、加賀藩邸と富山藩邸との屋敷境と考えられる。SD13092 は素掘りの溝であることや、複数基の地下室によって切られていることから、これらに連続する屋敷境であると断定することは難しい。

井戸

SE13160　長径 1.8m、短径 1.5m。足掛けの穴を設けている。内部にコンクリートガラを含む砂が充填されている（図 12)。確認面から 4.3m の深さ（標高 7.4m）まで断ち割ったが、砂が途切れずに確認された。恐らく井戸底部まで砂が充填されているものと考えられる。

SE13161　直径 1.5m。足掛けの穴はみられない。瓦を多量に含んでいる（図 13)。深さ 3.7m（標高 8.0m）まで掘削したが、内部には瓦が途切れることなく含まれていた。半裁時に出土した瓦の重量は 531.78kgである。確認面から 1 mほどの間の瓦層（1 層）に、井戸廃絶時の息抜きとして差し込んだ竹の痕跡が認められる。また瓦層（3 層）からは、石製の井戸枠が出土した。この井戸の井戸枠だったものだろう。

(2) 16 区北東側

施設新営に伴うインフラ工事の必要から、本区北東側の一部を拡張した。ここは内科研究棟と東研究棟との間に設けられていた、中央部が深い半地下道の跡地にあたる。地階を有した内科研究棟跡地（16 区）に比べ遺構の破壊は軽微で、土坑、ピット、道路などを検出した。

土坑

SK13204・SK13205　南北に並ぶ大型土坑で、どちらも遺構西側が旧内科研究棟によって壊されている。規模は南側の SK13204 が長軸（東西）約 2.7m、短軸（南北）約 2.2m、深さ約 2.6m。北側の SK13205 が同じく

約 4.5m、約 3.0m、深さ約 2.8m で、SK13204 に向かってやや傾斜する。どちらも底面、壁面に工具痕が多数認められる（図 14・図 15）。

遺物は SK13204 が遺物コンテナ 9 箱分、SK13205 が同じく 17 箱分出土している。切り合い関係から SK13204 が新しいが、どちらも 18 世紀末から 19 世紀初頭の時期が中心である。暗灰褐色粘土層を主体とする覆土は食物残滓や炭化物を多く含んでおり、これらが廃棄土坑として利用されたものであることが推測される。

道路遺構

SR13163　遺構の南北と西側が壊されており、東側は調査区外へと続くため遺構の規模は不明だが、砂利やロームブロックを多く含む硬化面を伴うことから道路遺構と捉えた。現状で南北 2.1m、東西 1.6m。遺構の断面は逆台形を呈している（図 16）。

検出標高は 14.4m ～ 14.5m で、周囲には SR13141・SR13156・SR13157 といった道路遺構も検出しており、いずれも検出面はほぼ同一である。SR13156 と SR13157 のように造り替えられたものもあるが、藩邸内に構築された一連の道と捉えてよいだろう。本地点の南側に位置する 3 区では、南北方向に延びる道路遺構を検出している。あるいはこれに続いていた可能性もある。

SR13134　遺構西側に立ち上がりを確認したが、東側は調査区外に延びている。また遺構の南北は撹乱によって壊されているので、遺構本来の規模は不明である。砂利やロームブロックを含む覆土が極めて硬く突き固められていることから、道路遺構とした（図 17）。本来の遺構規模は不明。検出標高は 14.2m なので、SR13163 から延びる道路だった可能性がある。しかし両者の間には SK13204、SK13205 などの廃棄土坑が複数基構築されているので、SR13134 と SR13163 が一連の道路であった場合は、少なくとも 19 世紀初頭には廃絶されたことになる。

(3) 17 区

インフラ設備のため 16 区北西側を拡張した調査区で、南北 12.5m、東西 2m と狭小である。

地下室 4 基、土坑 6 基などの遺構を検出した。16 区北西側に隣接しているが、汚染土壌の処理のために大きく掘削されており、16 区側とのつながりは明らかにできなかった（図 18）。

地下室　検出した 4 基の地下室はいずれも部分的な検出に留まっており、遺構の規模は不明である。遺物の出土は少数であり、検出状況から遺構の廃絶時期を明らかにするまでには至っていない。

採土坑（SX13209）　遺構の北側は SX13201 と切り合い、東側は汚染土壌によって壊されている。遺構の西側と南側は調査区外へ続いており、現状での規模は南北 9.3m、東西 1.3m、深さ最大 2.1m である。上述のように壁面は未検出だが、底部には工具痕が多く認められる（図 19）。

本区の南側に位置する 4 区では、16 世紀末～ 17 世紀初頭の堀（SD11473）を検出している。SX13209 は当初、これに続く堀の一部と考えた。しかし SD11473 の断面形態が薬研形を呈し、覆土の堆積状況からは空堀だったことがうかがえるのに対して、SX13209 は断面が不整形で、遺構底部に酸化鉄ブロックを多く含んでいる。このことから現段階では別遺構と捉えている。底部の工具痕が著しいことと、遺構の規模が大きいことが予想されることから、採土坑の可能性が高い。

覆土の中層には、17-3 面盛土層と称した黒色土が約 0.3m の厚さで堆積している（42 層）。この層は北から南・西から東へと傾斜していることから、調査区の北西方向から埋められたことが推測される。42 層の上に堆積している暗褐色土層や黒褐色土層は水平に堆積しているので、SX13209 は 17-3 面構築前後に埋め立てられたことがうかがえる。

3. まとめ

16 区は CRC-A 棟地点の約半分を占める広大な調査区だが、近代以降の削平によって遺構が著しく破壊されていた。南側の 1 ～ 3 区の状況を踏まえれば、4 枚程度の生活面が削平されている。従って本区の遺構分布状況から大名屋敷の空間構成を捉えることは困難であるが、1 区で検出した加賀藩邸と富山藩邸の屋敷境は、16 区にまで続いていた可能性が高い。ただし 16 区で検出した溝（SD13092）は 1 区の屋敷境と形態が異なっている。加えて複数基の地下室に切られていることから、これを藩邸の屋敷境とするにはなお検討を要する。

14 区では南北方向に延びる道路を複数基検出した。しかしそれに隣接する 16 区北側が大きく破壊されているため、そのつながりを明らかにすることはできなかった。

16 区南側の地下室の分布状況をみてみると、前述の

SD13092と切り合い関係を持つSU13081、SU13085、SU13086をはじめとした南北方向に並ぶ地下室列と、SU13097、SU13112、SU13106などの南北方向の列とがある。その間隔は約12～13ｍで7間程度に相当する。これらの地下室の列には、鍵の手状に南北方向にのびる 溝（SD13083・SD13074・SD13084） や、SD13113が平行しており、その中央付近に井戸（SE13090）がある。どちらの藩邸に帰属するかという点は措くとしても、南北方向に棟をもつ少なくとも二軒の勤番長屋が並ぶ藩邸外郭部の景観が推測できる。

こうした景観復原には個々の遺構の年代的位置付けを明確にすることが不可欠だが、本地点で検出した遺構の多くが砂を充填されており、出土遺物が認められない。調査開始当初は、遺構内の砂を覆土として捉えていた。しかしSU13076やSE13160などで、砂とともにコンクリート片やレンガ片が出土したことから、現段階ではこれらは医学部附属病院の施設工事の際に充填および投入されたものと考えている。

本地点の土地利用状況は、明治年間に寄宿舎や内科病室があり、1938年（昭和13）に、内科研究棟（内科小児科研究室）が建てられた。遺構内に砂を充填した理由や時期を示す記録は管見ながら見いだせないが、遺構が建造物の圧で押しつぶされることによる地盤の沈下を避けるために、覆土を抜き取り、代わりに砂を充填したものと考えられれば、内科小児科研究室の新営工事の際に行われた可能性が高い。Ⅰ期調査の成果を鑑みれば、その際に相当量の遺物が出土したはずであるが、その扱いについても詳らかでない。

16区北東側の拡張部分には土坑が集中している。その中にはSK13204やSK13205のような大型廃棄土坑もあり、この付近が富山藩邸内でも土地利用の頻度が高い一画だったことがうかがえる。ここではまた、3区で検出した道につながるようなSR13163などの道路遺構を検出した。大型廃棄土坑群はこの道を壊して構築されていることから、藩邸内の道からゴミ処理施設への変遷がうかがえる。こうした土地利用状況は、隣接する国際科学イノベーション総括棟地点との関係も含めて、今後検討を加えていく必要がある。

17区は調査区が狭小のため安全上十分な調査は行えなかったが、当初の目的である生活面の構築については興味深い知見を得ることができた。最も古い段階に採土坑があり、それを埋め立てた後に、他の調査区でもみられる生活面が17区にも及んでいることを示す土層堆積状況は、加賀藩邸東北側の開発を考える上で重要な成果だった。

図３　16 区北側全景

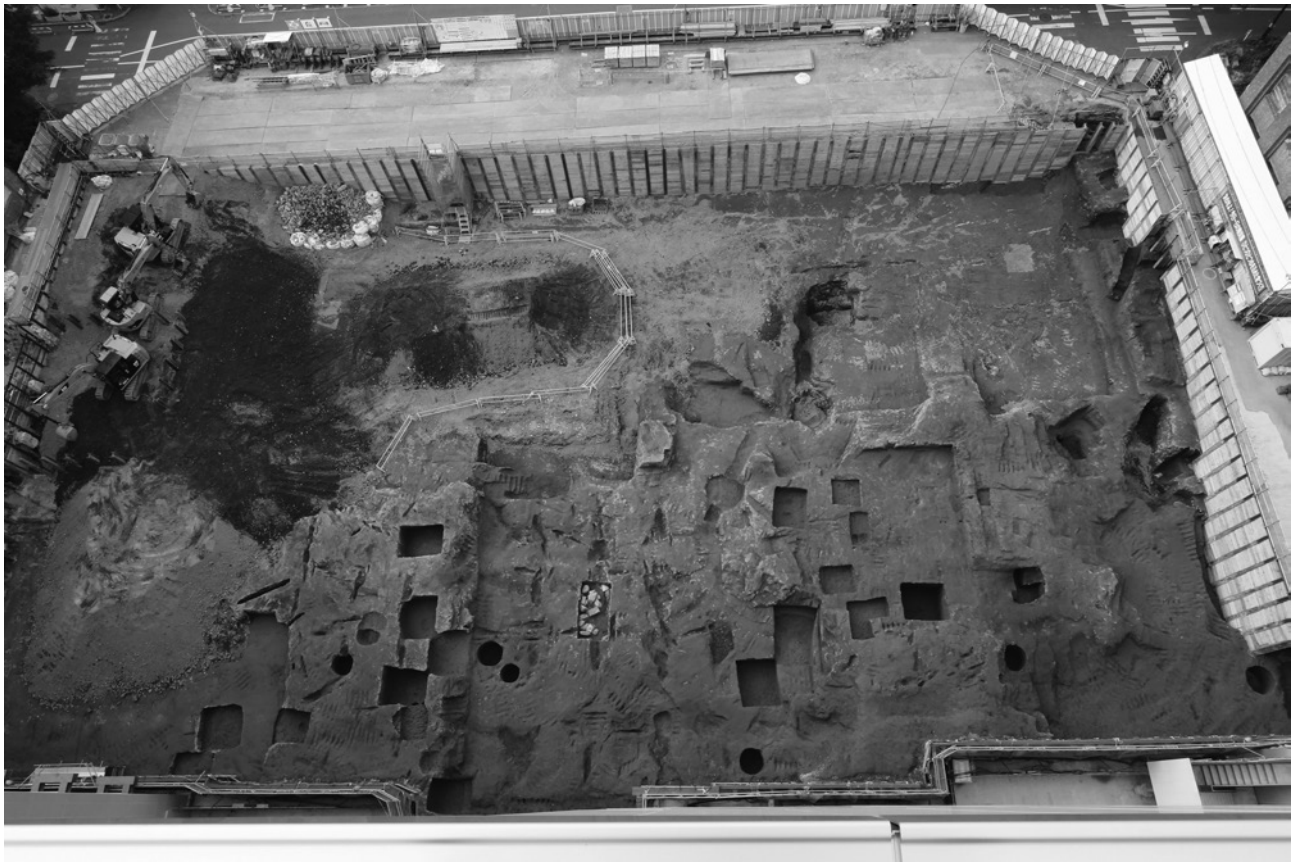


図４　16 区南側全景

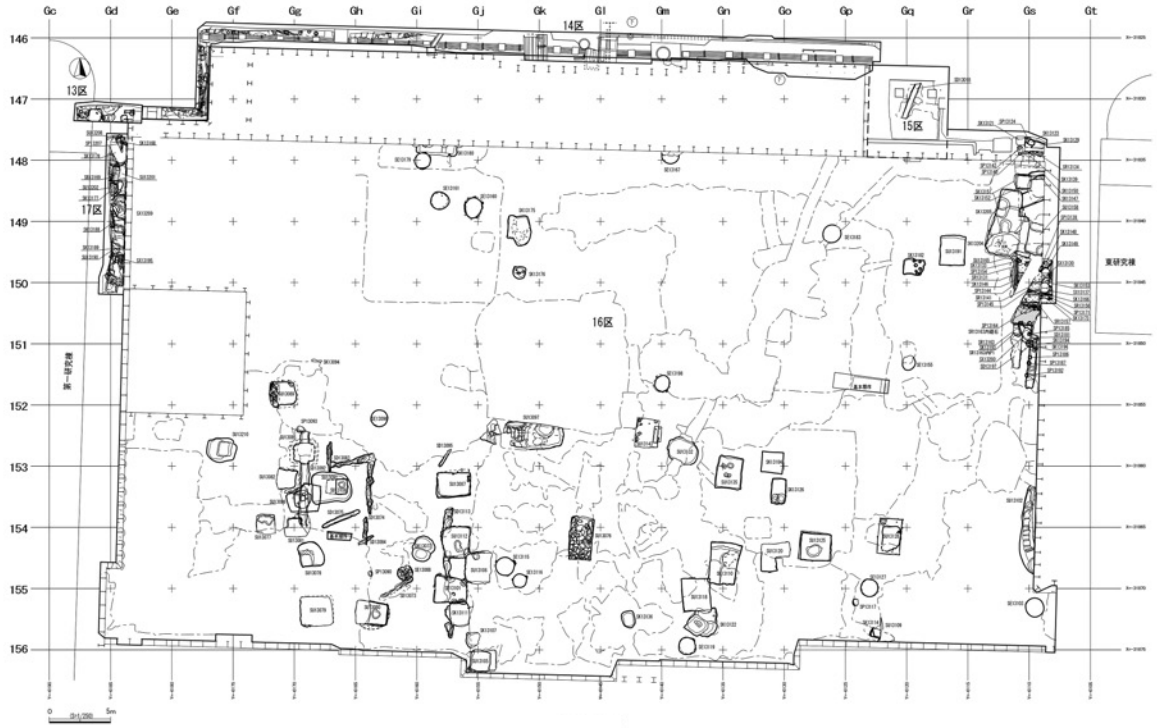


図５　遺構全体図

図６　SU13085

図７　SU13085 土層断面

図８　SU13082・SU13086

図９　SU13097

図 10　SU13076

図 11　SD13092

図 12　SE13160

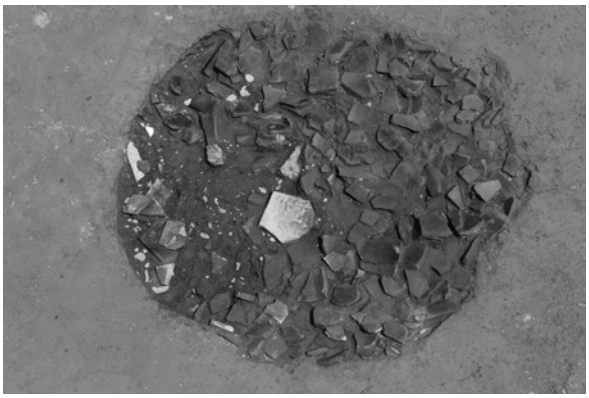


図 13　SE13161

図 14　SK13204・SK113205

図 15　SK13204・SK113205

図 16　SR13163

図 17　SR13134

図 18　17 区全景

図 19　SK13209

2. 本郷 244　基幹環境整備（言問通り横断管路）（HKO18）

所 在 地　東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学本郷構内（文京区 No.47・本郷台遺跡群）
調査期間　2018 年 3 月 30 日～ 4 月 2 日、5 日、12 日、16 日、5 月 10 日、16 日、17 日、12 月 18 日
調査面積　立坑 1：135.2㎡、立坑 2：11.95㎡、立坑 3・4：50.36㎡、立坑 5：5.83㎡
調査担当　大成　可乃（東京大学埋蔵文化財調査室）

1. 調査の経緯と経過

東京大学では本郷構内農学生命科学図書館付近から言問通りを縦断し、工学部 4 号館付近まで延びる横断管路の設置を計画、それに伴い 5 箇所の立坑（立坑 1 ～立坑 5）設置が計画された（図 2）。調査地点は絵図面などと対比すると水戸藩邸南端付近に該当し、立坑 1 と隣接する教育学部総合研究棟（SK）地点やインテリジェント・モデリング・ラボラトリー（IML）地点では 17 世紀後葉～ 19 世紀前葉の廃絶年代が推定される遺構が検出されている。また立坑 2 ～立坑 5 と隣接する工学部 4 号館改修に伴う試掘調査では藩邸内の道路や埋没谷の存在が確認されており、本調査地点でもそのような遺構の存在が想定された。

東京大学施設部より依頼を受けた東京大学埋蔵文化財調査室では、2018 年 3 月 30 日～ 4 月 2 日、5 日に立坑 3、4 を、4 月 12 日、16 日、5 月 16 日、17 日に立坑 1 を、5 月 10 日に立坑 2 を、12 月 18 日に立坑 5 の調査をそれぞれ実施した。立坑 1、立坑 3、立坑 4 では表土掘削直後に既設管が確認されたことで計画の見直しが行われ、埋蔵文化財の調査も当初の計画範囲から掘削範囲を移動、あるいは変更して実施し、合計 203.34㎡の発掘調査を実施した。以下、立坑毎に調査概要とその結果を述べる。

2. 調査概要と結果

立坑 1（図 3 ～ 4）

表土掘削で設置計画範囲に既設管が多数検出された為、計画範囲を北側へ変更、発掘調査は計画地点と変更地点の 2 地点で合計 135.2㎡を対象に実施した。計画変更前地点で僅かに遺存していた地山は地表面下約 50cm で検出、そこから約 80cm 掘削しローム層の堆積状況を確認したが、全体に粘性が強い黄褐色～暗黄褐色土であり、いわゆるハードロームや黒色帯を確認するには至らなかった。変更後地点では地表面下約 30cm で地山が検出されたが、遺構、遺物は検出されなかった。地山ローム層の堆積状況を調査区北端で地表面下約 150cm まで確認したところ、地表面下検出のロームはハードローム（Ⅳ層）であり、地表面下約 120cm で第二黒色帯が検出された。更に中央付近でも地表面下約 300cm 付近まで深掘りを実施したところ、ローム全体がやや白色化

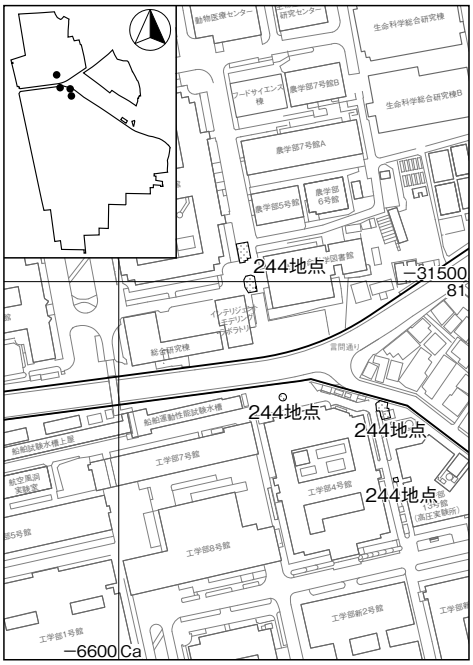


図１　調査地点位置図

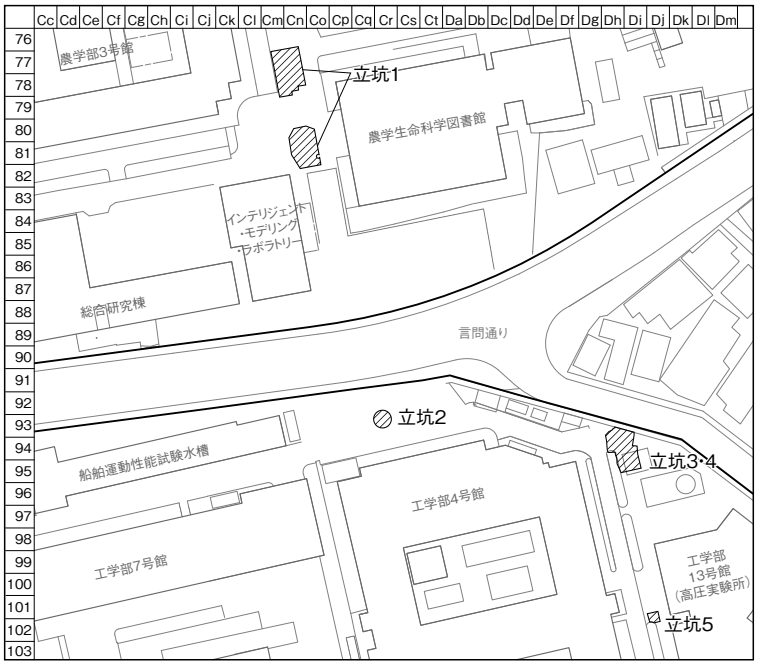


図２　調査箇所位置図
※1Grid 5m×5m

し、粘性が強く、立川ローム層標準層序との比定が困難であった。地表面下約 250cm で粘性の強い暗褐色土が、それ以下では黄白色粘土が検出されるなど、いわゆるロームに水が付いた状況が確認された。

立坑２（図 5）

調査対象面積は立坑掘削範囲の 11.95㎡であったが、工事計画範囲と既存建物基礎の残存範囲が概ね重なり、調査範囲が大きく撹乱されていることが計画図面などから想定された。さらに調査範囲の南側半分には鉛による汚染土が地表面下 100cm で確認されたことから、工事前にその部分までの土を除去する必要が生じた。そこで事前調査に先行し、汚染土除去後、その部分で遺構遺存状況と既存建物基礎による撹乱状況の立会調査を実施したところ、既存建物基礎が調査範囲南半分全面で確認され、基礎の下で確認された土はすべてコンクリートあるいはレンガなどを含み、基礎の掘り方に伴う埋め土と判断され、地山を確認することは出来なかった。なお汚染土除去対象外であった北側も既存基礎の状況が南側と同じであることも確認された。

本地点に近接する調査（本郷 177 工学部 4 号館屋外排水管改修に伴う調査）では地表面下約 50cm で地山が確認され、後述する本地点東側の立坑 3・4 でも地表面下約 30 ～ 60cm で地山が確認されている事などから、既存基礎が地表面下 220cm に埋設されている本地点では地山が大きく撹乱されていることが想定され、これ以上の調査は実施しなかった。

立坑３・４（図 6 ～ 8）

立坑 3 の計画範囲に既設管（地表面下 300cm 程で推進工法による陶管を検出）が確認されたことから、掘削位置を南へ移動、それに伴い立坑 3 の南側に近接していた立坑 4 の位置も南へずらし、立坑 3・4 の調査を同時に実施した。なお既設管が確認される前にすでに当初計画範囲内の調査を実施しており、その部分から南側に拡張する形で計 50.36㎡の対象範囲に対する調査を実施した。立坑 3 では地表面下約 30cm で、立坑 4 では地表面下約 60cm で地山を検出、両地点ともに近代以前の包含層、遺構、遺物は確認されなかった。

なお本地点では近世の絵図面、明治時代の測量図などから埋没谷の存在が想定されたことから、テストピットを設定、重機により地表面下約 300cm まで関東ローム層の堆積状況の確認調査を実施した。テストピット西壁面で調査を実施したところ、緩やかに南側へ傾斜する状況が確認され、地表面下 80cm からは白色粘土粒や砂粒をやや多く含む明黄褐色土、地表面下約 130cm で粘性の強い暗褐色土、地表面下 200cm 以下はさらに粘性の強い黄白色粘土ブロックや暗黄褐色の粗い砂礫を多く含む明黄褐～黄褐色土層が認められ、本地点では立川ロームⅢ層より下層では立川ローム標準層序とは異なるローム層の堆積状況が確認された。

立坑５（図 9）

調査直前、既設共同溝の直上に立坑を設置するように 2018 年に位置を変更されたため、埋蔵文化財の調査も計画変更に即した場所で行った。結果、地表面下約 50 ～ 60cm で既設ガス管、約 100cm で共同溝が検出された。立坑 5 掘削範囲がすでに共同溝などによって撹乱された範囲であり、遺構、遺物が検出されない事が確認された。

まとめにかえて

近隣調査地点で江戸時代の遺構や古代の住居址、埋没谷などが検出されていたことから本地点においても調査を実施したが、立坑 1 から立坑 5 いずれの地点においても近代以降に地山まで削平され、遺構、遺物は確認されなかった。

19 世紀前半の絵図と照合すると立坑 1、2 は水戸藩邸内の道路、立坑 3 から立坑 5 は同藩邸内の道路または広場のような場所に比定される場所（2011『教育学部総合研究棟地点　インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点』、2014「工学部 4 号館改修試掘調査」）であるが、それらに比定される硬化面や砂利面などは検出されなかった。その要因として限られた範囲の調査であったという事もあるが、全地点が近代以降、地山まで削平され、既設埋設物などで撹乱されていた事などが最大の要因であろうが、地下室、井戸などの地山深くまで痕跡が残る遺構も検出されず、また明治時代以降の盛土層からも江戸時代以前の遺物が全く出土しなかったことから、元々が頻繁に建物などが構築される場所ではなく、また利用頻度も高くない場所であったという推測はできる。

当初想定された埋没谷を具体的に確認するには至らなかったが、立坑 3・4 のローム土堆積状況は埋没谷の存在をうかがわせるものであり、今後立坑 3・4 の南側で実施予定の基幹環境整備電気管路地点でも同様のロームの状況が確認されるのか注視したい。

図３　立坑１全景

図４　立坑１テストピット南北 sec

図５　立坑２全景

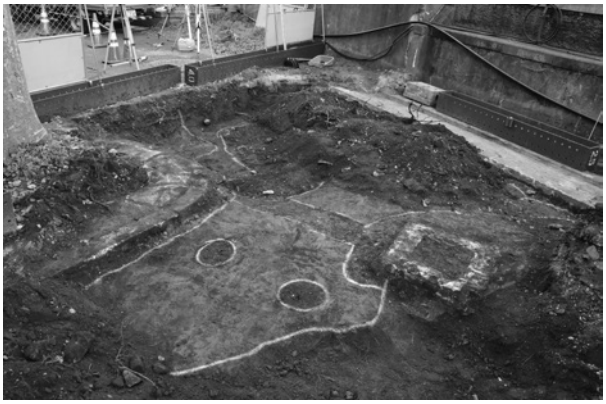


図６　立坑３南北 sec

図８　立坑４テストピット南北 sec

図７　立坑４全景

図９　立坑５全景

第２節　駒場Ⅰ構内の事前調査

1. 駒Ⅰ 37　駒場仮体育館（KKT18）

所 在 地　東京都目黒区駒場 3-8-1 東京大学駒場構内（目黒区 No.1　東京大学駒場構内遺跡）
調査期間　2018 年 2 月 5 日～ 2 月 16 日
調査面積　376㎡
調査担当　堀内秀樹

1 調査の経緯と経過

東京大学は、現在駒場Ⅰキャンパス内で使用している体育館の老朽化に伴ない新営を計画している。新体育館の建築期間内の利用に対応するため、京王井の頭線駒場東大駅北側付近に仮設体育館の建築を計画した（図 1）。建設予定地点は、目黒区遺跡番号 1 東京大学駒場構内遺跡（[旧][縄] 草・早・中・晩 [平][近]）として周知の遺跡の範囲内であり、調査の必要があった。

発掘調査は、仮設体育館の設計計画に沿って基礎に破壊される部分について行い、2018 年 2 月 5 日から開始、同月 16 日に全ての調査を終了した。

2. 遺跡の概要

発掘調査は、仮設体育館の基礎よって壊される部分を対象に行った（図 2）。したがって調査深度は、計画深度である現表下 50cm ～ 65cm までである。調査の結果、確認・推定された遺構は、近世から近代初期および縄文時代で、出土した遺物は、近代のみであった。確認されたいずれの遺構からも遺物が出土していないことから、

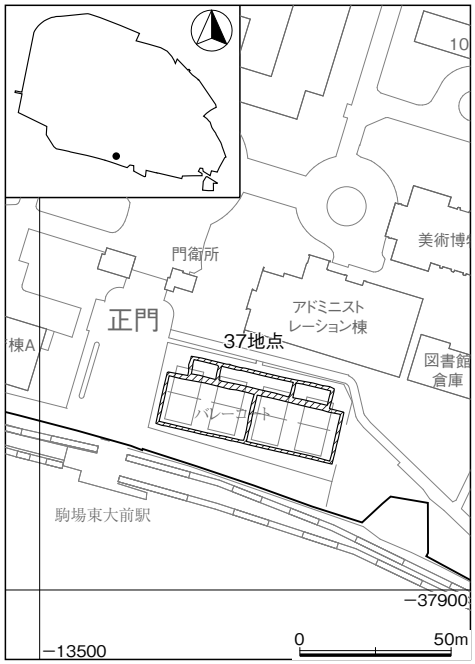


図 1　調査地点位置図

遺構の年代は明確ではないが、覆土の状況から、近世から近代初期に比定されるものが 10 基（うち土層ラインにかかる 6 基について試掘調査を行った）、縄文時代が 34 基（うち 19 基を試掘調査を行った）の合計 44 基であった。

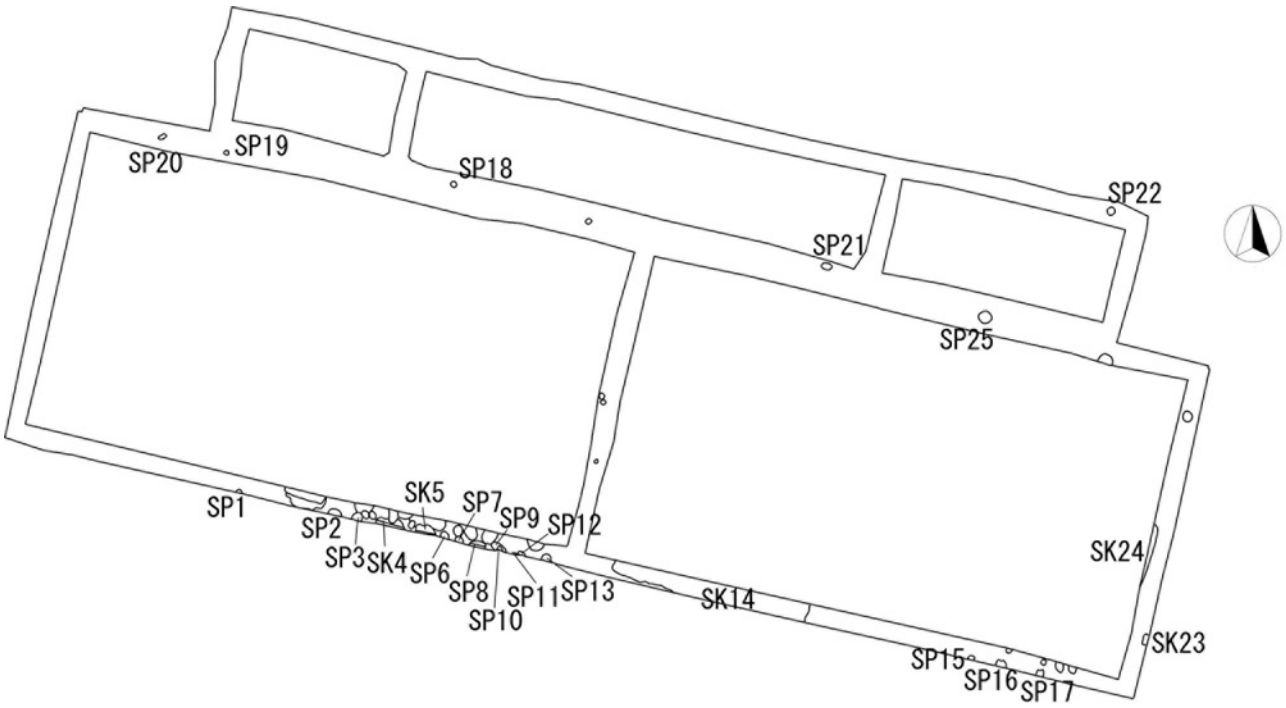
(1) 基本層序

調査区全体に確認された層序は、上層から表土（現代）、黒褐色土（近代初期？）、茶褐色土（縄文？）、ローム漸移層（Ⅱｄ層）、関東ローム層の順で堆積していた。ローム層上面は、北西から南東にかけて緩やかに傾斜を有していた。調査区北東部では、表土約 20cm、茶褐色土約 10cm、一部にローム漸移層（約 10cm）、以下武蔵野標準層位Ⅲ層で、現表下約 40cm でローム面が検出され、自然堆積層は近代以降に大きく削平されたと推定された。また、調査区南側トレンチ東端では、表土 50 ～ 60cm、黒褐色土約 10cm の堆積が確認され、現表下 70cm でローム漸移層上面が確認された。この黒褐色土は、調査区の東南側のみ確認され、同層中から土管の小破片が出土していることから、近世から近代初期にかけての堆積土と推定された。

(2) 近世から近代初期

黒褐色土層は、粒子が均等で礫・砂粒などの混入物もないことから耕作土と推定された。調査区南東側から確認された SK14 ～ SP17、SP23、SK24 は、SK14 を除いて黒褐色土を覆土に持つもので、同層上面あるいは同層下面から切り込まれていた。特に SP15 ～ 17 は平面形、規模、坑底レベル、間隔などから同時期に機能していた塀などの構造物であろうと推定された。SK14 は、覆土に黒色土を含まず、これら遺構より新しい可能性も想定される。

当該地は『目黒区史』によると、江戸時代には幕領武蔵国荏原郡馬込領上目黒村に属し、将軍放鷹の御立場として利用されていた。これがこれまでに駒場構内遺跡において確認された江戸期の遺構は少ない要因としてあげ



２図　全体図

図３　SP15

図４　SK24 土層堆積状況

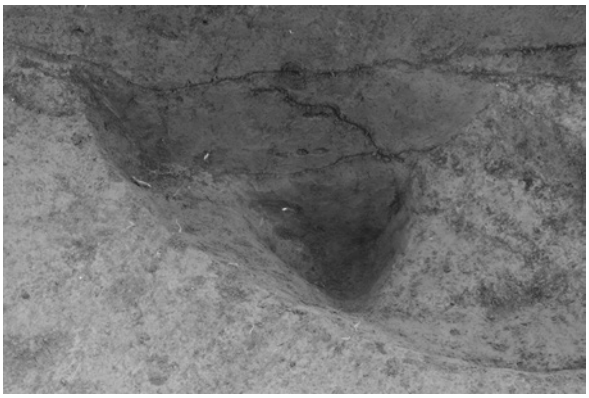


図５　SP9・SP10 土層堆積状況

図６　SP21 土層堆積状況

られる。上記、耕作土と推定される黒褐色土は、明治10（1877）年に設立された駒場農学校（のちの帝国大学農学部）に関連したものと考えられる。明治17（1884）年の農学校の図によると当該地付近は「園芸場」と書かれており、黒色の腐植土を搬入した可能性が考えられる。

(3) 縄文時代

遺物が出土していないことから明確な年代比定はできないが、茶褐色土層下から切り込みを持つ遺構群が34基確認された。このうち仮設体育館の工事によって破壊されるレベルで確認された遺構とメインセクションラインに位置していた19基の遺構について性格を確認するための調査を行った。

これらの遺構確認面の上層である茶褐色土は、本調査地点東側の数理学研究棟地点（駒Ⅰ9)、西側の駒場情報教育棟地点（駒Ⅰ2）からは確認されていないが、遺構の覆土の色調などから縄文時代であろうと推定された。ローム漸移層あるいはⅢ層から切り込んでいる遺構の多くは調査区南側に集中している。これらの遺構は、中～小規模の土坑やピットで、遺構群の性格は不明である。

3. 調査の結果成果

本調査は、調査区西側に旧石器時代、縄文時代早期から後期にかけての遺構・遺物が出土した情報教育棟地点と東側に縄文時代早期の複数の炉穴、平安時代の火葬蔵骨器が出土した数理学研究棟地点のほぼ中間に位置している。加えて、調査区南側に京王井の頭線に沿って流れる目黒川の支流の北側崖線上にあり、かつ周囲で最も標高が高い位置にあることから、縄文時代の集落跡の存在を想定していた。調査の結果では、縄文時代と想定できる遺構は、複数基確認されたものの、住居跡などの生活遺構は確認されなかった。旧石器時代については、遺跡としては好立地と考えられるが、本調査が工事による掘削深度より上位の調査であったため不明である。

図７　調査前

図８　調査区南側トレンチ東端黒褐色土検出状況

図９　調査区南側トレンチ遺構検出状況

図 10　調査区中央トレンチ

図 11　調査区西側トレンチ

第３節　駒場Ⅰ構内の試掘調査

1.駒Ⅰ 38　駒場体育館

所 在 地　東京都目黒区駒場 3-8-1（目黒区埋蔵文化財包蔵地番号１　東京大学駒場構内遺跡）
調査期間　2018 年 3 月 5 日 ～・25 日
調査面積　4155㎡
調査担当　原　祐一

1. 工事と調査の経緯

東京大学は駒場Ⅰキャンパスで第二体育館の解体と駒場新体育館（仮称）新営を計画。建設予定地は第二体育館の西側と現在は解体された明寮跡地が予定されている。隣接する駒場コミュニケーションプラザ（北棟）では縄文時代と旧石器時代の遺跡を確認､調査が行われた。駒場新体育館（仮称）建設予定地は道路を挟んだ北側に位置し、遺跡の存在が予想される区域であるが、明寮の基礎は深いが、基礎の周辺と３列ある基礎の間で遺跡の有無を確かめる必要があり協議の結果試掘調査を行う事になった。

2. 調査方法

調査方法は工事予定地の配管、樹木に考慮し６本のトレンチを設定。設定は遺跡が残邸る可能性のある明寮基礎の南側と北側に東西のトレンチ、明寮の３列の基礎を縦断する形で中央部に南北のトレンチを設定した。それぞれ１トレンチ～６トレンチと呼ぶ。それぞれで掘削を行ったが明寮の解体時に行われた周辺の掘削、撹乱が確認された部分、駒場池に繋がる谷を確認した部分ではトレンチの位置を変更した。また、掘削深度が 4m 以上の部分では崩落の可能性があることから安全を優先し人力掘削は中止し重機掘削のみ行い、図面作成も安全を優先し必要最小限の記録にとどめた。

試掘調査以外にカシミール 3D スーパー地形を用いて周辺の地形の調査を行った。

3. 調査結果（図１・2）

1 トレンチ

関東ローム層を削平した段差を検出した。段差は北方向に傾斜、性格、年代は不明である。傾斜部分で SB1-1 ～ 3、SK2 を検出した。遺構性格は柵の杭穴か。年代は不明である。

2 トレンチ

2 トレンチで旧石器時代の確認のため関東ローム層の掘削を行った｡旧石器時代の遺物､遺構は確認できなかった。

3 トレンチ

近代の遺構、遺物は第一高等学校時代から農学部時代のものと考えられる。Ⅱ層から縄文時代草創期の土器１点、有舌尖頭器１点を出土した。

4 トレンチ

トレンチの南側と北側で関東ローム層を確認した。ローム層検出した部分以外は撹乱を受けていた。

5 トレンチ

トレンチの東側で黒ボク土の自然堆積層を確認した。傾斜の方向から駒場池（一二郎池）に続く埋没谷と考えられれる。遺物は出土していない。

6 トレンチ

トレンチの中央、東西に関東ローム層を確認した。関東ローム層の南側を掘削、関東ローム層の段差を確認した。段差は位置から、第一高等学校の明寮の基礎のために掘削された段差と考えられる。北側はトレンチの壁が崩落する可能性があったため掘削を行うことができなかった。

4. まとめ

1 トレンチで年代不明の段さと遺構、3 トレンチで縄文時代の遺構、遺物、5 トレンチで埋没谷を確認した。協議の結果、周辺で旧石器、縄文時代の遺跡を確認していることから後日、事前調査を行うことになった。

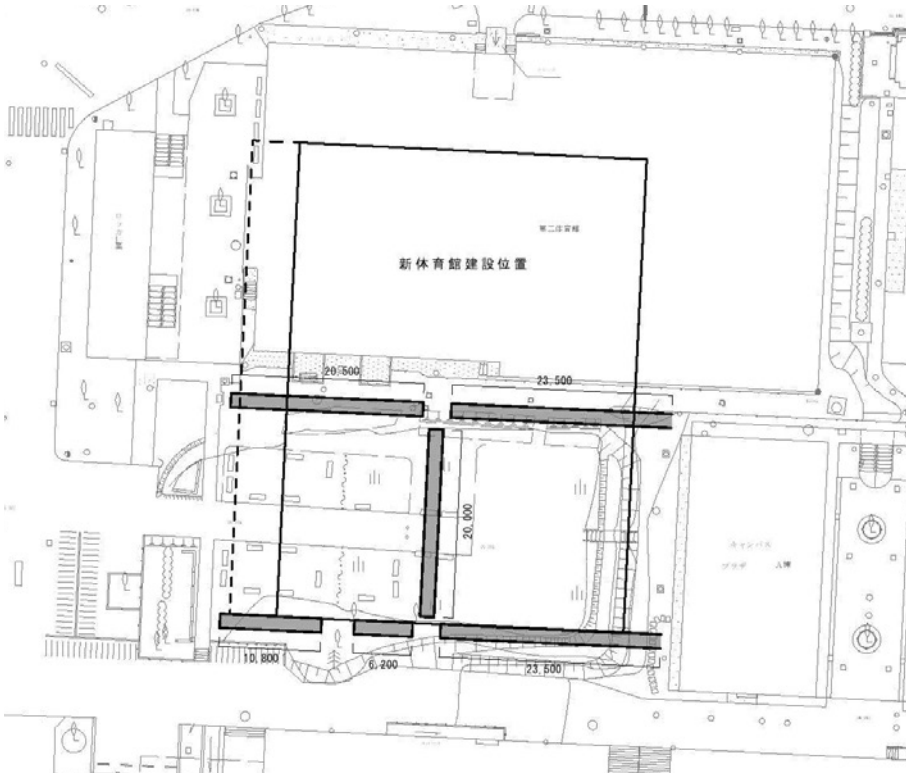


図1　トレンチ設定図（変更前）

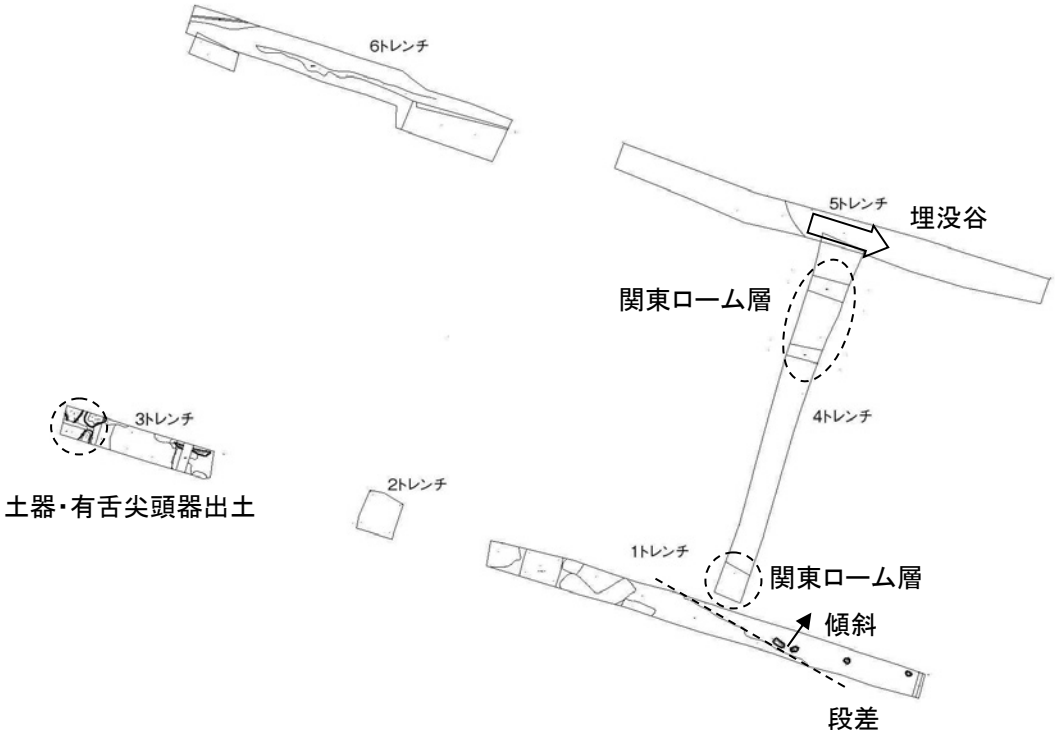


図2　トレンチ設定図（変更後）

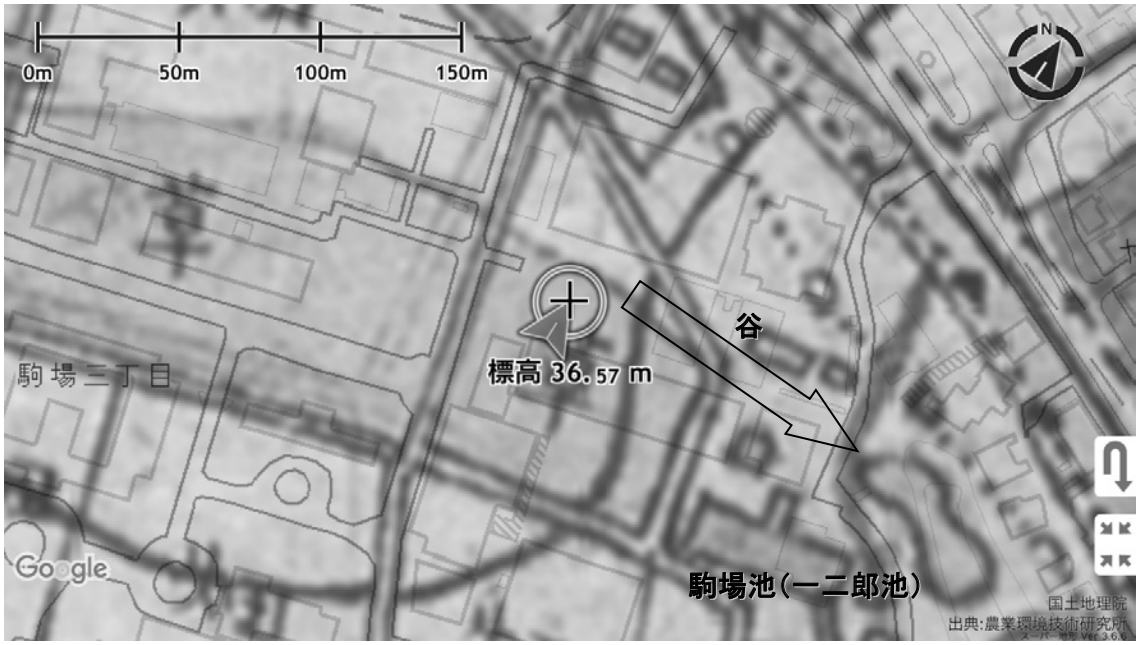


図3　GPSデータと調査地点と旧地形（関東迅速図）カシミール3Dスーパー地形で作成

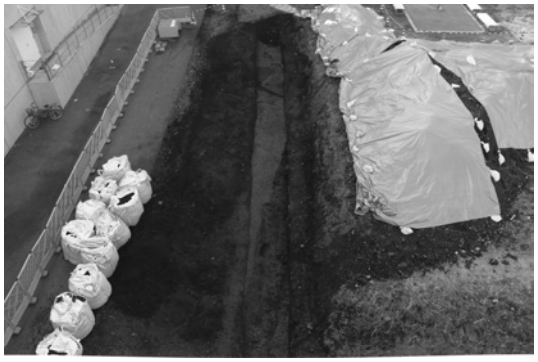


図4　1トレンチ全景　東～

図5　1トレンチ全景SB1-1～3、SK2　東～

図6　2トレンチ東西SEC7

7図　2トレンチ関東ローム層掘削

図8　3トレンチ 西～

図9　3トレンチ関東ローム層掘削

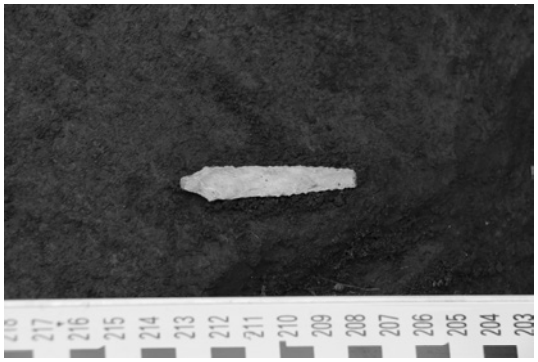


図10　SK6石器出土状況

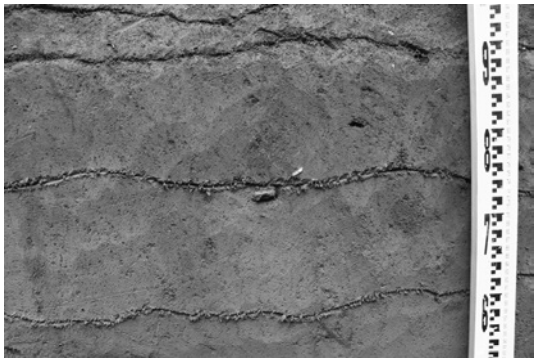


図11　SK6土器出土状況南～

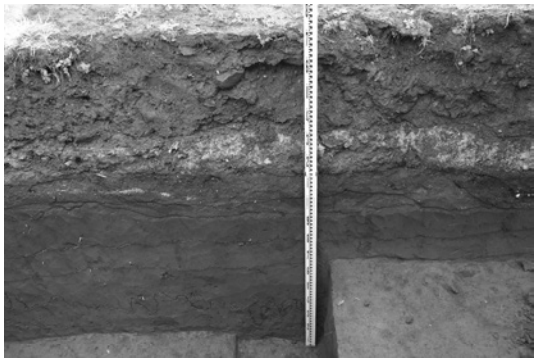


図12　SK6石器･土器出土部分東西SEC

図13　4トレンチ南端関東ローム層検出状況

図14　4トレンチ北端関東ローム層検出状況

図15　5トレンチ西端

図16　5トレンチ谷肩部分

図17　5トレンチ谷肩部分掘削

図18　6トレンチ地山検出状況東～

図19　6トレンチ掘削状況西～

第Ⅱ章　調査資料の整理・研究および公開・活用

第１節　調査資料の整理

1．整理事業概要

本年度は、発掘調査報告書刊行へ向けて以下のような整理作業を行った。

・本郷 24　医学部教育研究棟　全体図作成。報告書事実記載。
・本郷 60　医学部附属病院基幹整備外構施設　報告書事実記載。
・本郷 68　インキュベーション施設　遺物実測、写真撮影。
・本郷 74　医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期　遺物実測。
・本郷 76　ベンチャープラザ　遺物実測。
・本郷 78　情報学環・福武ホール　遺物接合。
・本郷 148　国際科学イノベーション総括棟　木製品遺物実測、整理。

２．外部委託

・本郷 81　経済学研究科学術交流棟　遺物実測図作成（CEL）

第２節　調査・研究成果の公開・活動

１．報告書・年報

東京大学埋蔵文化財調査室 2017『東京大学構内遺跡調査研究年報 10（2013・2014 年度）』

２．広報活動

（1）ホームページ
『東京大学構内遺跡調査研究年報 9』オンライン版、調査研究プロジェクト３告知、発掘調査速報などの掲載

３．研究活動

・東京大学埋蔵文化財調査室 調査・研究プロジェクト３
「江戸藩邸と国元・金沢の近世食生活　―動物考古学の研究成果から―」
日時：5 月 13 日
会場：東京大学大学院農学生命科学研究科・中島董一郎記念ホール
共催：加賀藩食文化史研究会
発表
金子浩昌（東京国立博物館）
「近世江戸動物考古学研究事始め」
畑山智史（文京区教育委員会）
「溶姫の生きた 19 世紀、金沢の食生活」
納屋内高史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）
「出土動物遺存体から見た近世富山城下町の食生活」
阿部常樹（國學院大學学術資料センター）
「加賀前田家江戸藩邸の食生活における国元の影響とその変遷」
江田真毅（北海道大学総合博物館）
「加賀藩前田家本郷邸内における鳥類利用の時間的・空間的変遷 - 溶姫御殿のゴミ穴遺構に着目して -」
覺張隆史（金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター）
「炭素・窒素安定同位体分析に基づく加賀前田家本郷邸出土動物遺存体の食性復元」
丸山真史（東海大学海洋学部海洋文明学科）
「近世の京都における動物質食料の特徴」
原　祐一（調査室）
「庭園から見た江戸と金沢 - 育徳園と兼六園、金沢城 -」

4. 資料の提供・貸出

貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料（資料 / 出土地点略称[*1] / 遺構）
東京国立博物館	展示	平成館考古展示室常設展	1. 色絵大皿片（伊万里・古九谷様式）/HW/ 包含層 2. 色絵亀甲文皿片（伊万里・古九谷様式）/HW/C2 層 3. 染付吹墨鷺図皿片（伊万里）/HHC/L32－1 4. 色絵花卉文大皿片（伊万里・柿右衛門様式）/HGS/391 号 5. 染付八宝文大皿片（景徳鎮窯）/HGS/ 包含層 6. 白釉鉄絵人物草花文壷片（磁州窯）/HGS/ 包含層、U/ 包含層 7. 色絵福字鉢片（呉須赤絵）/HGS/ 包含層 8. 織部脚付平向付片（美濃）/HGS/46、532 号 9. 織部筒向付片（美濃）/HGS/ 包含層 10. 染付脚付向付片（景徳鎮窯）/HGS/ 包含層 11. 染付八角瓢形徳利片（景徳鎮窯・祥瑞）/HGS/678 号 12. 染付水注蓋片（景徳鎮窯）/HGS/ 包含層 13. 色絵皿片（景徳鎮窯）/HGS/496、185 号 14. 黄地緑彩鉢片（大明嘉靖年製）/HW/C2 層 15. 色絵壺片 /HW/C2 層、包含層　HGS/617 号 16. 色絵大皿片（呉須赤絵）/HGS/678 号 17. 黒釉兎毫斑碗片（建窯）/HN/SK299 18. 染付小坏（五良大甫呉祥瑞造）（景徳鎮窯）/HGS/ 包含層 19. 魚屋茶碗片 /HN/SK299 20. 青磁袴腰形香炉片（龍泉窯）/HN/SK299 21. 青磁獅子紐香炉蓋片（龍泉窯）/HN/SK299 22. 青磁算木文瓶片（龍泉窯）/HN/SK299 23. イズニク陶器皿片 /HW/C2 層、SD422 24. 塩釉水注片（ドイツ）/HN/SK299 25. デルフト陶器片 /HGS/ 包含層　U/ 包含層
国立歴史民俗博物館	展示	総合展示「都市の時代」	1. 灰釉碗（呉器手）/HW/D 面焼土 2. 灰釉鉄絵碗（京焼風）/HW/D 面焼土 3. 青緑釉輪剥皿（内野山窯）/HW/D 面焼土 4. 染付皿（草花文）/HW/D 面焼土 5. 染付皿（菊文）/HW/D 面焼土 6. 輪剥皿 /HW/D 面焼土 7. 三島手鉢 /HW/D 面焼土 8. 染付大皿（網干文）/HGS/618 号 9. 染付大皿（海浜文）/HGS/678 号 10. 染付瓶（草花文）/HGS/537 号 11. 染付組皿（草花文）/HGS/537 号 12. かわらけ /HHC/ 池 13. 木製品（折敷）/HHC/ 池 14. 木製品（はし）/HHC/ 池 15. 金泥かわらけ /HIKN/SK4516
東京都江戸東京博物館	展示	常設展示「武士の暮らし・町の暮らし」	1. 裸人形 /HHC/U48－2 2. 童子 /HHC/3 号組石 3. 唐人 /HHC/F33－3 4. 西行 /HHC/F34－11 5. 座位の猿 /HHC/Z35－5 6. 犬 /HHC/V46－3 7. 雉 /HHC/E22－1 8. 鯉 /HHC/AL37－1 9. 瓢箪 /HHC/AJ37－2 10. 植木鉢 /HHC/AJ34－1 11. 銚子 /HHC/AE35－3 12. 浅鉢 /HHC/K30－1 13. 擂鉢 /HHC/AD35－1

貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料（資料 / 出土地点略称[*1] / 遺構）
東京都江戸東京博物館	展示	常設展示「武士の暮らし・町の暮らし」	14. 茶釜 /HHC/ 遺構外 15. 茶釜の蓋 /HHC/Y34－4 16. 城門 /HHC/2 号組石 17. 城壁 /HGS/49 号 18. 向付 /HHB/E7－3 号土坑 19. 片口 /HHC/F33－3 20 ～ 23. 急須 /HGS/7 号 24 ～ 25. 土瓶 /HGS/7 号 26 ～ 27. 皿（磁器）/HGS/1 号 28. 皿（磁器）/HHC/X37-1 29. 皿（陶器）/HHC/H21－2 30. 行平 /HHC/AE36－3 31 ～ 32. 行平 /HHC/H21－1 33、34. 酒坏 /HS7/14 号・54 号土坑、遺構外 35 ～ 37. 猪口 /HHC/H21－2 38、39. 爛徳利 /HHC/AJ34－1、7 40 ～ 42. 貧乏徳利 /HS7/63 号、75 号土坑 43. 箸 /HHC/ 池 44 ～ 49. 焼塩壺 /HS7/9 号地下式土坑、遺構外、83 号土坑、4 号井戸、13 号地下式土坑、1 号土坑 50 ～ 51. 焼塩壺（蓋）/HS7/1 号土坑、3 号井戸、120 号土坑 52. 風炉 /HS7/11、16 号地下土坑 53 ～ 54. 火鉢 /HHC/H21－2、E21－1 55 ～ 58. 火箸 /HHC/G20－2、X36－5、G36－2、2 号組石 59. 五徳 /HGS/7 号 60. 火鋏 /U/105 号 61. 温石 /HGS/50 号 62. 煙管 /HGS/532 号 63. 灰落し /HHC/G26－1 64. 火入れ /HHC/2 号組石 65. 火入れ /HHC/AJ35－1 66 ～ 67. 硯 /HGS/ 68. 水滴 /HHC/Y37－4 69 ～ 72. 小柄 /HGS/ 73 ～ 76. 切羽 /HGS/ 77. 刀子 /HGS/384 号 78 ～ 81. 砥石 /HS7/6 号地下式土坑、7、8 地下式土坑、63 号土坑、HGS/ 82. 碁石 /HGS/ 83 ～ 85. さいころ /HGS/、HHC/Y34－4 86. 箒 /HGS/678 号 87 ～ 89. 植木鉢 /HHC/AJ35－1、AE35－3 90. ～ 91 下駄 /HHC/ 池 92. 銭貨 /HS7/19 号地下式土坑 93 ～ 94. 火打石 /HGS/848、652 号
富山市教育委員会 埋蔵文化財センター	閲覧	富山藩邸内出土陶磁器の調査	1. 遺物出土状況 /HCRA12
国立歴史民俗博物館	展示 / 掲載	企画展『URUSHI 不思議物語 －人と漆の 12000 年史－』、展示図録、パネル	1. 容器 /HW/SK3 2 ～ 5. 碗 /FE1/SK1
東京都江戸東京博物館	展示	企画展『発掘された日本列島 2017「速報！四谷 1 丁目遺跡－麹生産にみる江戸東京－』	1. 麹室完掘 /H7I09/SU485
東京都埋蔵 文化財センター	掲載	広報誌『たまのよこあな』109 号	1. 麹室完掘 /H7I09/SU485
東京都埋蔵 文化財センター	展示 / 掲載	企画展『東京発掘　江戸っ子のくらしと文化』、解説冊子	1. 焼塩壷「いつミ花塩屋つた」/HGS/802 号

貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料（資料 / 出土地点略称 / 遺構）
JPタワー学術文化総合ミュージアム	展示	インターメディアテク COLONNADE3常設展　展示	1. 文久永寶 /HJF06/SK10　1 点 2 ～ 7. 碗、皿、小坏「双葉葵文」/HJF06/SK10 8 ～ 10. 碗、小坏「鏡文」./HJF06/SK10 11 ～ 13. 九谷焼小坏 /HJF06/SK10 14 ～ 25. 染付碗 ./HJF06/SK10 26 ～ 27. 染付皿 /HJF06/SK10 28. 染付変形皿 /HJF06/SK10 29. 染付蓮華 /HJF06/SK10 30. 褐釉水注 /HJF06/SK10 31 ～ 36. 上絵薄手坏 /HJF06/SK10 37. 染付仏飯器 /HJF06/SK10 37. 染付御神酒徳利 /HJF06/SK10 38. 染付筆立 /HJF06/SK10 39. 灰釉鳥餌水入 /HJF06/SK10 40. 硯 /HJF06/SK10 41. ミニチュア刀柄 /HJF06/SK10 42、43. キセル /HJF06/SK10 44. ミニチュア鉢 /HJF06/SK10 45、46 泥面子 /HJF06/SK10 47 ～ 56 碁石状土製品 /HJF06/SK10 57 色絵紅坏 /HJF06/SK10 58. 染付蓋物 /HJF06/SK10 59. 色絵角形段重 /HJF06/SK10 60. 染付油壺 /HJF06/SK10 61. 鉄絵鬢水入 /HJF06/SK10 62 ～ 71. 装身具 /HJF06/SK10 72. 鏡 /HJF06/SK10 73 ～ 77. 簪 /HJF06/SK10 78. 襟留 /HJF06/SK10 79 ～ 95. 寛永通宝四文銭 /HJF06/SK10
吉川弘文館	掲載	『わくわく！探検　れきはく日本歴史3　近世』吉川弘文館	1. 染付大皿（網干文）/HGS/618 号 2. 染付皿（菊文）/HW/D 面焼土 3. 灰釉碗（呉器手）/HW/D 面焼土
雄山閣	掲載	大橋康二「江戸中期における家紋入り磁器の盛行について」『中近世陶磁器の考古学　第7巻』雄山閣	1. 染付大皿（網干文）/HGS/618 号 2. 染付皿（菊文）/HW/D 面焼土 3. 灰釉碗（呉器手）/HW/D 面焼土
石川県埋蔵文化財センター	掲載	講演会「加賀藩江戸屋敷の暮らしと文化」ポスター展示	1. 地下室写真 /HES99/SK107 2. 九谷色絵皿 /HHC/F27-1 3. 色絵角形段重 /HJF06/SK10
吉川弘文館	掲載	『みる・よむ・あるく東京の歴史2　通史編2　江戸時代』吉川弘文館	1. 折敷出土状況写真 /HHC/ 池 2. 木札出土写真 /HHC/ 池 3. SR1643 東造成写真 /HHC299
大橋康二	掲載	大橋康二「有田の色絵磁器の始まりと、その赤絵窯の発見」 English Ceramic Circle	1. 色絵皿 /U/3 号
吉川弘文館	掲載	『みる・よむ・あるく東京の歴史4　地帯編』吉川弘文館	1. 方形周溝墓写真 /TS/1 号 2. 木方形周溝墓出土ガラス玉写真 /TS/1 号 3.. 弥生式土器 /TS/1 号
沼尻　裕子	掲載	京都造形芸術大学　卒業研究 展示パネル	1. 急須 /FE1/SK1 2. 急須 /K14/SU392
高島　裕之	掲載	高島裕之「罹災資料としての陶瓷器」『災害　その記録と記憶』 専修大学出版局	1. 染付皿 /HW/C2 層

＊1　調査地点名
FE1：工学部 1 号館
HAC13：アカデミックコモンズ
HCRA12：クリニカルリサーチセンター A 棟 I 期
HEA07：経済学研究科学術交流棟
HES99：総合研究棟（文・経・教・社研）
HG：医学部附属病院外来診療棟
HGS：御殿下記念館
HHB：法学部 4 号館（法）・文学部 3 号館（文）
HHC：医学部附属病院中央診療棟（病中）・設備管理棟（エネセン）・給水設備棟（給水）・共同溝（共同溝）
HHC299：医学部付属病院第 2 中央診療棟
HI709：伊藤国際学術研究センター
HIKN：医学部教育研究棟
HJF06：情報学環・福武ホール
HN：医学部附属病院看護師宿舎
HW：医学部附属病院入院棟 A
HS7：理学部 7 号館
K14：工学部 14 号館
OKS07：追分国際宿舎
SBS00：医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟
SK：教育学部総合研究棟
TS：工学部武田先端知ビル
U：山上会館

附　埋蔵文化財調査室要項

東京大学埋蔵文化財運営委員会は、全学委員会の見直しに伴い、以下の通り廃止され、埋蔵文化財調査室は、キャンパス計画室下部組織に改組された。

東京大学における全学委員会の見直しに伴う関係規則の整理等に関する規則（平成22年３月25日東大規則第133号）（抜粋）

（略）
（東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の廃止）
第17条　東京大学埋蔵文化財運営委員会規則（平成元年７月11日制定）

埋蔵文化財調査室規則

平成元年７月11日
評議会可決
（設置）
第１条　キャンパス計画室の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。
（業務）
第２条　調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査（以下「遺跡調査」という。）に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。
（１）　遺跡調査に対する総括的指導助言
（２）　文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
（３）　遺物等の保管及び管理
（４）　遺跡調査の方法に関する調査研究
（５）　前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項
（室長）
第３条　調査室に室長を置く。
２　室長は、東京大学専任の教授又は准教授のうちから総長が委嘱する。
３　室長は、調査室の業務を総括する。
（室員）
第４条　調査室に室員若干名を置く。
２　室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。
（庶務）
第５条　調査室の庶務は、本部施設企画課において処理する。
附　則
この規則は、平成８年５月21日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成８年５月11日から適用する。
附　則　　この規則は、平成22年４月１日から施行する。

東京大学埋蔵文化財調査室組織表

室長（人文社会系研究科教授）	大貫　静夫
室員（キャンパス計画室准教授）	堀内　秀樹
室員（キャンパス計画室助教）	成瀬　晃司
室員（人文社会系研究科特任助教）	増田　晴夫
室員（キャンパス計画室助手）	原　祐一
室員（キャンパス計画室助手）	大成　可乃
室員（キャンパス計画室助手）	追川　吉生
教務補佐員	小川　祐二
教務補佐員	香取　祐一
事務補佐員	青山　正昭
事務補佐員	相川　美香子（～2017年９月）
事務補佐員	今井　雅子
事務補佐員	大貫　浩子
事務補佐員	小林　照子
事務補佐員	清水　香
事務補佐員	杉浦　あかね
事務補佐員	田中　美奈子
事務補佐員	渡邊　法彦

第 2 部　2018 年度調査室事業概要

第Ⅰ章　埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）

2018 年度は、本郷地区、駒場Ⅰ構内において、以下の通りの調査を室員 6 名で対応した。

本郷地区では事前調査が本郷 266 基幹環境整備（電気管路）1 件、立会調査 18 件を実施した。

事前調査を実施した本郷 266 基幹環境整備(電気管路)は、言問通りを横断する管路を敷設する基幹環境整備に伴うもので､前年度に実施した本郷 244 基幹環境整備(言問い通り横断管路）から続く調査だった。本地点は水戸藩邸南端に位置しており、大型土坑を含む土坑やピットを検出したほか、須恵器の破片が 1 点出土した。

駒場Ⅰ構内では前年度に引き続いて駒場体育館の建替工事に伴う発掘調査を行った。今年度実施した駒場Ⅰ 43 駒場体育館は、体育館本体部分の調査である。

本郷地区

＜事前調査＞1 件

2018 年 12 月 17 ～ 21 日、2019 年 1 月 28 ～ 2 月 5 日　本郷 266 基幹環境整備（電気管路）（担当：大成）

〈立会調査〉18 件

2018 年 4 月 6 日　本郷 255 外来診療棟南側こいのぼり基礎（担当：小川）

2018 年 5 月 2 日　本郷 256 医学部附属病院バス停渡り配管（担当：小川）

2018 年 5 月 10 日　本郷 257 学生第二食堂横広場整備(担当：大成）

2018 年 6 月 22 日　本郷 258 学生第二食堂前外構（担当:大成）

2018 年 7 月 23 日　本郷 259 医学部附属病院南研究棟外構その他（担当：追川）

2018 年 10 月 22 日　本郷 261 工学部 11 号館南側ハンドホール補修（担当：小川）

2018 年 10 月 25 日　本郷 262 プレハブ研究Ａ棟案内表示板設置（担当：小川）

2018 年 10 月 1､16､17 日　本郷 263 育徳園倒木(担当:原)

2018 年 11 月 5 日　本郷 264 向ヶ丘ファカルティハウス中庭整備（担当：香取）

2018 年 12 月 1 日　本郷 265 最先端臨床研究センター西側喫煙所衝立設置（担当：香取）

2019 年 1 月 24 日　本郷 267 東御長屋井戸跡サイン板設置（担当：成瀬）

2019 年 1 月 21、22、23、25、28、29、30、31、2 月 1 日　本郷 268 育徳園路等補修工事（担当：原）

2019 年 1 月 31､2 月 1 日　本郷 269 農学部ファカルティハウス外構ブロック塀補強工事（担当：原）

2019 年 2 月 20、21、27 日　本郷 270 野球場防球ネット増設（担当：香取）

2019 年 2 月 28 日　本郷 271 東洋文化研究所北側外構スロープ手摺撤去他（担当：小川）

2019 年 3 月 6 日　本郷 272 野球場フェンス補修工事（担当：原）

2019 年 3 月 8 日　本郷 273 学生第二食堂前植栽帯改修(担当：小川）

2019 年 3 月 20 日　本郷 274 本郷通り囲障改修（担当：堀内）

駒場Ⅰ構内

＜事前調査＞2 件

2018 年 6 月 28 日、7 月 2、3、18 日　駒場Ⅰ 42 駒場新体育館新営に伴う機械設備切廻（担当：原）

2018 年 7 月 2 日～ 8 月 27 日　駒場Ⅰ 43 駒場体育館（担当：原）

＜立会調査＞8 件

2018 年 4 月 16 日　駒場Ⅰ 39 大隈良典博士ノーベル賞受賞記念碑（担当：成瀬）

2018 年 5 月 3 ～ 5 日、15、21 日、6 月 6、7 日、22 日、25 ～ 27 日、7 月 26 日　駒場Ⅰ 40 駒場体育館新営電気配管掘削（担当：原）

2018 年 6 月 6､8 日　駒場Ⅰ 41 駒場仮設体育館外構（担当：堀内）

2018 年 10 月 18 日　駒場Ⅰ 44 7 号館西側排水管破損修理（担当：小川）

2018 年 11 月 30 日　駒場Ⅰ 45 テニスコート夜間照明設置（担当：大成）

2018 年 12 月 20、21、25 日、2019 年 2 月 4 日、4 月 24 日　駒場Ⅰ 46 野外トイレ解体工事（担当：原）

2019 年 2 月 6 日　駒場Ⅰ 48 第一グランド改修（担当：香取）

2019 年 2 月 27 日､3 月 8 日､4 月 5 日　体育館（仮）（担当：原）

第１節　本郷地区の事前調査

1. 本 245　医学部附属病院クリニカルリサーチセンター B 棟（HCRB18）

所 在 地　東京都文京区本郷 7-3-1（文京区№ 47　本郷台遺跡群内）
調査期間　2018 年 1 月 15 日 ～ 4 月 4 日
調査面積　93㎡
調査担当　追川　吉生

1. 調査の経緯と経過

東京大学では医学部附属病院に臨床研究棟（クリニカルリサーチセンター）の新営工事を計画した。当初、臨床研究棟は内科研究棟跡地周辺の A 棟と、南研究棟跡地周辺の B 棟が建設される計画で、発掘調査もそれぞれ CRC-A 地点、同 B 地点とした。

CRC-A 地点の発掘調査は 1 期調査を 2012 年から 2014 年にかけて、2 期調査を 2016 年に実施した。その間に B 棟の建設計画は大きく変更され、解体予定だった南研究棟を改修して利用することとなった。この変更に伴い CRC-B 地点の埋蔵文化財調査は、改修工事で掘削が必要となる部分のみを対象とするものとなった。なお試掘調査時からの継続性を考慮して、地点名は当初のクリニカルリサーチンセンター B 棟地点（略称：CRC-B 地点）を踏襲している。

調査は 2018 年 1 月 15 日から 4 月 4 日まで行い、調査面積は 92.66㎡である。埋蔵文化財調査室の追川吉生が担当した。

2. 調査地点の立地と環境

本郷キャンパスは本郷台の東縁に位置している。キャンパス内は三四郎池付近を通る南北方向の崖線によって M1 面と M2 面の段丘からなっている。医学部附属病院一帯は M2 面だが、南研究棟一帯は根津谷に向かう傾斜地に位置している。この傾斜とは別に、第二中央診療棟から給水設備棟を経て薬学部資料館にかけて、大きく蛇行した埋没谷が存在する。このことが調査地点一帯の地形をより複雑なものとしている。

現在の本郷キャンパスでは、南研究棟や給水設備棟が敷地の南端にあたり、その南側に特別区道文台第 2 号（以下、区道）が東西に延びている。区道は給水設備棟の東側で北へ曲がり、本学鉄門前で再び東側へと鉤手状に向きを変えて無縁坂へと続く。これは大正期に本学のキャンパスが南側へ拡張されたためで、それ以前は無縁坂から直線状にのびていた。江戸時代はこの道を境に北側が加賀藩邸と大聖寺藩邸、南側が高田藩邸だった。

大正期のキャンパス拡張で本学に取り込まれた敷地に建つ南研究棟は、加賀藩邸、高田藩邸、その間にあった道の跡地にあたる。高田藩邸を対象とした発掘調査は、本学ではこれまで中央診療棟地点、設備管理棟地点、

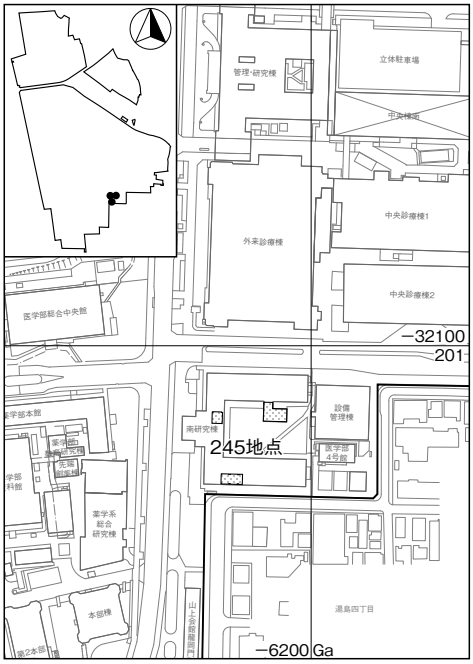


図１　調査地点位置図

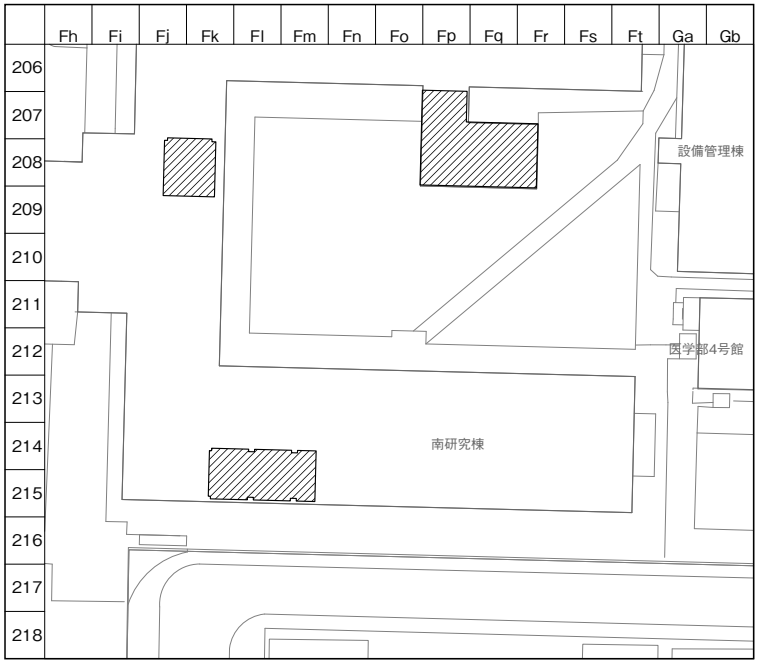


図２　調査区配置図

※1Grid 5m×5m

および給水設備棟地点において実施してきた。また敷地が現在の文京区と台東区にまたがる高田藩邸は、両区においても龍岡町遺跡（文京区遺跡№74）、湯島（切通し北）貝塚（文京区遺跡№40・台東区№10遺跡）として発掘調査が実施されている（図1）。

3. 調査結果

1区

1区はエレベータホール新設のための発掘として、研究棟1階にある一部屋（33.01㎡）が調査対象となった。部屋の北東隅と北西隅は研究棟のフーチングによって調査は不可能だった。南側についても、隣部屋が改修工事の後もそのままで利用する予定があり、床面崩落を防止するために未掘削部分を設けることにした。

遺構は6基検出し、いずれも柱穴である（図2）。遺構は全てローム面で検出し、その検出標高は15.8～15.9mである。ローム面は床下の盛土を除去してすぐに検出した。盛土中からは瓦片が少量出土するが、江戸時代に帰属する陶磁器類は出土していない。

柱穴　ローム層より6基検出した。いずれも遺構の平面は一辺0.3m前後の隅丸方形を呈している。深さは0.2～0.4mだが、構築面は削平されているので本来はもっと深いものと推測される。

柱穴の分布はSP006とSP004（間隔1.8m）、SP001とSP002（間隔0.9m）、SP003とSP005（間隔0.9m）が列をなしているようにもみえるが、調査区が狭小なため詳細は不明である。

2区

2区は改修後に本棟で使用する機械を設置するためのスペースに合わせた59.65㎡を調査した。これは東西に隣り合う二部屋を仕切る壁を撤去した一部屋半分に相当する。この壁は建物基礎に及んでいないため、遺構への影響はなかった。しかし調査区の南北は、それぞれフーチングによる撹乱が大きく入っており、実際の調査対象となったのは南北2m、東西10.5mの範囲である。

2区では地下室2基、柱穴14基、溝3基、その他2基の、合わせて21基の遺構を検出した（図3）。また調査区内に存在した埋没谷を確認した。

地下室（SU007）　建物基礎によって遺構の大部分が破壊されているが、平面形が四角形になること（現状南北0.8m、東西3.7m）と、立ち上がりがほぼ垂直である（深さ1.35 m）ことから地下室と判断した。出土遺物は近代以降の陶磁器片やコンクリートなどがあるが、これは建物基礎からの混入と考えられる。

溝

SX010　南北方向の溝。検出規模は南北4.82m、東西3.76m、深さ1.42m。

SD026　南北方向の溝。検出規模は南北2.12m、東西0.57m、深さ0.44m。

SD027　南北方向の溝。検出規模は南北3.43m、東西1.53m、深さ0.97m。

埋没谷　2区の北西側では標高14.6m～15.0mで自然堆積層として淡黒色土層（漸移層）を確認した。淡黒色土層の堆積は調査区の西側のみに限られ、それよりも東側は谷地形となっている。検出状況からこの埋没谷は、給水棟地点から続く埋没谷の左岸と推測される。谷の底部は調査区南東部で確認した（標高13.3 m）が、右岸側の立ち上がりは調査区外のため確認していない（4図・5図）。ただし本調査地点の約40m南側に位置する龍岡門別館地点では、地山は平坦なローム層であることが確認されているので、谷の右岸は本地点と龍岡門別館地点との間で立ち上がっていると考えられる。

4. 調査のまとめ

医学部附属病院設備管理棟地点の調査成果や、現存する東御長屋の石垣との位置関係から、1区には加賀藩邸と高田藩邸との間に存在した道の一部が含まれることが想定された。しかし南研究棟の切土造成によって江戸時代の盛土層は全て削平されており、道は未検出だった。6基のピットの分布状況は数条のピット列が存在したことをうかがわせる。塀など何らかの境界施設が数度にわたって造り替えられた可能性もあるが、調査地が狭小なため詳細は不明である。

2区は高田藩邸北西隅の詰人空間にあたる。やはり調査区が狭小なため遺構の面的な広がりは詳らかではないが、東西に並ぶ柱穴列と、その南側の地下室（SU007、SU025）は、東西方向に棟を持つ勤番長屋の存在をうかがわせるものである。『高田藩池之端屋敷絵図』（東京大学大学院工学系研究科建築学科蔵）で当該箇所を確認すると、やはり東西方向の長屋があることがわかる。ただし本図の制作年代が18世紀末頃であるのに対して、本区検出遺構では年代が比定できる遺物が未出土であるため、絵図との照合は今後の課題としたい。

また本区の中程では、南北方向に延びる3基の溝を検出した。そのうち最も新しい段階のSX010は覆土の最上部が硬化面となっており、そこに礎石SP020・SP021が構築されている。このことから、SX010廃絶と礎石列の構築はほぼ同時期に行われた可能性が高い。

SD010の下にSD027が構築されている。SD026はこれと並行する南北の溝で、遺構検出レベルもほぼ同じである。両者は切り合っていないため、新旧関係は不明である。出土遺物の詳細は現段階では不明だが、SD027からは志野釉の皿が1点出土している。少なくとも17世紀初頭から前葉にかけて廃絶していたことが推測される。SD026の廃絶年代も、それと大きく変わることはないと思われる。

SD027、SX010はその規模から堀と捉えることができ

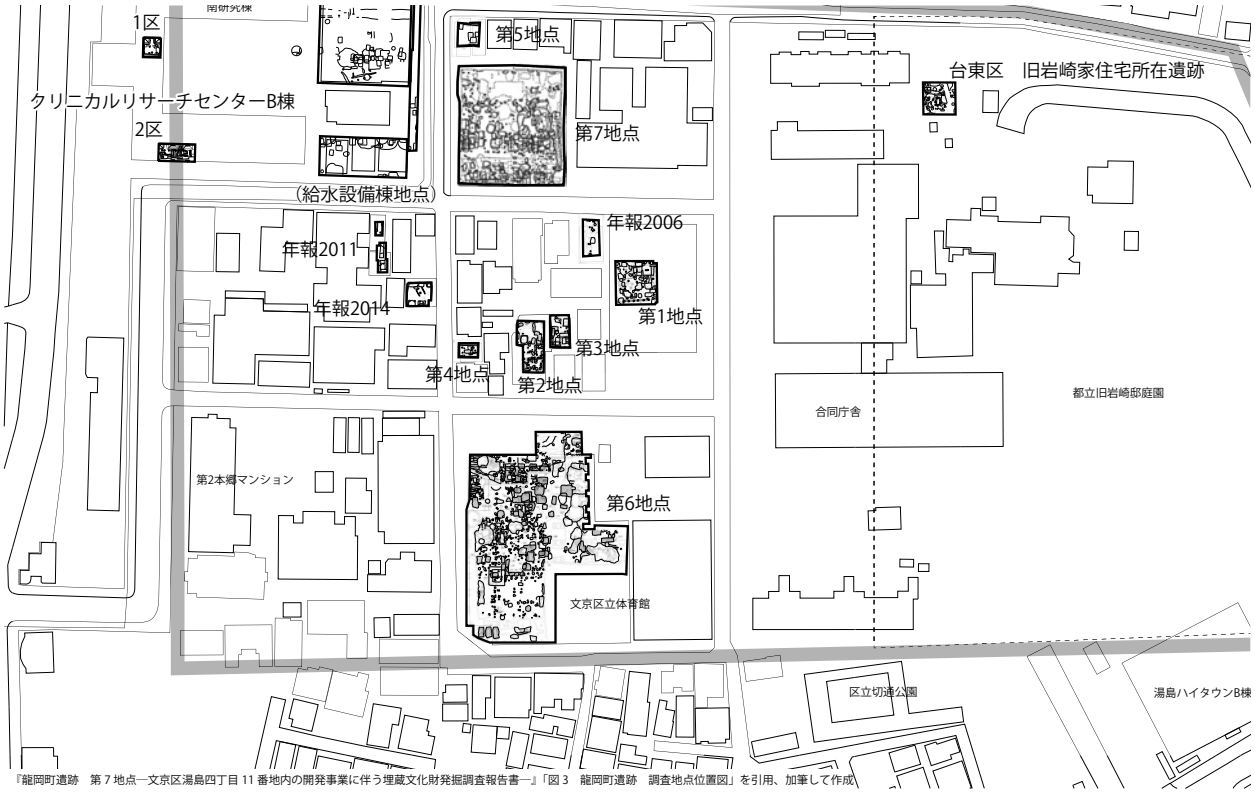
る（SD026 は上部が SX010 によって壊されているため遺構本来の規模は不明）。設備管理棟地点では、榊原邸北辺の屋敷境が、堀から石組溝に造り替えられていることが明らかになった。本地点で検出した溝（堀）もまた、その規模からすれば屋敷境であった可能性が高い。その場合、16 世紀末から 17 世紀初頭に、屋敷境が短期間に 3 回造り替えられており、その最終段階で屋敷範囲が西側へと拡張されたことになる。その際、埋め戻した屋敷境（SX010）付近が藩士らの居住地となったことが推測される。

SX010 上面の硬化面と、その上に据えられた礎石は、こうした屋敷の空間利用の変遷を反映したものとも考えられるが、現時点では榊原邸が拝領後に西側へ拡張されたことを裏付ける史料はみられない。遺構の性格は今後の検討課題としたい。

限られた範囲とはいえ、埋没谷の状況を明らかにできた点も本調査地点の大きな成果としてあげられる。1985 年に実施した給水設備棟地点の調査において、調査区の全面にわたって埋没谷が存在することは既に知られていた。その後、第 2 中央診療棟地点や薬学部資料館地点、薬学系総合研究棟地点、龍岡町第 7 地点においても埋没谷の存在が明らかになった。これらの調査によって、この埋没谷は薬学部資料館地点附近を谷頭に東側へと延びて、龍岡町第 7 地点で北東側へと大きく方向を転換して第 2 中央診療棟地点へと開析することが想定された。本地点で検出した埋没谷の谷筋は南西から北東側へと開いていることから、給水設備棟地点へ向かって蛇行しているという可能性のほかに、これとは別の支谷を形成していた可能性も考える必要があろう。医学部附属病院内で行われる今後の発掘調査によって、旧地形の状況がより明らかになることが期待される。なお既に述べたように 2 区において検出したのは埋没谷の左岸のみであり、右岸は本地点と龍岡門別館地点との間に存在する可能性が高い。左岸の状況からかなり急激な立ち上がりだったことが想定される。

前述のように加賀藩邸の東御長屋内は上壇と下壇のように段差が存在した。この段差は現存する石垣にも段切りとして認めることができるが、この段差が根津谷への地形の傾斜とは直交する南北方向に設けられていることから、埋没谷右岸側の立ち上がりといった微地形が影響しているものと推測される。

建物内のわずか二部屋半ほどを対象とした発掘調査ではあったが、本調査では榊原邸南西側の自然地形と土地利用状況の一端を捉えることができた。本学構内遺跡の中でも榊原邸に含まれる一帯は、これまで発掘調査の機会がほとんどなかったエリアとなる。本調査成果の分析にあたっては、隣接する龍岡町遺跡諸地点の成果を踏まえて、大名屋敷外縁部のあり方を明らかにしていくことが課題である。



『龍岡町遺跡　第 7 地点―文京区湯島四丁目 11 番地内の開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』「図 3　龍岡町遺跡　調査地点位置図」を引用、加筆して作成

図3　本地点と龍岡町遺跡（図中の枠線が榊原邸の推定範囲）

参考文献

大成エンジニアリング（株）　2015　『龍岡町遺跡第７地点』

東京大学遺跡調査室　1990　『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　1997　「薬学部資料館新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』１

東京大学埋蔵文化財調査室　2004　「医学部附属病院第２中央診療棟地点調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

東京大学埋蔵文化財調査室　2004　『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館龍岡門別館地点発掘調査報告』

東京大学埋蔵文化財調査室　2004　「薬学部総合研究棟地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

図４　１区全景

図５　２区全景

図６　２区埋没谷検出状況

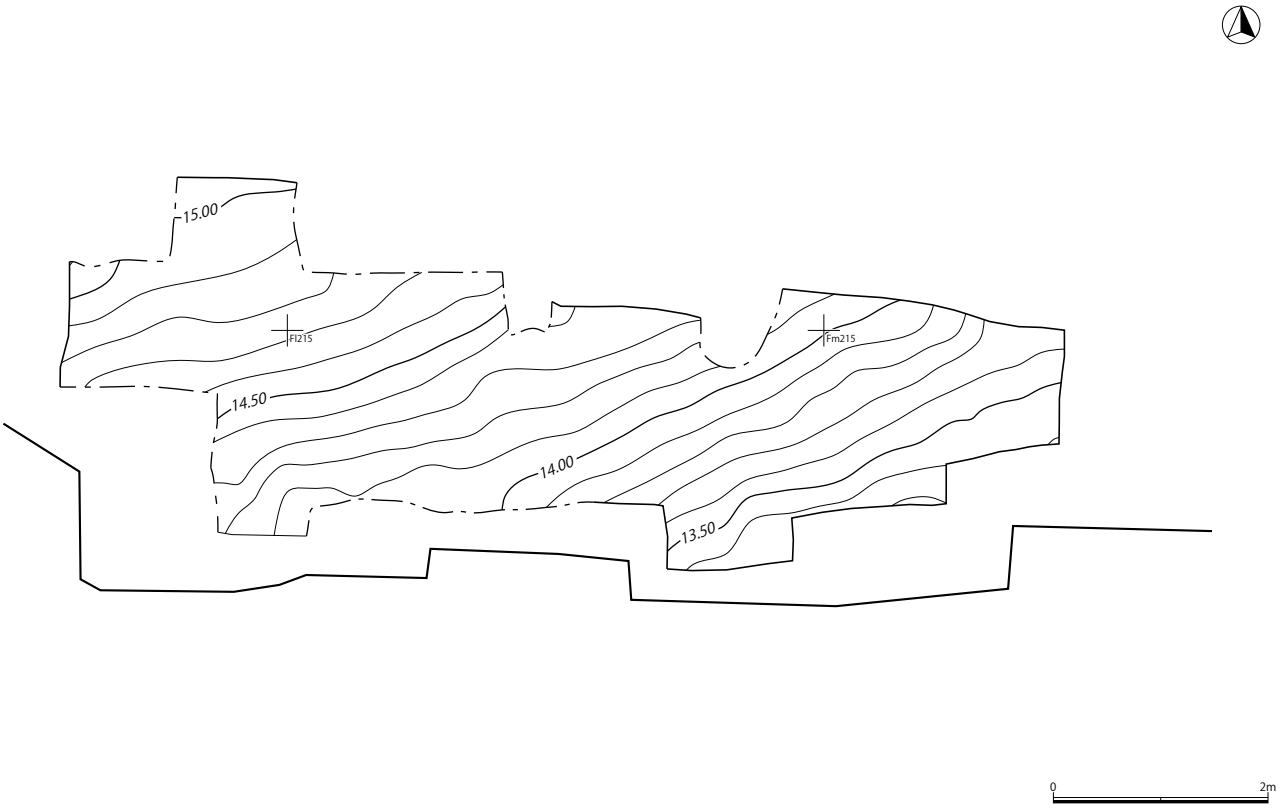


図７　２区埋没谷

2. 本郷 266　基幹環境整備（電気管路）（HKD18）

所 在 地　東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学本郷構内（文京区 No.47・本郷台遺跡群）
調査期間　2018 年 12 月 18 ～ 21 日、2019 年 1 月 28 日～ 2 月 5 日
調査面積　57.4㎡
調査担当　大成　可乃（東京大学埋蔵文化財調査室）

1. 調査の経緯と経過

東京大学では本郷構内農学生命科学図書館付近から工学部 13 号館付近までの基幹環境整備（言問通り横断管路。以下、横断管路）を計画、それに伴い横断管路立坑 3・4 南側から立坑 5 までの間、工学部 13 号館西側に電気管路の設置が計画された（図 1、2）。調査地点は絵図面などと照合すると水戸藩邸南端付近に該当し、本地点に隣接する工学部 4 号館改修に伴う試掘調査では藩邸内の道路や埋没谷の存在が確認されており、本調査地点でも藩邸に関連する遺構や埋没谷の存在が想定された。

東京大学施設部より依頼を受けた東京大学埋蔵文化財調査室では、2018 年 12 月 18 ～ 21 日、2019 年 1 月 28 日～ 2 月 5 日に 57.4㎡の発掘調査を実施した。以下、調査概要とその結果を述べる。

2. 調査概要と結果

調査は 2018 年に実施した横断管路地点の立坑 3・4 の南側、既設埋設管や植樹帯を避け、東西 150 ～ 220cm、南北約 31m の範囲で実施した（図 3）。北側では地表面下 40 ～ 50cm で、中央付近の植樹帯東脇では地表面下約 30cm で、南端では地表面下 50 ～ 70cm で地山が確認されたが、南端では局所的に地表面下約 30cm で暗褐色土が 30 ～ 40cm 厚で地山直上に堆積している状況が確認された。調査区東壁面でこの暗褐色土の堆積状況を調査したところ、地山まで漸移的に変化しており、自然堆積土あるいは植栽などに伴う土の可能性が高い。本層からは 1 点ではあるが須恵器坏破片が出土しているが、遺構は認められなかった。

遺構はいずれも地山で検出、ピット 1 基、土坑 3 基が確認されたが、以下では大形遺構 SK5 についてその概要を述べる。

SK5（図 8 ～ 11）

長軸（南北）約 770cm、短軸（東西）110cm 以上、深さ約 100 ～ 140cm を測る大形土坑である。埋設管や植樹帯が近接している調査区の最も幅が狭い部分で検出された上、それらを残置して調査を実施した為、全体の規模、形状などは不明である。北側立ち上がりは西半分が緩やかな階段状、東半分が円形に掘り込まれた状況で、南側立ち上がりは中程がオーバーハングするが、ほぼ垂直に立ち上がる。坑底は凹凸が顕著であり、坑底中央から南側は第二黒色帯に変化したレベルで、坑底中央から北側は地山ローム中に黄白色粘土等が多く認められるな

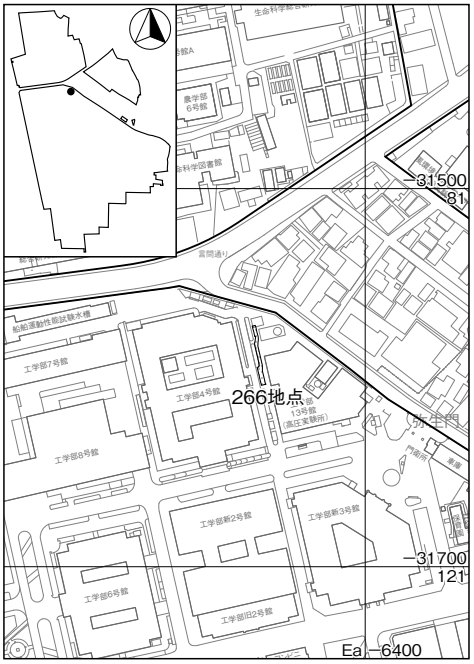


図 1　調査地点位置図

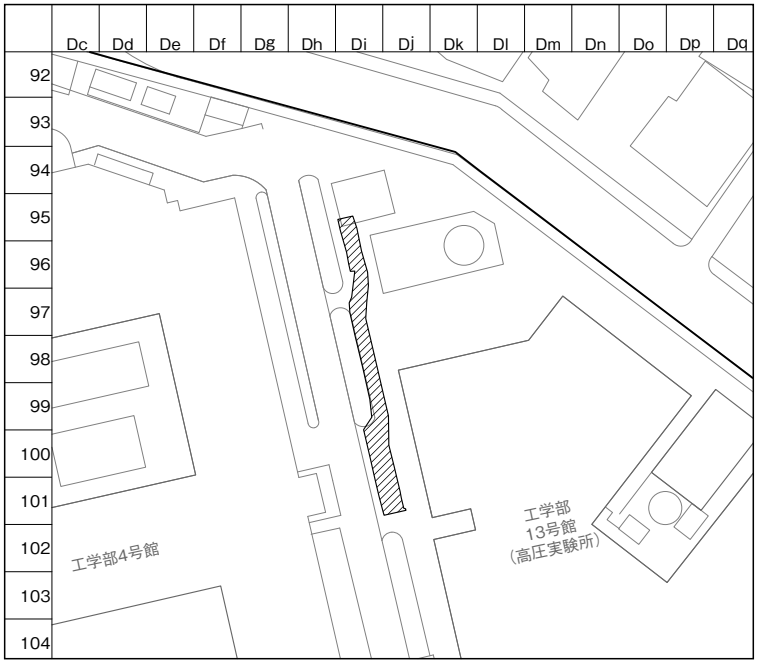


図 2　調査箇所位置図

※1Grid 5m×5m

どのローム土の変質が確認されたレベルで掘削を中止していることから、本来は精良なローム土を確保するための採土坑として掘削された可能性が高い。

SK5からは陶磁器類、金属などを含め遺物収納箱11箱分の遺物が出土したが、陶磁器類は19世紀前葉に比定されるものであり、サザエ、アワビなどの大形の貝なども一緒に出土した。これら出土遺物の大半は上層の明灰褐色土から出土しており、廃絶時にはごみ穴として利用され埋め戻されたようである。

3. まとめにかえて

近代以降の削平などで地山まで掘削されていた上、既設管や植樹で撹乱されていた部分も多かったが、大形遺構SK5をはじめ遺構が数基確認され、局所的ではあるが江戸時代以前の可能性のある堆積土も確認されるなど、約60㎡の調査ではあったが成果は大きなものであった。絵図面との照合や周辺調査地点の調査成果から、本地点が水戸藩邸南端の建物裏手、道路に囲まれた広場のような場所である事が想定されたが、SK5の検出により、本地点が大形遺構の掘削が可能なスペースがあり、19世紀前葉頃にはごみ穴として利用可能な場所であったことが確認され、想定された広場のような場所であった可能性は高い。またSK5以外に検出された遺構は小規模で、遺物も出土しなかったことから、江戸時代における本地点の利用頻度は希薄であったと思われる。

埋没谷の検出を想定しテストピットを南側1箇所で設定したが立川ロームⅢ～Ⅶ層が確認され（図5）、埋没谷は確認されなかった。しかし、本地点北側の表土直下の地山やSK5北側立ち上がり壁面では、地山ローム土層に白色シルト質粘土粒を多く含む立川ローム層の標準層序とは異なるローム土層が確認されており、同様のローム土層の状況は北側に近接する言問通り横断管路立坑3・4地点でも確認されていることから、本地点北側より言問通りに向かって埋没谷のような旧地形が存在していた事も推察されるが、その判断については周辺調査地点の地山ローム土堆積状況や標高なども合わせて検討する必要があり、今後の課題としたい。

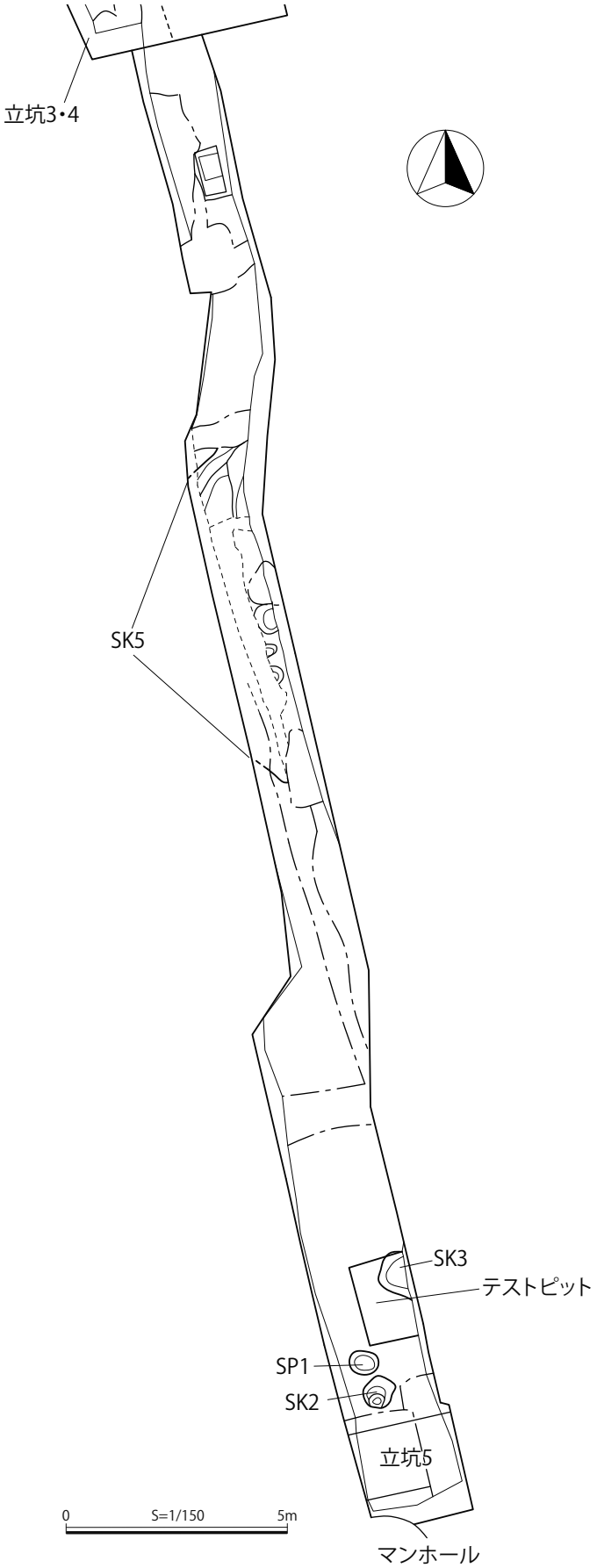


図3　全体図

図４　調査区南側全景

図５　調査区南側テストピット東西 sec

図６　調査区中央全景

図７　調査区北側全景

図８　SK5 完掘

図９　SK5 南北 sec 東から

図 10　SK5 南端南北 sec

図 11　SK5 北端南北 sec

第２節　駒場Ⅰ構内の事前調査

1. 駒Ⅰ 42　駒場新体育館（仮称）新営に伴う機械設備支障配管切廻し（KTS18）

所 在 地　東京都目黒区駒場 3-8-1
調査期間　2018 年 6 月 28 日、7 月 2・3・18 日
調査面積　25㎡
調査担当　原　祐一

1. 工事と調査の経緯

東京大学駒場Ⅰキャンパスは周知の遺跡「東京大学駒場構内遺跡」（遺跡番号　目黒区 1）で旧石器時代、縄文時代の遺跡が調査されている。構内では 2019 年度、駒場体育館新営工事が予定されこの工事に伴う駒場体育館新営電気配管掘削工事、駒場新体育館（仮称）新営に伴う機械設備切廻工事が予定されていた。駒場新体育館（仮称）新営に伴う機械設備切廻工事は工事の掘削深度が 3.4 メートルと深く（図 1、図 2）、旧石器から縄文時代の遺跡の検出が予想されたことから協議の結果、事前調査を行うことになった。

2. 調査結果

調査地点は 25㎡で配管工事の掘削深度は 3.4 メートル。調査地点では撹乱が確認され、確認された土層断面の中で関東ローム層の保存状態が良好な部分で土層断面図を作成した。調査の結果、遺構・遺物は確認できなかったが当地点周辺を含めた旧地形、造成に関する知見を得ることができた。

調査の結果、現地表面から約 1m は上から舗装、ロームを含む盛土（１）、瓦とレンガ等の瓦礫を含む盛土（２）。その下層は 0.6 ｍの厚みで黒ボク土、ローム土を含む土（３）で周辺の並木の樹木の根が張っていた。瓦とレンガ等の瓦礫は含まれない。この層の下層は関東ローム層の自然堆積層で第一黒色土層（１BB）を確認した。１BB の検出標高は 34.8m。明治 19（1886）年、関東迅速図の調査地点の標高は 35m の等高線が皆東側に描かれている。調査地点の旧地形の標高は不明だが等高線の 35m より高い（図 3）。

駒場Ⅰキャンパスと周辺は明治時代の駒場農学校で帝大農学部、第一高等学校を経て敷地を縮小するが東京大学教養学部に至る。駒場農学校時代の明治 17（1877）年の図面によると調査地点は「泰西農場」で農場内に「羊舎」がある。明治 19（1879）年の関東実測図では「泰西農場」が南北に区画されており北側が「畑」南側が「草」と記されている。調査地点は「畑」に該当する。帝大農学校は関東大震災、第一高等学校は戦災の被害を受けている。（２）は関東大震災もしくは戦災の瓦礫を含む盛土層と仮定すると（３）はそれ以前の土層。（３）の検出標高は 35.4 ｍで関東迅速図の標高に近い。根攪乱を受けているが瓦・レンガが含まれないことからの駒場農学校、帝大農学部時代の耕作土の可能性がある。

調査地点の南東側に駒場池（一二郎池）が位置する。駒場体育館の新営工事に伴う調査では調査地点の北東側で埋没谷を確認した。一二郎池の西の池尻から駒場体育館の谷を結んだラインを延長すると今回の調査地点を通っており、谷がどのように通っていたか知ることができるデータとなった。１BB の上面が削平されていること、検出標高から駒場農学校建設の造成が行われる以前、標高はさらに高く傾斜のある地形だったと考えられる。１BB 上層、埋没谷の黒色土は農場造成のため削平されたと考えられる。隣接する駒場体育館新営地点では旧石器の遺構を検出、縄文草創期の土器、有舌尖頭器が出土したがこれらの遺跡を包含する土層も農場造成に伴い削平されたと考えられる。明治時代の地形図、駒場農学校の図面から農場造成のため広範囲が削平されたと考えられる。掘削土は敷地内で処理したと考えるのが妥当だろう。窪地、谷地形を埋立てに用いられたと考えられるがどの部分に用いられたかについては今後の課題としたい。

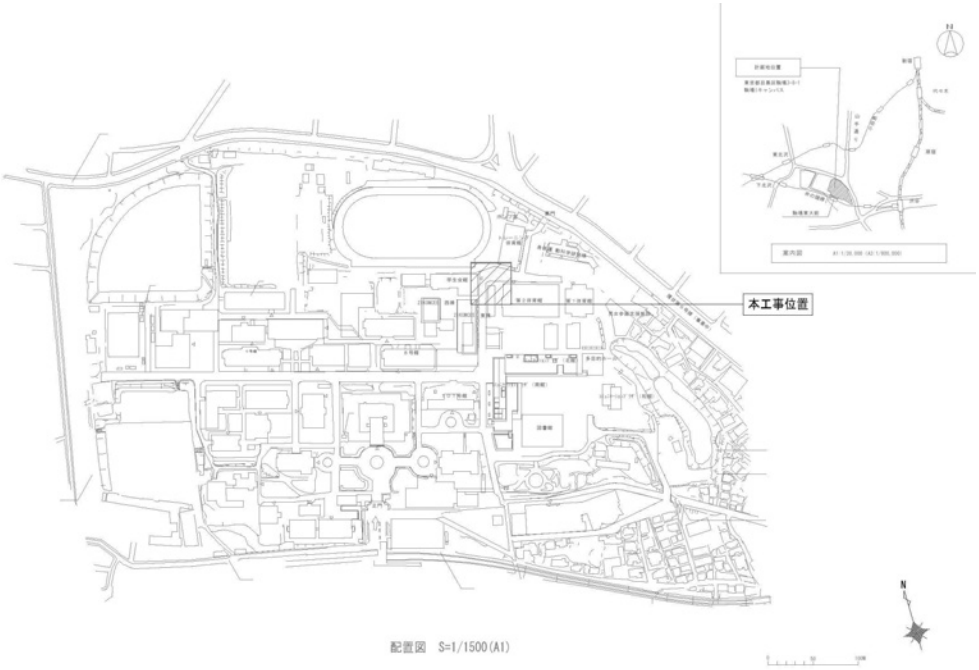


図1　調査地点

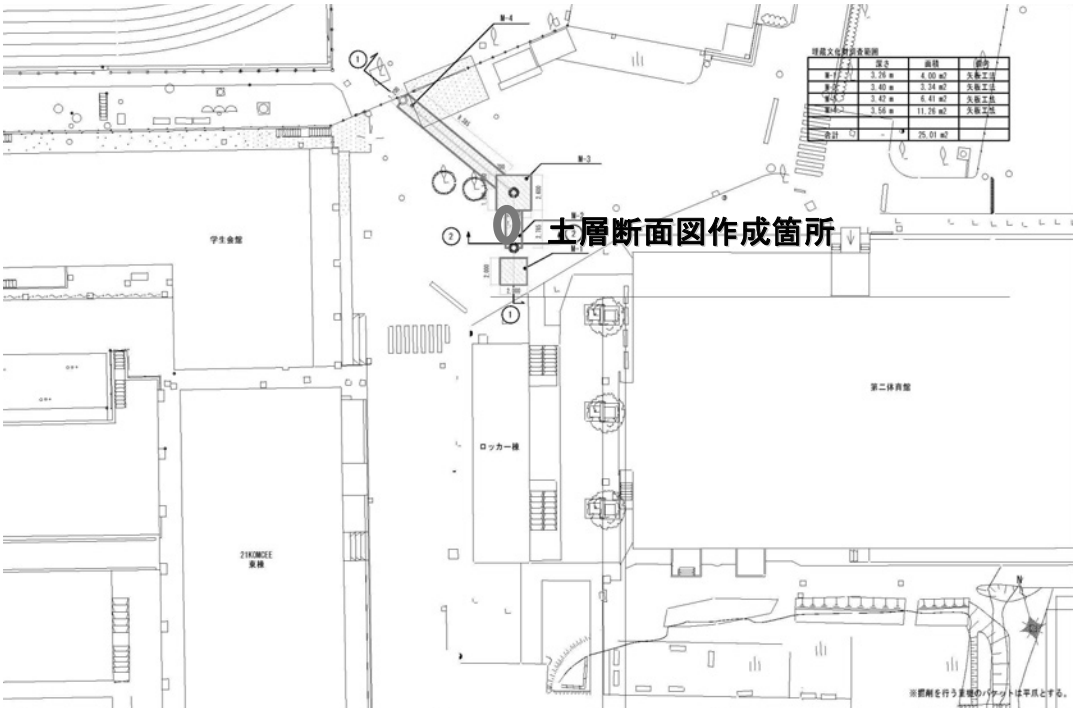


図2　調査範囲と土層断面図作成箇所

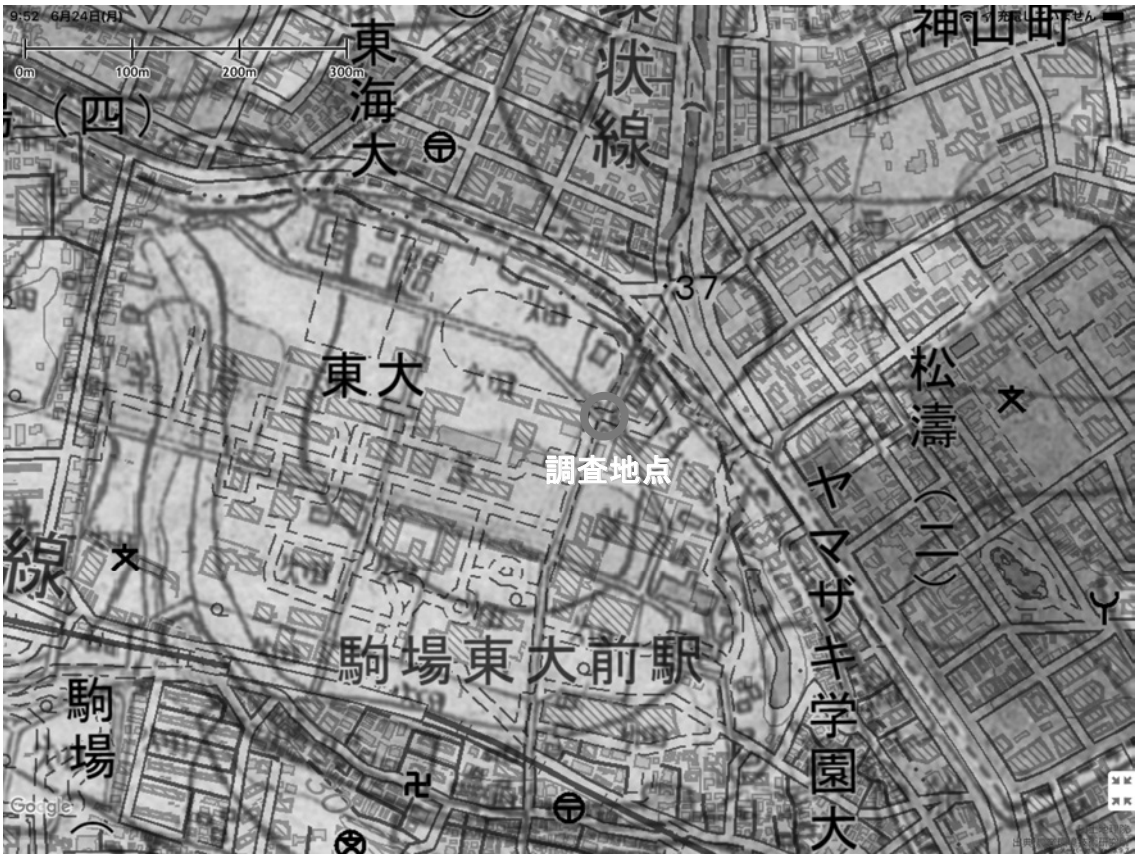


図3　調査地点と周辺の旧地形（関東迅速図）カシミール3Dスーパー地形で作成

図4　土層断面下層

2. 駒Ⅰ 43　駒場新体育館新営（KSK18）

所 在 地　東京都目黒区駒場 3-8-1（目黒区№1 東京大学駒場構内遺跡内）
調査期間　2018 年 7 月 2 日～ 8 月 27 日
調査面積　430㎡
調査担当　原　祐一

1. 工事と調査の経緯

東京大学駒場Ⅰキャンパスは周知の遺跡「東京大学駒場構内遺跡」（遺跡番号 目黒区 1）で旧石器時代、縄文時代の遺跡が調査されている。構内では 2019 年度、駒場体育館新営工事が予定されたため（図 1）、2018 年度工事予定地で 2019 年 3 月 5 日から 3 月 26 日まで試掘調査を行った（遺跡番号 38 駒場体育館新営）。調査の結果、近現代の遺構・遺物と縄文時代の遺構・遺物（縄文土器・有舌尖頭器）が出土したことから、協議の結果、事前調査を行うことになった。

2. 調査方法

調査区は 5 メートルメッシュのグリッドを設定した。体育館の南に第一高等学校時代の寄宿舎が南北に 4 棟並んでいた。寄宿舎は北から明寮、北寮、中寮、南寮（後の第一研究室）で、調査地点には明寮が配置されていた。調査は試掘調査の結果と明寮の基礎を取り囲む形で調査区をコの字型に設定した（図 2）。調査区は撹乱の状況から、南側を 1 区、北側の西を 2 区、東を 3 区、東側を 4 区とした。旧石器時代の調査は深堀 1 ～ 5 を設定し掘削を行った。

3. 調査結果

東京大学教養学部の位置する「駒場」は江戸時代以前からあった古い地名で「駒場野」と呼ばれていた。文京区 駒込、渋谷区駒沢と共に古代・中世の軍馬の産出にちなんだ地名とされる。駒場野は江戸時代、幕府の御鷹場となり、八代将軍徳川吉宗の時代には薬園が置かれ幕末は軍事教練が行われた。調査地点から江戸時代の遺構、遺物は確認できなかった。

明治時代以降（図 3、図 4、図 5）

明治 7（1874）年新宿御苑に農事修学校創設
明治 10（1877）年農事修学校、農学校に改称
　同年駒場移転
明治 11（1878）年開校
明治 15（1882）年駒場農学校
大正 8（1919）年東京帝國大学農学部に改称
大正 12（1923）年関東大震災で被害、
　本郷の第一高等学校と敷地交換検討
昭和 10（1935）年第一高等学校移転
昭和 20（1945）年 5 月 25 日大空襲による被害
昭和 24（1949）年学制改革により教養学部設立

明治時代に駒場野に移転した農学校は駒場農学校に改称し、東京帝國大学農学部、第一高等学校から教養学部へ移行する。

調査の結果、近現代を中心に 78 遺構を検出。第一高等学校から農学校時代の生活面を確認した。縄文時代の土器 3 点が出土し、旧石器時代の遺構 1 基を確認した。遺物は遺物収納箱で 32 箱が出土した。

(1) Ⅰ面 第一高等学校時代から農学部（図 5）

第一高等学校時代の遺構から第一高等学校で使用された校章がある磁器製の碗、皿、鉢が出土した。農学部時代の遺構から「農学部」の銘のある磁器碗が出土。第一高等学校時代か農学部時代か現在の所明確ではないが、ガラス製の実験道具、インク瓶等の文房具が出土している。東京大学史という歴史的価値からこれらの遺構を調査した。

(2) Ⅱ面 駒場農学校時代

駒場農学校時代の遺構は、調査区南側で道路の遺構、SR48 を検出した路面は固く突き固められ、南側は一段高くなっている（図 6 ～ 9）。北側は南寮の基礎による撹乱によって削平されている。図 3 によると SR48 の軸上に「草」と「畑」の境がある。図 6 の SR48 の遺構軸はこの地境の軸の角度に近いが、地図上では地境は実際の地境より北側にあるため地図合わせは再検討が必要である。図 4 によると調査区の西側に「羊舎」とあり「草」は牧畜の区域だろうか。SR48「草」と「畑」の段差は家畜の畑への侵入を防ぐための段差だろうか。調査区北側で駒場池（一二郎池）に続く谷を確認している。谷では畑の畝、土坑等を検出している（図 7）。谷の検出面は SR48 より低く、「草」から「畑」は谷地形を壇上に削平して農場として土地利用していたと考えられる。また、関東大震災の被災層と考えられる土層を検出してい

る。

(3) Ⅲ面 縄文時代

試掘調査で土器、石器を出土した縄文時代草創期の地層から縄文土器 3 点が出土した。出土地点は深堀 1 の周辺である（図 14)。試掘と合わせ土器 4 点、石器 1 点が出土した。

(4) Ⅳ面 旧石器時代（図 14 ～ 20）

深堀 1・2・5 では遺物・遺構の出土はなかった。

深堀 3 で炭化物、小礫の出土を確認、ドット上げを行った。石器や炻器に関わる剥片等は確認できなかった。

深堀 4 の南側壁面で遺構を確認した。

まとめ

調査の結果、旧石器時代の遺構、縄文土器、駒場農学校時代から帝大農学部と第一高等学校の遺構・遺物を検出した。駒場農学校時代の圃場内の区画を示す道を検出した。駒場農学高時代の土地利用状況は駒場池（一二郎池）へ続く谷地形の高低差を利用していることが明らかになった。この時代の土地利用状況については関連史料の調査を行い駒場農学校時代の土地利用状況の一端を検討したい。旧石器時代、縄文時代に関しては周辺遺跡と併せて検討を行いたい。

図1　調査地点（カシミール3Dスーパー地形で作成）

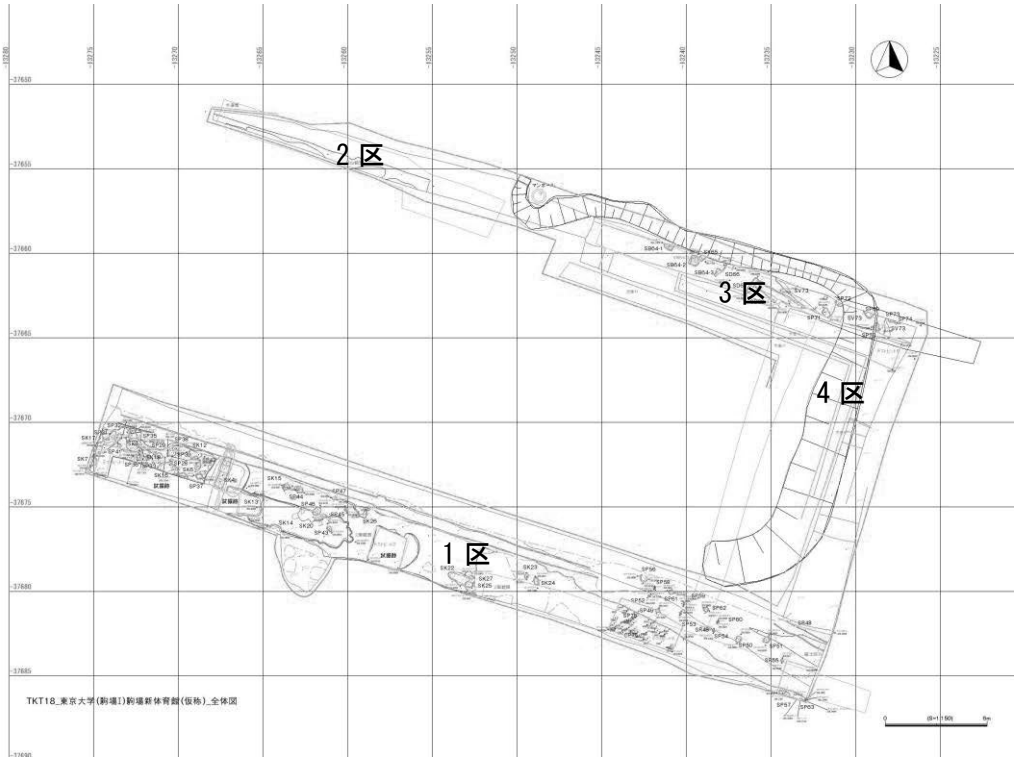


図2　調査地点全体図

図3　調査地点と周辺の旧地形（関東迅速図）カシミール3Dスーパー地形で作成

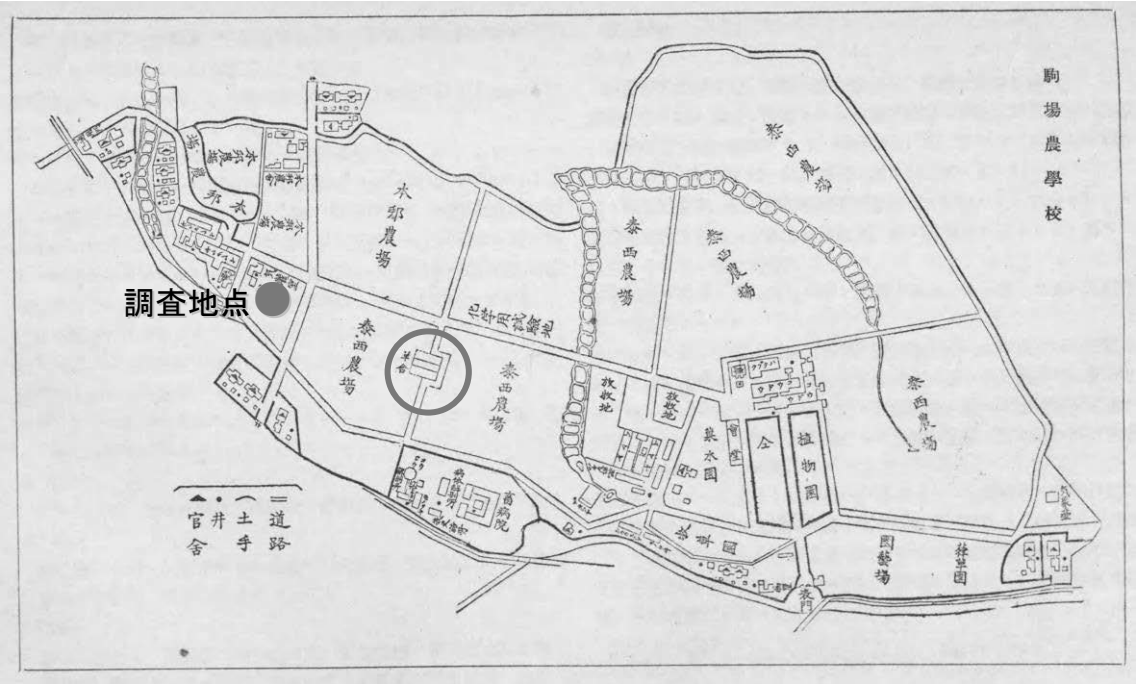


図4　駒場農学校時代
『明治前期勧農事蹟輯録. 上巻』国会図書館デジタルコレクション
（digidepo_1716642_PDF　20100806閲覧）

図5　帝大農学時代（1927-1939年）
（カシミール3Dスーパー地形で作成）

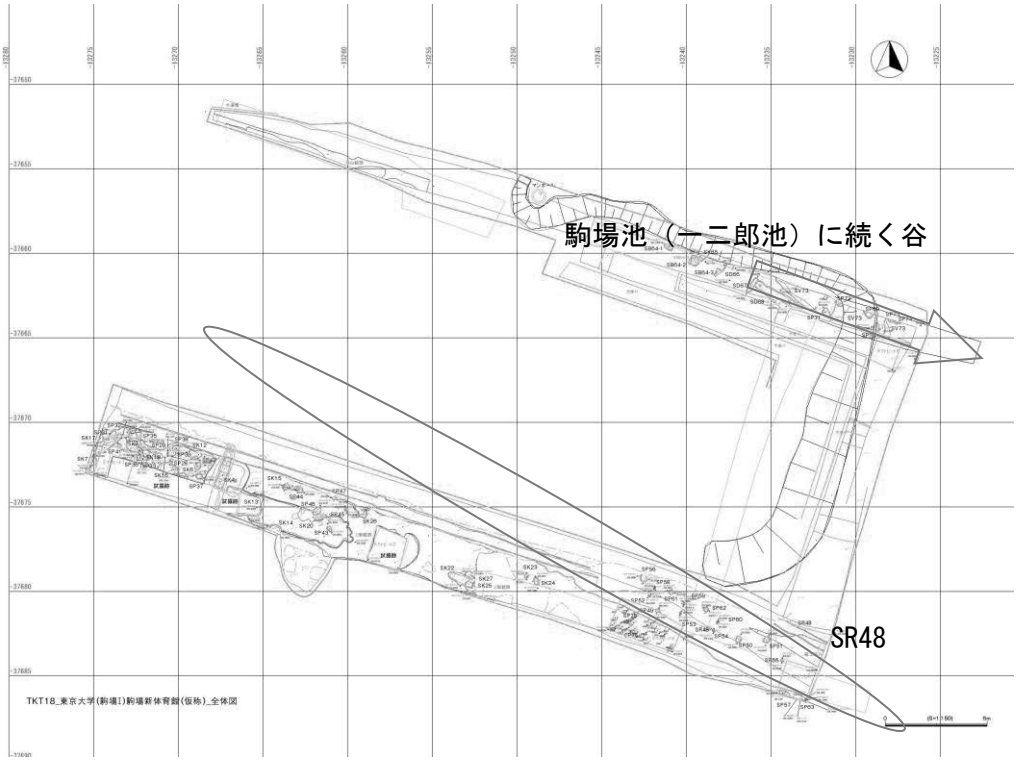


図6　駒場農学校時代

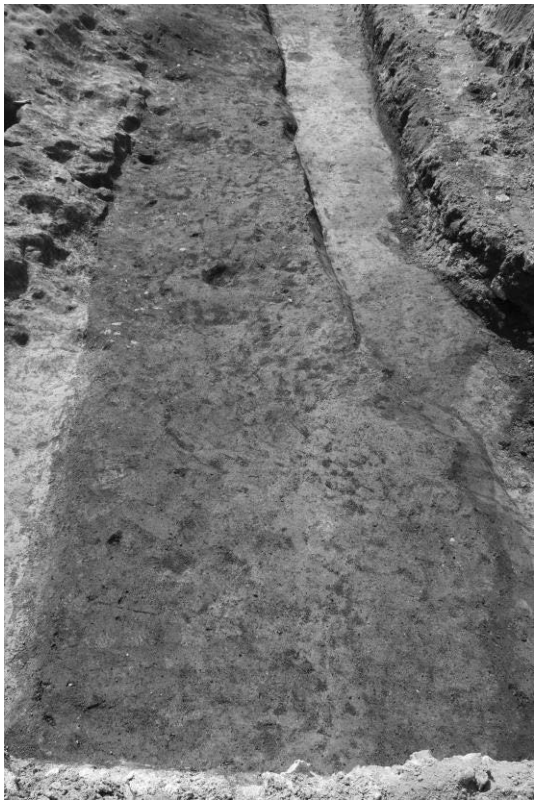


図7　SR48路面

図8　SR48完掘（1区東側全景）

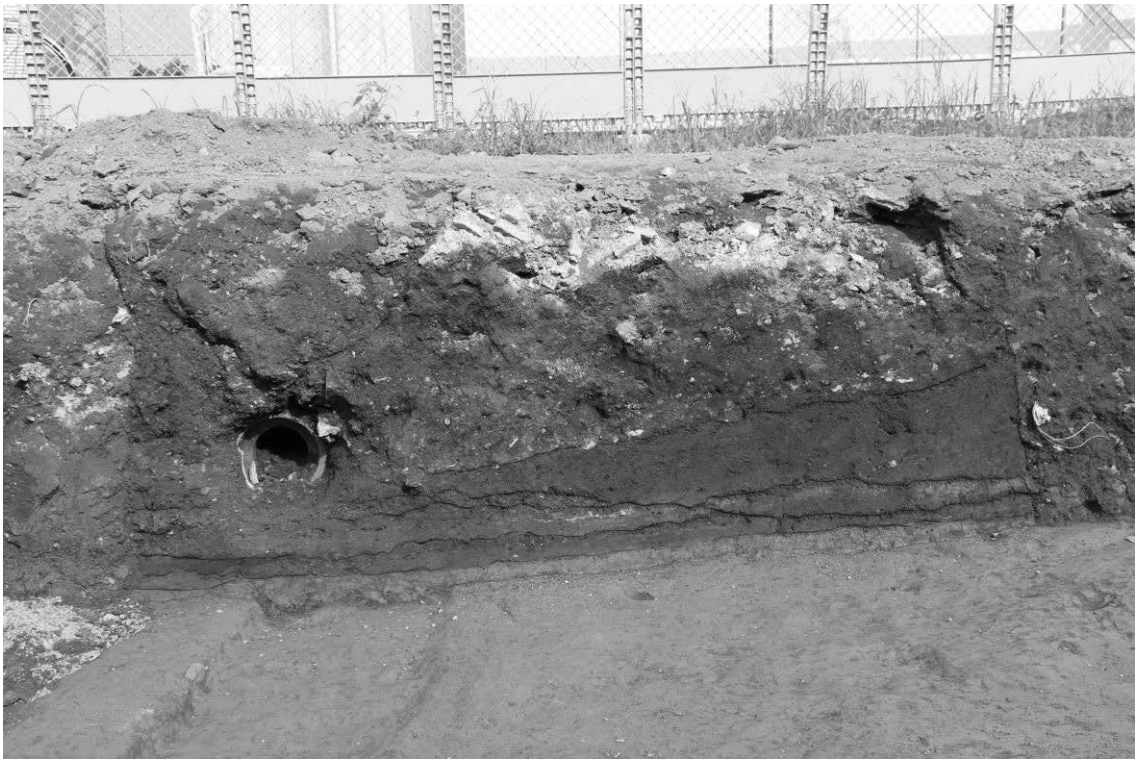


図9　SR48路面断面

図10　1区北側全景

図11　2区全景

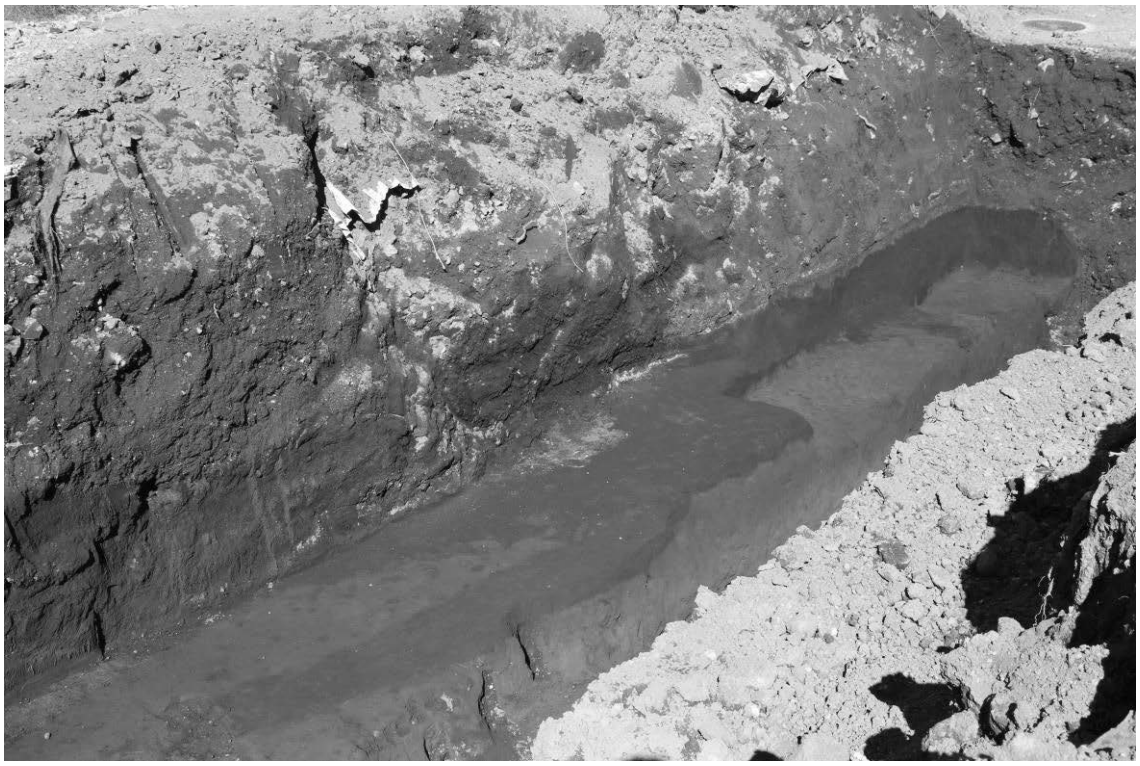


図12　3区　畝･谷

図13　3区全景

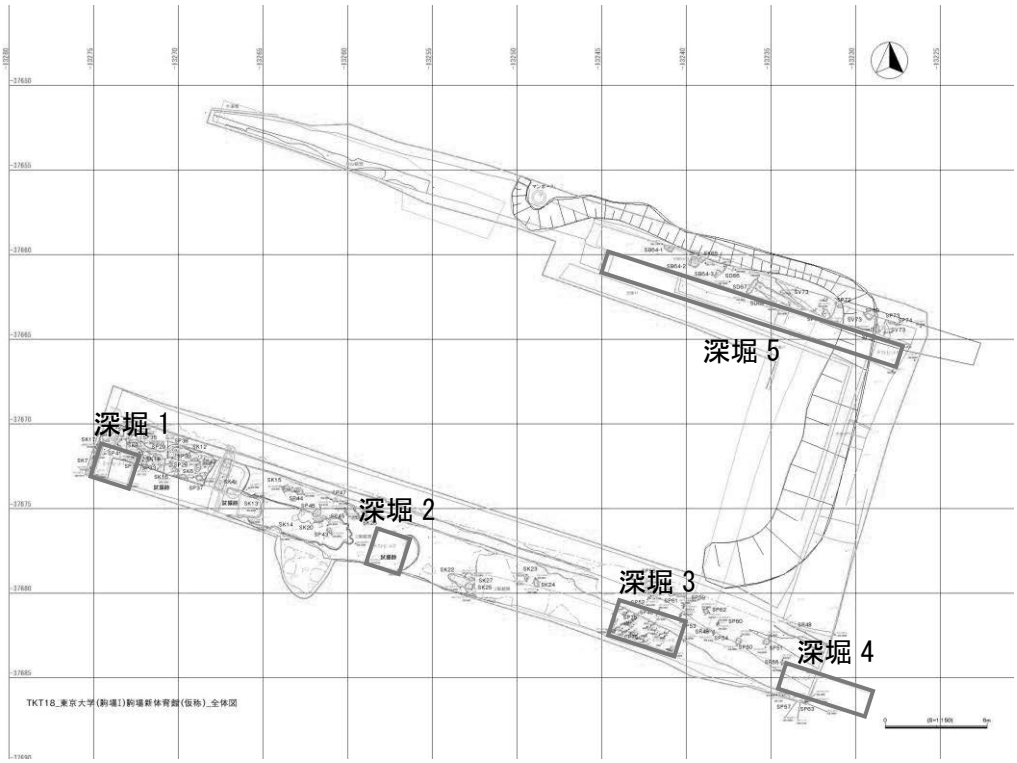


図14　調査地点全体図

図15　深堀1

図16　深堀2(設定)

図17　深堀3

図18　深堀4

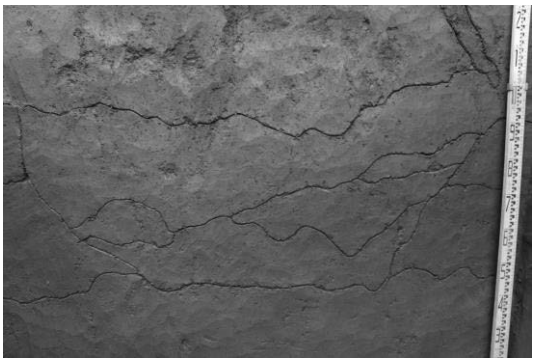


図19　深堀4　遺構

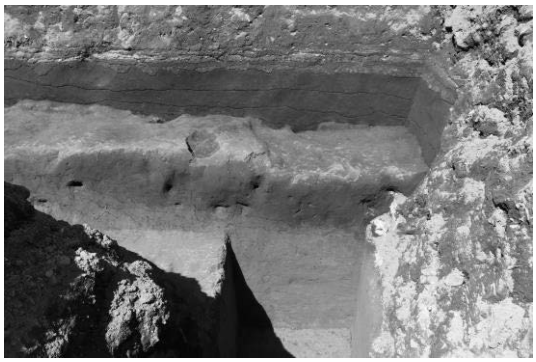


図20　深堀5(部分)

第Ⅱ章　調査資料の整理・研究および公開・活用

第１節　調査資料の整理

1．整理事業概要

本年度は、発掘調査報告書刊行へ向けて以下のような整理作業を行った。
・本郷 54　総合研究棟（文・経・教・社研）　遺構図作成。
・本郷 61　薬学系総合研究棟　遺物接合。
・本郷 78　情報学環・福武ホール　遺物実測。
・本郷 81　経済学研究科学術交流棟　遺物撮影。
・本郷 148　国際科学イノベーション総括棟　木製品遺物実測、整理。
・医学部附属病院看護師宿舎、MRI-CT 棟古代住居図面整理。

その他、文京区支援事業として、小石川温室地点縄文土器整理。

２．外部委託（遺構・遺物整理、自然科学分析、保存修復）

・本郷 76　ベンチャープラザ　遺物実測図、拓本作成（CEL）。

第２節　調査・研究成果の公開・活動

１．報告書・年報

・東京大学埋蔵文化財調査室 2019『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 14　東京大学本郷構内の遺跡医学部教育研究棟地点（報告編）』
・東京大学埋蔵文化財調査室 2019『東京大学構内遺跡調査研究年報 10（2015・2016 年度）』
年報掲載報告書
本郷 82　懐徳門
本郷 207　各門サイン設置
白山 6　理学系研究科附属植物園本園・下水・電源ケーブル埋設枡・埋設溝

２．広報活動

（1）ホームページ
『東京大学構内遺跡調査研究年報 10』オンライン版、発掘調査速報、調査研究プロジェクト 4 告知、同レジュメなどの掲載。

3．教育普及活動

・教養前期展開科目　人文科学ゼミナール（歴史学）考古学入門
「東京大学の歴史遺産（埋蔵文化財）」に関連して、2 回の授業を室員が担当した。
・広島大学総合博物館第 13 回企画展『大学と埋蔵文化財～キャンパスの遺跡・発見された文化財の魅力～』
主催：広島大学総合博物館
共催：東広島市教育委員会（出土文化財管理センター）
会期 1：2018 年 11 月 7 日～ 11 月 12 日（於：東広島市総合文化ホールくらら市民ギャラリー）
会期 2：2018 年 11 月 16 日～ 12 月 15 日（於：東広島市出土文化財管理センター展示室）
広島大学の埋蔵文化財調査を通じて、大学と埋蔵文化財との関わりを紹介する展示。全国の大学埋蔵文化財調査機関の一つとして、本調査室の室員も展示パネルの執筆を担当した。
・東京大学キャンパス計画室編 2018『東京大学本郷キャンパス 140 年の歴史をたどる』東大出版会
本書は本学キャンパス計画室が編集した東京大学と本郷キャンパスの変遷を辿る書籍。埋蔵文化財に関連した項目を室員が執筆した。

4. 研究活動

・東京大学埋蔵文化財調査室調査研究プロジェクト 4
『医学部附属病院入院棟 A 地点の成果－ 17 世紀後葉の陶磁器から－』
日時：9 月 22 日
会場：本郷キャンパス　法文 1 号館 2 階 215 教室
発表
大成可乃（調査室）
「SK3 出土陶磁器に関する一考察」
成瀬晃司（調査室）
「天和 2 年火災廃棄資料の 2 側面 -C2 層と D 面焼土出土資料 -」
C2 層出土陶磁器検討会
高島裕之 (専修大学)
「C2 層出土資料にみる有田南川原窯産高品質製品の製作技術」

東京大学埋蔵文化財調査室調査研究プロジェクト 4

医学部附属病院入院棟 A 地点の成果

－ 17 世紀後葉の陶磁器から －

＜研究趣旨＞

東京大学埋蔵文化財調査室では 1994 年から約 2 年間、医学部附属病院入院棟 A 建設地点の調査を実施、遺構総数 3567 基、遺物総量は遺物収納箱約 3000 箱におよぶ膨大な情報が得られた。2016 年、『医学部附属病院入院棟 A 地点』として研究成果をまとめた報告書を刊行した。

調査では、加賀藩下級藩士長屋群焼失に伴う焼土（D 面焼土）と、造成土中に廃棄された加賀藩御殿焼失に伴う焼土（C2 層）という異なる性格の天和 2（1682）年火災層が検出された。またこの火災後に構築された大形遺構（SK3）からは、火災前後の 2 つの廃棄段階を示す陶磁器などが出土した。

今回のプロジェクトでは、D 面焼土と C2 層という 2 つの天和 2 年火災資料の比較、さらに火災前後の遺物を含む SK3 出土資料との比較、検討などから、17 世紀後葉の藩邸内で使用された陶磁器の諸相を明らかにしたい。また C2 層出土磁器には、有田の南川原窯ノ辻窯出土資料などに比定されるものが多数あり、生産地資料との比較を通し、評価したい。

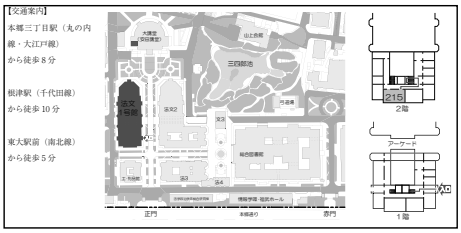
■開催日時：2018 年 9 月 22 日（土）13：30 ～ 17：45（受付 13：00 ～）

■会場：東京大学本郷キャンパス法文 1 号館　2 階 215 教室（下図参照）

■参加費：無料（先着 40 名）

■プログラム

1.「SK3 出土陶磁器に関する一考察」大成可乃（調査室）
2.「天和 2 年火災廃棄資料の 2 側面－ C2 層と D 面焼土出土資料－」成瀬晃司（調査室）
　－ C2 層出土陶磁器検討会－
3.「C 2 層出土資料にみる有田南川原窯産高品質製品の製作技術」高島裕之（専修大学）



お問い合わせ　東京大学埋蔵文化財調査室　TEL　03-5452-5103

5. 資料の提供・貸出

貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料（資料 / 出土地点略称[*1] / 遺構）
東京国立博物館	展示	平成館考古展示室常設展　資料展示	1. 色絵大皿片（伊万里・古九谷様式）/HW/ 包含層 2. 色絵亀甲文皿片（伊万里・古九谷様式）/HW/C2 層 3. 染付吹墨鷺図皿片（伊万里）/HHC/L32－1 4. 色絵花卉文大皿片（伊万里・柿右衛門様式）/HGS/391 号 5. 染付八宝文大皿片（景徳鎮窯）/HGS/ 包含層 6. 白釉鉄絵人物草花文壷片（磁州窯）/HGS/ 包含層、U/ 包含層 7. 色絵福字鉢片（呉須赤絵）/HGS/ 包含層 8. 織部脚付平向付片（美濃）/HGS/46、532 号 9. 織部筒向付片（美濃）/HGS/ 包含層 10. 染付脚付向付片（景徳鎮窯）/HGS/ 包含層 11. 染付八角瓢形徳利片（景徳鎮窯・祥瑞）/HGS/678 号 12. 染付水注蓋片（景徳鎮窯）/HGS/ 包含層 13. 色絵皿片（景徳鎮窯）/HGS/496、185 号 14. 黄地緑彩鉢片（大明嘉靖年製）/HW/C2 層 15. 色絵壺片 /HW/C2 層、包含層　HGS/617 号 16. 色絵大皿片（呉須赤絵）/HGS/678 号 17. 黒釉兎毫斑碗片（建窯）/HN/SK299 18. 染付小坏（五良大甫呉祥瑞造）（景徳鎮窯）/HGS/ 包含層 19. 魚屋茶碗片 /HN/SK299 20. 青磁袴腰形香炉片（龍泉窯）/HN/SK299 21. 青磁獅子紐香炉蓋片（龍泉窯）/HN/SK299 22. 青磁算木文瓶片（龍泉窯）/HN/SK299 23. イズニク陶器皿片 /HW/C2 層、SD422 24. 塩釉水注片（ドイツ）/HN/SK299 25. デルフト陶器片 /HGS/ 包含層　U/ 包含層
国立歴史民俗博物館	展示	総合展示「都市の時代」資料展示	1. 灰釉碗（呉器手）/HW/D 面焼土 2. 灰釉鉄絵碗（京焼風）/HW/D 面焼土 3. 青緑釉輪剥皿（内野山窯）/HW/D 面焼土 4. 染付皿（草花文）/HW/D 面焼土 5. 染付皿（菊文）/HW/D 面焼土 6. 輪剥皿 /HW/D 面焼土 7. 三島手鉢 /HW/D 面焼土 8. 染付大皿（網干文）/HGS/618 号 9. 染付大皿（海浜文）/HGS/678 号 10. 染付瓶（草花文）/HGS/537 号 11. 染付組皿（草花文）/HGS/537 号 12. かわらけ /HHC/ 池 13. 木製品（折敷）/HHC/ 池 14. 木製品（はし）/HHC/ 池 15. 金泥かわらけ /HIKN/SK4516
JPタワー学術文化総合ミュージアム	展示	インターメディアテク COLONNADE3常設展　資料展示	1. 文久永寶 /HJF06/SK10　1 点 2 ～ 7. 碗、皿、小坏「双葉葵文」/HJF06/SK10 8 ～ 10. 碗、小坏「鏡文」./HJF06/SK10 11 ～ 13. 九谷焼小坏 /HJF06/SK10 14 ～ 25. 染付碗 ./HJF06/SK10 26 ～ 27. 染付皿 /HJF06/SK10 28. 染付変形皿 /HJF06/SK10 29. 染付蓮華 /HJF06/SK10 30. 褐釉水注 /HJF06/SK10 31 ～ 36. 上絵薄手坏 /HJF06/SK10 37. 染付仏飯器 /HJF06/SK10 37. 染付御神酒徳利 /HJF06/SK10 38. 染付筆立 /HJF06/SK10

貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料（資料 / 出土地点略称[*1] / 遺構）
JPタワー学術文化総合ミュージアム	展示	インターメディアテク COLONNADE3常設展　資料展示	39. 灰釉鳥餌水入 /HJF06/SK10 40. 硯 /HJF06/SK10 41. ミニチュア刀柄 /HJF06/SK10 42、43. キセル /HJF06/SK10 44. ミニチュア鉢 /HJF06/SK10 45、46 泥面子 /HJF06/SK10 47 ～ 56 碁石状土製品 /HJF06/SK10 57 色絵紅坏 /HJF06/SK10 58. 染付蓋物 /HJF06/SK10 59. 色絵角形段重 /HJF06/SK10 60. 染付油壺 /HJF06/SK10 61. 鉄絵鬢水入 /HJF06/SK10 62 ～ 71. 装身具 /HJF06/SK10 72. 鏡 /HJF06/SK10 73 ～ 77. 簪 /HJF06/SK10 78. 襟留 /HJF06/SK10 79 ～ 95. 寛永通宝四文銭 /HJF06/SK10
NHK 制作局	放映	「NHKスペシャル　シリーズ大江戸」2018年4月29日（日）、5月27日（日）、7月1日（日）21:00～21：55	1. 調査風景 /HHC299 2 ～ 3. 調査風景 /YGS01 4. 調査風景 /HS7
楊　美莉	掲載	楊　美莉『The circulation of elite Longquan celadon ceramics from China to Japan』　East Sussex Academic Press　掲載	1. 東京大学構内遺跡出土青磁片
大橋　康二	掲載	大橋康二「日本における色絵磁器生産の創始に関する考古学的研究」『東洋陶磁』第47号	1. 色絵皿 /U/3 号
水本　和美	展示	色絵磁器の技術的解明のため、自然科学分析を行いたい	1 ～ 2. 色絵染付碗 /HW/D 面焼土 3. 色絵染付天啓赤絵皿 ./HW/E 面上層 4. 色絵染付皿 /HW/C2 層 5 ～ 6. 初期鍋島皿 /HW/C2 層 7 ～ 9. 古九谷様式大平鉢 /HW/C2 層 10. 色絵付碗 /HW/HW/C2 層
NHK 出版	掲載	『大江戸知らないことばかり』　NHK出版　2018年5月発行	1. かわらけ出土状況 /HGS/395 号 2. 染付揃い皿 /HGS/537 号
和歌山県立博物館	展示 / 掲載	特別展「西行－紀州に生まれ、紀州をめぐる－」　資料展示、図録掲載	1. 土人形（西行）/HW/SK883 2. 土人形（西行）/HW/SE326 3 ～ 4. 土人形（西行）/HW/SK3 5. 土人形（西行）/HHC/F34-11 6. 土人形（西行）/HG/SU313 7. 土人形（西行）/HG/SK31 8 ～ 10. 土人形（西行）/K14/SK245 11 ～ 12. 土人形（西行）/K14/SU63 13. 土人形（西行）/K14/SK101 14 土人形（西行）/VMC/SK15
洋泉社	掲載	『NHKスペシャル　シリーズ　大江戸　の世界』　洋泉社ムック　2018年6月1日発行	1. 染付大皿 /HJF06/SK10 2. 建物礎石群 /HGS 3. 地下室 /HES99/SU107 4. 金箔瓦 /HIKN ほか 5.「御末」釘書皿 /HJF06/SK10 6. 魚骨 /HS7/2 号土坑 7. 貝類 /HS7/2 号土坑 8. 井戸、井戸枠検出状況 /HK310/SE373 9. 廃棄土坑出土遺物 /HK310/SX7 10. 三つ葉葵文瓦 /HJF06/SK10

貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料（資料 / 出土地点略称 / 遺構）
日本経済新聞社	掲載	日本経済新聞　社会面連載コラム	1. 弥生式土器 /TS/1 号
ミュージアムパーク 茨城県自然博物館	展示	企画展[火山列島日本」資料展示 2018年7月7日（土） ～9月17日（月祝）	1. 宝永テフラ剥ぎ取り資料 2.. 宝永テフラ
ニューサイエンス社	展示	『考古学ジャーナル　特集 －近世考古学の提唱から半世紀－』 2018年8月号	1. 染付大皿、「守セン」釘書 /HJF06/SK10
文京ふるさと歴史館	掲載	特別展「ねこの細道・散歩道　ぶんきょう道中ひげ栗毛」　パネル展示、解説図録『ぶんきょう道中　史跡探訪記』	1 ～ 4. 遺構写真 / 追分国際学生宿舎 2. 地下室 /HES99/SU107
日本考古学協会	掲載	日本考古学協会70周年記念誌『日本考古学・最前線』	1. 梅ノ御殿全景 /HGS
小田原城天守閣	展示	特別展「小田原開府五百年～北条氏綱から続くあゆみ～」　資料展示	1. 唐草文五寸皿 /HGS/537 号 2. 矢羽文七寸皿 /HGS/537 号 3. 双鳥文五寸皿 /HGS/537 号 4. 唐草文瓶 /HGS/537 号 5. 草花文蓋物 /HGS/537 号 6. 竹文大皿 /HGS/532 号 7. 備前釣花生 /HHB/E8-2 8 ～ 9. 文字文碗 /HHB/E8-2 10. 茶筅たて /HHB/E8-2 11 ～ 14. 金箔瓦 /HHC299 15 ～ 16. 木簡 /HHC/ 池 17 ～ 21. かわらけ /HHC/ 池 22 ～ 24. 鍋島皿 /HW/C2 層 25 ～ . 扇面六寸皿片 /HHC/L32-1
長久　智子	掲載	長久　智子「徳川美術館所蔵ドイツ製塩釉灰色藍彩炻器「印花人物阿蘭陀焼手付水指」－大名道具の「阿蘭陀」としての視座から－」『金鯱叢書』46輯 徳川美術館	1. ドイツ炻器片 /HN
長久　智子	掲載	長久智子「近世日本におけるドイツ製塩釉炻器の流通と需要」『貿易陶磁研究』39	1. ドイツ炻器片 /HN
（株）青龍社	掲載	『華道』4月号　2019年3月発行	1. 金箔瓦 /HES099
白井　裕一郎	閲覧	土人形製作参考のため	1. 土人形（猫）/HW/SK2584 2. 土人形（猫）/K14/SK99 3. 土人形（猫）/K14/SU2 3.. 土人形（猫）/HW/SK3

＊1　調査地点名
FE1：工学部 1 号館
HAC13：アカデミックコモンズ
HCRA12：クリニカルリサーチセンター A 棟 I 期
HEA07：経済学研究科学術交流棟
HES99：総合研究棟（文・経・教・社研）
HG：医学部附属病院外来診療棟
HGS：御殿下記念館
HHB：法学部 4 号館（法）・文学部 3 号館（文）
HHC：医学部附属病院中央診療棟（病中）・設備管理棟（エネセン）・給水設備棟（給水）・共同溝（共同溝）
HHC299：医学部付属病院第 2 中央診療棟
HI709：伊藤国際学術研究センター
HIKN：医学部教育研究棟
HJF06：情報学環・福武ホール
HN：医学部附属病院看護師宿舎
HW：医学部附属病院入院棟 A
HS7：理学部 7 号館
K14：工学部 14 号館
OKS07：追分国際宿舎
SBS00：医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟
SK：教育学部総合研究棟
TS：工学部武田先端知ビル
U：山上会館

附　埋蔵文化財調査室要項

東京大学埋蔵文化財運営委員会は、全学委員会の見直しに伴い、以下の通り廃止され、埋蔵文化財調査室は、キャンパス計画室下部組織に改組された。

東京大学における全学委員会の見直しに伴う関係規則の整理等に関する規則（平成 22 年３月 25 日東大規則第 133 号）（抜粋）

（略）
（東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の廃止）
第 17 条　東京大学埋蔵文化財運営委員会規則（平成元年７月 11 日制定）

埋蔵文化財調査室規則

平成元年７月 11 日
評議会可決

（設置）
第１条　キャンパス計画室の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。
（業務）
第２条　調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査（以下「遺跡調査」という。）に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。
（１）　遺跡調査に対する総括的指導助言
（２）　文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
（３）　遺物等の保管及び管理
（４）　遺跡調査の方法に関する調査研究
（５）　前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項
（室長）
第３条　調査室に室長を置く。
２　室長は、東京大学専任の教授又は准教授のうちから総長が委嘱する。
３　室長は、調査室の業務を総括する。
（室員）
第４条　調査室に室員若干名を置く。
２　室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。
（庶務）
第５条　調査室の庶務は、本部施設企画課において処理する。
附　則
この規則は、平成８年５月 21 日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成８年５月 11 日から適用する。
附　則　　この規則は、平成 22 年４月１日から施行する。

東京大学埋蔵文化財調査室組織表

室長（人文社会系研究科教授）	佐藤　宏之
室員（キャンパス計画室准教授）	堀内　秀樹
室員（キャンパス計画室助教）	成瀬　晃司
室員（人文社会系研究科特任助教）	増田　晴夫
室員（キャンパス計画室助手）	原　祐一
室員（キャンパス計画室助手）	大成　可乃
室員（キャンパス計画室助手）	追川　吉生
教務補佐員	小川　祐二
教務補佐員	香取　祐一
事務補佐員	青山　正昭
事務補佐員	今井　雅子
事務補佐員	大貫　浩子
事務補佐員	小林　照子
事務補佐員	清水　香（～ 2018 年４月）
事務補佐員	杉浦　あかね
事務補佐員	渡邊　法彦

報　告　編

東京大学構内遺跡発掘調査報告

東京大学駒場Ⅰ構内の遺跡

駒場コミュニケーションプラザ地点発掘調査報告

北区　SX1（一本梯子形遺構）

北区　第Ⅱ文化層２号ブロック石器出土状況

北区　第Ⅱ文化層２号ブロック接合資料（10+12）

北区　第Ⅱ文化層２号ブロック接合資料（9+11+13+14）

例　　言

1．本報告は、東京大学駒場Ⅰ構内　駒場コミュニケーションプラザ新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2．本地点の略称は「KCP」である。
3．本地点は、東京都目黒区駒場３丁目８番１号東京大学駒場Ⅰ構内に所在する。
4．本地点は、東京都遺跡地図「目黒区 No. 1　東京大学駒場構内遺跡」内に位置している。
5．調査面積は、北区、南区、ケヤキ移植地区、4,327 ㎡を対象とした。
6．調査期間は下記の通りである。
　試掘調査　平成 14 年 11 月５日～ 15 日（北館地点・南館地点）、平成 16 年 12 月６日～７日（和館地点）
　本調査　平成 17 年４月 22 日～７月 21 日
7．発掘調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、成瀬晃司が担当した。
8．本報告の編集は成瀬が行った。
9．調査時の遺構写真は成瀬が、遺物写真は青山正昭、（株）CEL が撮影した。
10．本報告の執筆分担は、第Ⅰ章を成瀬、第Ⅱ章を成瀬・小池　聡・香取祐一・大貫浩子、第Ⅲ章を成瀬・大貫、第Ⅳ・Ⅴ章を成瀬が担当した。
11．旧石器時代遺物の分類、事実記載について、小池　聡氏に依頼した。
12．石器の実測・トレースは（株）盤古堂に、縄文土器の実測、拓本、デジタルトレースは（株）CEL に委託した。
13．発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が、本学駒場Ⅱ構内（東京都目黒区駒場４－６－１）、同工学系研究科柿岡教育研究施設内（茨城県石岡市柿岡 414）において、保管・運用している。
14．発掘調査及び報告作成にあたり、下記の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して謝意を表する（敬称略、五十音順、所属は調査時）
　久保純子（早稲田大学）、小池　聡（盤古堂）、小檜山一良・竜子正彦（京都市埋蔵文化財研究所）、野口　淳（明治大学）、両角まり、役重みゆき（東京大学）、目黒区教育委員会

発掘調査参加者（所属は調査時）
成瀬晃司、中村亜希子　角道亮介（東京大学）、吉田千沙子（日本大学）、平野加奈子（ロンドン大学）、加藤建設（株）
整理作業参加者
今井雅子　大貫浩子　香取祐一　清水　香（埋蔵文化財調査室）

凡　　例

1．遺構図は原則として 1/50 で掲載している。それ以外は各図版に記した。
2．旧石器時代石器の実測図は原寸、縄文時代土器・石器の実測図は原則として 1/3 で掲載している。その他の縮尺は各図版に記した。
3．実測図に付けられる記号は以下を表している。
　中心線上下端の破線は、推定口径、推定底径を表している。
4．遺構番号は、原則調査順に通し番号を付した。また冠詞に付けた略号は以下の通りである。
　SA：塀（柵）跡、SB：建物跡、SD：溝、SK：土坑、SL：便槽、SP：小穴、SX：性格不明遺構
5．グリッドは、調査区北西隅を基準点とし（A1）南へ英大文字、東へ自然数（アラビア数字）を 4m 間隔で付した。よってグリッド名は４m四方枡の北西コーナーを交点とする英数字を充てている。A1 の座標値は平面直角座標系（世界測地系）Ⅸ系Ｘ＝－37669.458、Ｙ＝－13295.488 で、南北方向のグリッドラインは 17°　48′　58″ 東偏する。
6．遺構断面図などに記された標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とした、目黒区公共基準点駒場三丁目８番１号先地点（36.780m）から算出した。
7．遺構平面図に記載された方位記号は、平面直角座標系による方眼北を示し、真北より 5′　10″ 西偏している。

東京大学駒場Ⅰ構内の遺跡
駒場コミュニケーションプラザ地点発掘調査報告

目　　次

例　　言
凡　　例
目　　次

第Ⅰ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯 …… 85
第２節　調査の方法と経過 …… 85
第３節　調査地点の地理・歴史的環境 …… 88
第４節　調査地点の現状と基本層序 …… 92

第Ⅱ章　北区の調査

第１節　旧石器時代の調査 …… 97
第２節　縄文時代以降の調査 …… 114

第Ⅲ章　南区の調査

第１節　遺構 …… 131
第２節　遺物 …… 147

第Ⅳ章　ケヤキ移植地区の調査 …… 153

第Ⅴ章　一本梯子形遺構小考 …… 155

まとめ …… 165

引用・参考文献

報告書抄録

第Ⅰ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

教養学部では、目黒区駒場３－８－１、駒場Ⅰ構内駒場寮跡地に「駒場コミュニケーションプラザ」の建設を計画しており、平成17年度よりPFI事業として実施されることとなった（Ⅰ－1図）。

本キャンパスは、東京大学駒場構内遺跡（目黒区No.1）として登録されており、埋蔵文化財調査室が実施したこれまでの調査で、南側に隣接する駒場図書館地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2011）では、旧石器時代の遺物集中区が（立川ロームⅤ層）、さらにその南に谷を挟んだ数理科学研究科Ⅱ期棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）では、平安時代の火葬墓、縄文時代早期の遺構（炉穴、住居址）、旧石器時代の遺物集中区（立川ロームⅣ層）などが検出されており、近隣に位置する本地点でも遺構・遺物の存在が予想された。そこで埋蔵文化財調査室では、事業計画との関連から平成15・16年の２回に分けて試掘調査を行った。その結果、北館、南館、和館各建設予定地区のうち、北館、南館建設予定地区において縄文時代の遺構、遺物が確認されたため、目黒区教育委員会、本学施設部との協議の結果、当該地を対象に事前調査を行うこととなった。

また前述した試掘調査では、旧石器時代について周辺調査地点の状況より立川ロームⅥ層までを対象としていたが、平成15年度に実施された国際学術交流棟地点の調査において立川ロームⅨ～Ⅹ層中の遺物集中区が確認されたため（東京大学埋蔵文化財調査室 2004）、本調査と並行に立川ロームⅩ層までの試掘調査も実施する運びとなった。

第２節　調査の方法と経過

調査は、現状の土地区画とほぼ平行になるようにグリッドラインを設定し、北西を基準として東西方向に算用数字を南北方向に英大文字を４m間隔で付し、グリッドの北西角の杭をグリッド名とした（Ⅰ－２図）。基礎点となるA1杭の座標は、平面直角座標系（世界測地系）Ⅸ系でX＝－37669.458、Y＝－13295.488に位置し、南北方向のグリッドラインは方眼北より17°　48′　58″東偏する。

旧石器時代の試掘に関しては、基本的に８m間隔で２×２mのテストピットを設定したが、立川ロームⅢ層からの堆積が認められる箇所に関しては安全上の理由から、東西４m、南北２mのテストピットを設定しⅥ層上部まで調査を行い、それ以下は西側２×2mを調査対象としてⅩ層上部まで試掘を行った。

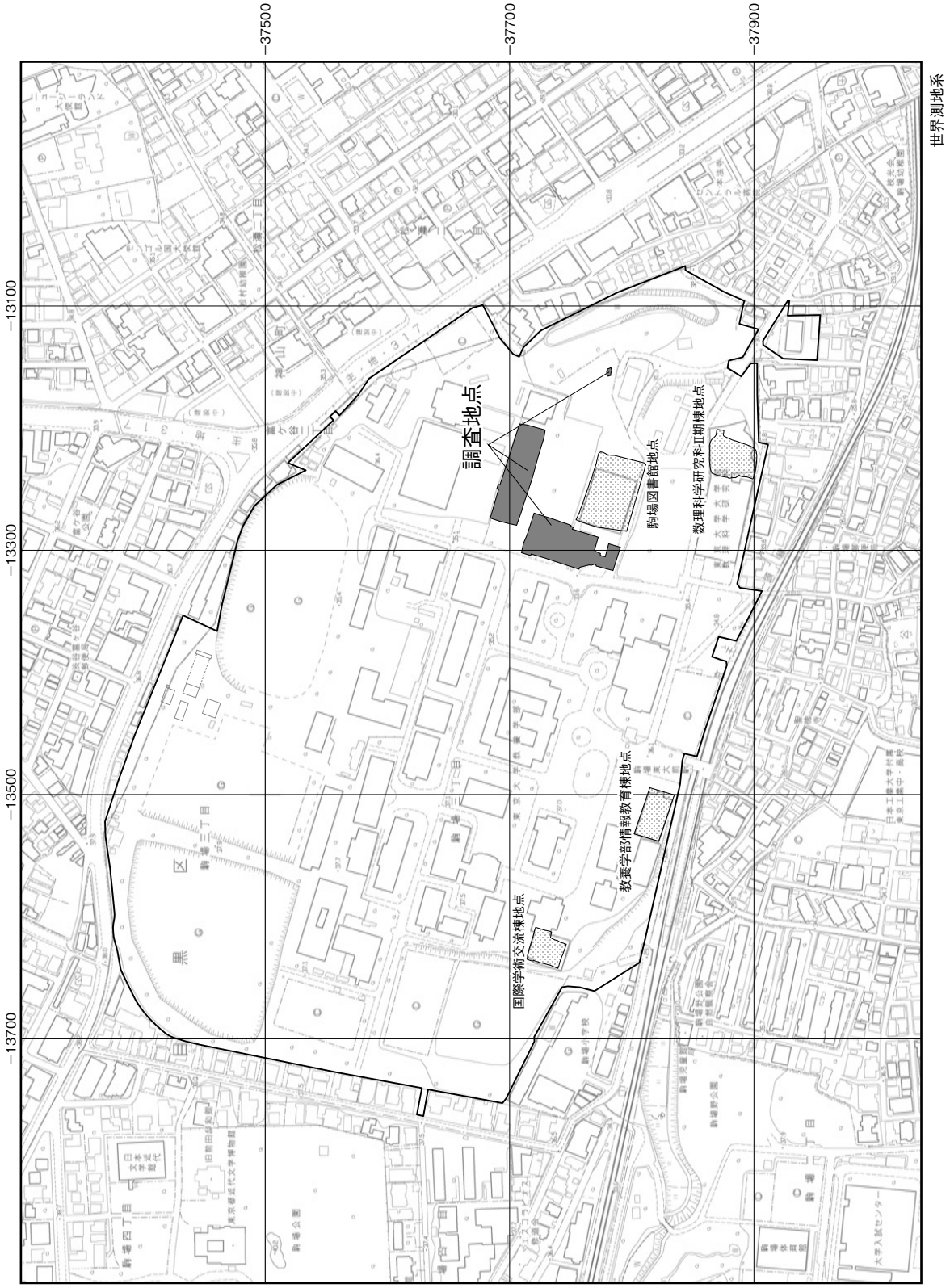
調査は本件の建設予定建物毎に行い、北館建設地を北区、南館建設地を南区、また南館建設の支障となったケヤキの移植場所をケヤキ移植地区とした（Ⅰ－２図）。

北区の調査は、４月25日から開始した。表土掘削は北寮基礎撹乱が及んでいないＤライン以北付近を先行して行い、基礎撹乱範囲境界を見極めながら自然堆積層上面レベルで東へと進め、28日に表土掘削、遺構確認が終了した。ゴールデンウィーク明けの５月９日より自然堆積層上で確認された遺構の調査を開始、並行して北寮撹乱部分の表土掘削を開始し、表土掘削の進捗に合わせてテストピット用のグリッドを設定し、旧石器時代の調査を行った。５月12日にG12グリッドⅦ層上部より剥片１点が出土。16日にE16グリッドⅥ層より剥片が出土、25日にG14グリッドⅦ層上部より剥片が出土し、各々隣接する２×２mの範囲を拡張して調査を進めた。６月３日にはＤライン以北の自然堆積層及びソフトローム層上の遺構調査を終了し、旧石器時代の調査へ移行し、６月23日に全ての調査を終了した。

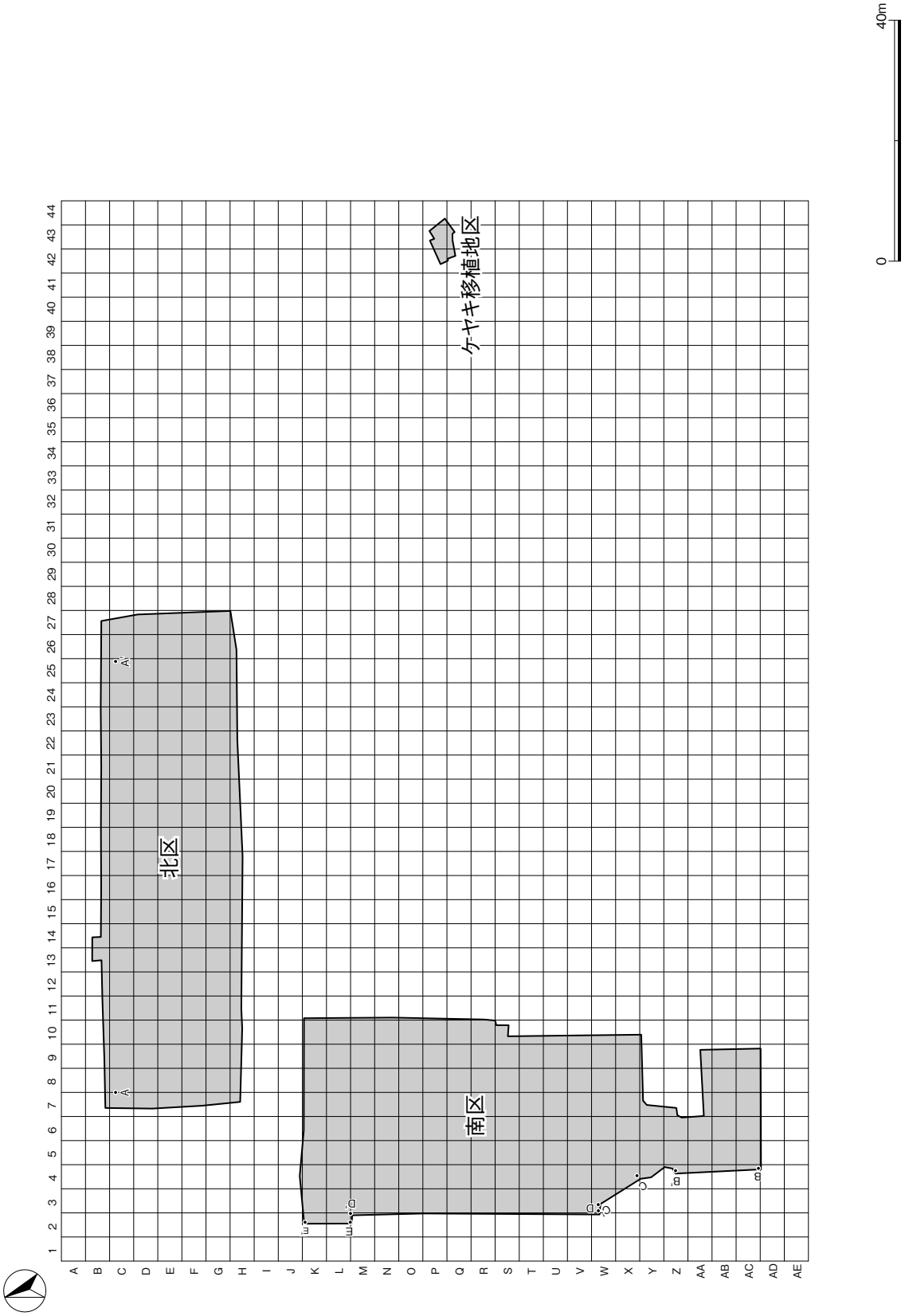
南区の調査は、６月３日に表土掘削及び遺構確認を開始。８日に斜面部にかかるＰライン以北まで終了し、翌日より遺構の調査を開始する。Ｐライン以南の表土掘削は、６月23日から再開し、調査区南端より谷方向に向けて進めた。旧地形は基本的に南北方向へ傾斜しているが、西方向へも緩やかに立ち上がっており、駒場図書館地点ではほぼ東西方向へ伸びていた谷筋が谷頭に向かい北方向へ湾曲していることが確認された。７月６日には、Ｐライン以北の台地上の調査をほぼ終了し、順次旧石器時代テストピットを設定し、確認調査を開始した。７月11日には埋積谷堆積土の掘削が終了し、重機掘削を完了した。引き続き遺構調査、旧石器時代試掘を実施し、７月20日に調査を完了した。

ケヤキ移植地区の調査は、７月19日に実施した。当初設計の直径３mの対象地を重機掘削した所、水道管が検出されたため、対象地を西へ移動したが、そこでもガス管が検出されたので、さらに西側へ拡張した。拡張部にはロームを掘り込んだ撹乱が存在し、その壁面を利用してローム層の堆積状況を記録し、調査を完了した。

７月21日に埋積谷を含む調査区西壁断面を記録して、全ての調査を完了した。


−37500
−37700
−37900
−13100
−13300
−13500
−13700
世界測地系
調査地点
駒場図書館地点
数理科学研究科II期棟地点
教養学部情報教育棟地点
国際学術交流棟地点

I-1図　調査地点



I-2図　調査区グリッド

第３節　調査地点の地理・歴史的環境

(1) 地理的環境

本遺跡は武蔵野台地の南東部、目黒川と神田川に挟まれた淀橋台上にあり、目黒川の支流のひとつ空川の左岸台地上に位置する（Ⅰ－３図）。空川は駒場Ⅱキャンパス・駒場公園間付近を源流とし、駒場野公園から伸びる支谷と合流して南東方向へ向きを変え、西郷山下付近で目黒川に合流する。さらにキャンパス東縁では駒場池（通称一二郎池）の湧水点から、西縁ではテニスコート付近から駒場小学校方向へ開く支谷がはいり、東西二方を空川に続く支谷で囲まれた位置にあたる。本地点のうち北区は空川と駒場池から開く支谷に挟まれた台地上に、ケヤキ移植地区は、駒場池に向かう東緩斜面上に、南区は空川へ向かう南斜面上に位置する。また南区南部では、駒場図書館地点で確認された東西方向に伸びる埋積谷の延長が、調査区内で北方向に進路を変えていることが確認された。

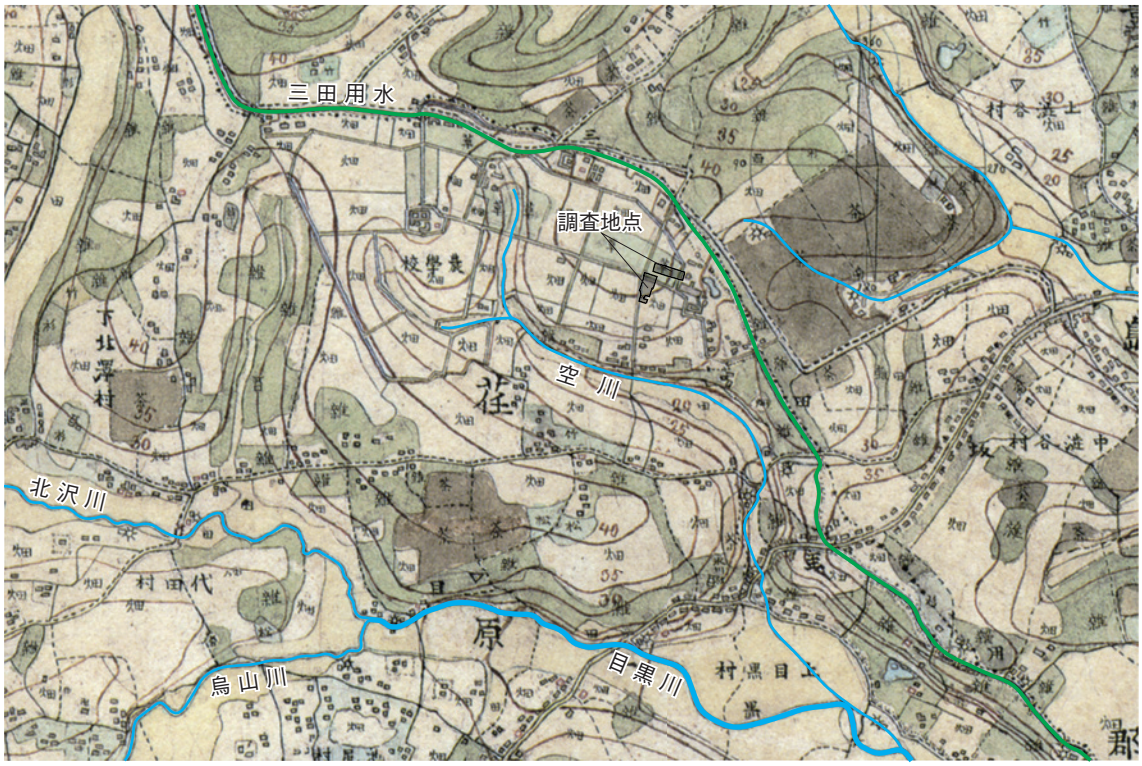
(2) 歴史的環境

本遺跡は、東京大学駒場構内遺跡として旧石器時代、縄文時代（草創期～早期・中期・晩期）、平安時代、近世の集落・包蔵地として登録されている。これまでに調査室が実施した調査から各時代の様相を概観する。1993年に実施した情報教育棟地点では、縄文時代の集石遺構と後期を主体とする遺物包含層が確認された。1996年に実施した数理科学研究科Ⅱ期棟地点では、旧石器時代（立川ローム層Ⅳ層）の遺物集中区と礫群、縄文時代早期撚糸文期の住居址、条痕文期の炉穴のほか、土坑、ピット、平安時代（９世紀後半）の火葬墓、近世～近代の溝、土坑、ピットなどが検出された。2000年に実施した駒場図書館地点では、旧石器時代（立川ローム層Ⅴ層）の遺物集中区、近代の溝、礎石列、土坑、ピットなどが検出された。2003年に実施した国際学術交流棟（現、駒場ファカルティーハウス）地点では、旧石器時代（立川ローム層Ⅸ～Ⅹ層）の遺物及び炭化物集中区、縄文時代の土坑、近代の遺構が検出された。

これまでの成果から、旧石器時代～縄文時代の包蔵地は、駒場Ⅰキャンパス南部にあたる空川及びその支谷を望む傾斜変換点付近に分布し、特に縄文時代早期の資料は、駒場池を源流とする支谷右岸に分布する傾向が捉えられる。

縄文時代晩期以降は、数理科学研究科Ⅱ期棟地点で検出された平安時代の火葬墓を除くと中世まで遺構、遺物ともに皆無である。続く江戸時代も後述する状況から考古資料は希薄である。

江戸時代の駒場Ⅰ～Ⅲキャンパス周辺は、幕府が設定した江戸近郊の鷹場六筋のひとつ目黒筋の鷹場であった



I-3図　周辺の旧地形（1/25,000）
明治13年作成「第一軍管地方二万分一迅速測図原図」部分に一部加筆

ことが知られる。目黒筋鷹場は荏原郡馬込領･世田谷領･麻布領・品川領83ヵ村および江戸町方に属する35ヵ村を含み、名称が示すように目黒がその中心であったといわれる。鷹場の管理は上目黒村に置かれた御用屋敷にある鳥見役所で行われた。この御用屋敷は16万坪といわれる遊猟地駒場野のなかに置かれ、文化２年作成とされる目黒筋御場絵図には（Ⅰ－4図a)、渋谷道（現在の淡島通）の南側に描かれている。この絵図と明治13年作成の迅速測図原図を比較する。渋谷から南西方向に伸びる道がＹ字状に二手に分かれる。北側の渋谷道が現在の淡島通、南側の大山街道が現在の国道246号線にあたる。また西方から流れる北沢川と烏山川が合流し目黒川となって南東方向へ流れ、そこに空川が合流する。その東には三田用水が描かれている。これらの街道、河川、水路の位置関係を基準に文化２年絵図と明治13年地図を比較すると絵図に「駒場原」と書かれた緑地帯が駒場農学校敷地とほぼ重なることが判る。空川に向かう支谷の位置関係も問題ない。空川をまたいで南北方向に伸び渋谷道に接続する道も両図に描かれ、絵図で御用屋敷正面に繋がっている位置関係から、鷹場と屋敷を結ぶ「御成道」にあたると考えられ、現在の駒場高校正門前から駒場Ⅰキャンパス梅林門に通じる道に比定される。

幕府の鷹狩りは家康から家光の頃は盛んに行われていたが、５代綱吉が発した生類憐れみの令を契機に中止された。その後、吉宗が享保元（1716）年に復活し、六筋の鷹場が設定され、幕末まで鷹場として運用された。また鷹狩りが幕臣の武術調練を目的に行われていたことから、幕末には軍事教練や砲術訓練が行われていたといわれる。

また駒場原の北側外周に沿って緩やかなカーブを描き､三田用水が描かれている。三田用水は寛文４（1664）年に三田、芝地域の飲料水用として開削され、下北沢村で玉川上水から分水し、代々木、渋谷、目黒、白金、大崎、三田まで給水した。享保７（1722）年に廃止されたが、分水を農業用水に利用していた近隣農村からの願い出により､享保10（1725）年に三田用水として再開した。明治にはいると、これを利用した水車が観られるようになり、目黒地域では日本麦酒、目黒火薬製造所の動力として工業利用された。

明治７（1874）年、内務省において同省所管の内藤新宿試験場（現新宿御苑）内に農事修学場を設立することが決せられ、内務省勧業寮管轄として農学校開設に向けて動き始めた。明治８年末に基本構想が制定され、それに基づいて明治９年11月までに外国人教師の招聘、生徒の募集､諸規則の整備などが実施され､明治10（1877）年２月に開場の運びとなった。しかし外国人教師から内藤新宿は風紀上農学校設置場所として不適切であると指摘され、同年12月に荏原郡上目黒村駒場野（現、駒場Ⅰ～Ⅲキャンパス辺一帯、約17万坪）に移転し、翌11年１月に農学校の名称で正式に開校式が行われた。これだけの広大な用地が確保できた背景には、江戸時代に鷹場として管理されていたことが一因と考えられる（Ⅰ－4図b、c)。

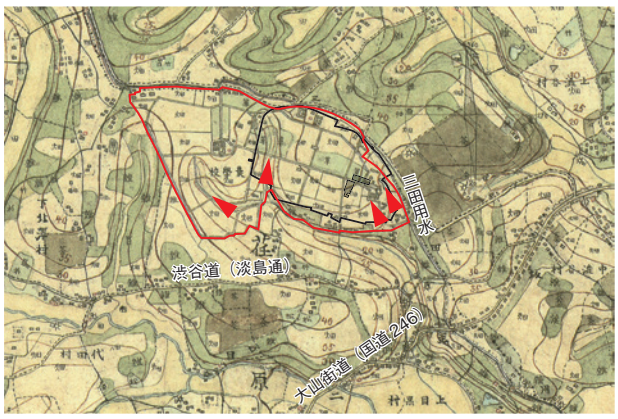
明治14（1881）年農商務省の設置に伴い、内務省勧農局、大蔵省商務局が廃止になり、農学校は農務省に移管され、明治15年に駒場農学校と改称した。さらに明治19(1886)年に東京山林学校と合併し､農学部､林学部、獣医学部の３学部を有す東京農林学校となり、４年後の明治23（1890）年に農商務省から文部省に移管されて、帝国大学農科大学となった（Ⅰ－4図d、e)。その後大正８（1919）年帝国大学令の全文改正により農学部と改称された。

大正15（1926）年に､本郷キャンパス拡張のため､キャンパス南西の一角約12,600坪を所有していた前田邸用地と、大学が提供した農学部敷地のほぼ中央部分約40,000坪との土地交換が行われ、前田家は駒場に移転した。これにより農学部敷地面積は140,523坪と減少し、東西に分断された（Ⅰ－4図f)。さらに昭和５年頃には前田邸を挟んだ西側敷地（現駒場Ⅱキャンパス）北部に航空研究所建物が建ち始め、実際の敷地面積はさらに減少し、昭和８年には敷地南部を通る帝都電鉄鉄道路線建設(現、井の頭線）のため、その南側にあたる敷地（都立国際高等学校、駒場野公園辺）が分断された（Ⅰ－4図g)。

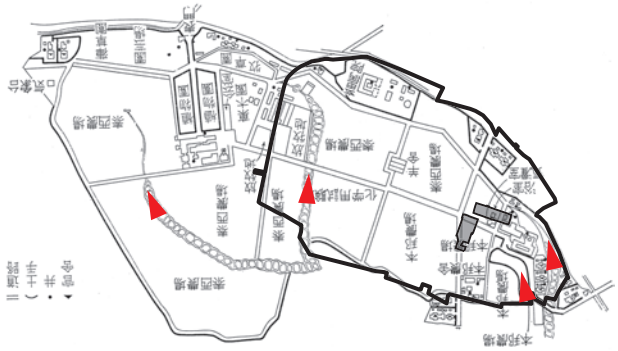
その後、農学部は、昭和10（1935）年、第一高等学校との敷地交換により、東京帝国大学に隣接する文京区本郷弥生町へ移転し、第一高等学校敷地（約69,900坪)、航空研究所敷地(約13,000坪)以外は大蔵省に移管され、現在の駒場Ⅰ、Ⅱキャンパスの形が形成された（Ⅰ－4図g)。また、第一高等学校は、戦後新制大学への移行に伴い、昭和24年教養学部となり、現在に至る（Ⅰ－4図h)。

本地点を大学建物配置図に対比させると、明治から大正にかけては、北区と南区北側は寄宿舎、食堂など学生の生活エリアに、南区南部は圃場に比定される（Ⅰ－4図d～e)。昭和２年の配置図では南区北部の寄宿舎が農芸化学教室に用途変更し、その南側に科学教室が建てられ、生活の場から教育の場へ変化が観られる（Ⅰ－4図f)。さらに第一高等学校との用地交換により、新たに駒場寮と呼ばれる寄宿舎が建設された(Ⅰ－4図g､h)。

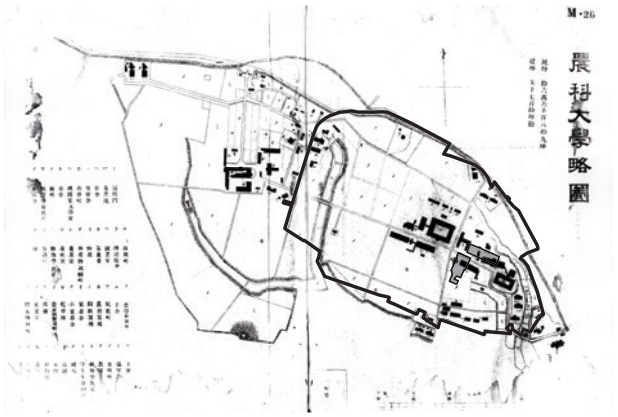
a 文化 2 年「目黒筋御場絵図」より



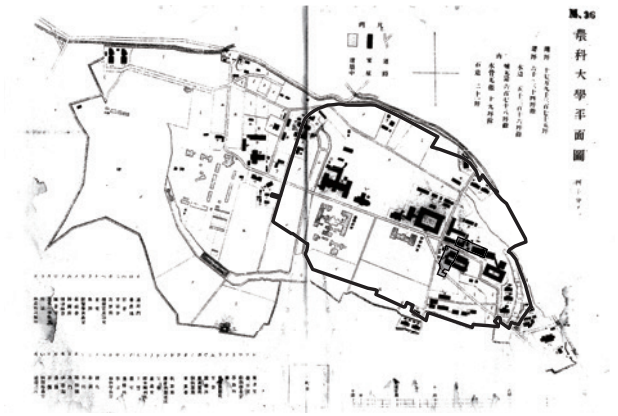
b 明治 13 年「迅速測図原図」より



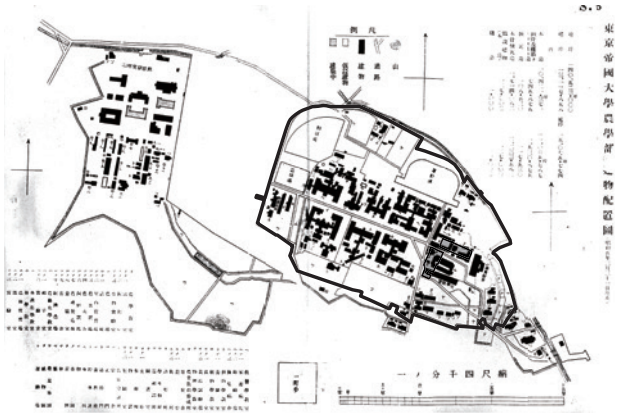
c 明治 17 年「駒場農学校一覧」より



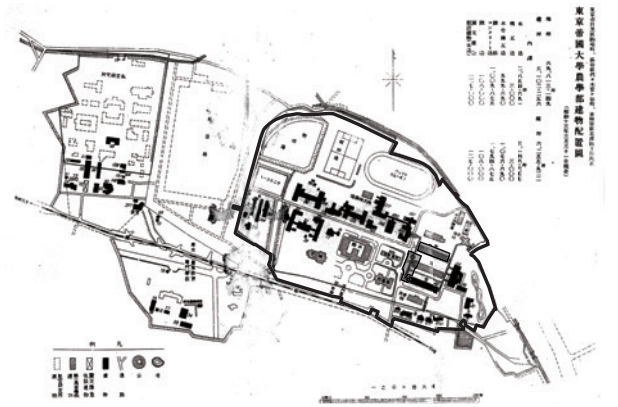
d 明治 26 年「農科大学略図」より



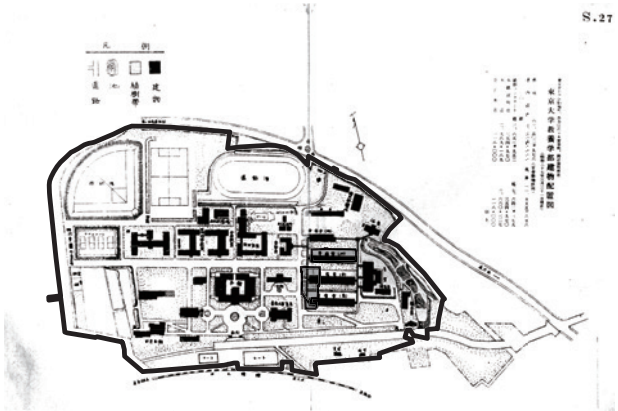
e 明治 36 年「農科大学平面図」より



f 昭和 5 年「東京帝国大学農学部建物配置図」より



g 昭和 13 年「東京帝国大学農学部建物配置図」より



h 昭和 27 年「東京大学教養学部建物配置図」より

Ⅰ-4 図　敷地および土地利用の変遷（赤枠は農科大学、黒枠は教養学部範囲、▲は支谷を加筆）

No.	行政区	遺跡名	遺跡番号	時　代	種　別
1	世田谷	下山谷	82	縄文（中）	包蔵地
2	世田谷	池ノ上	84	縄文（中）	包蔵地
3	世田谷	土器塚	200	旧石器、縄文（中期）、弥生（後）、古墳	集落
4	世田谷	騎兵山	201	縄文（早・中）、古墳、近世、近代	集落
5	世田谷	多聞山	85	縄文（早～後）、古墳、中世、近世	集落、城館
6	世田谷	東山	294	旧石器、縄文（中）、弥生、古墳	集落
7	目　黒	駒場北	57	縄文（中）	包蔵地
8	目　黒	東京大学駒場構内	1	旧石器、縄文（草、早、中、晩）、平安、近世、近代	集落
9	目　黒	駒場	2	旧石器、縄文（早～後）	包蔵地
10	目　黒	土器塚	53	旧石器、縄文（中）、弥生（後）、近世、近代	集落、その他（軍施設）
11	目　黒	駒場高校	4	縄文（中）	包蔵地
12	目　黒	大橋	47	旧石器、縄文（草～晩）、弥生（後）、古墳、平安、中世、近世、近代	集落、その他（軍施設）
13	目　黒	氷川	3	旧石器、縄文（早～後）、弥生（前～後）、古墳、奈良、平安、近世、近代	集落、その他（軍施設）
14	目　黒	東山貝塚	8	旧石器、縄文（早～晩）、弥生（後）、古墳、平安、中世、近世、近代	集落、貝塚、その他（軍施設）
15	目　黒	大坂下	6	縄文（中）	包蔵地
16	目　黒	菅刈	56	旧石器、縄文（前～中・晩）、中世、近世、近代	包蔵地、屋敷跡、その他（庭園）
17	目　黒	鉢山町・猿楽町17番	54	旧石器、縄文（早～中・晩）、弥生（後）、近世	集落
18	渋　谷	渋谷区No.11	11	縄文（中）	包蔵地
19	渋　谷	渋谷区No.15	15	縄文（中）	包蔵地
20	渋　谷	渋谷区No.94	94	縄文、古墳、奈良、平安	包蔵地
21	渋　谷	渋谷区No.30	30	縄文（中）	包蔵地
22	渋　谷	渋谷区No.33	33	縄文（中）	包蔵地
23	渋　谷	渋谷区No.38	38	縄文（中）	包蔵地
24	渋　谷	渋谷区No.39	39	旧石器、縄文（中）	包蔵地
25	渋　谷	渋谷区No.42	42	縄文（中）、弥生	包蔵地
26	渋　谷	鶯谷	46	縄文（中～後）	集落
27	渋　谷	渋谷区No.44	44	縄文（中）	包蔵地
28	渋　谷	鉢山町・猿楽町17番	96	旧石器、縄文、弥生、中世、近世	集落
29	渋　谷	渋谷区No.49	49	縄文（中）	包蔵地、集落

I-5図　周辺の遺跡（S=1/25000）

(3) 周辺の遺跡

先述したように、本遺跡は現在、東京大学駒場構内遺跡として旧石器時代、縄文時代（草創期～早期・中期・晩期)、平安時代、近世の集落・包蔵地として登録され、また近代以降の遺構、遺物も確認されている。その中でもこれまでの調査成果から中心となるのは空川とその支谷を望む台地上に分布する旧石器時代、縄文時代であることから、本項では目黒川左岸の淀橋台を中心に概期の遺跡を概観する（Ⅰ－5図)。

周辺部の旧石器時代遺跡は多いとはいえないが、本遺跡と空川を挟んだ対岸台地上に駒場遺跡（9)、土器塚遺跡（10)、大橋遺跡（12)、氷川遺跡（13）がある。該地は空川、北沢川に伸びる支谷に挟まれた馬の背状に南北に伸びる台頂部が、ゴルフのドライバー状に東に大きく曲がり面積が大きく拡がった台頂部上に分布している。また空川が目黒川に合流する辺りで、目黒川左岸に菅刈遺跡（16)、鉢山町･猿楽町17番遺跡（54、96）がある。

縄文時代になると遺跡数は増加し、早期の遺跡では、騎兵山遺跡（4）をはじめ先述した駒場遺跡､土器塚遺跡、大橋遺跡、氷川遺跡などが確認される。本遺跡では確認されない中期の集落・包蔵地は大橋遺跡をはじめとし周辺部に多く分布し､地形的環境との関わりが注目される。

第４節　調査地点の現状と基本層序

(1) 調査地点の現状

本地点は駒場寮解体により現況は更地になっている。調査区東側には駒場池（通称「一二郎池」）と呼ばれる湧水池から南方に開く空川支谷が、また南側には駒場図書館地点の調査で明らかにされた東へ開く埋積谷が存在し、本地点はこの２つの谷に囲まれた舌状台地の奥部に当たると推定される。現況では駒場寮建設のために行われた造成事業によって、北区東端と隣接する多目的ホールを境に1m近い段差が生じていることからも、元来東へ下る緩斜面であったことを窺い知ることができる。

本調査区内には駒場寮基礎の解体による撹乱が大きく入っていることが試掘調査によっても明らかにされている。今回の表土掘削によって、北区ではＤライン以南全体が北寮基礎によって撹乱を受けており、その範囲では基本的に立川ロームⅤ層以上は存在しない。南区ではＯライン、６ライン、Ｔラインで囲まれた区域が、中寮基礎によって立川ロームⅥ層以上が削平されている。さらにＸライン、６ライン、ACラインで囲まれた区域が、南寮基礎によって撹乱を受けているが、この部分は図書館から続く埋積谷のほぼ中央部にあたり、浸食により立川ロームは堆積していない。また中寮と南寮間も撹乱を受け、立川ローム層は全て削平されている。以上、大規模な撹乱の影響を受けている状況下で、撹乱を受けていない部分で、縄文時代の遺物包含層および遺構が検出された。

(2) 基本層序

北区では、駒場寮北寮基礎による撹乱を受けていないＤライン以北の14ライン以東において、淡色黒ボク土もしくは褐色森林土に比定される沖積層が確認された（Ⅱｂ層)。Ⅱｂ層下には明瞭な漸移層はなく、Ⅱｂ層から漸移的に立川ロームⅢ層へ移行している。立川ローム層は東に向けて緩やかに傾斜していることが認められた（Ⅰ－6図)。

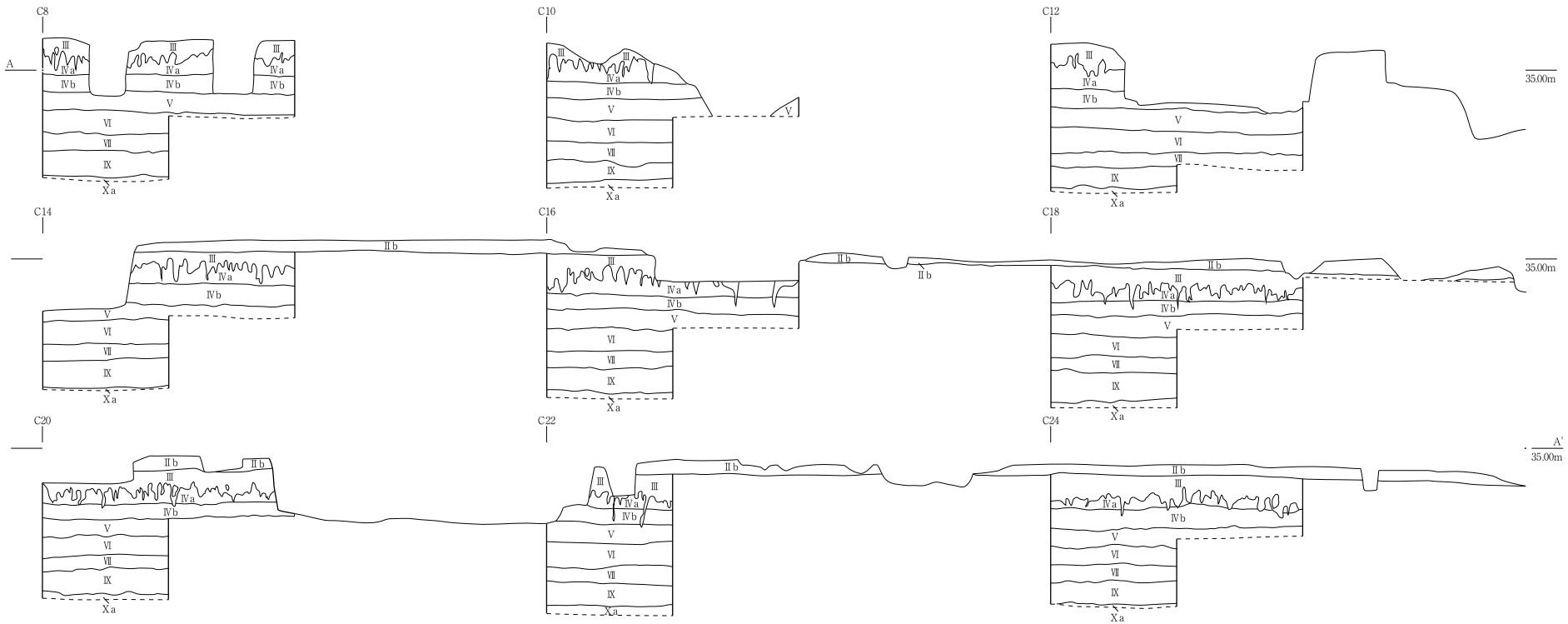
一方、南区は、北区から続く舌状台地の南緩斜面に当たる。ローム層上での等高線は、５ライン付近から谷筋が北西方向へ湾曲していることを示している。本地区は緩斜面上に位置していることから、農学部期の耕作土と推定される黒色土（Ⅰｃ層）の遺存状態も良好で、その下層には部分的ではあるが、新期テフラと推定される黒色スコリアを多量に含有する黒褐色土も認められた（Ⅱａ層)。Ｗライン付近以南から埋積谷の形成が認められ、その中心域のＴライン付近では最大約140cmの沖積層が堆積していた。この堆積土はⅡｂ層下にあたり、埋積谷の形成が縄文時代早期にはほぼ完了していたことが確認された。また、Ｗライン付近の南北断面観察から、谷の浸食により立川ローム第１黒色帯から第２黒色帯までが削平されていることが確認され、削平面の直上には部分的に立川ロームⅣ層が認められるものの、クラック帯を挟みソフトローム層が堆積している。このソフトロームもＹ～ABラインを通る沢の中心部には堆積していない（Ⅰ－7図)。

この様相から、本地点周辺は、立川ロームⅦ層段階までは緩斜面を擁する微高地を形成していたが、寒期に伴う海面低下を要因とした谷筋の浸食によってローム層が削平され、その後、再び谷部分の埋積が進行し、縄文時代前期段階までには、わずかに谷の面影を残す状況まで埋積したものと推定される。

本地点は、前述したように撹乱や埋積谷の影響で、立川ローム層が削平されている部分が多く、旧地形の様相を立川ローム上位面で押さえることが難しく、そのため全区域に存在する立川ロームＸ層を対象に、旧地形のあり方を概観したい（Ⅰ－8図)。

本地点は東西方向に伸びる舌状台地上にあることから、北区においては、基本的に東へ向かう緩やかな緩斜面を形成しており、その斜度は立川ロームⅢ層上面とほ

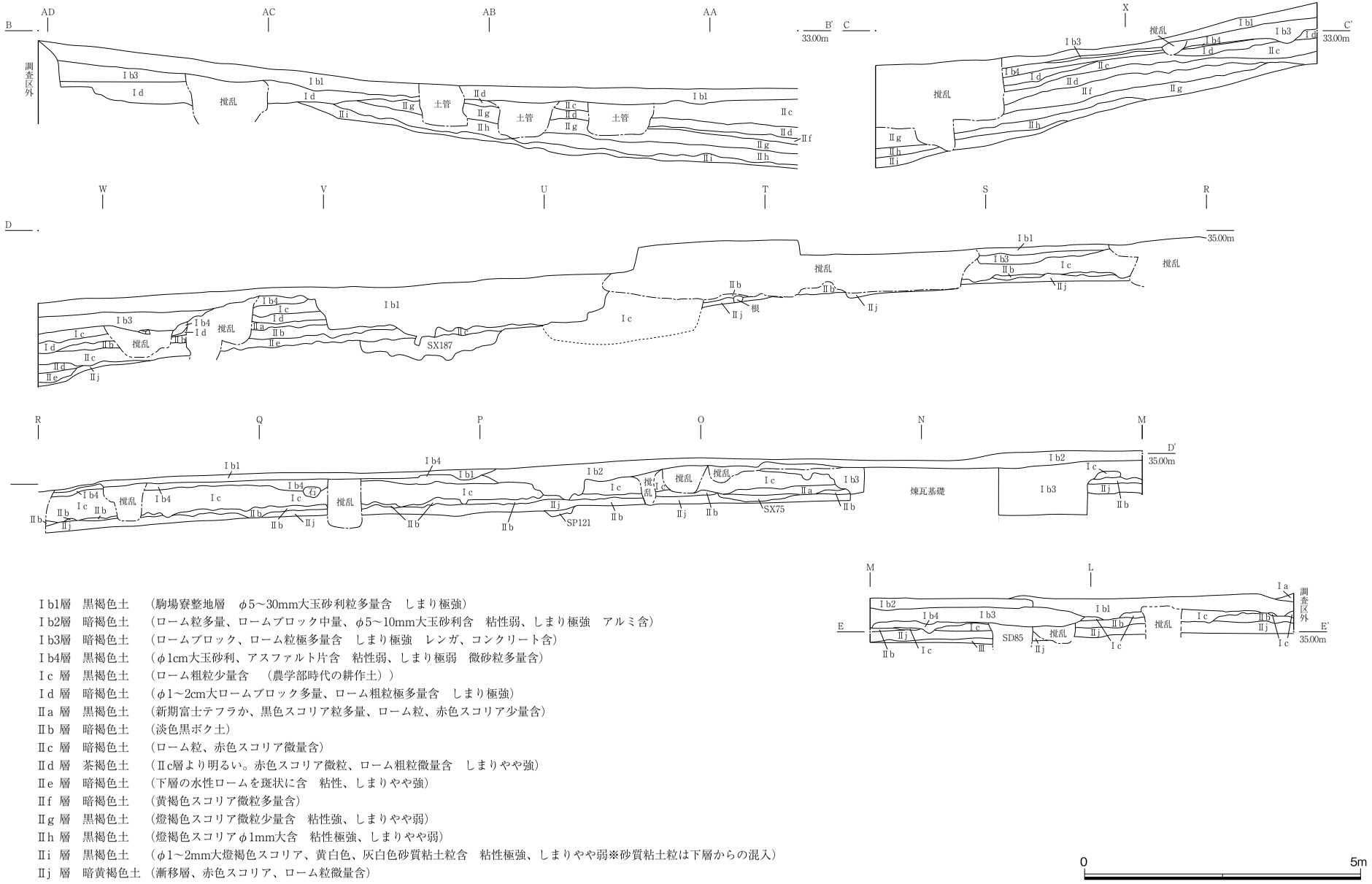
ぼ同様である。南区では、逆に西に向かう傾斜が認められる。これは、図書館地点から続く埋積谷が北西～北方向に向きを変えたため、その谷筋に向かう斜面の現れと位置付けられる。また、南北方向に関しては、南区では、前述した立川ローム層上面での様相と同様に、南向きの傾斜が認められるが、その斜度は台地縁辺に向かい大きく異なっており、その差からローム層を浸食して谷が形成された様子をうかがい知ることができる。北区では、調査区南端から北に向けて緩やかに傾斜しており、南区の状況も併せると、G～Hライン付近に尾根の中心が存在するものと推定される。



Ⅱb層　暗褐色土　（φ10～20mm大の褐～暗黄褐色塊を斑状に含有）
Ⅲ 層　暗黄褐色ローム層（ソフトローム φ1mm大黒色、赤色スコリア微量含 粘性、しまりやや強）
Ⅳa層　暗黄褐色ローム層（φ1mm大赤色スコリア多量、粘性やや強 しまり極強）
Ⅳb層　黄褐色ローム層　（φ1～3mm大黒色スコリア多量、φ1mm大赤色スコリア中量含 粘性やや強 しまり極強）
Ⅴ 層　褐色ローム層　（第1黒色帯 φ1mm大黒色スコリア極多量、φ1mm大赤色スコリア多量、φ1mm大灰褐色スコリア微量含 粘性強。しまり極強）
Ⅵ 層　明褐色ローム層　（AT層 φ0.5～1mm大黒色スコリア極多量、φ1mm大赤色スコリア中量、φ1～2mm大燈色パミス中量、φ1mm大灰褐色スコリア少量含 粘性強 しまり極強）
Ⅶ 層　暗黄褐色ローム層（第2黒色帯上部 明褐色ロームが斑状に混入。φ1mm大黒色スコリア多量、φ1mm大赤色スコリア少量、φ1mm大灰白色スコリア微量含 粘性強 しまり極強）
Ⅸ 層　暗褐色ローム層　（第2黒色帯下部 φ1mm大赤色スコリア、黄色スコリア少量、φ1mm大赤色スコリア微量含 粘性、しまり極強）
Ⅹa層　黄褐色ローム層　（φ1mm大黒色スコリア、φ1mm大燈褐色スコリア少量、φ1mm大赤色パミス微量含 粘性、しまり極強）

0　5m

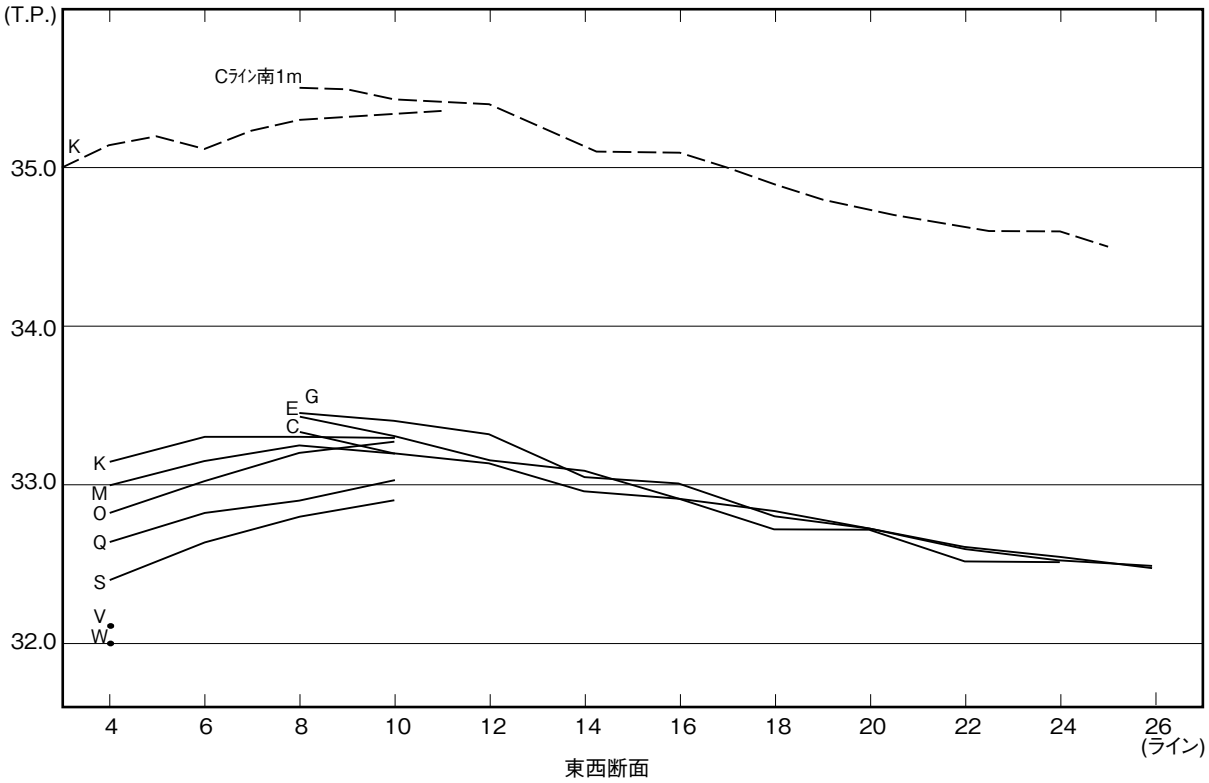
Ⅰ-6図　北区Cライン南1m 東西セクション

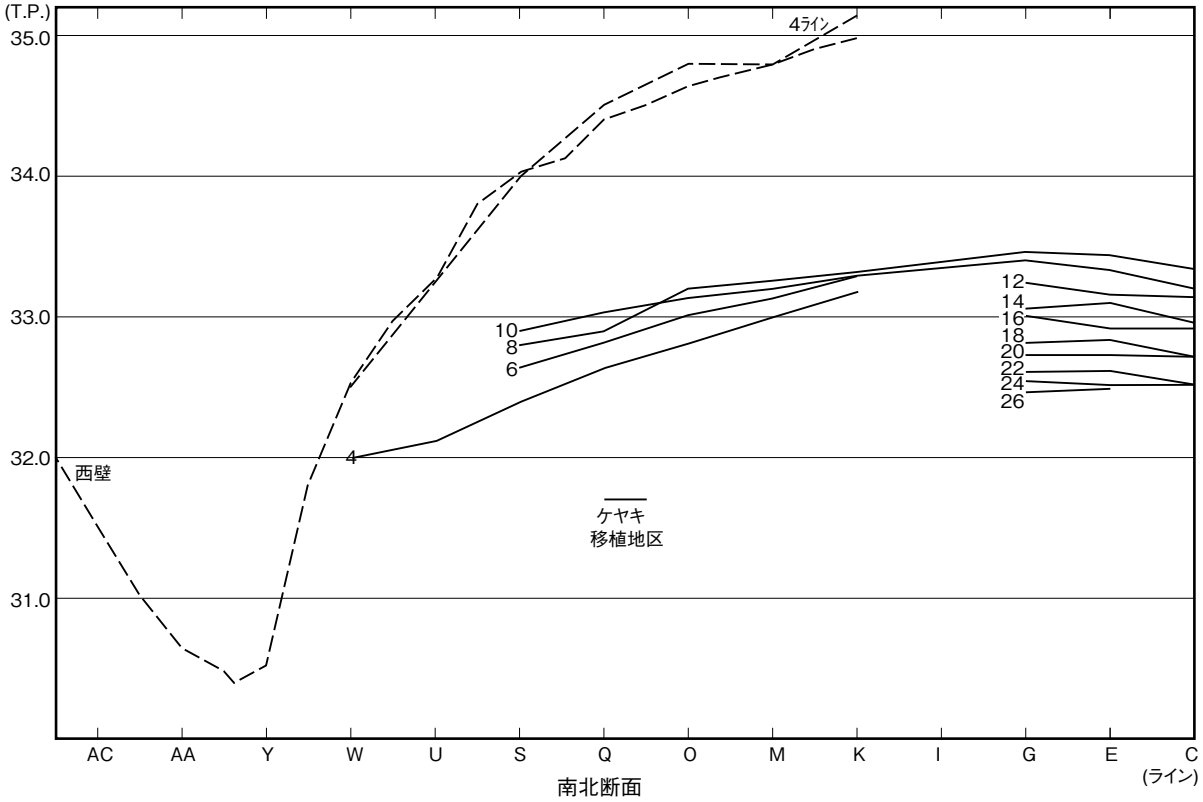


Ⅰb1層　黒褐色土　（駒場寮整地層　φ5～30mm大玉砂利粒多量含　しまり極強）
Ⅰb2層　暗褐色土　（ローム粒多量、ロームブロック中量、φ5～10mm大玉砂利含　粘性弱、しまり極強　アルミ含）
Ⅰb3層　暗褐色土　（ロームブロック、ローム粒極多量含　しまり極強　レンガ、コンクリート含）
Ⅰb4層　黒褐色土　（φ1cm大玉砂利、アスファルト片含　粘性弱、しまり極弱　微砂粒多量含）
Ⅰc 層　黒褐色土　（ローム粗粒少量含　（農学部時代の耕作土））
Ⅰd 層　暗褐色土　（φ1～2cm大ロームブロック多量、ローム粗粒極多量含　しまり極強）
Ⅱa 層　黒褐色土　（新期富士テフラか、黒色スコリア粒多量、ローム粒、赤色スコリア少量含）
Ⅱb 層　暗褐色土　（淡色黒ボク土）
Ⅱc 層　暗褐色土　（ローム粒、赤色スコリア微量含）
Ⅱd 層　茶褐色土　（Ⅱc層より明るい。赤色スコリア微粒、ローム粗粒微量含　しまりやや強）
Ⅱe 層　暗褐色土　（下層の水性ロームを斑状に含　粘性、しまりやや強）
Ⅱf 層　暗褐色土　（黄褐色スコリア微粒多量含）
Ⅱg 層　黒褐色土　（燈褐色スコリア微粒少量含　粘性強、しまりやや弱）
Ⅱh 層　黒褐色土　（燈褐色スコリアφ1mm大含　粘性極強、しまりやや弱）
Ⅱi 層　黒褐色土　（φ1～2mm大燈褐色スコリア、黄白色、灰白色砂質粘土粒含　粘性極強、しまりやや弱※砂質粘土粒は下層からの混入）
Ⅱj 層　暗黄褐色土（漸移層、赤色スコリア、ローム粒微量含）

0　5m

Ⅰ-7図　南区西壁セクション





I-8図　立川ローム層堆積状況 断面模式図

（破線はⅢ層上面、実線はX層上面）

第Ⅱ章　北区の調査

本地区は、Ｄライン南側が旧駒場寮北寮基礎によって大きく破壊されていることから、遺構の調査はＣ～Ｄライン間のみが対象となった。遺構確認面は14ライン以東ではⅡｂ層が遺存していたため、その上下の２面、14ライン以西ではソフトローム上面１面であった。ソフトローム層上面からは、縄文時代に帰属する土坑１基、小穴11基、性格不明遺構２基が検出された。Ⅱｂ層上面からは、建物基礎遺構２基、土坑１基、小穴39基、性格不明遺構９基が検出された。性格不明遺構のうち５基は縄文時代の倒木痕と推定される（Ⅱ－１図）。

旧石器時代の遺物は立川ロームⅤ～Ⅹ層にかけて剥片を中心に47点出土した。出土石器はC12、E16、F12、G12グリッドで立川ロームⅤ～Ⅵ層から、D12、E10、E12、E16、G13、G14グリッドで立川ロームⅦ～Ⅸ層に分布し、各出土層位ともＥ～Ｇライン、即ち北斜面への傾斜変換点内側部分の尾根上に位置している。また、特にＤ・E16グリッド、Ｆ・G13・14グリッドの２箇所に集中し、前者ではⅥ～Ⅶ層にかけて、後者ではⅦ～Ⅸ層にかけて分布している。

第１節　旧石器時代の調査

（1）調査の概要

これまでに埋蔵文化財調査室が実施したキャンパス内調査では、本地点南側に隣接する駒場図書館地点で立川ローム層Ⅳ層中から旧石器時代遺物集中区が検出された（東京大学埋蔵文化財調査室 2011）。その南に展開する谷を挟んだ数理科学研究科Ⅱ期棟地点でも、立川ローム層Ⅳ層中から旧石器時代遺物集中区などが検出されている（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）。また、国際学術交流棟（現､駒場ファカルティーハウス）地点で立川ローム層Ⅸ～Ⅹ層遺物及び炭化物集中区が確認され（東京大学埋蔵文化財調査室 2004）、東京大学駒場構内遺跡では立川ローム上部から最深部まで旧石器時代遺跡の存在が確認されていた。

このような調査事例と地形等を考慮すると、本地点でも旧石器時代の遺構・遺物が存在し、旧石器時代遺跡が形成されている可能性が高いことが予想された。このため、表土掘削の進捗に合わせてテストピット用グリッドを設定し、立川ローム層Ⅲ層からⅩ層までを旧石器時代の試掘調査の対象として調査を実施した。その結果、F･G12グリッドで石器集中区（調査時１号ブロック）１箇所、また、Ｆ・G13・14とＤ・E16グリッドで石器集中区（調査時２・３号ブロック）２箇所とC12グリッドで単独出土剥片（標高33.71ｍで立川ローム層Ⅵ層下部付近か？）が検出された。これらの石器集中区（以下本報告では石器ブロックと表記する）の石器群包含層位は、Ｆ・G12グリッド検出石器ブロックは立川ローム層Ⅴ～Ⅵ層、Ｆ・G13・14とＤ・E16グリッド検出石器ブロックは立川ローム層Ⅶ～Ⅸ層であり、石器群の平面分布と包含層位が明確に異なっている。この立川ローム層Ⅴ～Ⅵ層とⅦ～Ⅸ層に包含された石器ブロックと単独出土石器は､２時期に分かれる石器群と考えられる。以下では、立川ローム層Ⅴ～Ⅵ層石器群を第Ⅰ文化層、立川ローム層Ⅶ～Ⅸ層石器群を第Ⅱ文化層として報告する。

（２）第Ⅰ文化層

概要（Ⅱ－２図）

本文化層の遺構は、調査範囲の南西側Ｆ・G12グリッドで検出した１号ブロックで、出土石器は剥片５点である。本文化層は立川ローム層Ⅴ層下面又はⅥ層上面に認められた小規模な石器ブロック１基からなる。本文化層の石器石材は、チャート・安山岩・頁岩である。

石器ブロックと出土石器

１号ブロック（Ⅱ－３・４図）

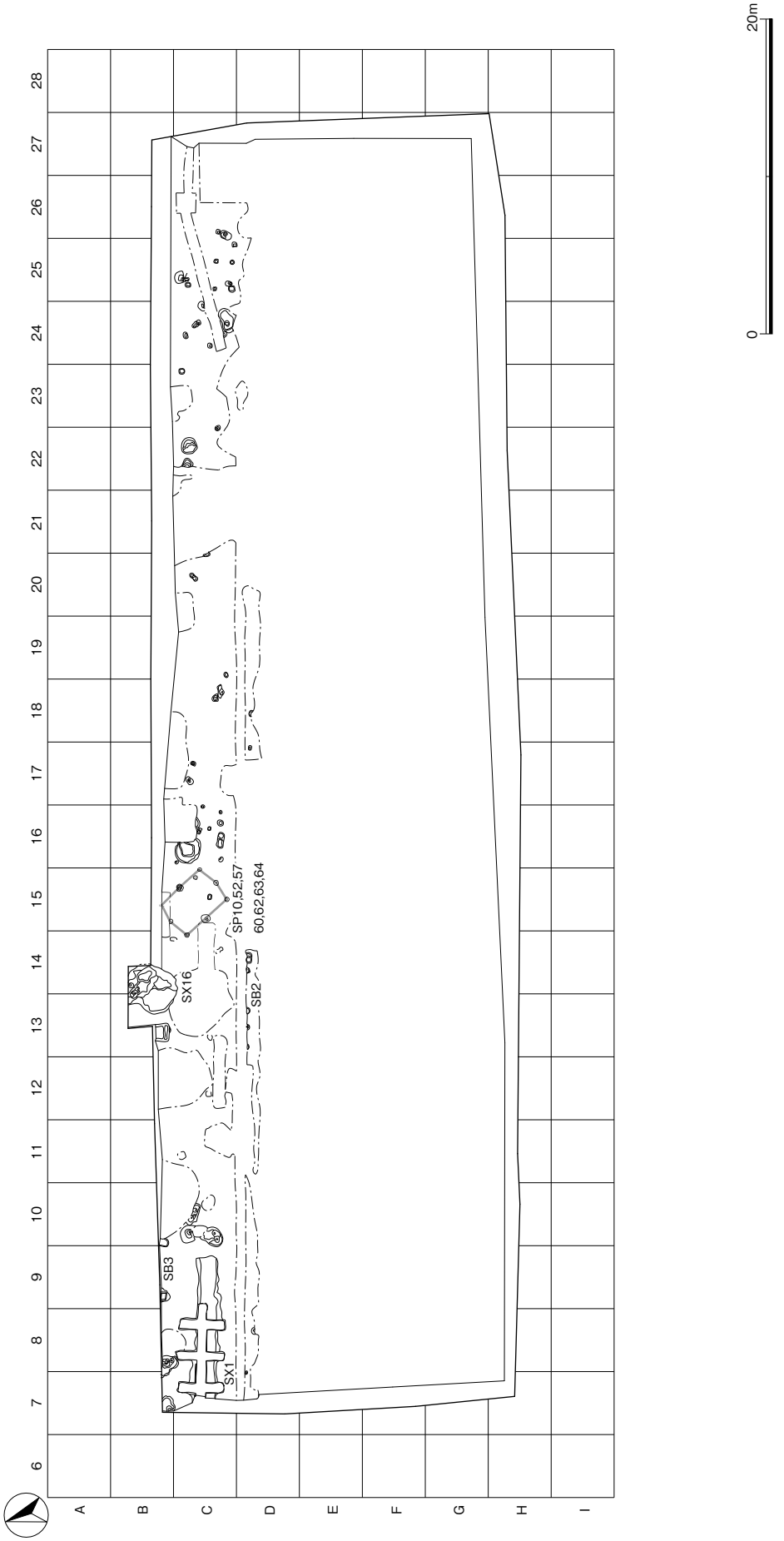
調査範囲南西部F･G12グリッドに位置する。本ブロックを構成する石器は、立川ローム層Ⅴ層下面からⅥ層上部に集中する。構成石器の標高は34.015～33.742ｍで、高低差は約27㎝である。層位的には、立川ローム層Ⅴ層から３点、Ⅵ～Ⅶ層から１点、Ⅶ層から１点出土しⅤ層下面又はⅥ層上面に集中している。

本ブロックは５点の石器が長径6.0ｍ、短径1.6ｍの長楕円形の範囲に散漫に分布している。遺物分布は散漫ではあるが、４点が北東部分に纏まっている。

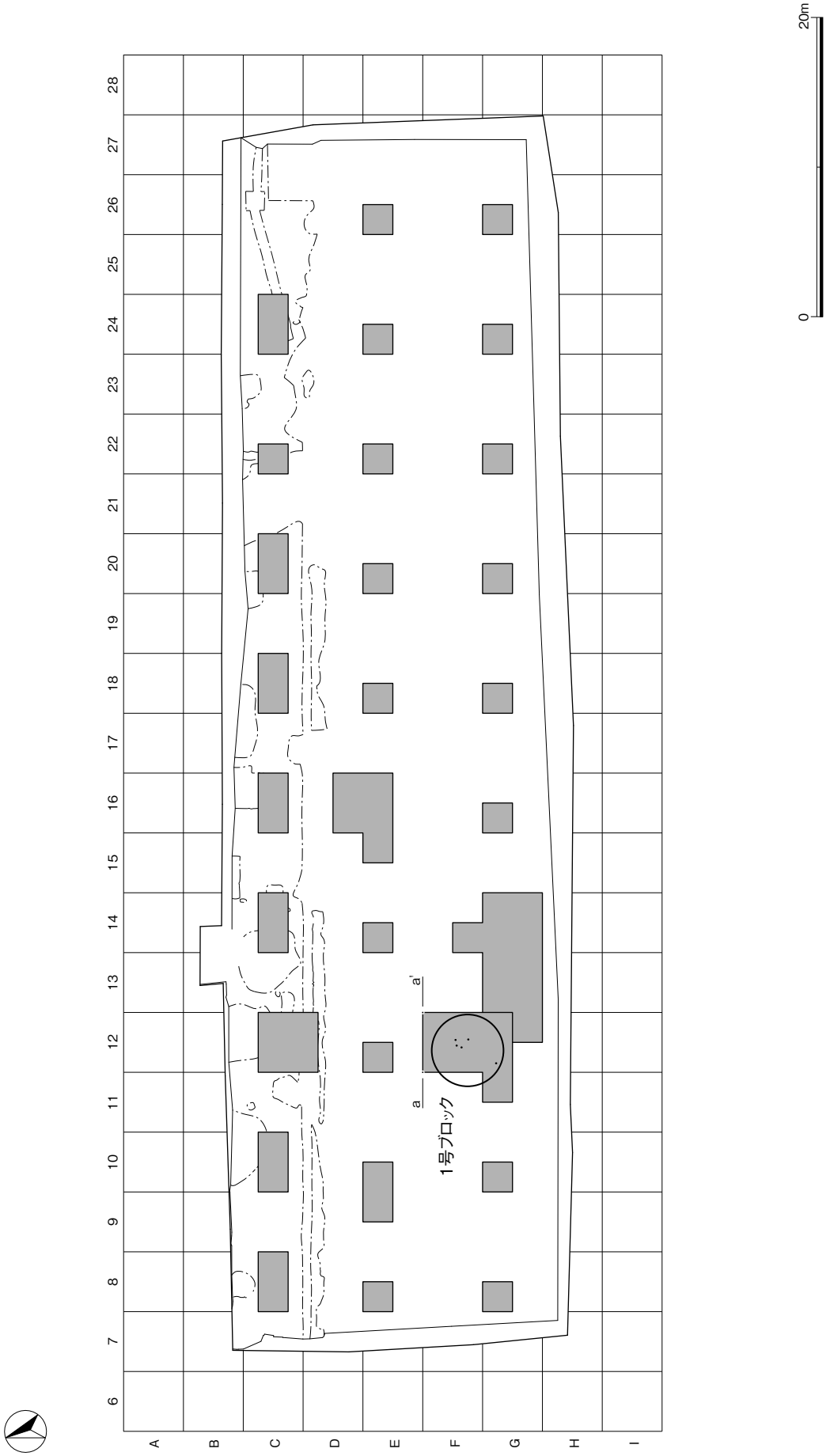
１号ブロック出土石器（Ⅱ－５図）

本ブロックの出土石器は剥片５点である（Ⅴ－１表）。

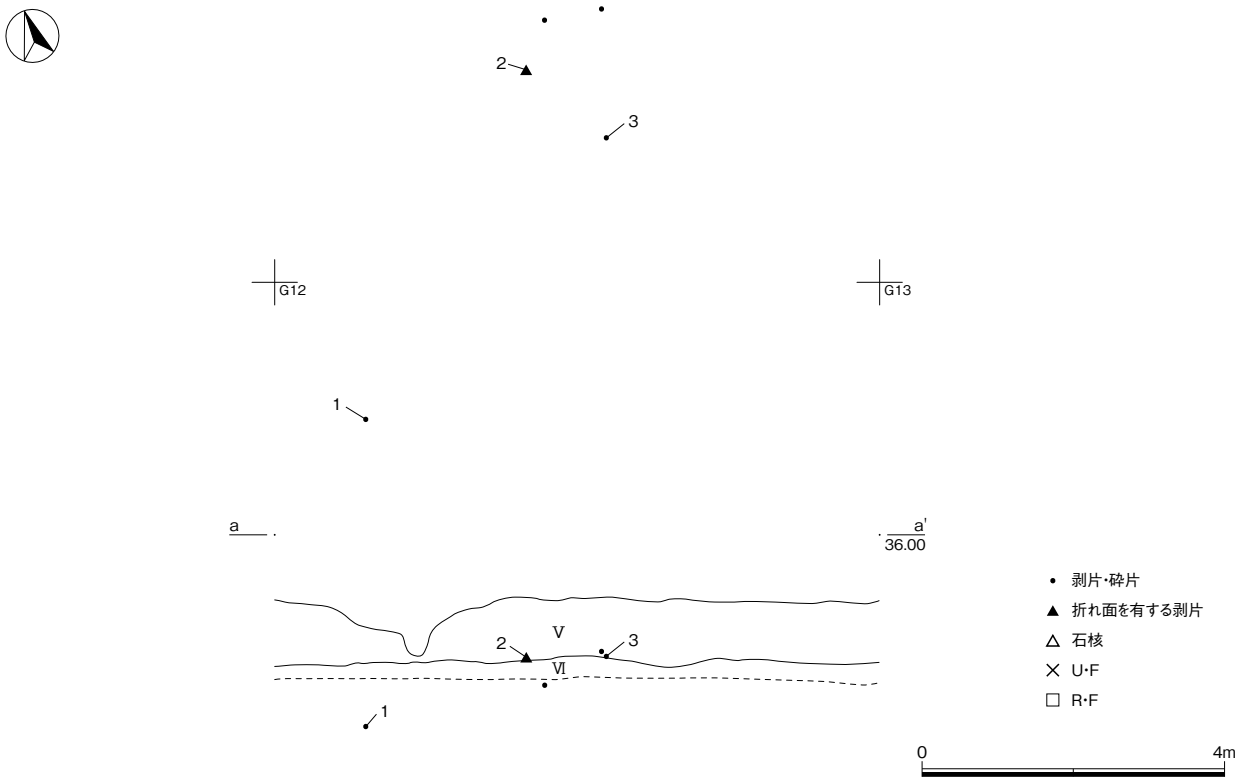
１は右側面に自然面を残す寸詰まりの安山岩製横長剥片である。拳大の石核から同様な横長剥片を連続して剥離している。本剥片は個体別資料安山岩１である。２は打点部が折断された頁岩製縦長剥片である。本剥片は個体別資料チャート４である。３は上部が欠損するチャート製縦長剥片である。右側面にはネガティブバルブがあり、本剥片は節理面に少し打面調整を施して剥片剥離作


A
B
C
D
E
F
G
H
I
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
SX16
SP10,52,57
60,62,63,64
SB2
SB3
SX1
0
20m

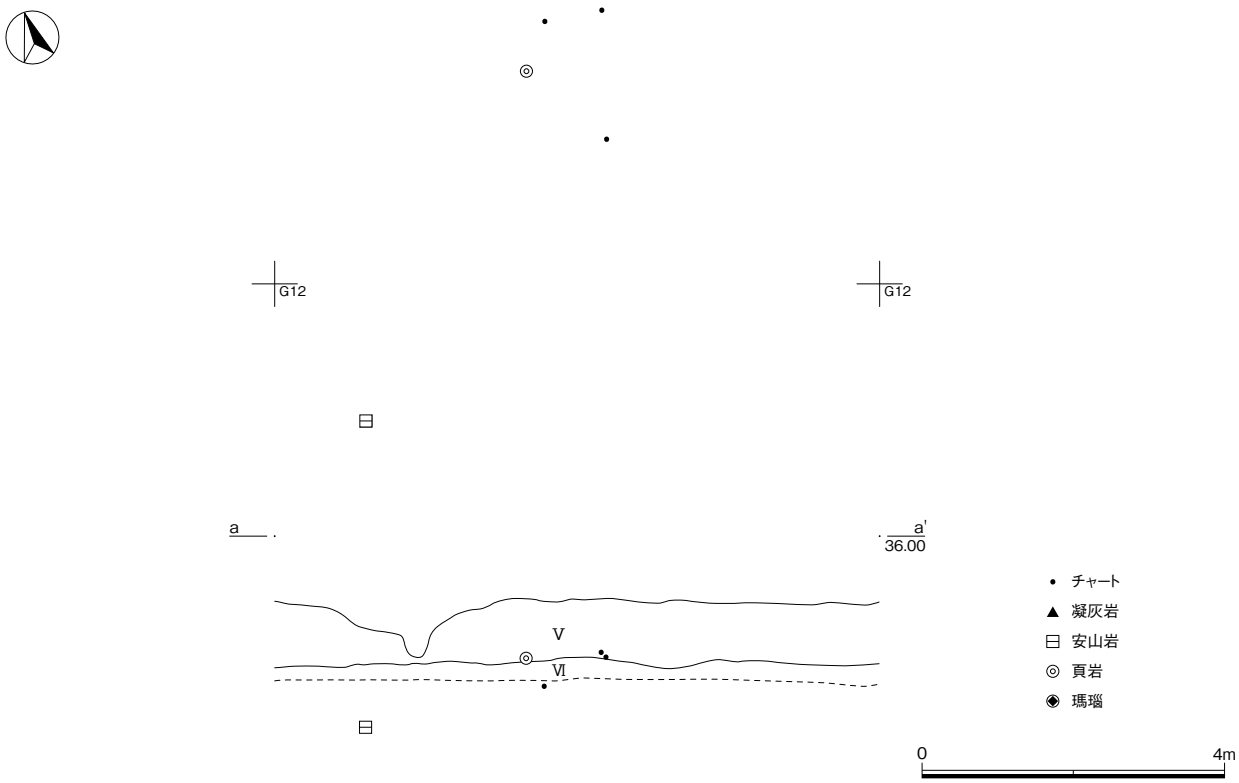
Ⅱ-1図　北区遺構配置図



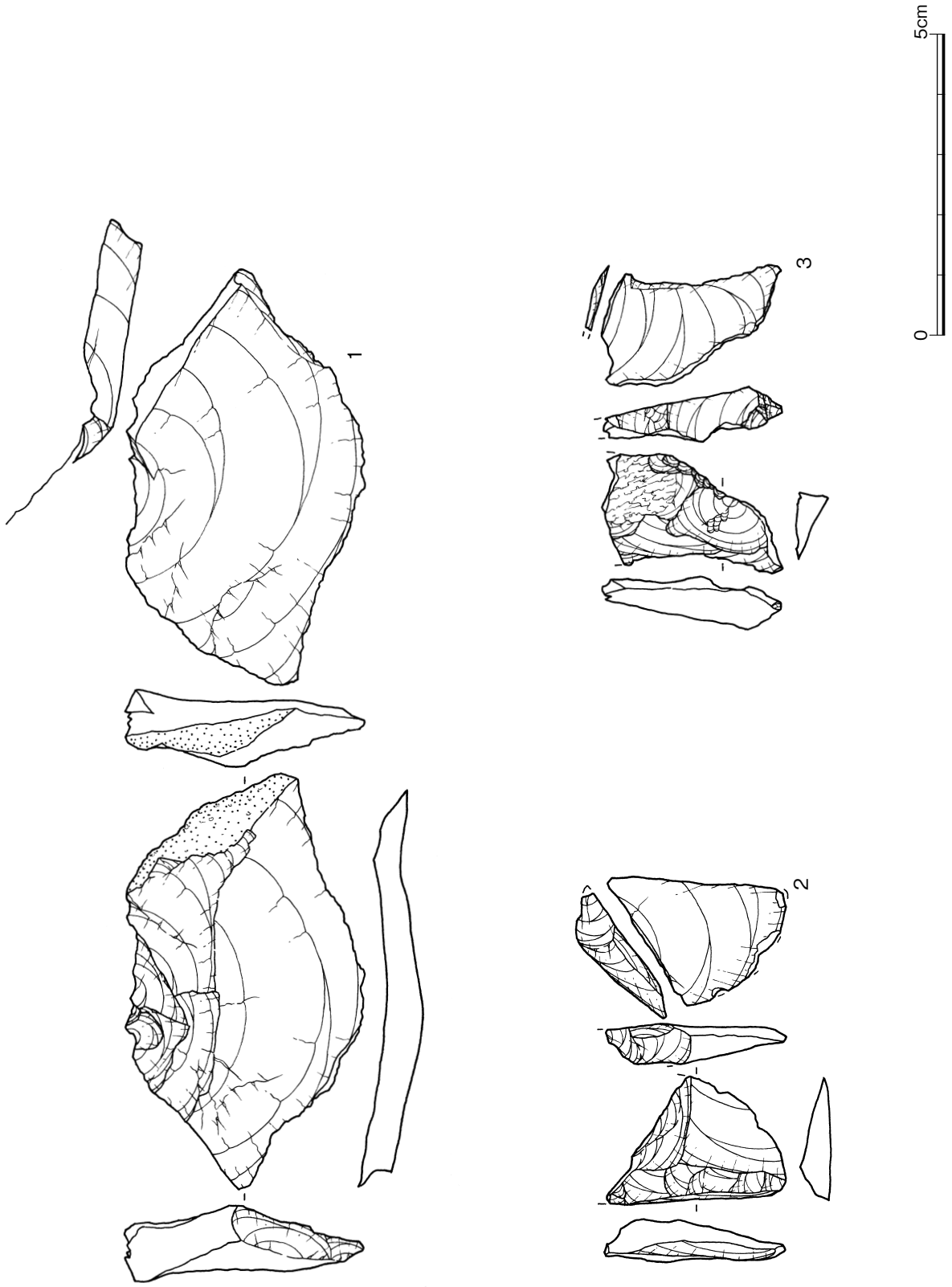
Ⅱ-2図　北区旧石器TP配置・第Ⅰ文化層全体図



Ⅱ-3図　第Ⅰ文化層 1号ブロック器種別出土分布



Ⅱ-4図　第Ⅰ文化層 1号ブロック石材別出土分布



Ⅱ-5 図　第Ⅰ文化層 1 号ブロック出土石器

	ナイフ形石	台形様石器	石斧	掻器	削器	彫器	敲石	磨石	ドリル	ピエス・エスキーユ	R・F	U・F	原石	石刃・折石	剥片	砕片	石核	合計
1号ブロック															5			5
合　計															5			5

Ⅴ-１表　第Ⅰ文化層遺構別器種組成

業を行っていた石核の打面調整剥片である。本剥片は個体別資料頁岩１である。

本文化層の石器群は、剥片表面に認められる先行剥離作業面の観察からは、比較的小さい円礫素材石核から頻繁に打面転位を行いながら小型縦長剥片や打面を左右に動かしながら寸詰まり横長剥片を剥離する石器製作が行われた石器群であると捉えることができる。

本文化層の接合資料と個体別資料の様相（Ⅱ－４図）

出土した５点の石器は、石器石材ではチャート・凝灰岩・頁岩の３種、個体別資料分類では５個体に分類された。石材別個体構成は　チャート２個体（個体別資料チャート２・４）は剥片２点、安山岩１個体（個体別資料安山岩１）は剥片１点、頁岩１個体（個体別資料頁岩１）は剥片１点である。個体別資料チャート２は剥片２点により構成されているが接合資料ではない。そのほかの石器石材は単独個体である。石器接合資料はない。

（３）第Ⅱ文化層

概要（Ⅱ－６図）

本文化層で検出された遺構は、調査範囲の南西部Ｆ・G13・14グリッドで検出した１号ブロック、調査範囲中央部Ｄ・E16グリッドで検出された２号ブロックの石器ブロック２基とC12グリッド単独出土石器である。１号ブロックの北東約５ｍを隔てて、２号ブロックが位置している。C12グリッド単独出土石器は１・２号ブロックより北西約13ｍ離れている。本文化層石器群の出土層位は立川ローム層Ⅵ層上部からⅨ層上部で、出土石器はⅦ層中位に集中する。

出土石器は二次加工痕のある剥片１点、使用痕のある剥片４点、剥片33点、砕片３点、石核１点の計42点である。本文化層石器群の石器石材は、瑪瑙・チャート・ガラス質黒色安山岩・凝灰岩で、チャートが主体となっている。

石器ブロックと出土石器

１号ブロック（Ⅱ－７・８図）

調査範囲の南西部Ｆ・G13～14グリッドに位置する。本ブロックの北東約５ｍには２号ブロックが位置する。本ブロックを構成する石器群の出土層位は、立川ローム層Ⅵ層上部からⅨ層上面である。構成遺物の標高は、34.016～33.414ｍで高低差は約60㎝である。層位別では、立川ローム層Ⅵ層から１点、Ⅶ層から20点、Ⅶ～Ⅸ層から３点出土し、Ⅶ層中位に多くの石器が集中している。石器群の平面分布は、長径10.6ｍ、短径10.4ｍの短楕円形状である。石器平面分布は南に向かい集中度が高くなり、特に南東部に集中する。調査グリッド外の南方向にさらに分布が広がる可能性がある。

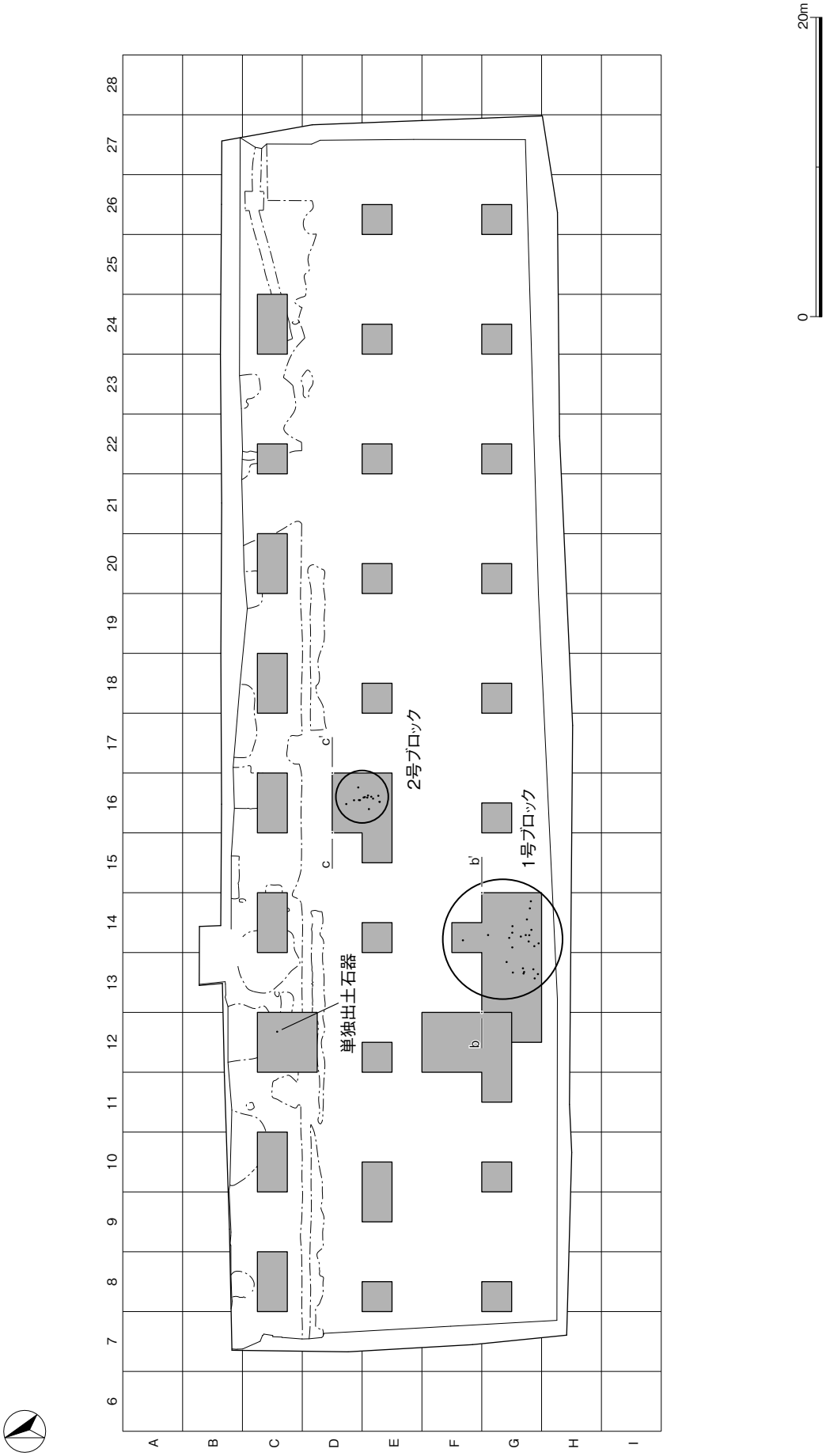
出土石器は、使用痕のある剥片１点、剥片22点、石核１点の合計24点である。この内、使用痕のある剥片１点、剥片５点、石核１点構成する石器石材は、チャート６個体（12点）、凝灰岩４個体（７点）、瑪瑙１個体（１点）、ガラス質黒色安山岩１個体（４点）の12個体で、チャートが主体となる。石器接合資料はチャート製剥片２点の接合が１例（個体別資料チャート９）認められる。

１号ブロック出土石器（Ⅱ－９・10図）

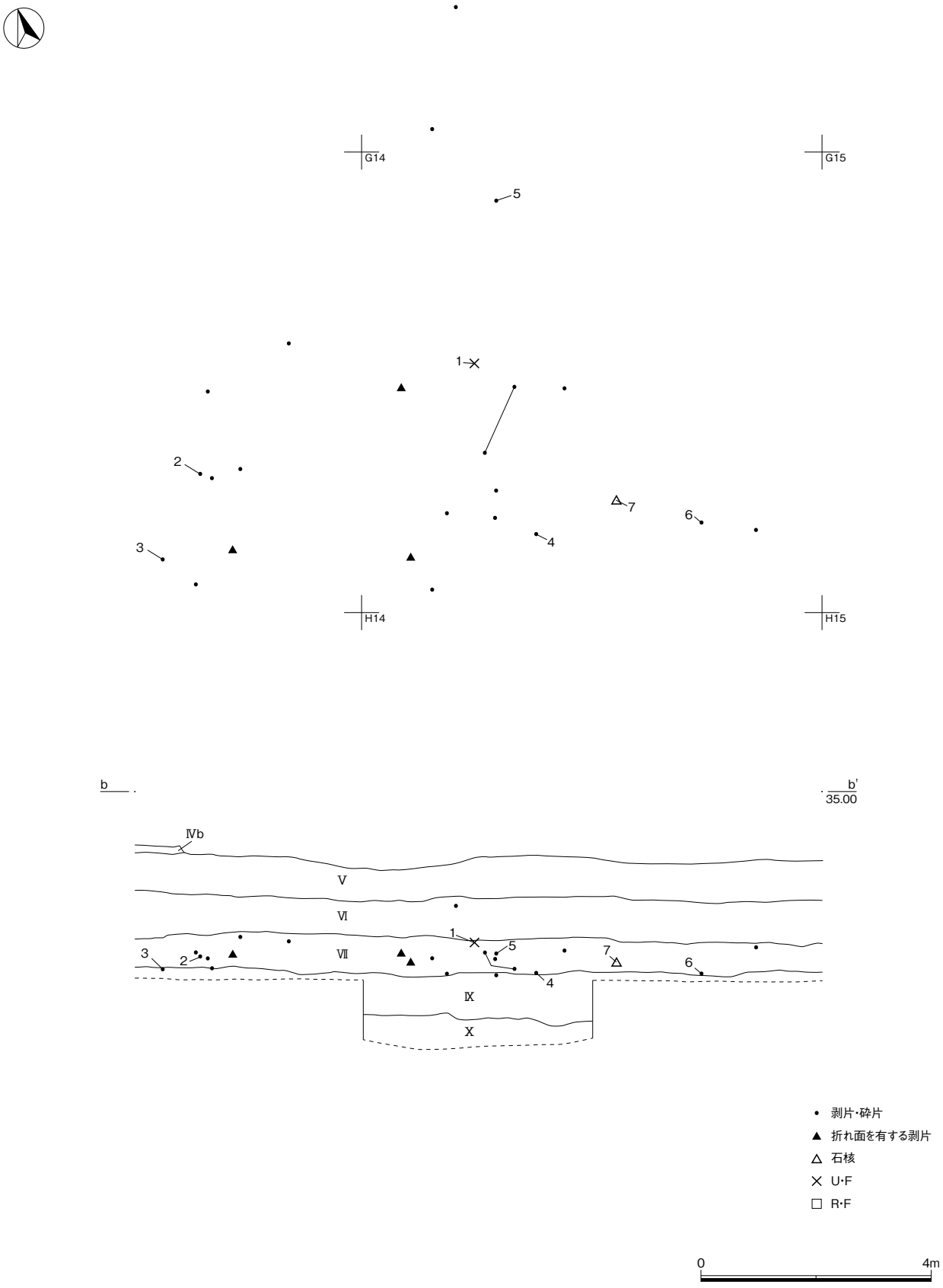
本ブロック出土石器は、使用痕のある剥片１点、剥片22点、石核１点の合計24点である（Ⅴ－２表）。この内７点を図示した。

１はチャート製使用痕のある剥片で下端部に自然面を大きく残す横長剥片を素材とする。右側縁部と下端部表裏面に微細剥離痕が顕著に認められる。個体別資料チャート６である。

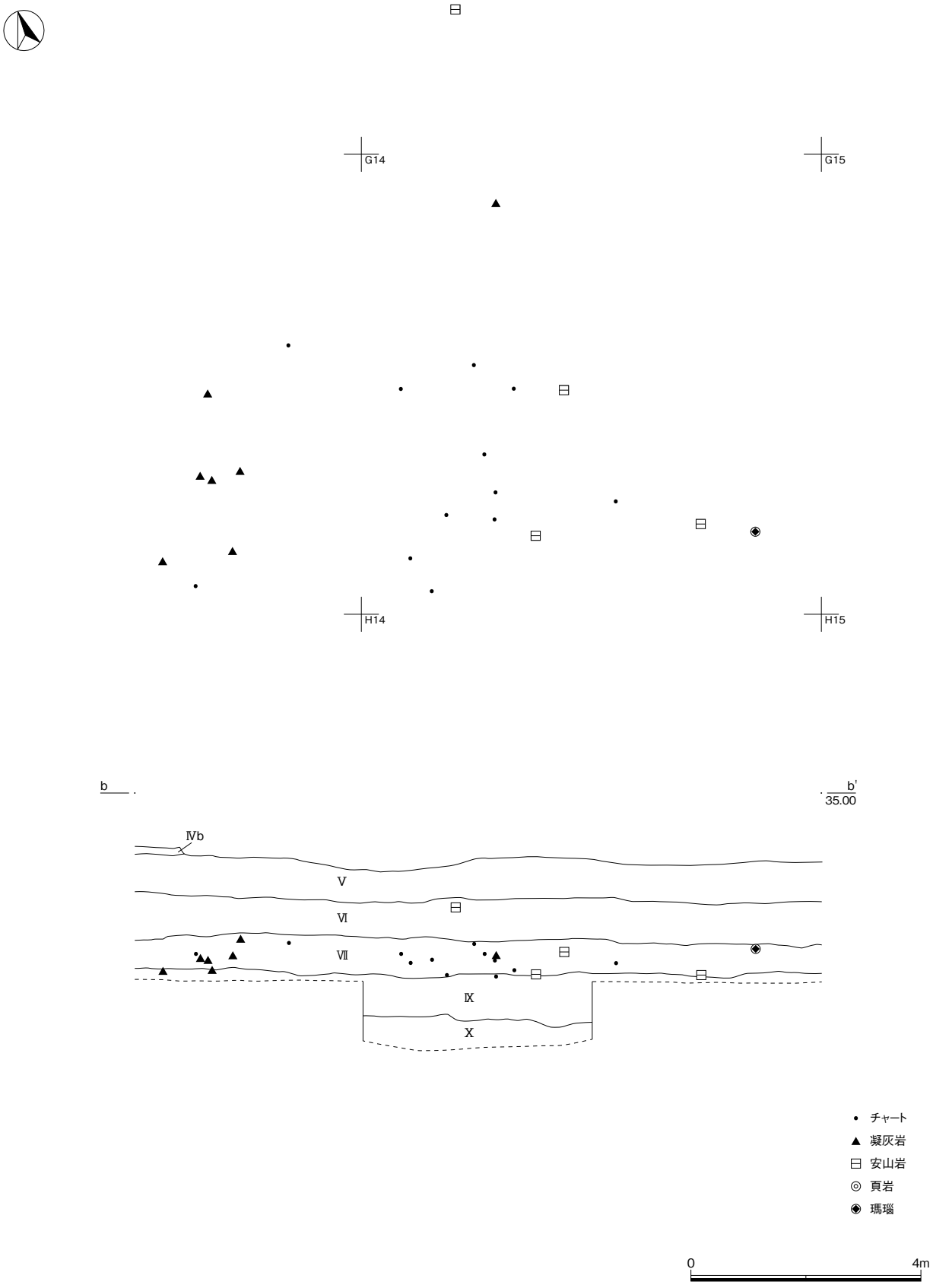
２～６は剥片である。２は凝灰岩製小型石刃状縦長剥片で、左右側縁部と下端部を欠損する。表面の剥片剥離痕から同様な小型縦長剥片が連続して剥離されていることが観察される。個体別資料凝灰岩２である。３はやや厚い寸詰まり凝灰岩製横長剥片で、自然面打面である。本資料の表面作業面観察から、自然面礫面打面から同様



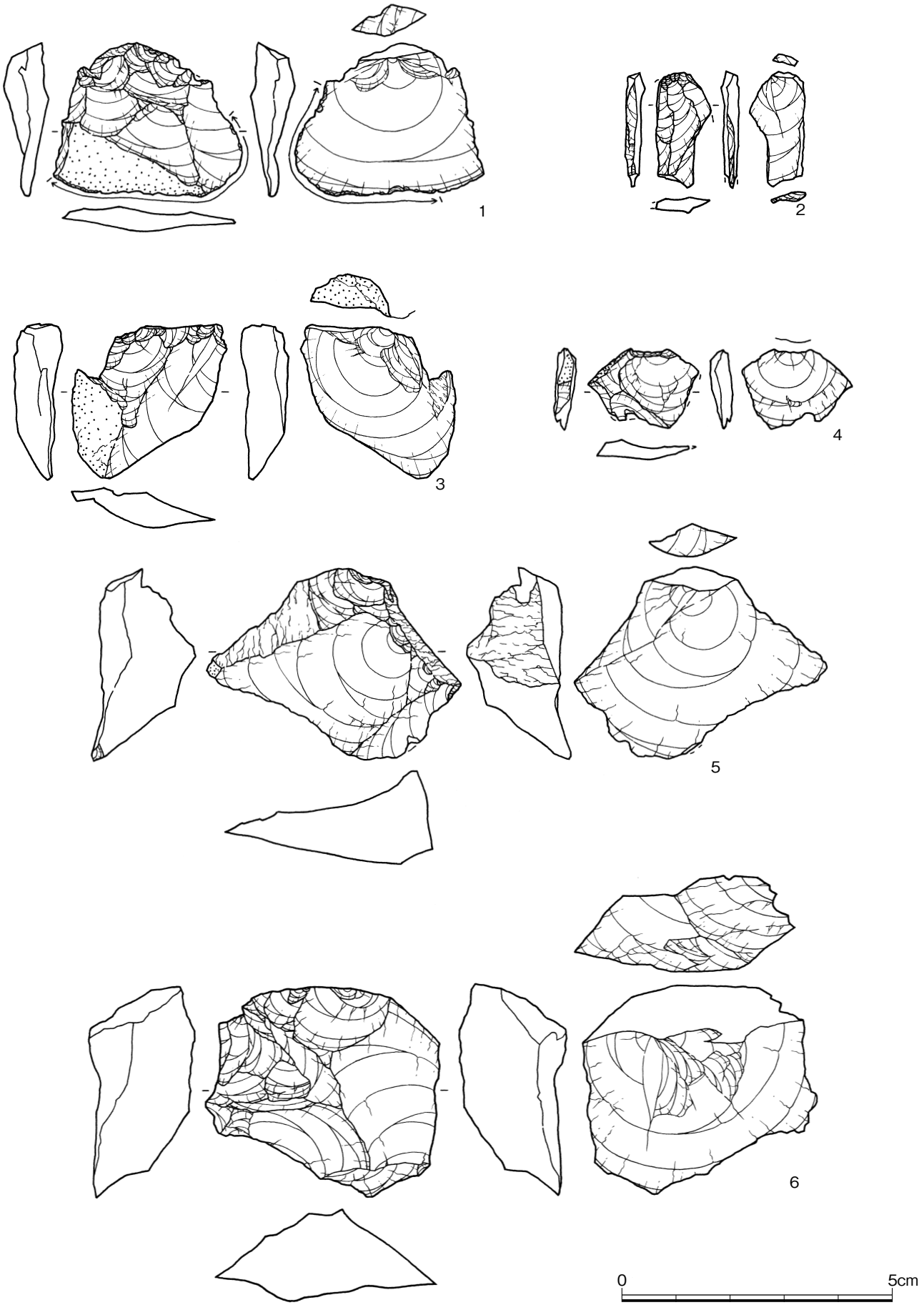
Ⅱ-6図　北区旧石器TP配置・第Ⅱ文化層全体図



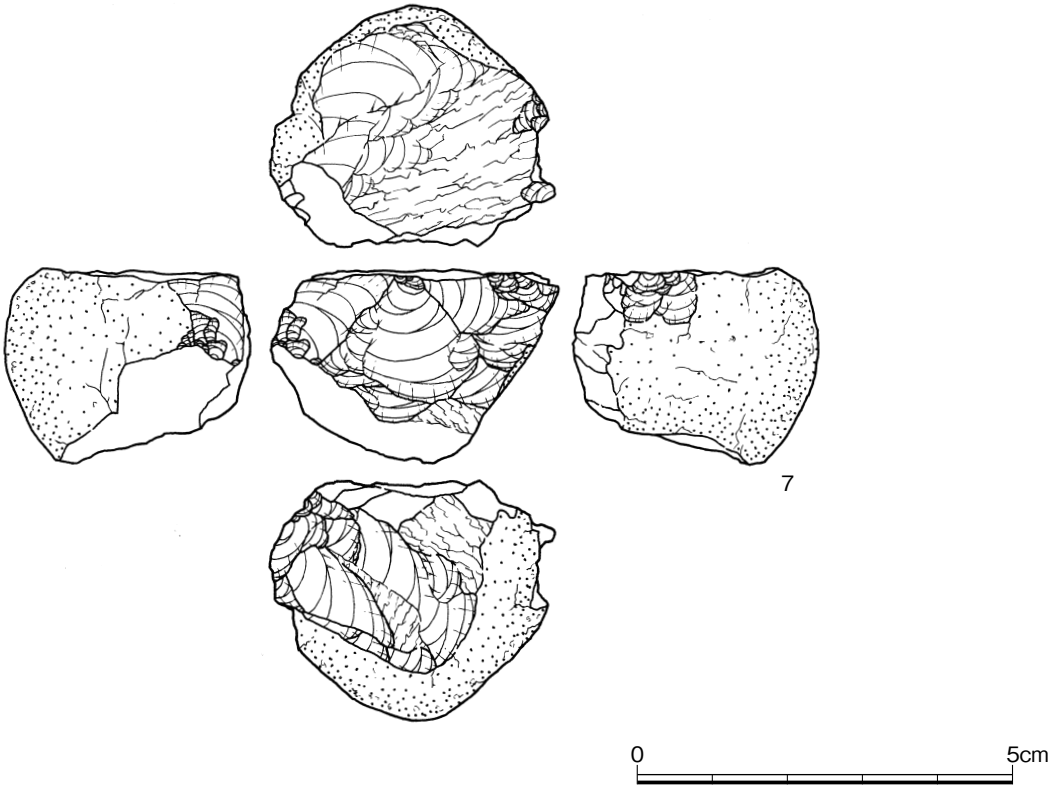
Ⅱ-7図　第Ⅱ文化層 1号ブロック器種別出土分布



Ⅱ-8図　第Ⅱ文化層 1号ブロック石材別出土分布



Ⅱ-9 図　第Ⅱ文化層 1 号ブロック出土石器（1）



Ⅱ-10 図　第Ⅱ文化層１号ブロック出土石器（2）

な横長剥片が連続剥離されていることが観察される。個体別資料凝灰岩１である。４はガラス質黒色安山岩製小型横長剥片で、左側縁部に自然面を残している。右側縁部と下端部をガジリにより欠損する。個体別資料ガラス質黒色安山岩１である。５は厚くゴロッとした凝灰岩製横長剥片で、裏面の先行剥離面から剥離されている。表裏面の周縁部で剥片剥離を連続して行っており、石斧など両面加工石器の調整剥片であろう。個体別資料凝灰岩５である。６は寸詰まりで厚いガラス質黒色安山岩製の横長剥片である。５同様裏面の先行剥離面から剥離され、表裏面の周縁部で剥片剥離を連続して行っている。石材がガラス質黒色安山岩であるが石斧など両面加工石器調整剥片であろう。個体別資料ガラス質黒色安山岩１で剥片４と同一母岩資料である。

７はチャート製石核である。打面の一部、左右側面、裏面、下面に自然面が残る。上下面に設定された単剥離打面または調整打面や先行する剥離作業面を打面として、頻繁に打面転位を行い小型円礫素材の石核から小型剥片を剥離している。個体別資料チャート８で、単独個体である。

２号ブロック（Ⅱ－11・12 図）

調査範囲の南西部Ｆ・G13 ～ 14 グリッドに位置する。本ブロックの南西約５ｍには１号ブロックが位置する。本ブロックを構成する石器群の出土層位は、立川ローム層Ⅵ層上部からⅨ層上面である。構成遺物の標高は、33.123 ～ 33.906 ｍで高低差は約 78 ㎝である。層位別には、立川ローム層Ⅵ層から１点、Ⅶ層から 11 点、Ⅵ～Ⅶ層２点、Ⅸ層３点から出土し、Ⅶ層中位から下部に集中している。

出土石器の平面分布は、長径 4.4 ｍ、短径 3.1 ｍで比較的整った楕円形に集中し、集中範囲の中心部からやや南東寄りに最も石器が集中しているようである。

出土した石器は、二次加工痕のある剥片１点、使用痕のある剥片３点、剥片 10 点、砕片３点の合計 17 点である（本ブロック石器には、E16 グリッド立川ローム層Ⅶ層中で座標値・標高不明出土石器が３点認められる。剥片２点、砕片１点である。個体別資料分類の結果、個体別資料チャート１・３が２号ブロック石器群と同一母岩個体別資料と認められたので、ブロック分布図には表現していないが出土石器・個体別資料の記述中にはこの３点を含めて報告する）。接合資料は、４例認められる。いずれもチャートの個体別資料である。個体別資料は４個体で、チャート３個体（個体別資料チャート１・３・

10)、凝灰岩１個体（個体別資料凝灰岩４）である。

２号ブロック出土石器（Ⅱ－13～15図）

本ブロックの出土石器は､二次加工痕のある剥片１点、使用痕のある剥片３点、剥片10点、砕片３点の合計17点である（Ⅴ－２表)。この内８点を図示した。

８は凝灰岩製二次加工痕のある剥片である。右側縁部に自然面を大きく残す大型でやや厚い縦長剥片で、左側縁部から下端部、上部右側縁部に裏面側から浅い片面調整が施されている。本資料はやや小型ではあるが同様な縦長剥片を連続して剥離する石器製作の存在が推定される。本資料は概期の特徴的石器である石斧製作に関連する資料であり、石斧素材と捉えられる。個体別資料凝灰岩４で、単独個体資料である。

９～11は使用痕のある剥片である。９は下端部に自然面の残るチャート製石刃状縦長剥片である。表面左側縁部中位から下端部に微細剥離痕が顕著に認められる。個体別資料チャート１で、後述する剥片11・13・14と接合する。10はやや幅広で寸詰まりなチャート製縦長剥片を素材とし、表面左側縁部に顕著な微細剥離痕が観察される。右側縁部はガジリ欠損する。個体別資料チャート１である。本資料は後述する剥片５と接合する資料である。11は表面に自然面を大きく残す肉厚でゴロッとしたチャート製横長剥片を素材とし、裏面左側縁部に微細剥離痕が観察される。本資料の個体別資料はチャート１で、９・13・14と接合する。

12～15は剥片である。12は上部を欠損するチャート製縦長剥片で左側面に自然面を大きく残している。個体別資料チャート１で３の使用痕のある剥片と接合する。13は左右側面と表面に自然面を大きく残す肉厚で寸詰まりチャート製横長剥片である。表面には石核頭部調整の小剥離痕が認められる｡個体別資料チャート１で、使用痕のある剥片９・11、剥片14と接合する資料である。14は左側面･下端部を素材剥離時に欠損するチャート製縦長剥片である。表面の剥片剥離作業面の観察から90°打面転位し剥片剥離を行っている。個体別資料チャート１である。使用痕のある剥片９・11、剥片13と接合する資料である。15は表面に自然面を大きく残すチャート製縦長剥片で、左側面をガジリにより欠損する。個体別資料チャート１である。

単独出土石器（Ⅱ－６図）

試掘調査時にC12グリッドに設定した試掘調査範囲の北東寄りで出土した。遺物の出土標高は33.71ｍで層位（台帳未記入）は立川ローム層Ⅶ層上部付近から出土したと推定される。寸詰まりでやや厚い縦長剥片で中位から下端部を欠損する。良質なチャート製個体（個体別資料チャート７）で単独個体である。

本文化層の個体別資料と接合資料の様相（Ⅱ－８･15図）

出土石器は二次加工痕のある剥片１点、使用痕のある剥片４点、剥片33点、砕片３点、石核１点の計42点である。本文化層石器群の石器石材は、瑪瑙・チャート・ガラス質黒色安山岩・凝灰岩の４種で、チャートが主体となっている。これらの石器石材は個体別資料分類の結果、17個体に分類された。石器石材別個体数は、チャート９個体（使用痕のある剥片４点､剥片15点､砕片３点、石核１点)、凝灰岩５個体（二次加工痕のある剥片１点、剥片７点)、ガラス質黒色安山岩２個体（剥片４点)、瑪瑙１個体（剥片１点）である。

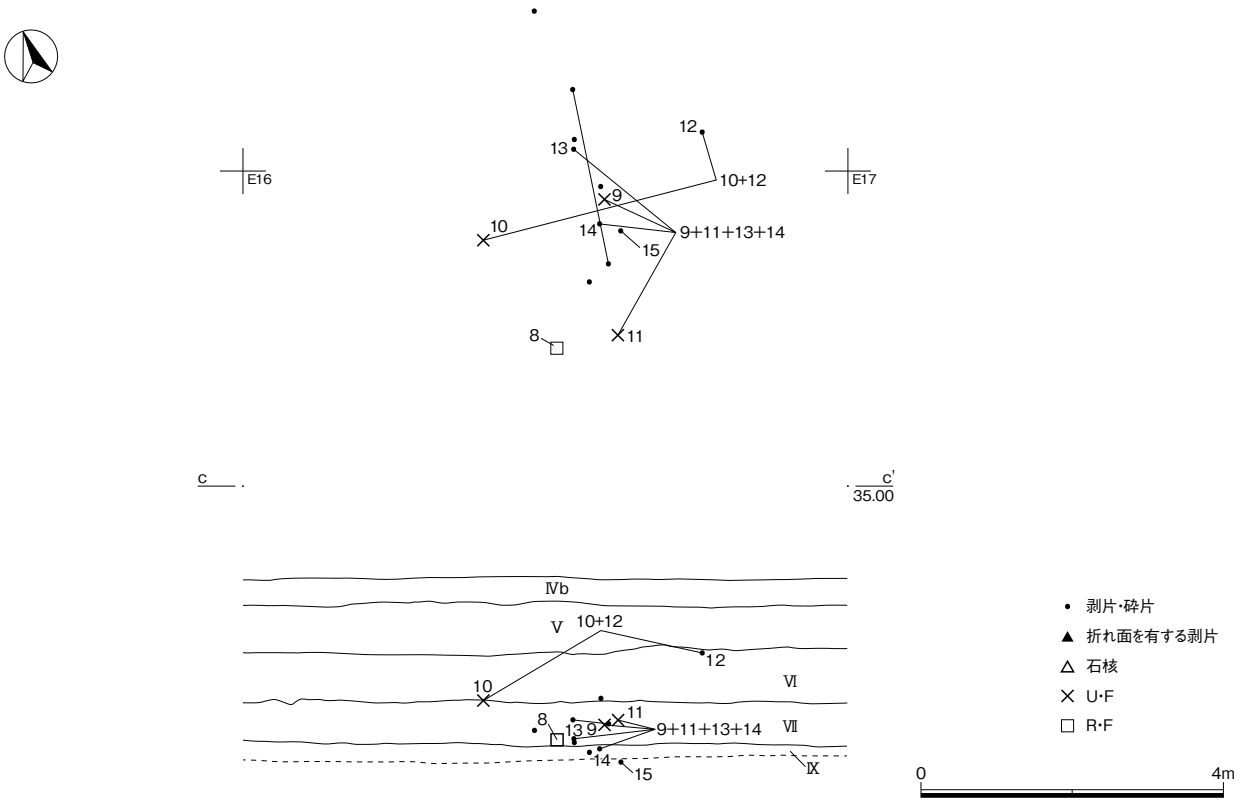
個体別資料

本文化層の個体別資料は、瑪瑙の個体別資料（個体別資料瑪瑙１）は１個体で、１号ブロック出土剥片１点のみであり、単独個体である。

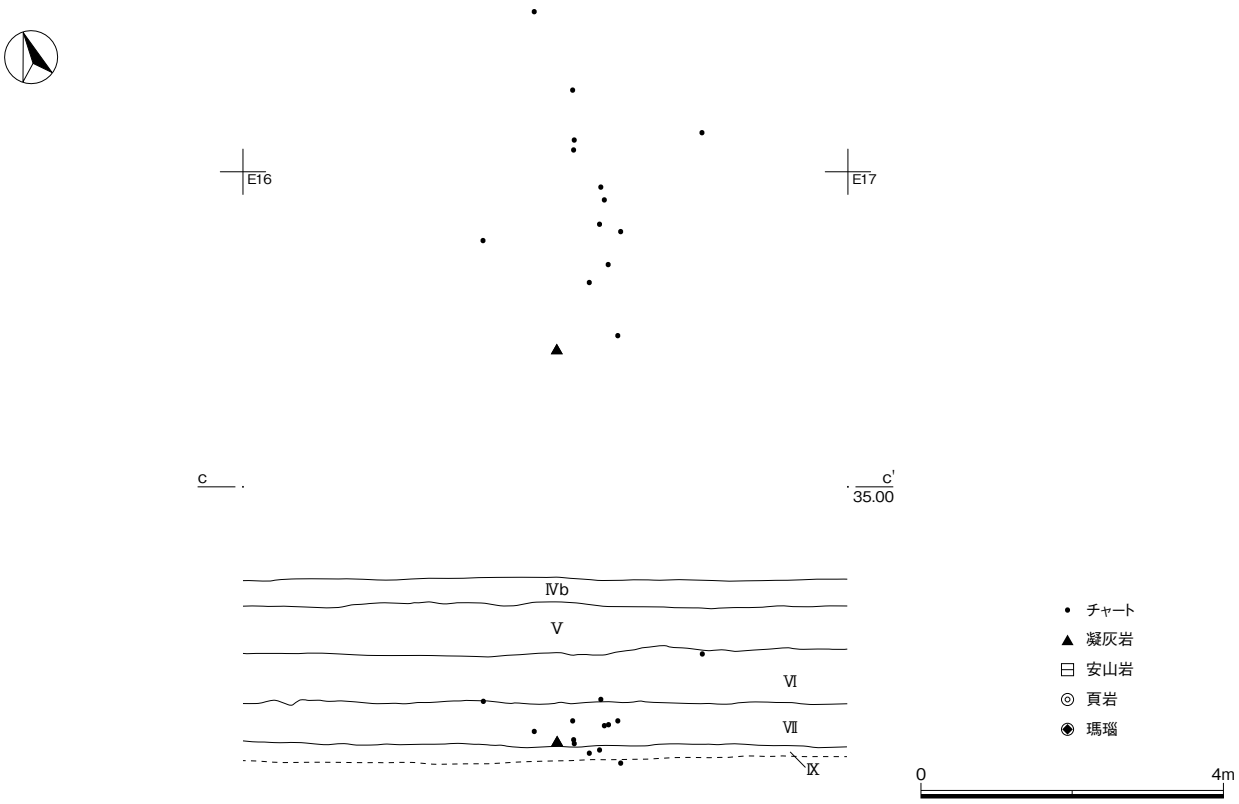
チャートの個体別資料（チャート１・３・５～11）は９個体であり、本文化層の主要個体である。各個体別資料の内容と遺跡内分布状況は、個体別資料チャート１

	ナイフ形石	台形様石器	石斧	掻器	削器	彫器	敲石	磨石	ドリル	ピエス・エスキーユ	R・F	U・F	原石	石刃・折石	剥片	砕片	石核	合計
１号ブロック												1			22		1	24
２号ブロック											1	3			10	3		17
単独出土															1			1
合　　計											1	4			33	3	1	42

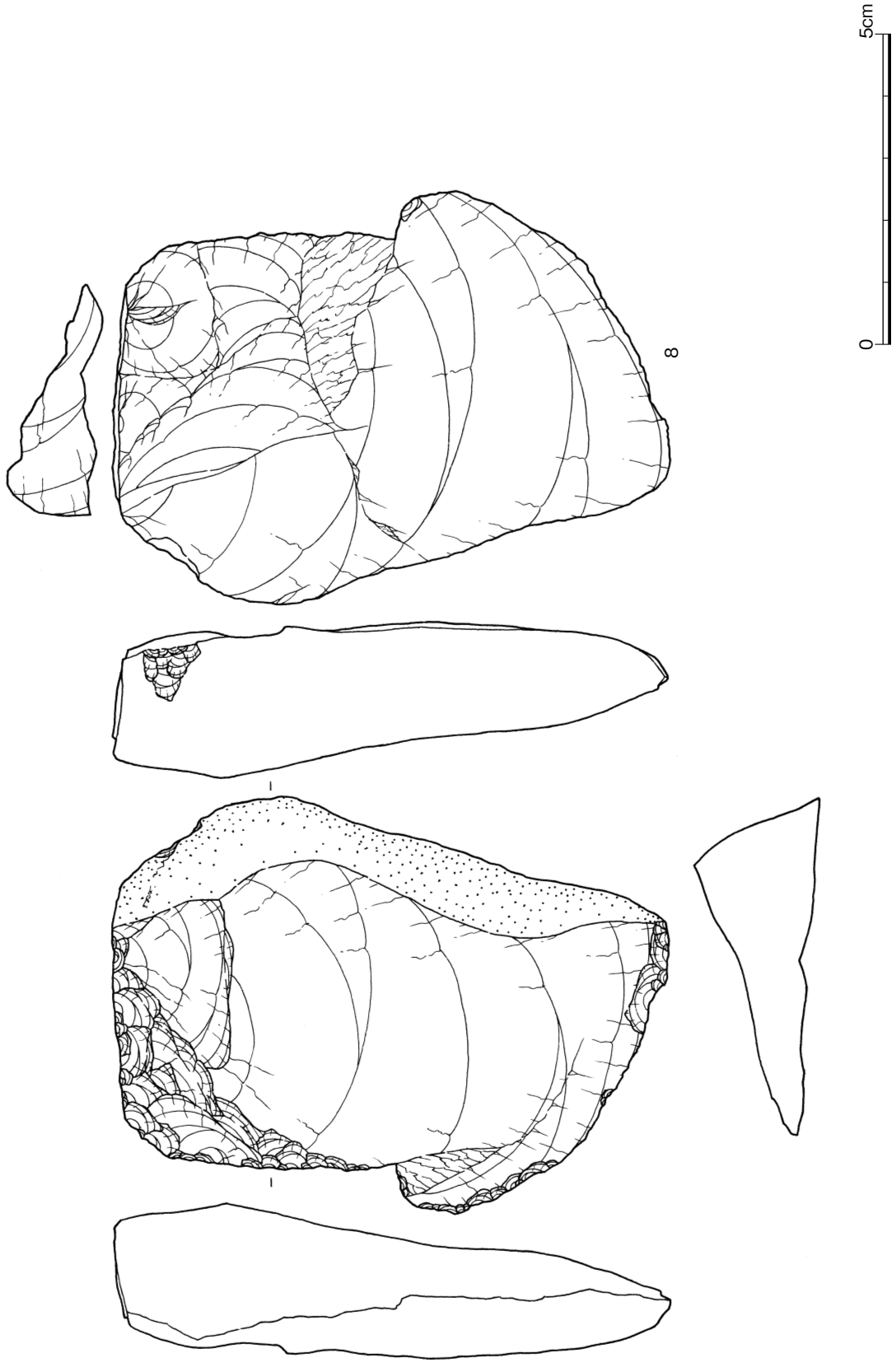
Ⅴ-２表　第Ⅱ文化層遺構別器種組成



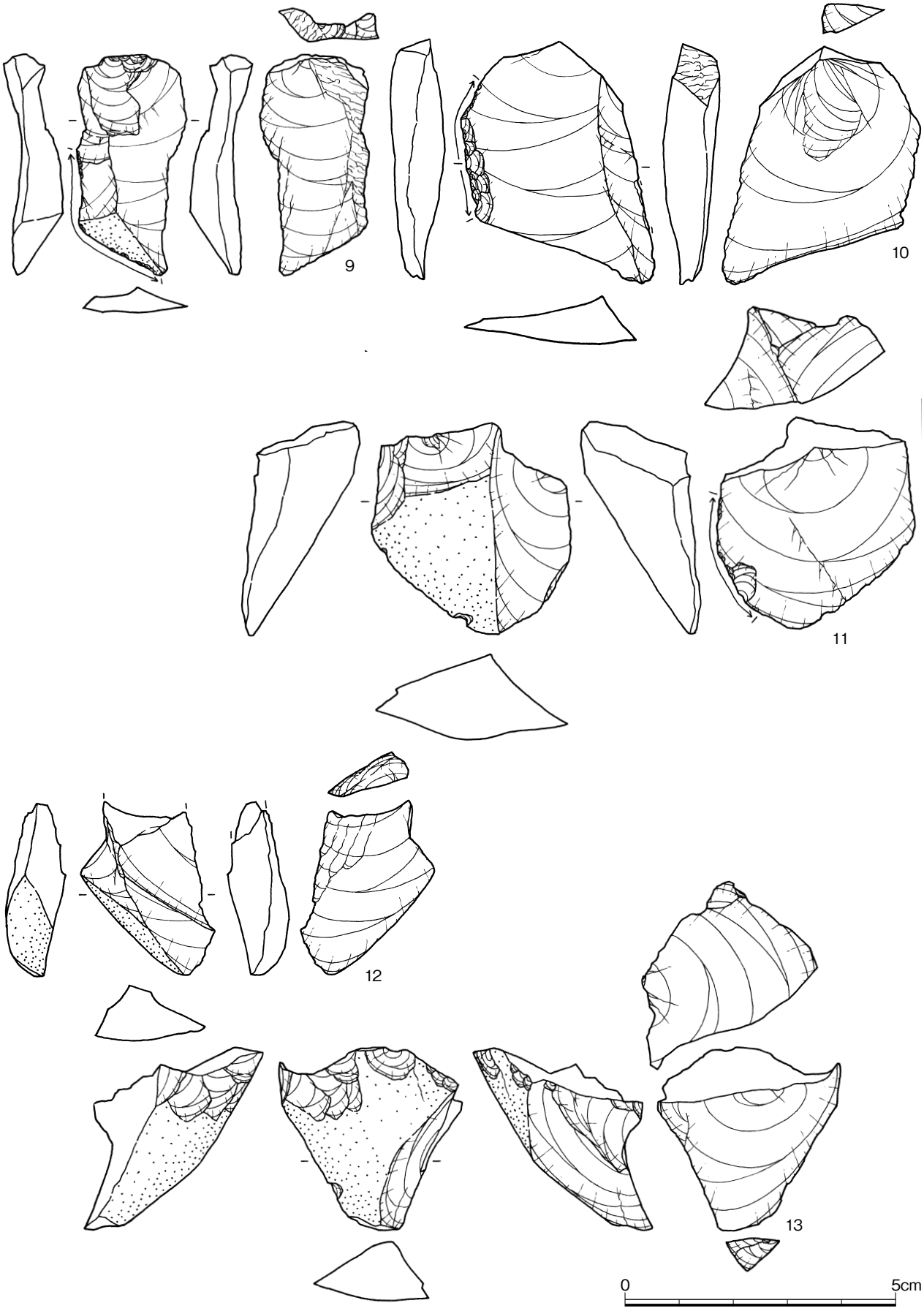
Ⅱ-11図　第Ⅱ文化層 2号ブロック器種別出土分布



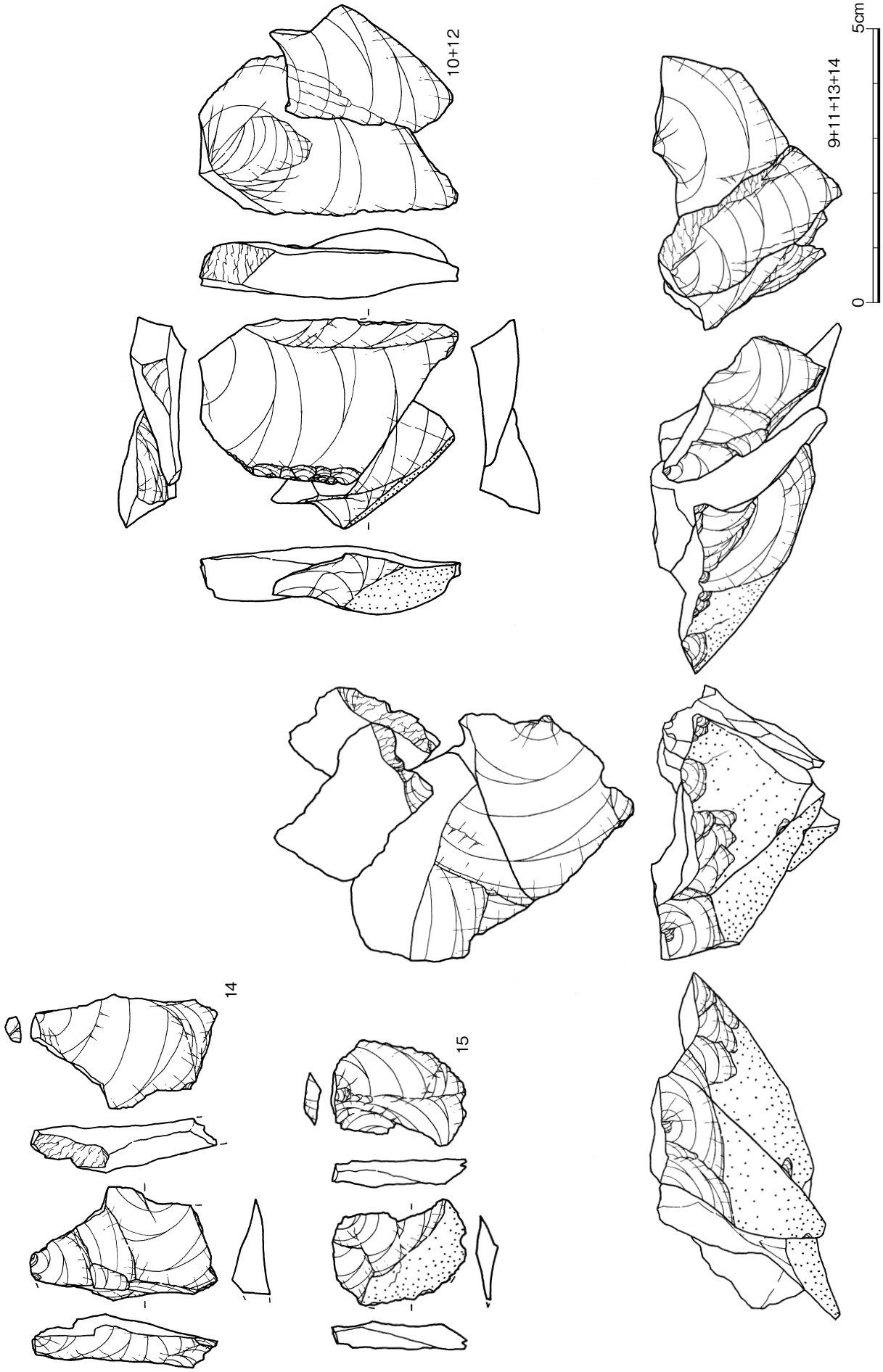
Ⅱ-12図　第Ⅱ文化層 2号ブロック石材別出土分布



Ⅱ-13図　第Ⅱ文化層２号ブロック出土石器（1）



Ⅱ-14 図　第Ⅱ文化層 2 号ブロック出土石器（2）



Ⅱ-15図　第Ⅱ文化層２号ブロック出土石器（3）

は本文化層で主体となって消費された個体別資料であり、使用痕のある剥片３点、剥片６点、砕片１点の10点からなる。２号ブロックのみの資料である。接合資料は２例認められる。使用痕のある剥片２点と剥片２点（接合資料４）と使用痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料３である。個体別資料チャート３は剥片３点、砕片１点の資料で２号ブロックのみの資料である。剥片２点の接合資料が１例（接合資料１）認められる。個体別資料チャート５は２号ブロックから出土した剥片３点と砕片１点の個体別資料で、剥片２点の接合資料１例（接合資料１）が含まれる。個体別資料チャート６は、１号ブロックから出土した使用痕のある剥片１点の単独個体別資料である。個体別資料チャート７はC12グリッドで検出された剥片の単独出土石器であり、単独個体である。個体別資料チャート８は１号ブロックで検出された石核１点の単独個体別資料である。石核は本資料１点のみ出土した。個体別資料チャート９は１号ブロック出土の剥片５点の個体別資料で、剥片２点の接合資料が１例（接合資料２）認められる。個体別資料チャート10は剥片２点、砕片１点の個体である。本資料は１・２号ブロック間で唯一の共有個体別資料である。１号ブロック剥片１点、２号ブロックには剥片１点と砕片１点が含まれている。２号ブロックの剥片１点と砕片１点は接合資料５である。個体別資料チャート11は剥片３点の資料で、すべて１号ブロックに含まれている。

ガラス質黒色安山岩は２個体確認された。個体別資料ガラス質安山岩１は剥片３点からなるが、接合資料は認められない。石斧調整剥片が含まれる。個体別資料ガラス質黒色安山岩２は剥片１点で単独個体資料ある。いずれも１号ブロックから出土した。

凝灰岩の個体別資料は５個体確認された。個体別資料凝灰岩１は１号ブロック出土剥片１点の単独個体である。個体別資料凝灰岩２は１号ブロック出土剥片１点の個体別資料である。個体別資料凝灰岩３は１号ブロックから出土した剥片３点の個体別資料である。個体別資料凝灰岩４は２号ブロックから出土した二次加工痕のある剥片１点で単独個体資料である。本資料は石斧未製品である。個体別資料凝灰岩５は１号ブロック出土剥片２点の個体別資料である。石斧調整剥片が含まれている。

接合資料

本文化層で確認された接合資料は５例で、すべて個体別資料チャート１である。チャートは本文化層で主体となり消費された石器石材である。５例の接合資料は、１号ブロックでは、剥片２点の接合資料２（個体別資料チャート９）が１例、２ブロック内では、剥片２点の接合資料１（個体別資料チャート３）、使用痕のある剥片２点と剥片２点の接合資料４、使用痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料３（個体別資料チャート１）、剥片２点の接合資料５（個体別資料チャート10）がある。個体別資料とブロック間での共用関係は、分類された個体別資料17種内ではチャート個体別資料１例（個体別資料チャート10・剥片２点）である。ブロック間での接合資料共有関係は認められない。図示した個体別資料チャート１の２例である。Ⅱ－14図の使用痕のある剥片10と剥片12の接合資料は円礫素材石核から幅広な縦長剥片を連続して剥離している。このような縦長剥片や石刃状剥片を連続して剥離している。一方、9・11・13・14の使用痕のある剥片２点と剥片２点の接合資料は、縦長剥片とともに横長剥片も連続剥離している。

本文化層接合資料と１号ブロック石核８の剥片剥離作業面の状況から確認される剥片剥離は、小型円礫素材石核や、やや大きい円礫素材を分割して石核として、打面転位を頻繁に繰り返して石刃状縦長剥片や寸詰まりな横長剥片などを剥離している。それらに二次加工を施して定形的石器の素材とすることなく、必要状況に応じてそれらをそのまま使用した作業を行っている。

	ナイフ形石	台形様石器	石斧	掻器	削器	彫器	敲石	磨石	ドリル	ピエス・エスキーユ	R・F	U・F	原石	石刃・折石	剥片	砕片	石核	合計
第Ⅰ文化層															5			5
第Ⅱ文化層											1	4			33	3	1	42
合　　計											1	4			38	3	1	47

Ⅴ-３表　文化層別器種組成

（4）まとめ

今回調査では、立川ローム層Ⅴ層下面又はⅥ層上面で第Ⅰ文化層（石器ブロック１基、出土石器剥片５点）、立川ローム層Ⅶ層下部で第Ⅱ文化層（石器ブロック２基・単独出土石器１、二次加工痕のある剥片１点、使用痕のある剥片４点、剥片33点、砕片３点、石核１点の計42点）を検出した（Ⅴ－３表）。いずれも、定形的石器を組成しない石器群であり、ブロック規模・構成など小規模な石器群からなる。

第Ⅰ文化層は層位的に武蔵野Ⅱ期（諏訪間・野口・島立　2010）に比定される石器群である。石器石材はチャート・安山岩・頁岩である。武蔵野Ⅱ期石器群は、ナイフ形石器に彫器・掻器・削器の共伴する石器群であり、石斧が伴う場合もあるとされる。第Ⅰ文化層の石器群は、チャートを石器石材とした、小型縦長剥片や寸詰まり横長剥片を保有する石器群であると捉えることができる。本来これらの剥片を素材とした小型ナイフ形石器を保有する石器群と推定されるが、ナイフ形石器ほかの定形的石器を組成していない。該期は大規模石器製作を行う石器群のほかに、第Ⅰ文化層のようなナイフ形石器や定形的な石器を保有しないし石器製作痕跡希少な小規模石器群による遺跡形成も特徴とされ、第Ⅰ文化層石器群もそのような石器群と捉えられる。

第Ⅱ文化層は層位的に武蔵野Ⅰ期後半（諏訪間・野口・島立　2010）の石器群である。石器石材は、瑪瑙・チャート・ガラス質黒色安山岩・凝灰岩でチャートが主体である。石器ブロック以外に検出されず、礫群は検出されていない。武蔵野Ⅰ期後半の石器群は、ナイフ形石器、石刃、石斧からなる石器群であり、遺跡は台地の中・上流域では規模の大きな遺跡が形成され、特に在地系石材の原産地周辺では拠点的遺跡が形成されて集中的大規模な石器製作が行われ、環状ブロック群が形成される時期である。石器群の特徴も、凝灰岩や黒色頁岩を用いた石刃による大型ナイフ形石器とともに第Ⅱ文化層で用いられているようなチャートや安山岩などの石器石材を多用する非石刃系小型のナイフ形石器が特徴的に認められる。第Ⅱ文化層の石器群には、石斧未製品と推定される二次加工痕のある剥片を含んでいる。第Ⅱ文化層の石器群も第Ⅰ文化層同様、剥片表面に認められる先行剥離作業面の観察からは、チャートなどを主要な石器石材として、比較的小さい円礫素材石核から頻繁に打面転位を行いながら小型縦長剥片や寸詰まり横長剥片を剥離する石器製作が行われた石器群であると捉えることができる。

第Ⅱ文化層の石器群も非石刃を素材とした小型ナイフ形石器を主体とする石器群であると捉えられるが、検出された石器ブロック内にはナイフ形石器ほか定形石器は組成していないが、使用痕のある剥片と接合資料の存在が認められ、小型縦長剥片や寸詰まり剥片を剥離しそれらを加工することなく用いた作業を行った石器群と捉えられよう。第Ⅱ文化層石器群も第Ⅰ文化層同様、第Ⅱ文化層のようなナイフ形石器など定形的な石器を保有しないし小規模石器群による遺跡と捉えられる。

今回検出した文化層は、層位的に立川ローム層ＡＴ降灰前の最寒冷期に武蔵野台地南縁部に形成された活動痕跡であると捉らえられる。このような遺跡は、本遺跡を含む東京低地を望む武蔵野台地南縁部に形成される遺跡であり、河川中・上流域の在地石材原産地に隣接する拠点的遺跡に比べ、遺構や石器群構成の小規模な遺跡が点在して形成されている。これらは中・上流に形成される遺跡から東京低地を望む武蔵野台地南縁部に小規模な集団が展開し衛星的に点々と活動した結果であろうと捉えられよう。

第２節　縄文時代以降の調査

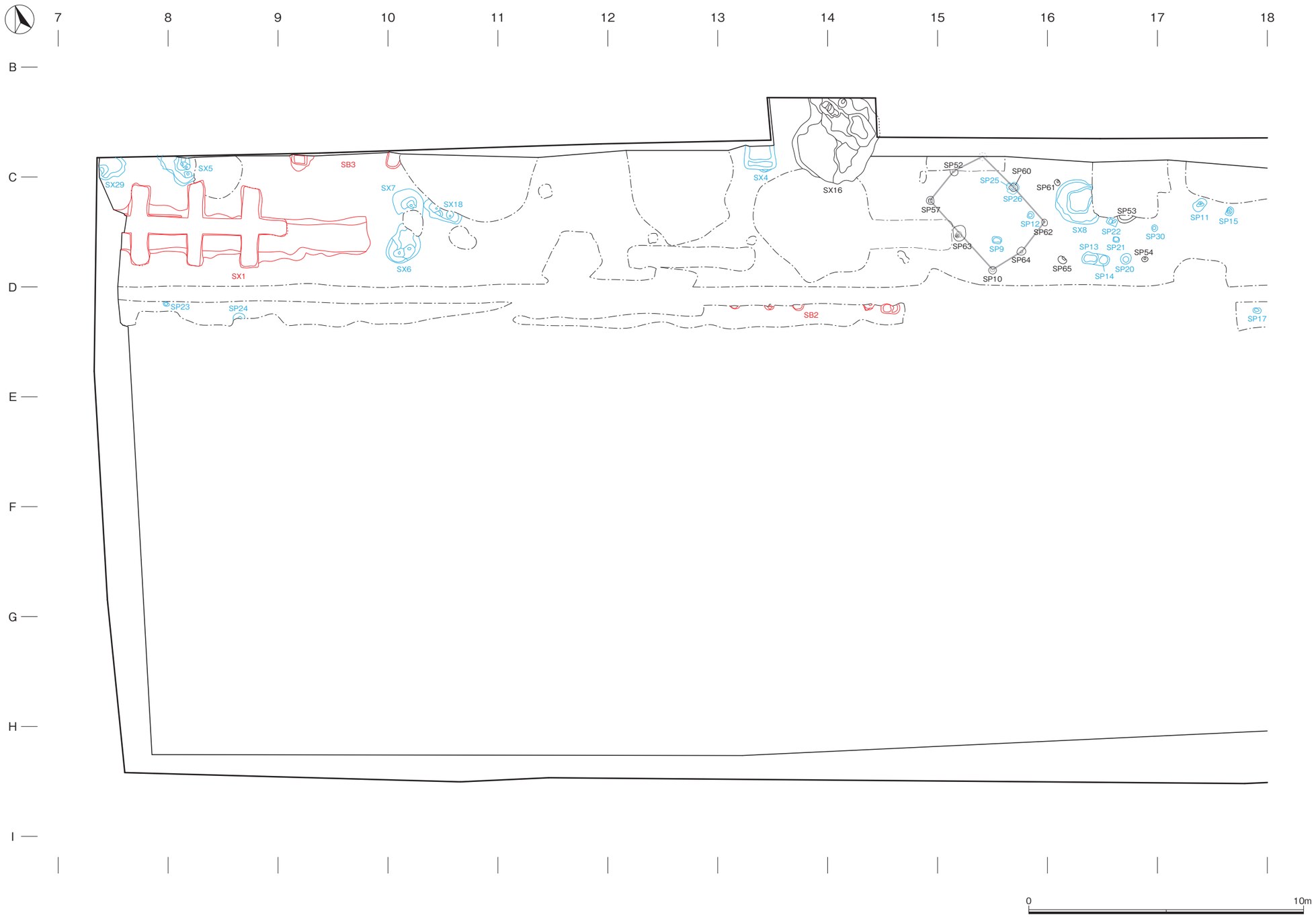
（1）調査の概要（Ⅱ－16、17図）

本地区は前述したとおり、Ｄライン南側が旧駒場寮北寮基礎によって大きく破壊されていることから、遺構の調査はＣ～Ｄライン間のみが対象となった。遺構確認面は14ライン以東ではⅡｂ層が遺存していたため、その上下の２面、14ライン以西ではソフトローム上面の１面であった。検出された遺構は近現代、縄文時代に帰属する。ソフトローム層上面からは、縄文時代と推定されるピット、倒木痕などの遺構が十数基検出された。ピットはC15～16グリッドに集中し、そのうちSP10、SP52、SP57、SP60、SP62、SP63、SP64の７基が長方形に分布しており、同一遺構の可能性が高い。

（2）Ⅱｂ層を覆土とする遺構

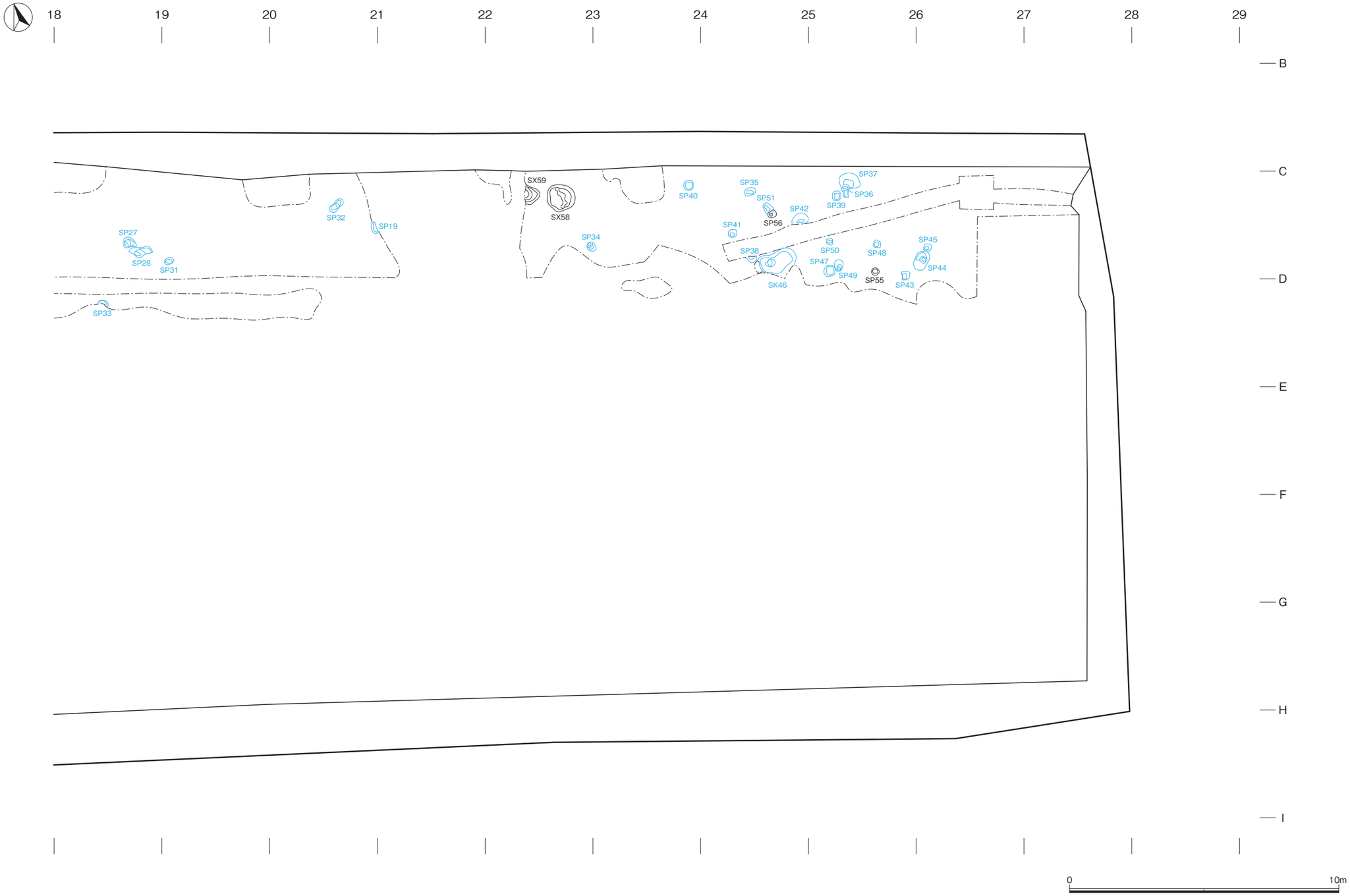
SP10・SP52・SP57・SP60・SP62・SP63・SP64（Ⅱ－18図）

C14・15グリッドに分布するピット群である。ソフトローム層上面より検出された。いずれも平面形は不整円形、断面形は砲弾状を呈す。壁は緩やかに開いて立ち上がり、確認面からの深さは40～50cmを測る。平面規模はSP63を除き、ほぼ直径20～30cmを測る。覆土はローム粗粒、スコリアを含む褐色土～暗褐色土を基調とする。SP60の覆土中位壁際からチャート製の剥片が２点出土している。これらのピット群は、位置関係から北側撹乱内に１基存在したことが推定され、総計８基による長方形を呈するピット列である。短軸中央のSP52、



Ⅱ-16図　北区遺構全体図(1)

(黒色:Ⅲ層上面検出遺構、青色:Ⅱ層上面検出遺構、赤色:近現代遺構)



Ⅱ-17図　北区遺構全体図(2)
(黒色:Ⅲ層上面検出遺構、青色:Ⅱ層上面検出遺構)

SP64がやや外側へ張り出し、規模は長辺340～385cm、短辺260～270cmを測る胴張り長方形を呈すると推定される。本遺構上のⅡb層は、比較的遺物密度が高く、関連性が考えられる。

SX16（Ⅱ－19図）

B・C13・14グリッドに位置する遺構である。ソフトローム層上面より検出された。北側は調査区外へ伸びる。平面形は不整形を呈し、調査区内での最大値は長軸330cm、短軸282cm、確認面からの深さ最大90cmを測る。覆土はロームブロック、ローム粒を含む暗黄褐色土を基調とするが、４層の暗褐色土が東壁沿いにU字状に巡り、暗黄褐色土１、３層下に入り込む状況、相対的に東から西方向への堆積状況が看取されることから、東側へ倒れた倒木痕と推定される。遺物は出土していない。

SK53（Ⅱ－20図）

C16グリッドに位置する遺構で、北側を撹乱されている。ソフトローム層上面より検出された。残存部での平面形は、不整円形を呈し、最大長64cm、確認面からの深さ13cmを測る。覆土は暗黄褐色土ブロックを含む褐色土を基調とし、基本土層Ⅱb層に対比される。遺物は出土していない。

SP54（Ⅱ－21図）

C16グリッドに位置するピットである。ソフトローム層上面より検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長軸24cm、短軸20cm、確認面からの深さ24cmを測る。覆土はローム粒、スコリアを含む褐色土を基調とする。周辺に関連遺構は確認されなかった。遺物は出土していない。

SX58（Ⅱ－22図）

C22グリッドに位置する遺構である。ソフトローム層上面より検出された。平面形は不整円形を呈し、直径は100～104cmを測る。断面形は皿状を呈し、確認面からの深さ12cmと浅い。坑底には凹凸が認められる。覆土は褐色～暗黄褐色土ブロックを含む暗褐色土で、基本土層Ⅱb層に対比される。遺物は出土していない。

SX59（Ⅱ－23図）

C22グリッドに位置し，西側を撹乱されている。平面形は不整形を呈し、調査区内での最大長は72cmを測る。坑底には凹凸が存在し、確認面からの深さは最大16cmを測る。覆土は暗黄褐色土ブロックを斑状に含む暗褐色土で、基本土層Ⅱb層に対比される。形態・規模がSX58に類似するが、関連性・性格は不明である。遺物は出土していない。

SP61（Ⅱ－24図）

C16グリッドに位置するピットである。ソフトローム層上面より検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長軸23cm、短軸19cm、確認面からの深さ24cmを測る。覆土はローム粒、スコリア粒を含む褐色土を基調とする。周辺に関連遺構は確認されず、性格は不明である。遺物は出土していない。

SP65（Ⅱ－25図）

C16グリッドに位置するピットである。ソフトローム層上面より検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長軸33cm、短軸23cm、確認面からの深さ48cmを測る。覆土はローム粒、スコリア粒を含む褐色土を基調とする。西側に住居址の可能性を指摘したピット群が位置するが本遺構との関係は不明である。遺物は出土していない。

（3）Ⅱb層出土遺物（Ⅱ－26～28図）

調査区東側に残存した基本土層Ⅱb層より土器、石器、礫など314点の縄文時代遺物が出土した。分布域は住居の可能性を指摘したSP10、SP52、SP57、SP60、SP62～64周辺及び20ライン以東に密で、特に24ライン以東に集中し、東方の谷部に向かい密度が増す傾向が窺われる。また、同一母岩と考えられるチャート製フレイクが十数点出土し、SP62覆土中からも２点出土している。包含層出土遺物は、撚糸文系土器が大半を占めている。

土器（Ⅱ－28図）

本調査ではⅡb層より、299点の縄文土器が出土している。総じて小破片が多く、今回は文様の遺存している土器を中心に掲載した。

１～10は早期前葉の土器である。１は無文深鉢の口縁部で、わずかに肥厚が観られる。胎土の色調は外面は橙色で内面は赤褐色を呈す。白色粒子を微量含んでいる。稲荷台式と思われる。２は深鉢胴部片で無節Rの撚糸文が密に施文される。胎土の色調は外面は赤褐色で、内面は明黄褐色である。胎土に白色粒子・雲母多量含む。３は２と直接接合しないが同一破片である。無節Rの撚糸文が施文される。４、５は同一個体深鉢の胴部片で無節Rの撚糸文が施文されている。胎土色調は外面が浅黄色で内面は橙色。胎土には白色粒子・雲母を少量含んでいる。６は深鉢胴部片で無節Rの撚糸文が疎に施文されて

いる。胎土色調は外面が明赤褐色、内面はにぶい赤褐色を呈している。胎土には白色粒子を少量含む。7は直接の接合はないが6と同一個体片と思われる。施文の浅い部分も多い。8は無節Ｒの撚糸文が施文された深鉢胴部片である。外面・内面ともににぶい黄褐色で胎土に白色粒子少量、雲母微量含んでいる。焼成はやや不良で脆い。9は深鉢胴部片で、無節Ｒの撚糸文が施文される。外面は黒褐色、内面はにぶい黄橙色で胎土に白色粒子、雲母少量含む。焼成は良好である。10は無節Ｒの撚糸文が施文された深鉢胴部片である。施文は極めて浅い。外面は橙色で、内面は煤の付着が窺われる。胎土中に小礫、白色粒子を含んでいる。11は半截竹管の平行沈線と細い沈線がＶ字状に施された深鉢胴部片でる。外面・内面ともに明黄褐色で胎土中に白色粒子微量含む。前期後葉に属すると思われる。12は深鉢口縁部で口縁部下にＲＬの縄文が施文される。口縁端部に沈線を巡らせ、その上にボタン状の貼付文３箇所施される。外・内面ともに赤褐色を呈し、胎土中には白色粒子・雲母微量含む。焼成は良好である。前期末葉十三菩提式か。13は深鉢胴部片で半截竹管による集合沈線文が浅く施される。外・内面ともに橙色で胎土中には白色粒子を少量、雲母を微量含む。前期末葉、集合沈線文系と思われる。14は深鉢胴部片で細い沈線が鋸歯状に施される。胎土の色調は外面が明黄褐色、内面が黄灰色で、胎土中に白色粒子・雲母微量含む。加曽利ＥⅣ式か。15は深鉢胴部片で、横走する沈線で区画し、下部にＲＬの縄文が施文される。外・内ともににぶい褐色で胎土中に雲母少量含む。焼成は良好で、硬質である。堀之内２式と思われる。16は無文のミニチュア土器で、口縁部に山形突起を持つ。外面にはミガキが施される。外・内面ともに明黄褐色で、胎土中には雲母微量含む。堀之内式～加曾利Ｂ式か。17は深鉢胴部片で沈線で区画され、磨消縄文が施文される。外面は暗灰黄色、内面は赤褐色で白色粒子・雲母微量含む。

石器（Ⅱ－28、29図）

18、19は横長剥片で、18の左側縁、19の右側縁に摂理面が認められる。20、21は石核で、20の背面、21の上下両面に自然面を残す。いずれもチャート製で、同一母岩と推定される。22は打製石斧である。縦長剥片を利用している。表面には自然面を残す。両側面はやや括れ、丁寧な調整剥離が縁辺全体に施されている。

(4) 近現代の遺構と遺物

本節では検出遺構のうち覆土の様相や出土遺物の年代観より、近代以降に比定される遺構を取り扱う。全体様相として、不整形遺構、ピットが散在する程度で本地区の土地利用を復元できる遺構はない。逆に言えばこの散漫とした様相が当時の土地利用を表出しているとも言える（Ⅱ－30図）。

SX1（Ⅱ－31図）

C7・8グリッドに位置する遺構である。東西方向に伸びる１条の溝状遺構に直交する３箇所の長方形土坑を約200cm間隔で組み合わせた遺構で、形状は一本梯子形を呈する。西側は調査区外に伸び全長は不明であるが、東西方向溝状部は最大長590cmを測る。南北方向長方形土坑部長辺はいずれも約300cmと等しい。壁面は垂直に立ち上がり、断面形は長方形を呈す。坑底は、幅50～60cmとほぼ均一で、標高は34.6～34.7mと全体的にほぼ水平である。覆土は水平堆積をしているが、a－a'ラインでは坑底から間層を挟み、b－b'ラインでは坑底直上に幅20cm、高さ15～20cmを測る角材痕が確認された。この角材痕は遺存状態は悪いが、坑底全域に認められ、本遺構がこの材を埋設するための布掘り状掘方であることが確認でき、角材を根太として設置した基礎遺構と考えられる。材付近には五寸サイズの丸釘が斜方向に打たれていた痕跡も確認された。

覆土中より、無文の軒平瓦（軒桟瓦）が出土している（Ⅱ－32図１）。軒部は無文で角は面取りされている。胎土は灰白色。黒色粒子多量混入。表面は還元炎で黒変している。

釘及び瓦の形状から近代以降の構築物であることが確認される。

本遺構の類似例は、東京大学本郷構内の遺跡　農学部総合研究棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 1997）、世田谷区・騎兵山遺跡（加藤建設株式会社 2006）、尾張徳川家下屋敷跡（東京都埋蔵文化財センター 2008）で報告されている。本遺構については第Ⅴ章で私見を述べる。

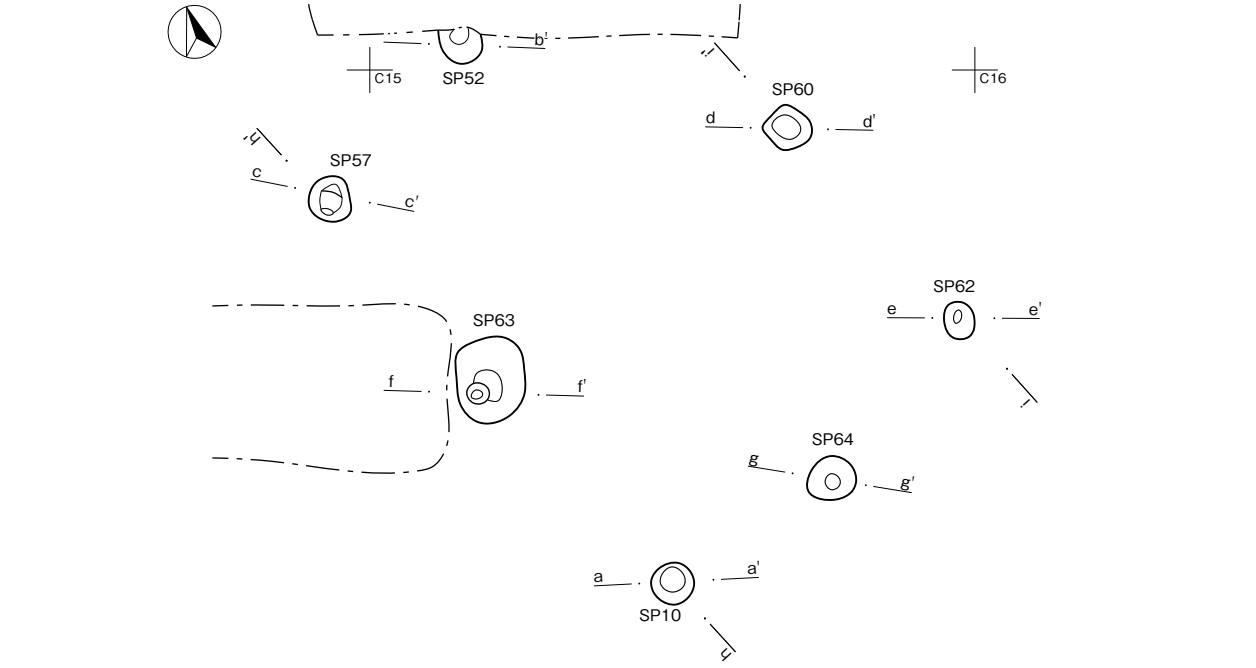
SB2（Ⅱ－33図）

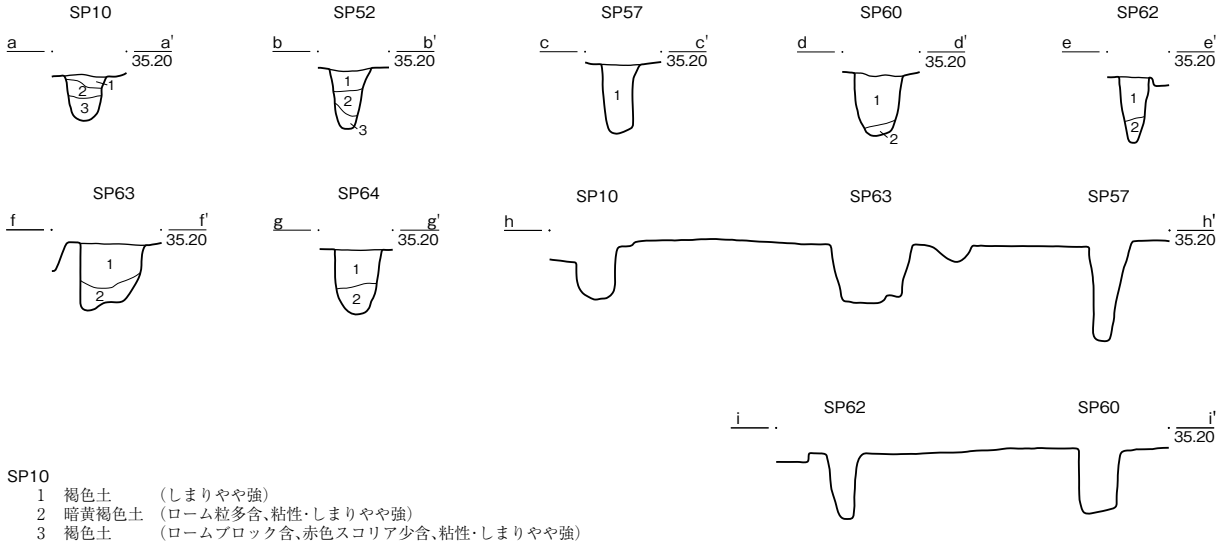
D13・14グリッドに位置するピット列で、ほぼグリッドラインに沿って東西方向に配置している。西側からP1と枝番を付した。北半を土管溝によって破壊され、また東西両側も広い範囲で撹乱を受けているため、全容は不明である。直径約40cmを測る円形を呈す。P5の東側張出しは覆土の観察から別遺構の重複と判断される。ピット間は芯々でP1－P2が約130cm、P2－P3が約100cm、P3－P4が約270cm、P4－P5が約60cmとバラツキが認められる。覆土の様相には共通性が認め

られることから、一連の遺構と推定される。P5 の坑底付近よりガラス片が出土したことから、近現代の遺構と考えられる。

SB3（Ⅱ－34 図）

B9・10 グリッドに位置するピットである。北半は調査区域外に及ぶため全容は不明である。平面形は不整形を呈し、確認面からの深さは約 30cm を測る。ピット間は芯々で 350cm を測る。西側の P1 坑底から東西 40cm、南北 25cm、厚さ 15cm を測る長方形切石が確認された。周辺には関連遺構が存在しないことから、この２基を南端とする遺構が、調査区外へ拡がっていることが推定される。





SP10
1　褐色土　　（しまりやや強）
2　暗黄褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりやや強）
3　褐色土　　（ロームブロック含、赤色スコリア少含、粘性・しまりやや強）

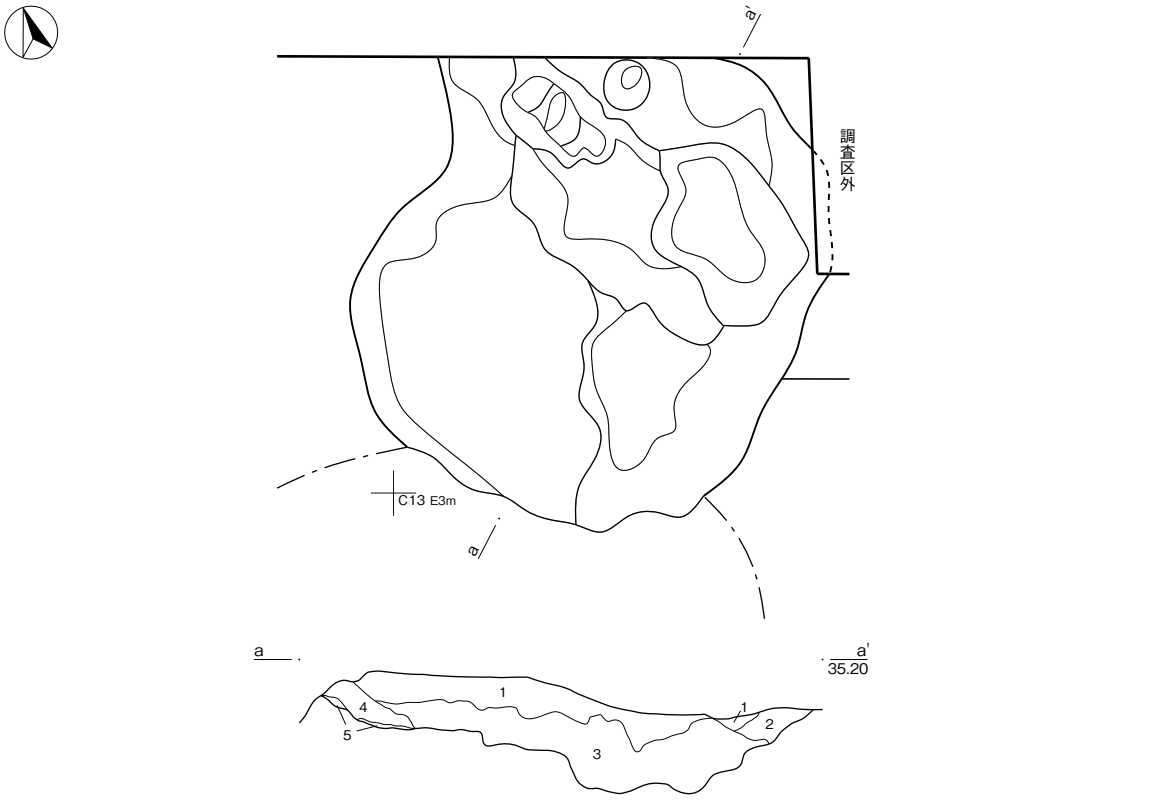
SP52
1　褐色土　　（ロームブロック・ローム粒多含、黒色スコリア少含、しまりやや強）
2　暗褐色土　（ロームブロック・ローム粒含、黒色スコリア少含、赤色スコリア極微含、粘性やや強）
3　褐色土　　（ロームブロック・ローム粒極多含、黒色スコリア少含、赤色スコリア極微含、粘性強、しまりやや強）

SP57
1　褐色土　（ロームブロック・ローム粒・黒色スコリア少含、赤色スコリア微含、しまりやや強）

SP60・SP62・SP63・SP64
1　褐色土　（ローム粒少含、赤色・黒色スコリア微含、しまりやや強）
2　褐色土　（壁際にローム粗粒多含、粘性やや強）

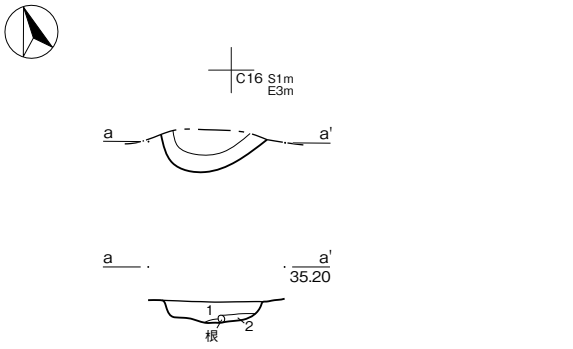
0　2m

Ⅱ-18図　SP10・SP52・SP57・SP60・SP62・SP63・SP64



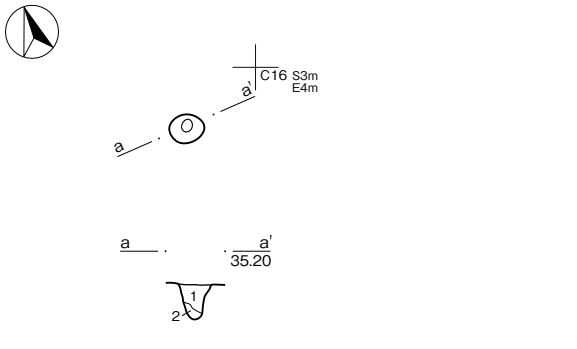
SX16
1　暗黄褐色土　（ローム土･ローム粗粒多含、粘性やや弱）
2　暗黄褐色土　（ローム土、粘性やや強）
3　暗黄褐色土　（ローム土･ロームブロック多含、粘性やや強）
4　暗褐色土　　（ローム粒少含、赤色スコリア微含）
5　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性やや強）

Ⅱ-19図　SX16



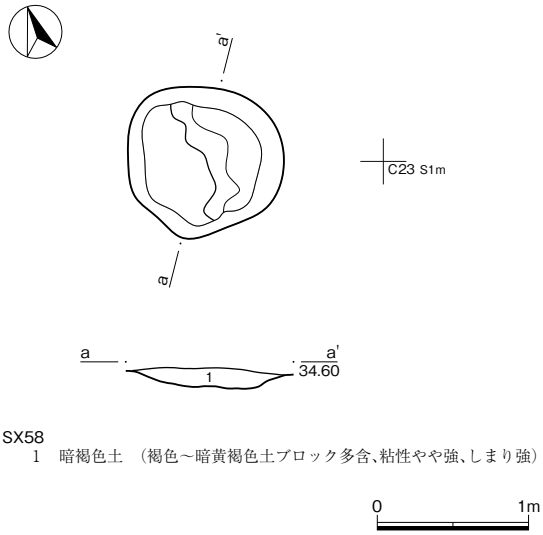
SK53
1　褐色土　　（褐色～暗黄褐色土塊多含）
2　暗黄褐色土　（粘性･しまりやや強）

Ⅱ-20図　SK53



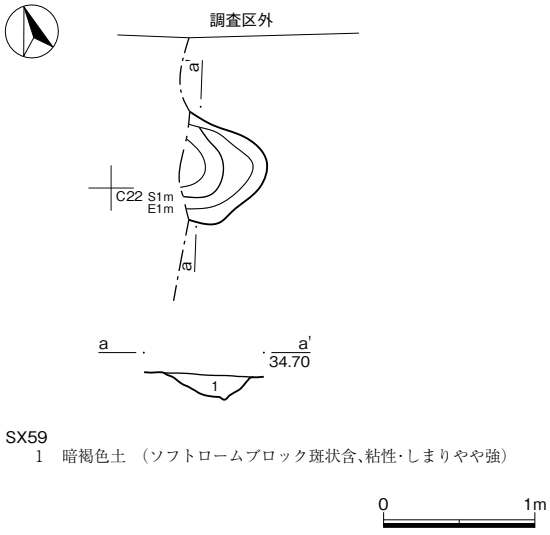
SP54
1　褐色土　（ローム粒少含、赤色･黒色スコリア微含、しまりやや強）
2　褐色土　（壁際にローム粗粒多含、粘性やや強）

Ⅱ-21図　SP54



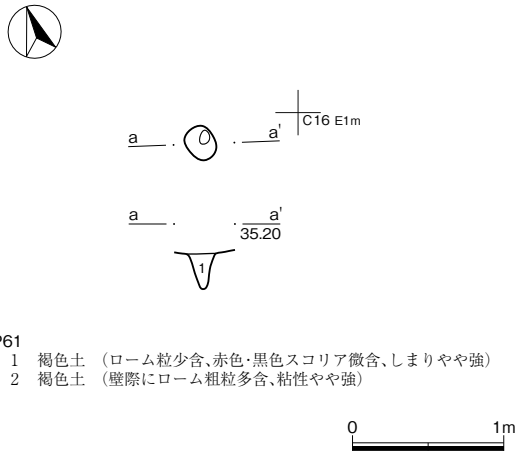
SX58
1　暗褐色土　（褐色～暗黄褐色土ブロック多含、粘性やや強、しまり強）

Ⅱ-22図　SX58



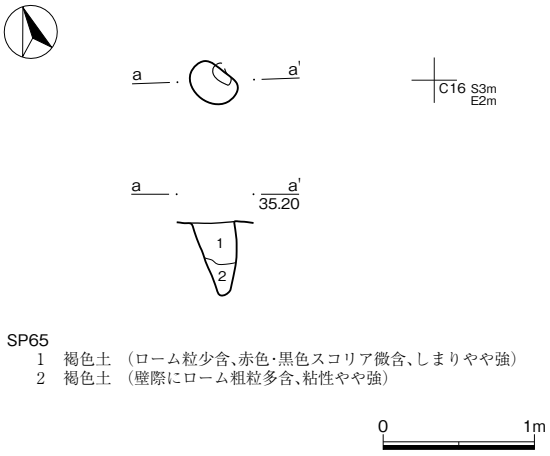
SX59
1　暗褐色土　（ソフトロームブロック斑状含、粘性･しまりやや強）

Ⅱ-23図　SX59



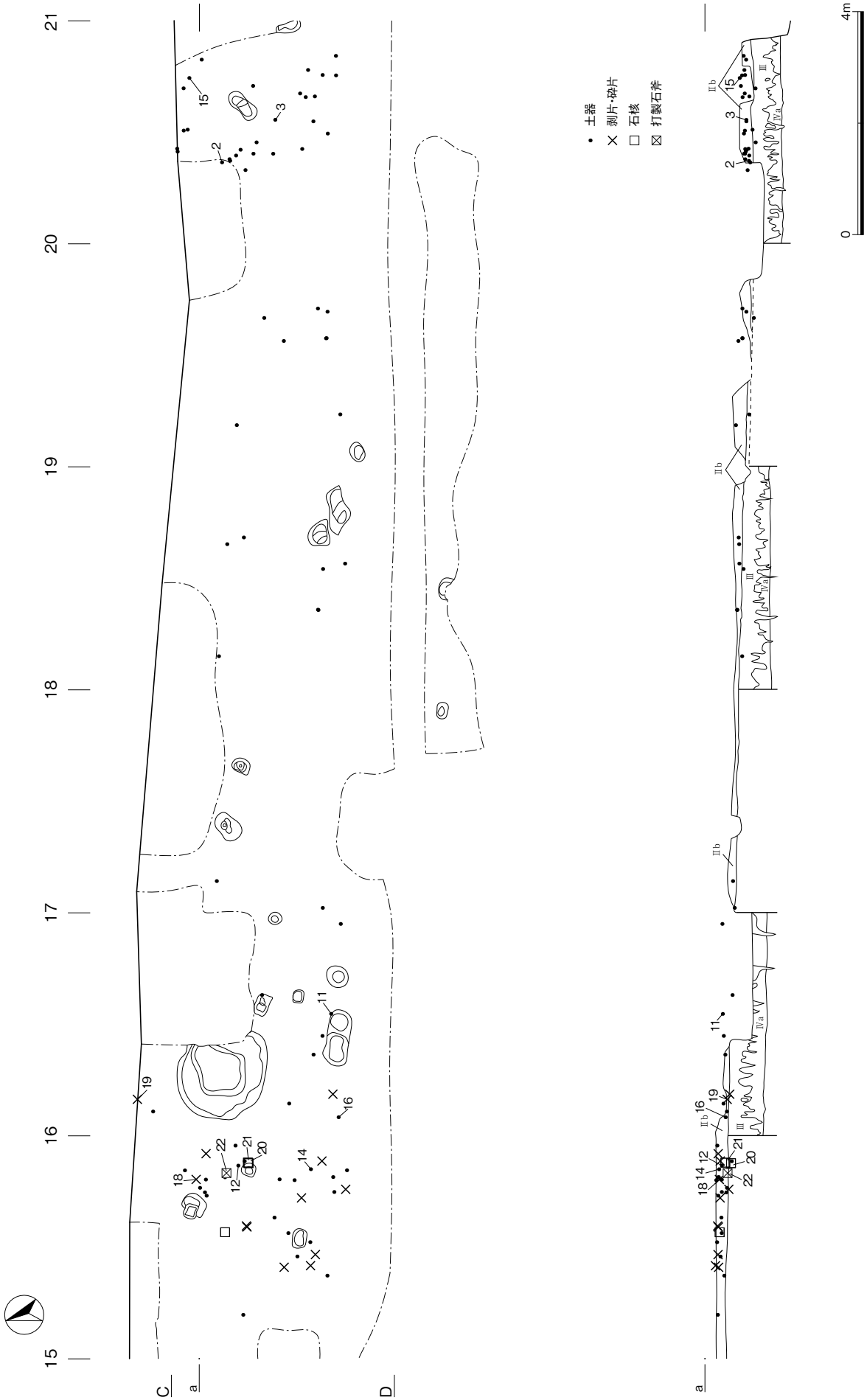
SP61
1　褐色土　（ローム粒少含、赤色･黒色スコリア微含、しまりやや強）
2　褐色土　（壁際にローム粗粒多含、粘性やや強）

Ⅱ-24図　SP61

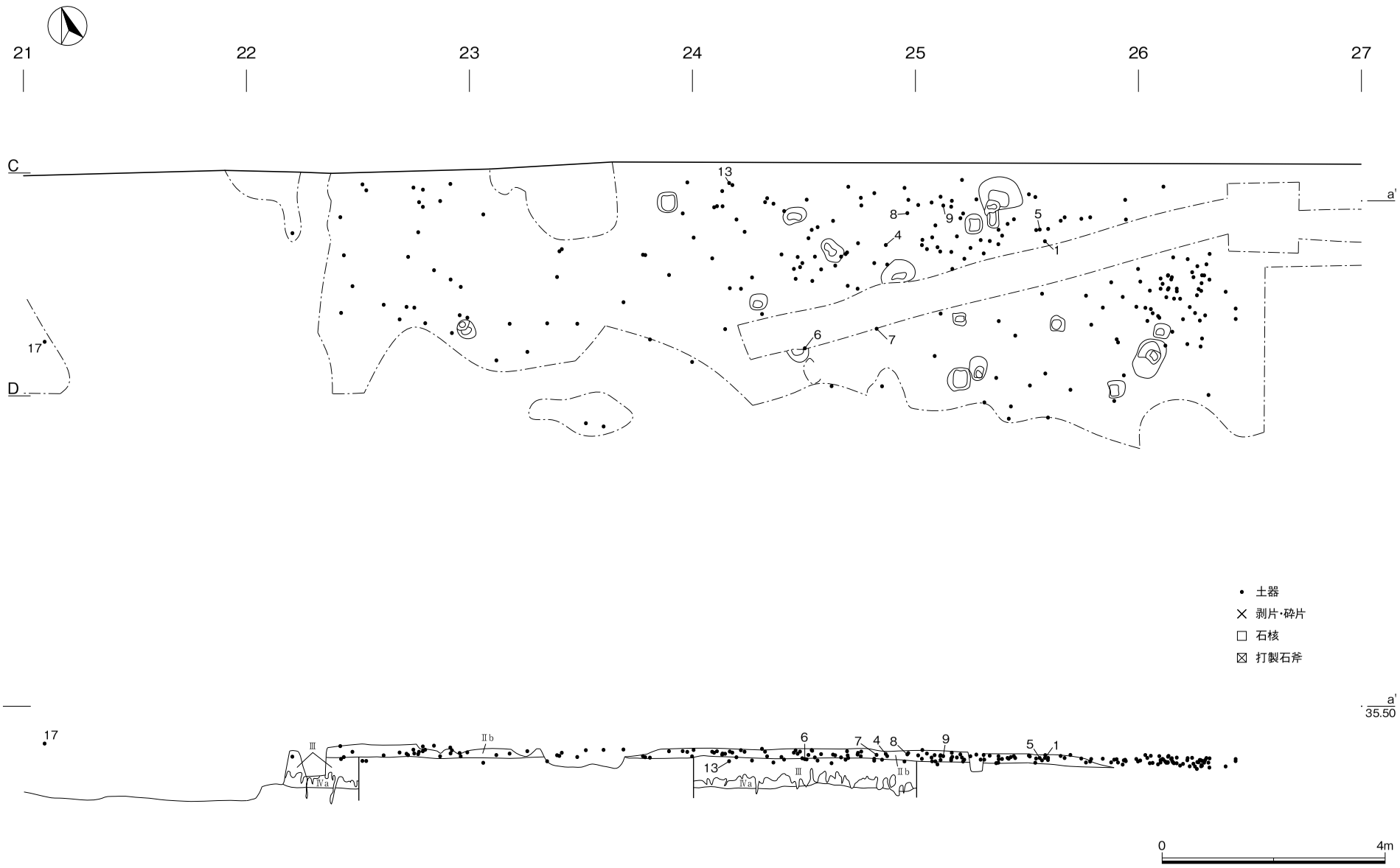


SP65
1　褐色土　（ローム粒少含、赤色･黒色スコリア微含、しまりやや強）
2　褐色土　（壁際にローム粗粒多含、粘性やや強）

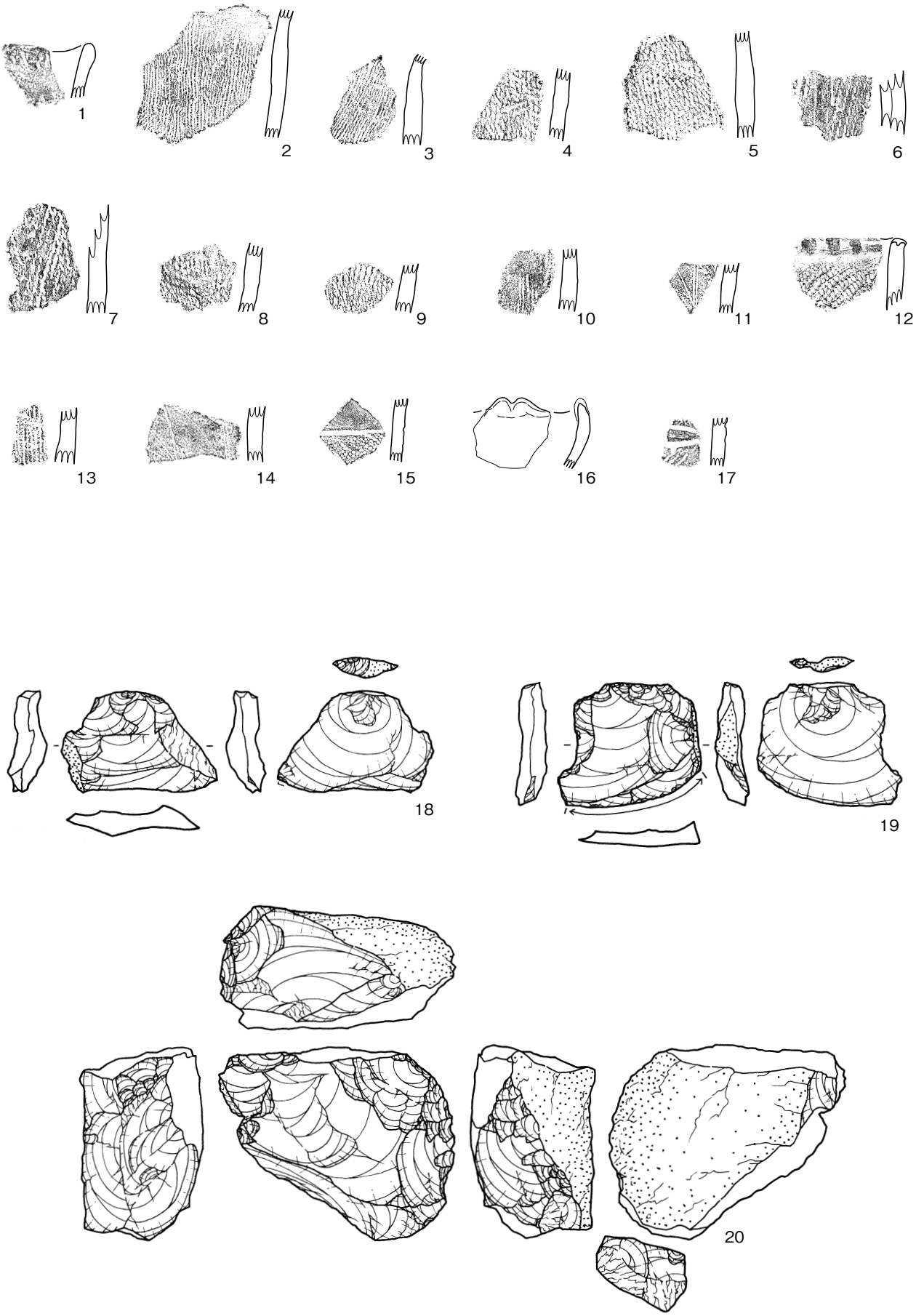
Ⅱ-25図　SP65



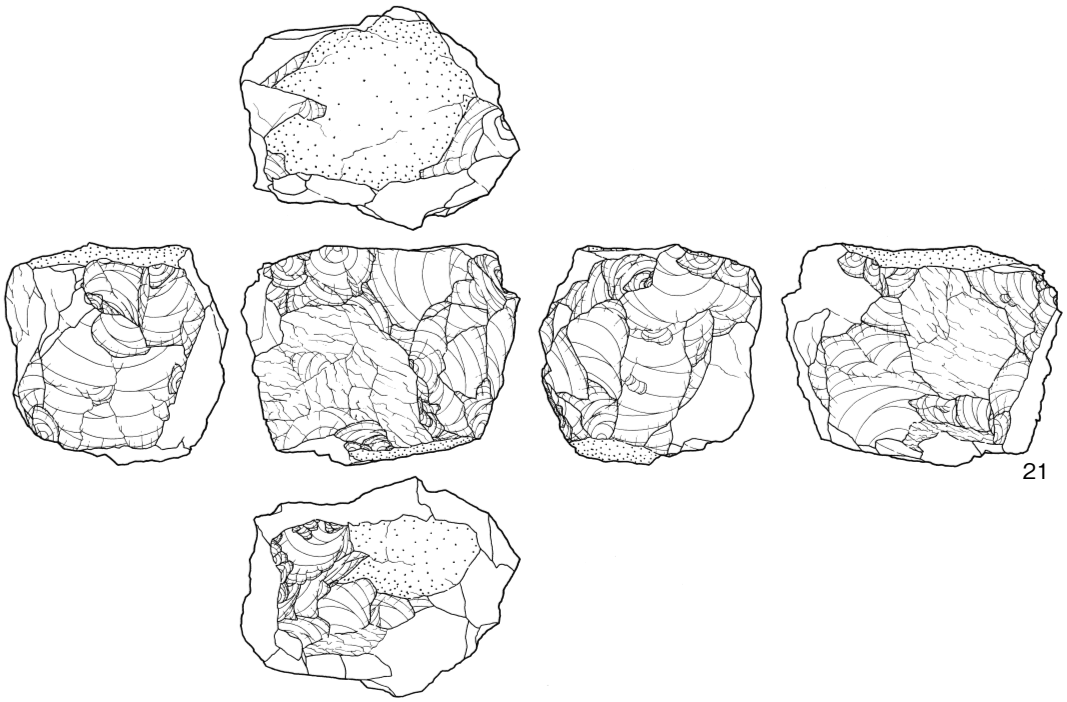
Ⅱ-26図　包含層遺物出土状況(1)

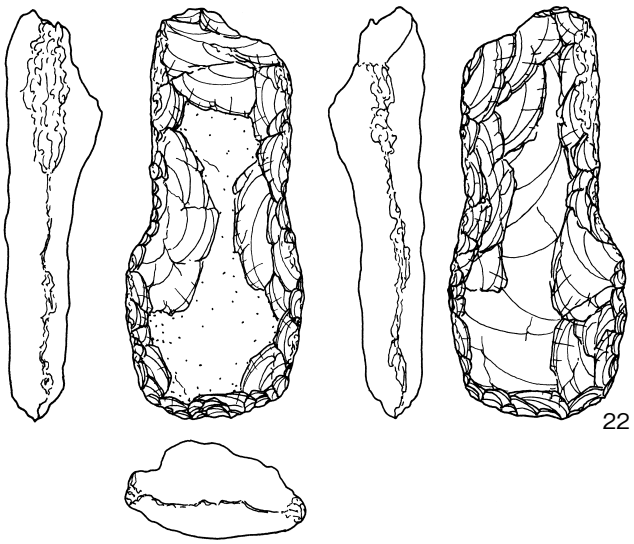


Ⅱ-27図　包含層遺物出土状況(2)

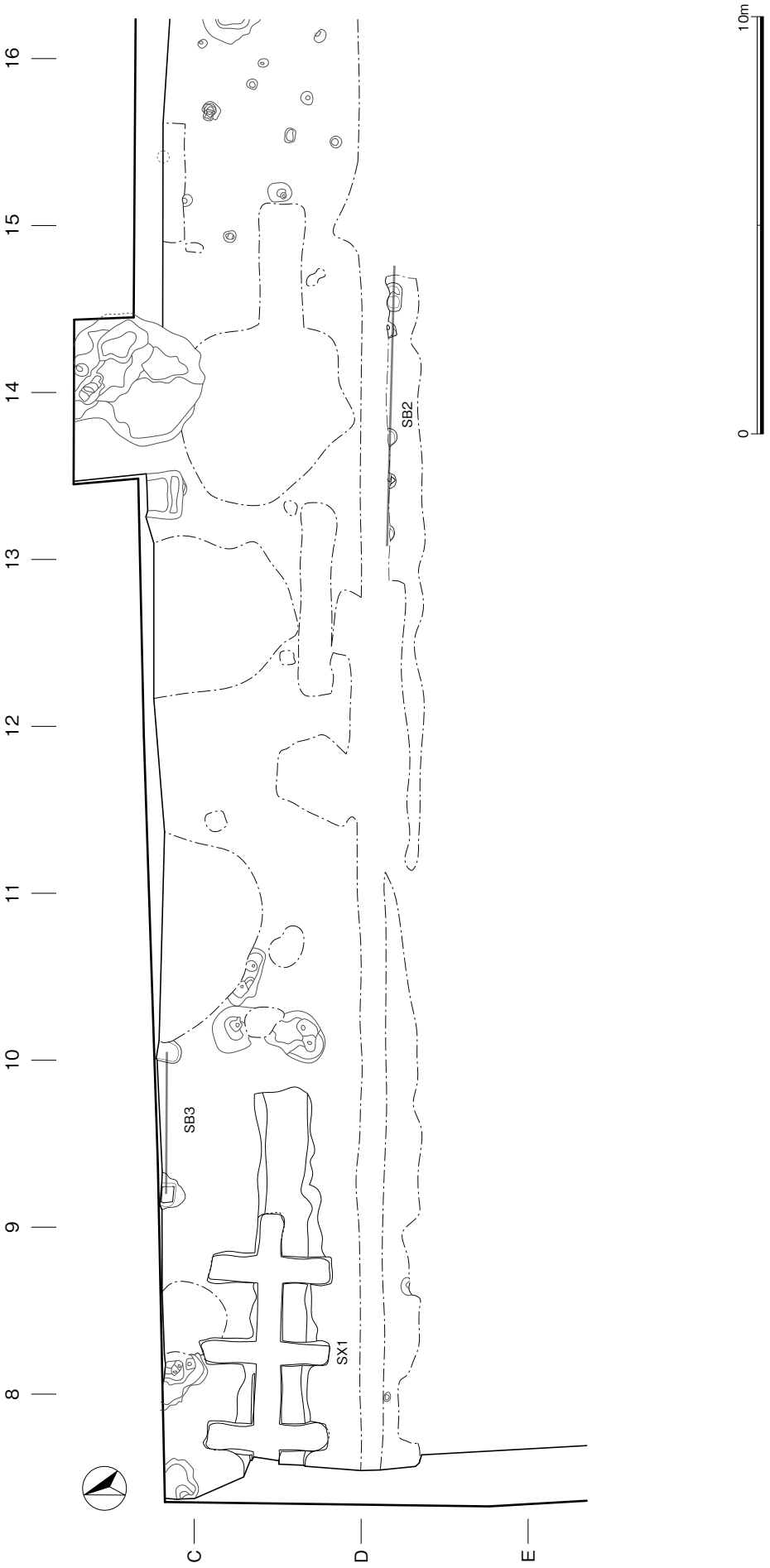


Ⅱ-28 図　包含層出土遺物（1）
（1 ～ 17 は 1/3、18 ～ 20 は 1/1）

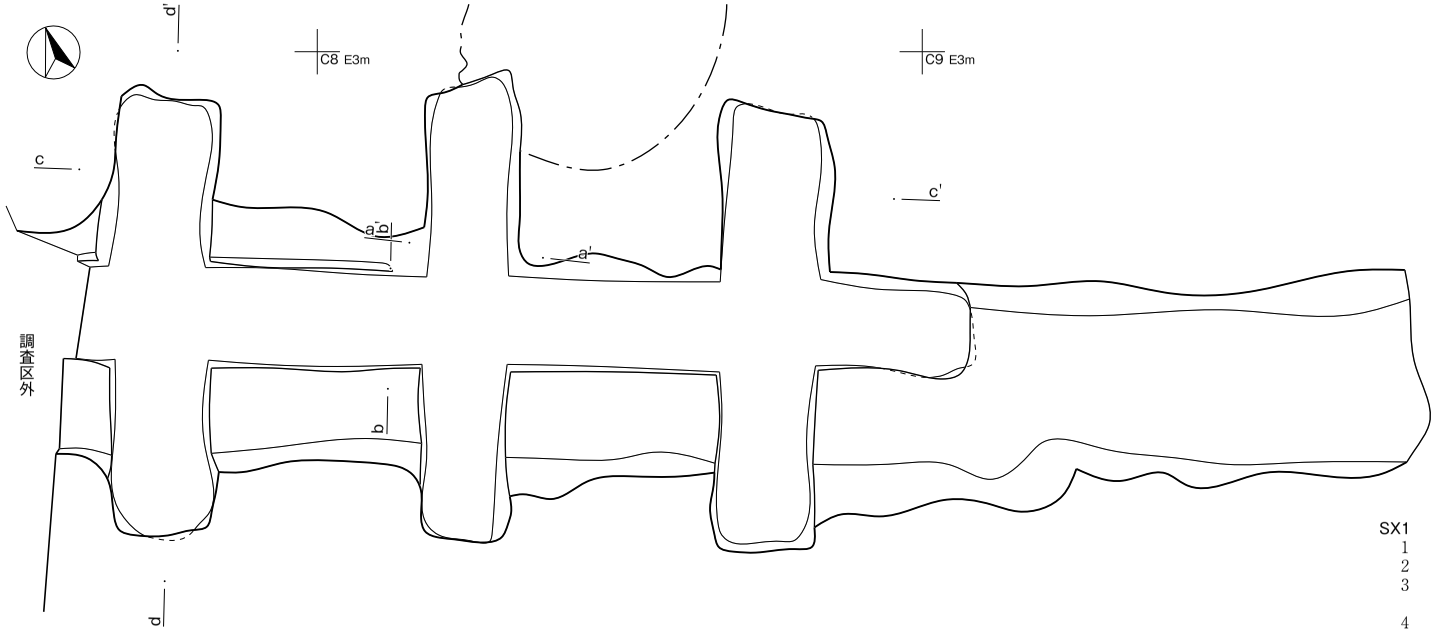


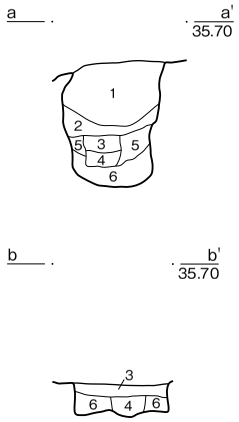


Ⅱ-29 図　包含層出土遺物（2）
（21、22 は 1/2）



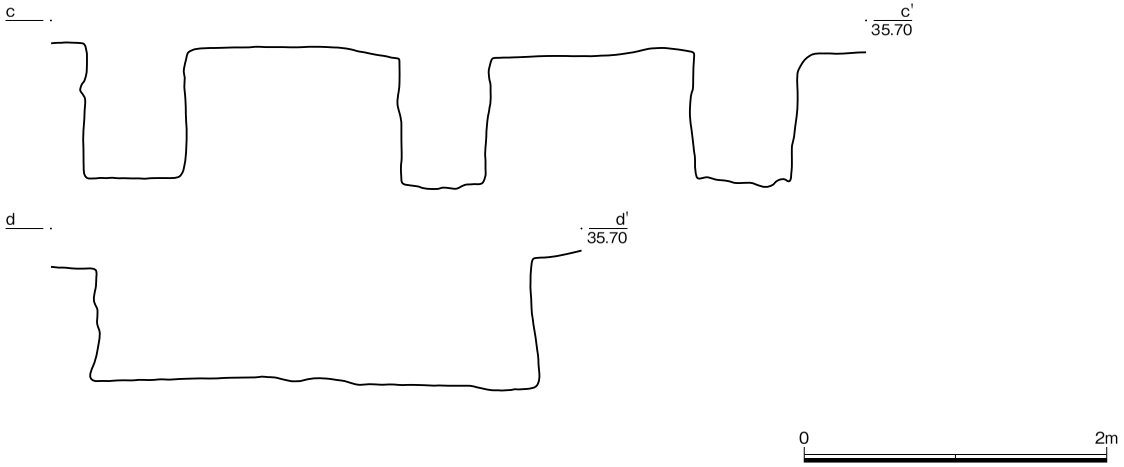
Ⅱ-30図　北区 近現代の遺構



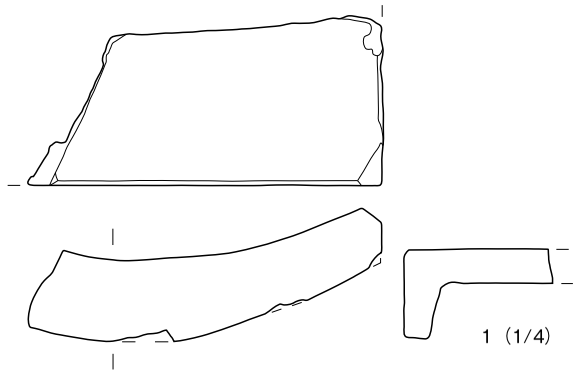


SX1

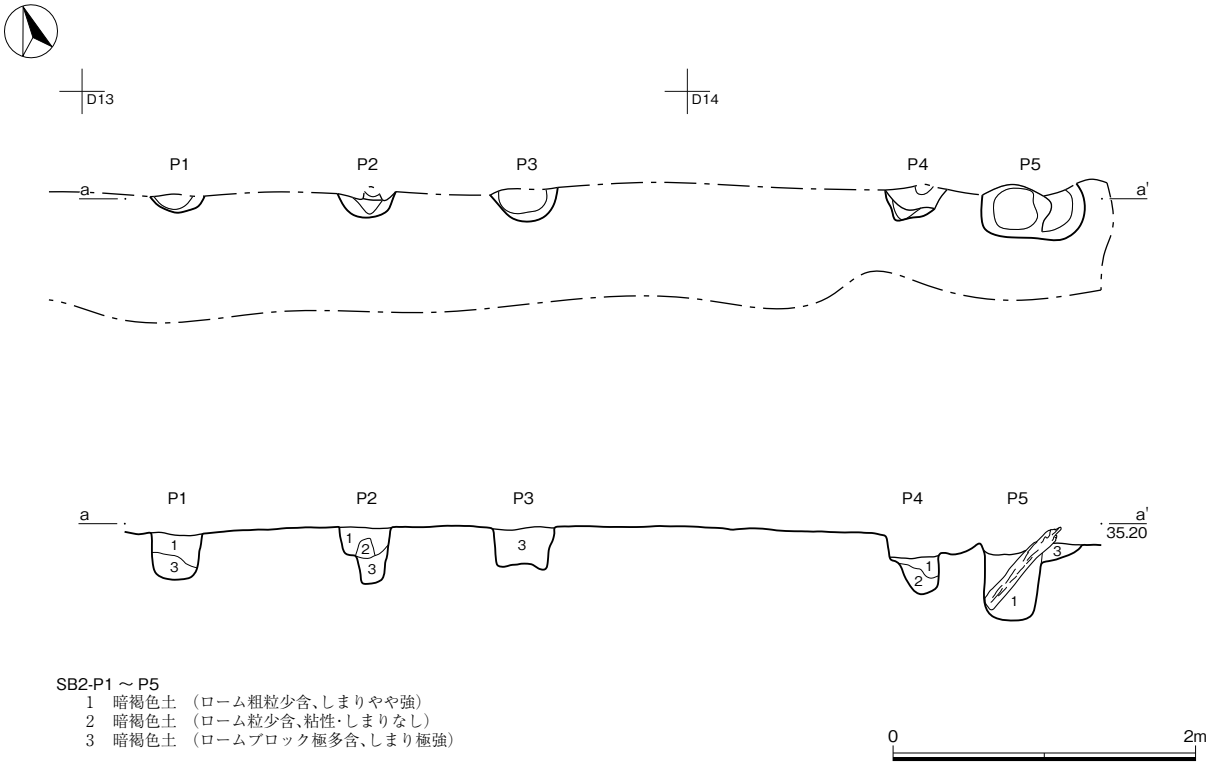
1	褐色土	（ロームブロック・黒色土ブロック多含、しまり弱）
2	暗黄褐色土	（ローム粗粒主体、粘性やや強、しまりやや弱）
3	褐色土	（ロームブロック・ローム粗粒・黒色土ブロック多含、粘性やや強、しまりやや弱）
4	褐色土	（ローム粗粒主体、木質残存、しまりなし）
5	褐色土	（ロームブロック極多含、粘性やや強、しまりやや弱）
6	暗黄褐色土	（ロームブロック主体、粘性やや強、しまりやや弱）



Ⅱ-31図　SX1



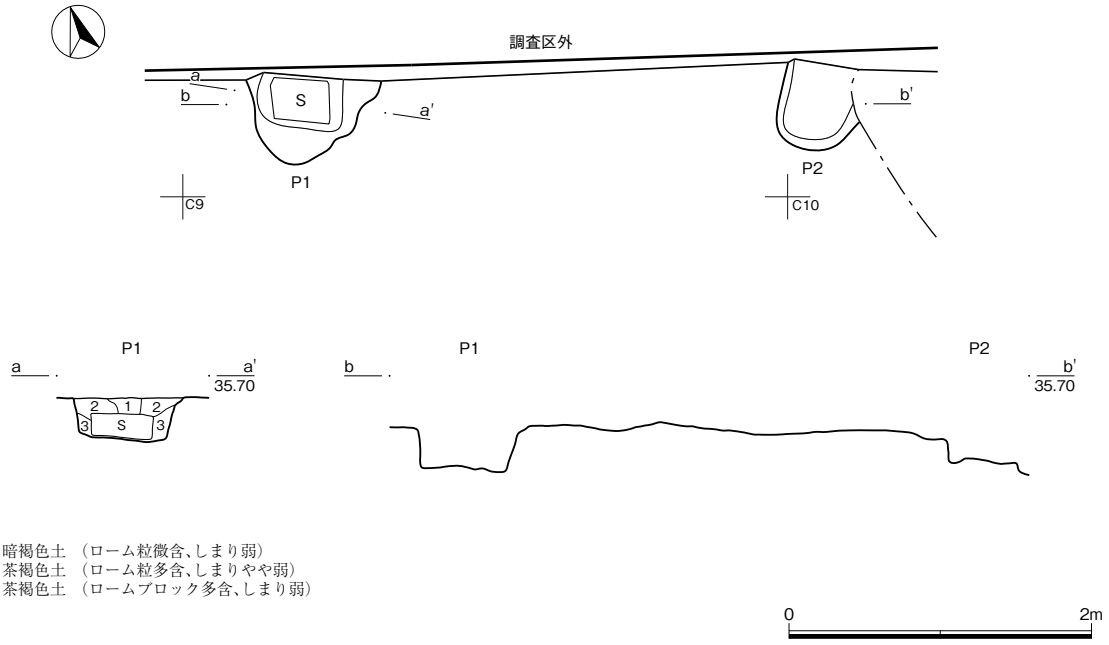
Ⅱ-32図　SX1出土遺物



SB2-P1 ～ P5
1　暗褐色土 （ローム粗粒少含、しまりやや強）
2　暗褐色土 （ローム粒少含、粘性・しまりなし）
3　暗褐色土 （ロームブロック極多含、しまり極強）

0　2m

Ⅱ-33図　SB2



SB3-P1
1　暗褐色土 （ローム粒微含、しまり弱）
2　茶褐色土 （ローム粒多含、しまりやや弱）
3　茶褐色土 （ロームブロック多含、しまり弱）

0　2m

Ⅱ-34図　SB3

第Ⅲ章　南区の調査

第１節　遺構

（１）調査の概要

旧駒場寮中療、南寮基礎による撹乱に加え、おそらく斜面の平準化を目的とした削平によって両建物間も立川ローム層が削平されている。そのため、沖積層の残存範囲はＮライン以北と、Ｎライン以南の６ライン以西である（Ⅲ－１図）。残存範囲内では埋積谷に続く緩斜面上に位置することから沖積層の残存状態は比較的良好である。遺構検出面はⅡｂ層上面と立川ロームⅢ層上面の２面である（Ⅲ－２図）。また、旧石器時代遺物確認のため、撹乱によりローム層が大きく削平されている場所を除き、台地上から埋積谷斜面にかけてテストピットを設定し立川ロームＸ層まで試掘調査を行ったが、概期の遺物は確認されなかった（Ⅲ－３図）。

（２）Ⅲ層上面の遺構

SK86（Ⅲ－４図）

M9・10グリッドに位置する遺構である。重複するSX78より古い。確認面での平面形は不整長楕円形を呈し、長軸183cm、短軸56cmを測る。坑底は幅約16cmと細く、確認面からの深さ60cmを測る。全体的に凹凸が著しく、長軸方向両壁面はオーバーハングしている。南北両壁面はほぼ垂直に立ち上がり、上部で大きく外反する漏斗形を呈する。覆土はローム粒、スコリア粒を少量含む暗褐色土を基調とする。その形状からいわゆるＴピットと考えられる。遺物は出土していない。

SX152（Ⅲ－５図）

M6・7グリッドに位置する遺構である。平面形は不整形を呈し、東西240cm、南北140cm、確認面からの深さ約30cmを測る。壁面、坑底ともに凹凸が著しい。覆土はローム粒を多く含む暗黄褐色土が下部に堆積している。その様相から倒木痕と考えられる。遺物は出土していない。

SX157（Ⅲ－６図）

Ｒ・Ｓ４・５グリッドに位置する遺構である。南半を撹乱によって大きく削平されている。平面形は不整形を呈し、最大値は南北295cm、東西160cm、確認面からの深さ71cmを測る。壁面、坑底共に凹凸が著しい。本遺構は、１層の暗褐色土が遺構東壁寄りに拡がり、2、4層との不自然な堆積状況から倒木痕と考えられる。遺物は出土していない。

SX167（Ⅲ－７図）

R3・4グリッドに位置する土坑である。平面形は不整円形、断面形はⅢ形を呈し、直径最大185cm、確認面からの深さ50cmを測る。坑底は凹凸が著しい。覆土にはローム粒、スコリアが含まれ、下層に向けて明るさを増す。遺物は出土していない。性格、年代ともに不明。

SK173（Ⅲ－８図）

Ｒ・S5・6グリッドに位置する土坑である。東側大半が中寮の撹乱を受け、西壁が遺存しているに過ぎない。残存部での最大長118cm、確認面からの深さ32cmを測る。a－a'セクション中央が膨らんでいるのは壁面の凹凸による。中寮撹乱内よりピットが検出された。覆土１層は柱痕と考えられる。陥穴の可能性も考えられる。遺物は出土していない。

SX187（Ⅲ－９図）

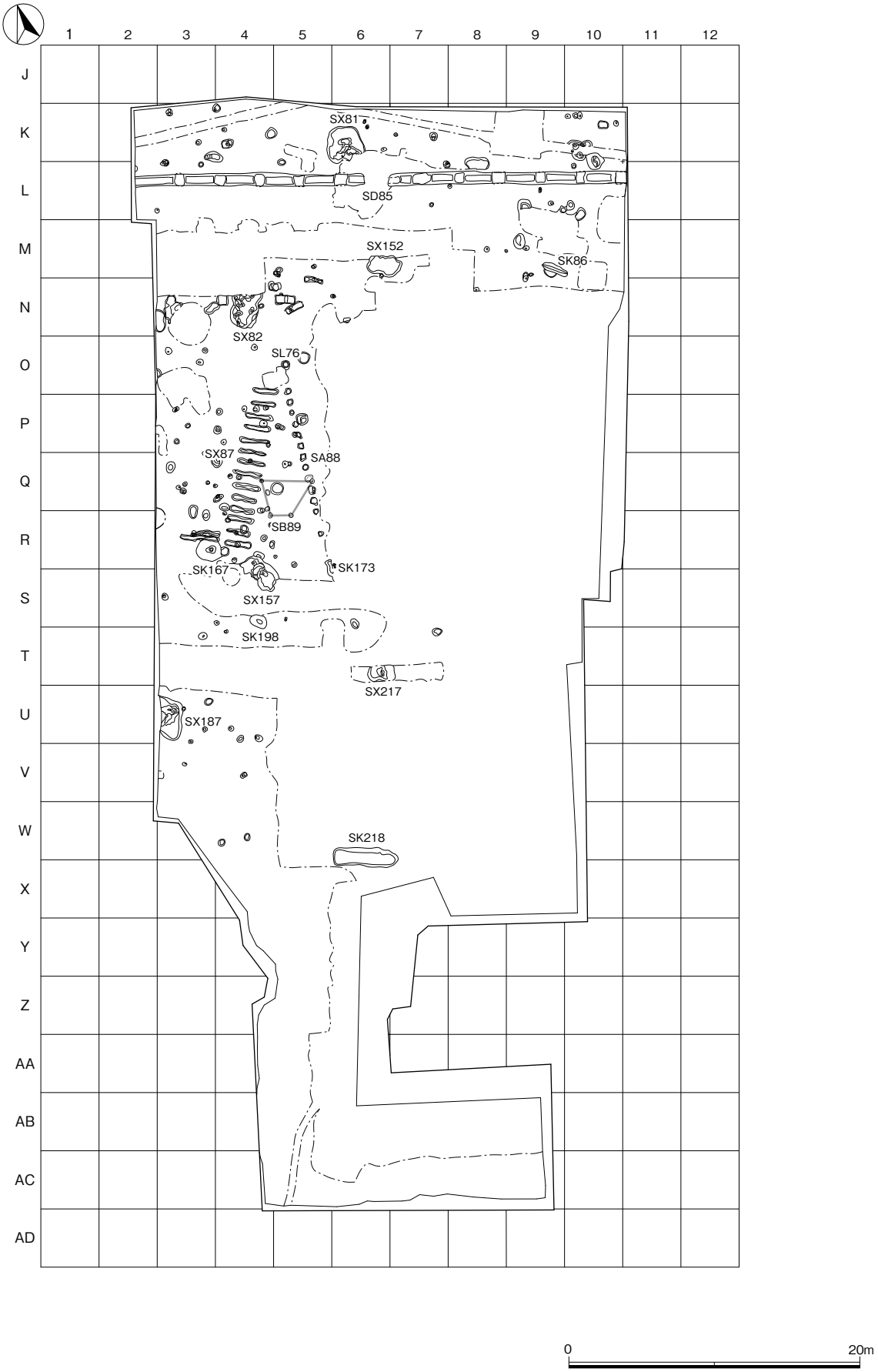
U3グリッドに位置する遺構である。西側は調査区域外に及ぶため全容は不明である。平面形は不整形を呈し、調査区内最大長は330cm、確認面からの深さ38cmを測る。坑底中央には凹凸の激しい落ち込みが存在する。覆土はローム粒、ブロックを多量に含む暗黄褐色土を主体とし、北壁際に天地返しの結果と推定される褐色土（3層）が堆積していることから、倒木痕と考えられる。遺物は出土していない。

SK198（Ⅲ－10図）

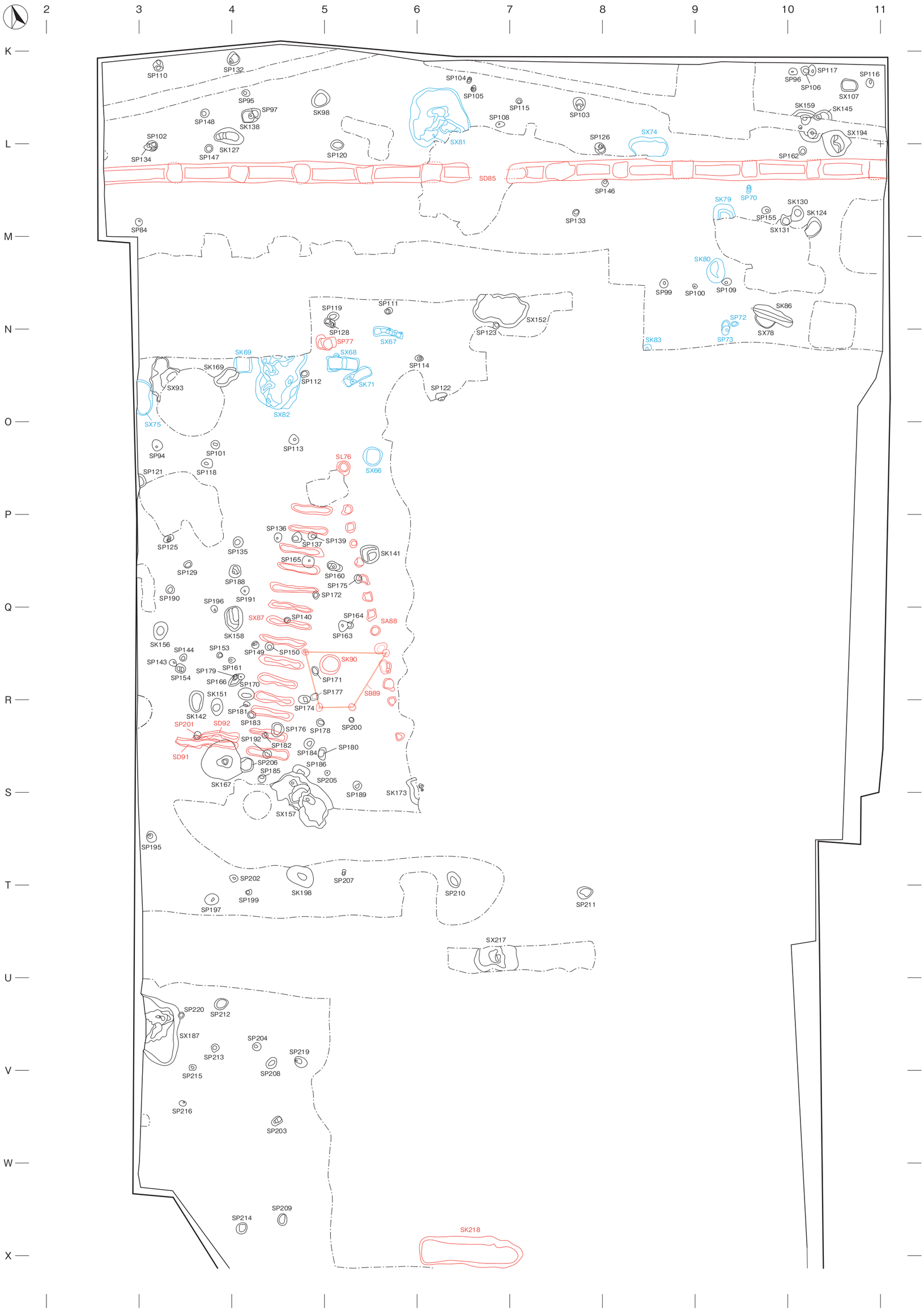
S・T4グリッドに位置する土坑である。平面形は不整楕円形、断面形はⅢ形を呈し、長軸122cm、短軸84cm、確認面からの深さ最大32cmを測る。壁は緩やかに立ち上がるが、坑底中央に凹凸が認められる。覆土はローム粒、スコリアを含む褐色土を主体とする。遺物は出土していない。

SX217（Ⅲ－11図）

T6・7グリッドに位置する遺構である。南北両壁面を撹乱によって破壊されている。平面形は不整形を呈し、東西長最大190cm、確認面からの深さ38cmを測る。壁

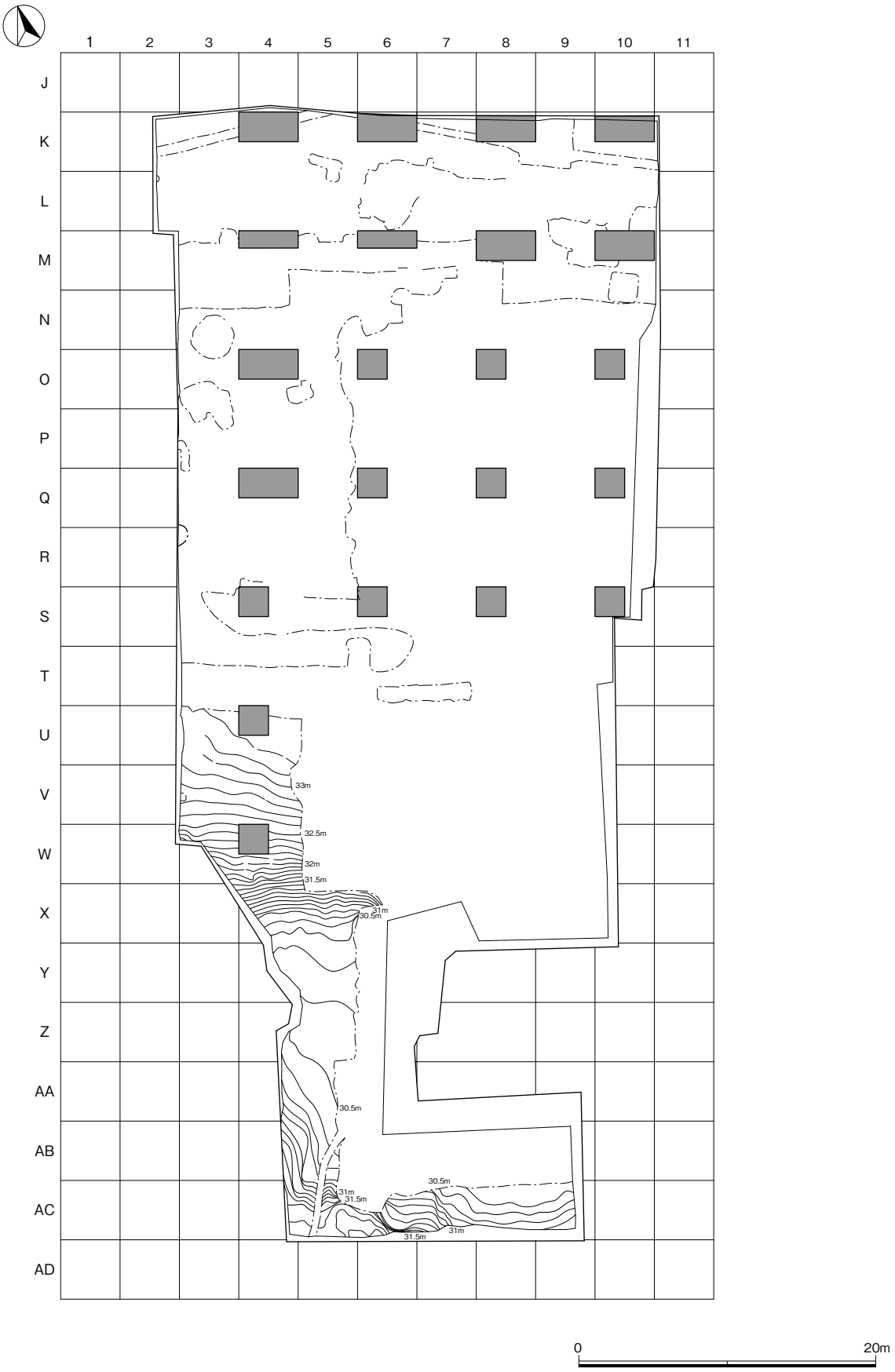

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
X
Y
Z
AA
AB
AC
AD
SX81
SD85
SX152
SK86
SX82
SL76
SX87
SA88
SB89
SK167
SK173
SX157
SK198
SX217
SX187
SK218
0
20m

Ⅲ-1図　南区遺構配置図



Ⅲ-2図　南区遺構全体図
（黒色:Ⅲ層上面検出遺構、青色:Ⅱ層上面検出遺構、赤色:近現代遺構）

0　10m



Ⅲ-3図　南区旧石器TP配置・等高線

は緩やかに立ち上がり、坑底は凹凸が顕著で、中央付近に落ち込みを有す。遺構形態及び覆土の堆積状況から倒木痕と考えられる。遺物は出土していない。

（3）Ⅱ層上面の遺構

SX81（Ⅲ－12図）

K5・K6・L6グリッドに位置する遺構である。南東側の一部が撹乱を受け残存していない。平面形は不整形を呈し、東西最大265cm、南北最大254cm、確認面からの深さ最大90cmを測る。壁面、坑底ともに凹凸が著しく、特に坑底南半部が顕著で浅い落ち込み状を呈している。平面形状、覆土の複雑な堆積状況から倒木痕と考えられる。遺物は出土していない。

SX82（Ⅲ－13図）

N4グリッドに位置する遺構である。北側が撹乱を受け残存していない。平面形は不整楕円形を呈し、残存部南北長230cm、東西長188cm、確認面からの深さ56cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は凹凸が著しい。覆土1層は基本土層Ⅱb層、3層は漸移層、4層はソフトローム層とほぼ90°回転した複雑な堆積状況を呈していることから、倒木痕と考えられる。遺物は出土していない。

（4）近代以降の遺構

SL76（遺構Ⅲ－14図、遺物Ⅲ－19図）

O5グリッドに位置する甕埋設遺構である。Ⅱ層上面より検出された。上半部は近代以降の撹乱を受け、残存していない。堀方南西部は撹乱の影響を受け、残存しない。平面形は楕円形を呈し、長軸64cm、短軸57cm、確認面からの深さ30cmを測る。埋設甕の遺存状態から本来の深さは60cm程度だったと推定される。堀方と甕にはほとんど隙間がなく、甕の埋設を想定して掘削されたことが窺われる。埋設された甕は常滑産で、表面にマンガン釉が施されていることから、明治末以降の製品と考えられる。甕内覆土には底部上約数cmに石化した灰白色土が堆積している。この堆積土は本郷キャンパス内加賀藩邸調査で絵図面との対比から便槽遺構と評価された桶枠埋設遺構の桶木質部に付着した石化灰褐色土と同質であることから、本堆積土もいわゆる尿石と考えられる。甕内体部にも尿石の付着が認められるが、その下端が本層堆積レベルとほぼ一致することから、本遺構は3層が埋積した状態で使用されていたと判断される。明治期の農科大学（のち農学部）建物配置図との対比から本遺構は寄宿舎の西端付近に位置しており、それに伴う便槽と推定される（Ⅰ－4図d～f）。この寄宿舎は昭和13年の「東京帝国大学農学部建物図」ではすでに取り壊され、その後建設される中寮の計画範囲が示されていることから（Ⅰ－4図g）、昭和12・13年頃廃絶されたと推定される。また1層中より甕の上半部片、瓦片が出土しており、寄宿舎の解体と新寮建設に伴う根切りの影響と考えられる。

SK218（遺構Ⅲ－15図、遺物Ⅲ－20、21図）

W・X6・7グリッドに位置する土坑である。南寮建築の際に大きく削り取られた基礎撹乱中ハードローム層上より検出された。平面形は東側に先端を向けた砲弾形を呈し、東西448cm、南北約120cm、確認面からの深さ最大56cmを測る。壁面は逆ハの字状に立ち上がり、坑底は工具痕による凹凸が著しい。覆土中より大量の遺物が出土した。出土遺物には旧制第一高等学校の校章「柏葉章」が描かれた統制陶器、「東京大学教養学部」や昭和23年に制定された銀杏マークが描かれた湯呑み碗などが含まれることから、昭和10年代後半から20年代にかけての廃棄土坑と考えられ、撹乱範囲と該当年代の大学建物配置図との対比から、本遺構は南寮の南に隣接して掘削されたことが読み取れ、出土資料は寄宿舎生の日常生活品と評価できる。

SD85（遺構Ⅲ－16図、遺物Ⅲ－19図）

L2～L11グリッドにかけて調査区を東西に横断する溝状遺構である。Ⅱ層上面より検出された。幅70～100cmを測り、断面形はほぼ長方形を呈する。調査範囲ほぼ中央L6グリッド内で、長さ170cmにかけて天井高約60cm、幅約40cmの暗渠が確認された。溝底には約280cm間隔で1辺60～80cmを測る不整方形の落ち込みが存在し、落ち込みからの立ち上がり壁面が袋状に拡がる傾向が看取される。東西両調査区壁面の観察から、遺構面からの深度は最大320cmを測り、不整方形落ち込み以外の溝底の平均標高は32.40mとほぼ水平である。覆土は全体的にロームブロックを多量に含み、遺構掘削時の土砂で埋め戻されたと想定される。L3グリッド内で溝底付近より木樋の痕跡である空洞と一部材が検出され、水道遺構の可能性が考えられるが、それ以外では木材痕及び釘など木樋を推定させる遺物や木樋が腐敗したときに生じる空洞も認められなかった。こうした状況より遺構廃絶時に樋を撤去した可能性が指摘できる。出土遺物には桟瓦片、タイル片、鉄絵徳利片などが認められる。

本遺構類似例は、本郷キャンパス内の調査において総

合研究棟（文・経・教・社研）地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2002）、情報学環・福武ホール地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2008）、経済学研究科学術交流棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2011）などで確認され、木樋の痕跡、犬釘の出土状況から上水遺構と判断される遺構である。いずれも本郷通りに近接した調査地点であるが、前２者は遺構重複関係、出土遺物年代から 17 世紀末から 18 世紀前半に位置づけられ、本郷通り（中山道）地下を縦走する千川上水から藩邸内へ上水を取り入れた取水樋と考えている。一方、後者は覆土から近代遺物が出土したことから、明治 15（1882）年に再興された千川上水株式会社運営の千川上水から前田邸へ取水するための施設であると判断している。遺構形態や木樋構造のあり方に大きな差異が認められないことから、明治 10 年代に布設された東京水道施設は江戸時代の技術系統上にあることが確認でき、同形態の本遺構も明治中期頃の所産であると推定される。

第Ⅰ章第３節でも触れたように、本調査地点を含む駒場Ⅰキャンパスの北側から東側にかけキャンパス外周を沿うように寛文４（1664）年に三田上水が開削された。享保以降も用水として利用され、明治に入り目黒地域の日本麦酒、目黒火薬製造所の動力として工業利用されたとされる。こうした流れの中、農科大学の設立に伴い、栽培作物用の農業用水として引き込まれた施設と考えられる。ただし管見の限りでは設置、廃絶に関する記録は認められず、詳細は不明である。

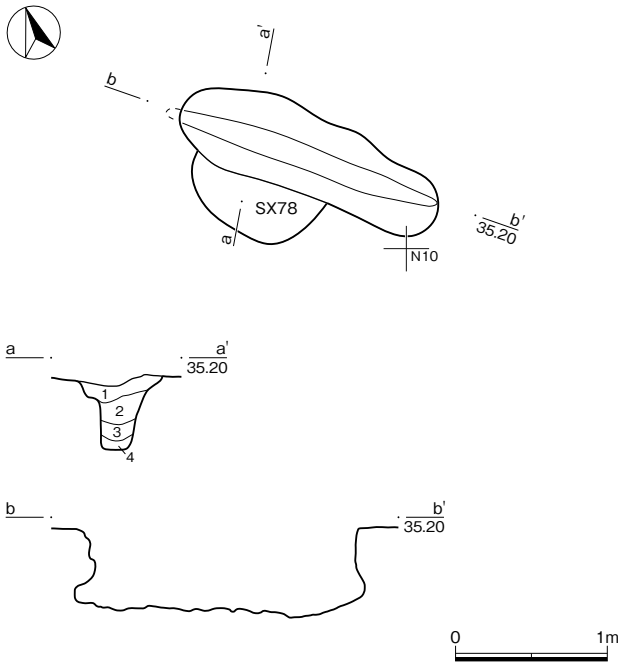
SX87（Ⅲ－17 図）

O ～ R4・O5 グリッドに位置する溝状遺構群である。Ⅱ層上面より検出された。14 条の溝状遺構群で、方眼北より東偏 28°方向へ並んで検出された。各溝状遺構の両端は丸味を帯び、両側壁はやや蛇行した形状を呈している。溝長は 165 ～ 205cm、平均 187cm を測る。幅は 30 ～ 40cm、間隔はややバラツキがあるが、おおよそ芯々 80 ～ 90cm を意識していると考えられる。断面形は皿形を呈し、確認面からの深さ 5 ～ 8cm と浅いが、上部削平の影響を受けたためと考えられる。覆土は全てロームブロックを含む黒褐色土で共通する。個々の溝形状にはややバラツキが認められるものの主軸方位、間隔、覆土、大枠での形状が類似しており一連の遺構群であると判断できる。

遺物は出土していないが、覆土がⅡ層上に堆積している盛土（黒褐色土）と同一であることから、農科大学（農学部）時代の遺構と推定され、その形状から畑の畝跡と考えられるが、本遺構群軸線の規制要因は不明である。

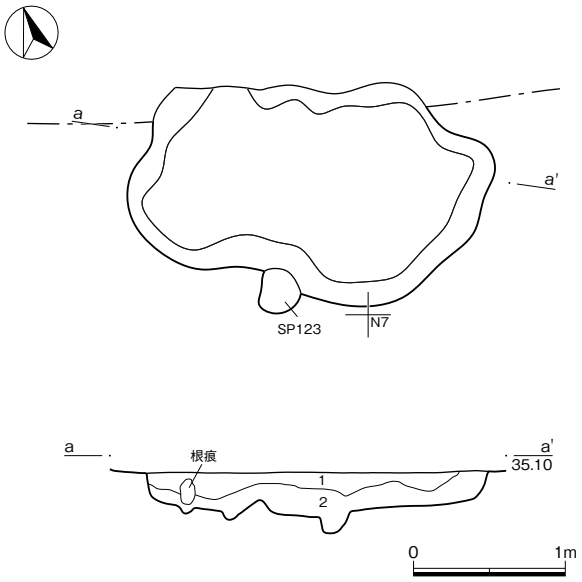
SA88（Ⅲ－18 図）

0 ～ R5 グリッドに位置するピット列である。Ⅱ層上面より検出された。13 基が確認された。東偏 4°50′と方眼北よりやや東偏する。個々のピットはほぼ１辺 35 ～ 50cm を測る方形を呈する。確認面からの深さは 6 ～ 10cm と浅く、SX87 同様上部がかなり削平された結果と考えられる。覆土は SX87 と類似するロームブロックを含む黒褐色土で、近似する段階に構築されたと考えられる。本遺構群の主軸方位は、Ⅰ－４図 c ～ f 段階の調査地点西側を南北に伸びる道路にほぼ沿っており、この段階の塀跡（柵列）と考えられる。遺物は出土していない。



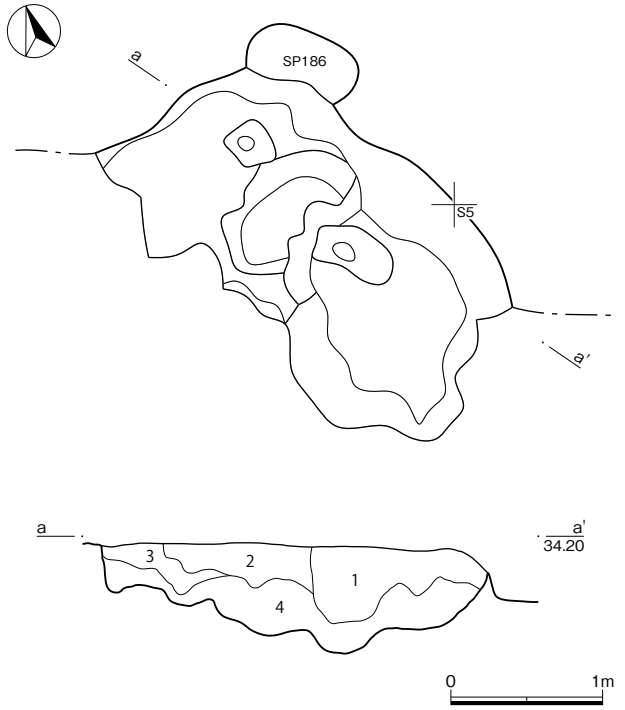
SK86
1 褐色土 （ローム粒少含、黒色・赤色スコリア極微含、粘性やや強）
2 暗褐色土 （ローム粒少含、黒色・赤色スコリア極微含、粘性やや強）
3 暗褐色土 （ローム粒含、黒色・赤色スコリア微含、粘性やや強、しまりやや弱）
4 暗褐色土 （ローム粒少含、黒色・赤色スコリア微含、しまり極強）

Ⅲ-4図 SK86



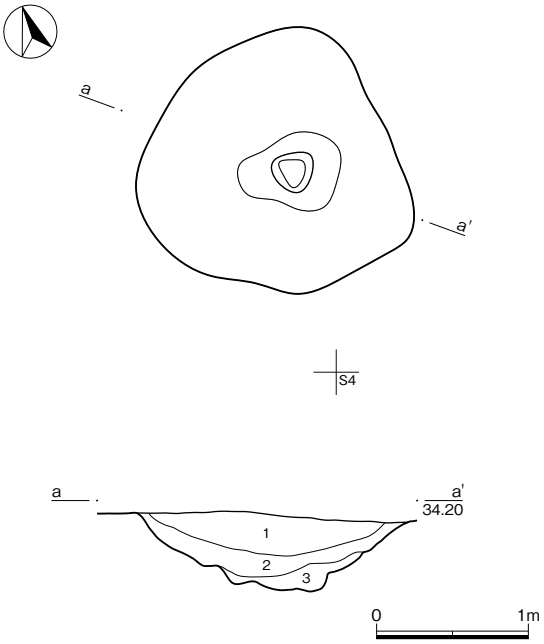
SX152
1 暗褐色土 （ローム粒微含）
2 暗黄褐色土 （ローム粗粒多含）

Ⅲ-5図 SX152



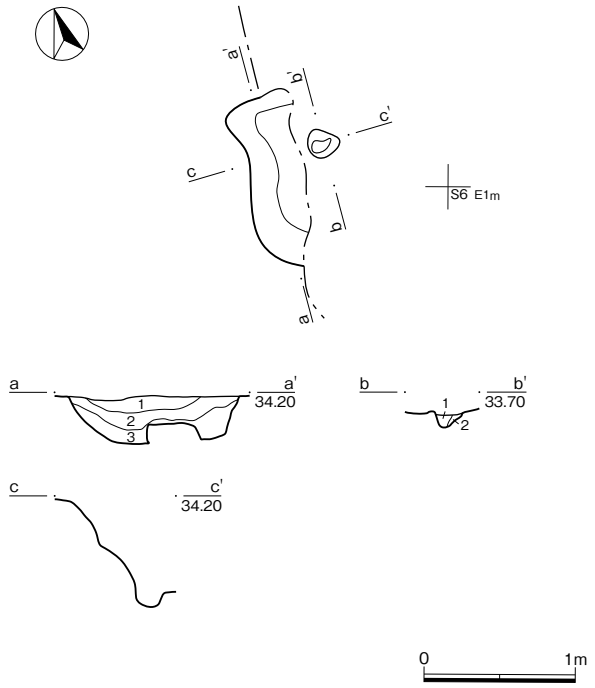
SX157
1 暗褐色土 （ロームブロック多含、粘性やや強）
2 褐色土 （ロームブロック含、粘性やや強）
3 褐色土 （赤色・黒色スコリア少含、粘性・しまりやや強）
4 暗黄褐色土 （ロームブロック極多含、粘性やや強、しまりやや弱）

Ⅲ-6図 SX157



SK167
1 褐色土 （ローム粒・黒色・赤色スコリア含、粘性・しまりやや強）
2 暗黄褐色土 （ローム粒少含、黒色・赤色スコリア含、粘性・しまりやや強）
3 黄褐色土 （ローム粒・黒色・赤色スコリア少含、粘性・しまりやや強）

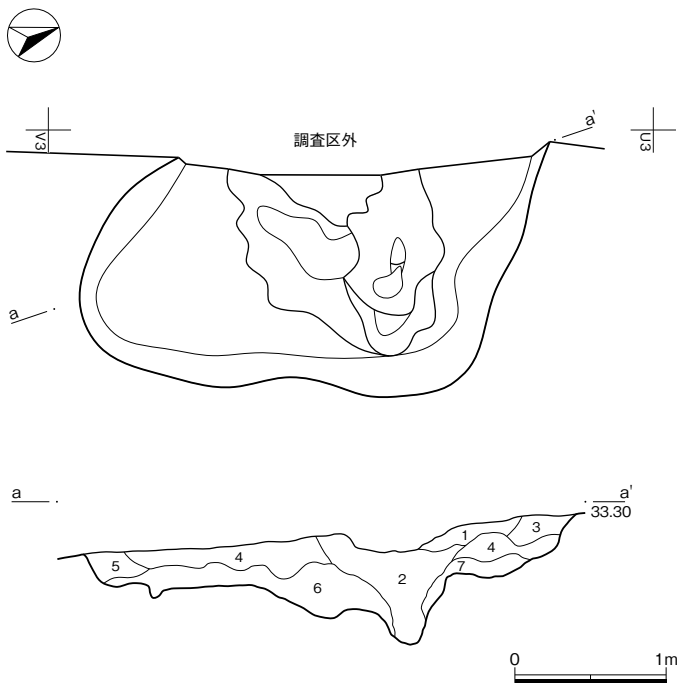
Ⅲ-7図 SK167



SK173
1　暗褐色土　（ローム粒含、赤色スコリア微含）
2　暗褐色土　（ローム粒微含）
3　暗褐色土　（ローム粒多含）

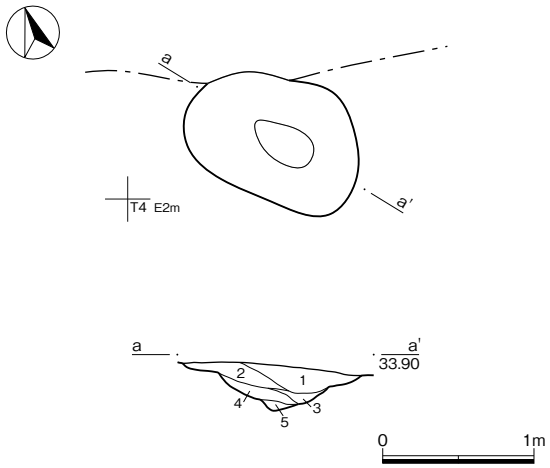
SK173 pit
1　暗褐色土　（ローム粒含）
2　暗褐色土　（ローム粒多含、しまりやや強）

Ⅲ-8図　SK173



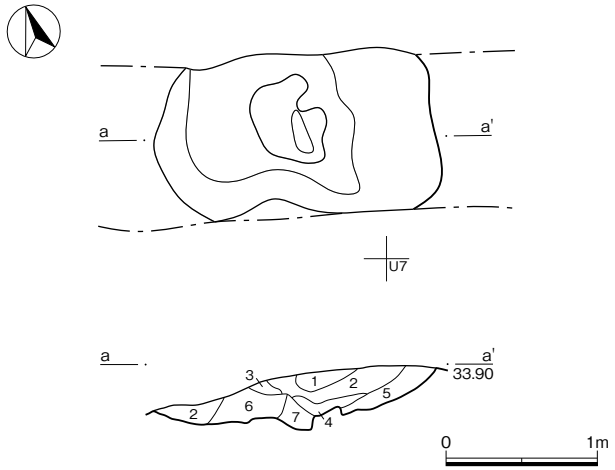
SX187
1　暗褐色土　（ローム粒多含、赤色スコリア微含）
2　暗黄褐色土　（ロームブロック極多含）
3　褐色土　（赤色スコリア微含）
4　暗黄褐色土　（ロームブロック・ローム粗粒多含、粘性やや強、しまりやや弱）
5　黄褐色土　（ローム粒含、赤色スコリア微含、粘性やや強、しまりやや弱）
6　暗黄褐色土　（ロームブロック極多含、粘性・しまりやや強）
7　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性やや強、しまりやや弱）

Ⅲ-9図　SX187



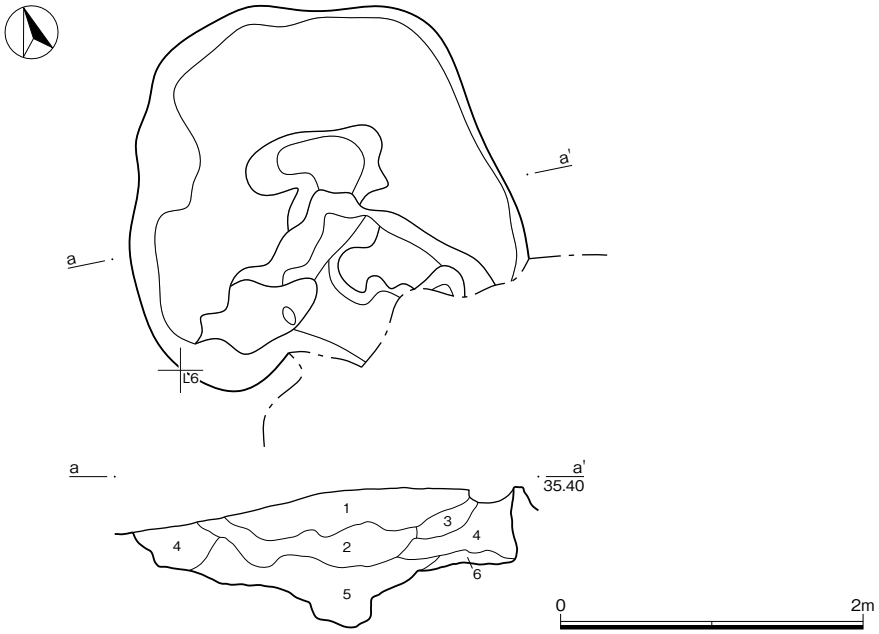
SK198
1　暗褐色土　（下部に径約１㎝大ロームブロック含、炭化物粒
　　黒色・赤色スコリア微含、粘性やや強、しまり強）
2　褐色土　（黒色・赤色スコリア微含、しまりやや強）
3　褐色土　（ローム粒やや多含、黒色・赤色スコリア微含、粘性やや強、しまり強）
4　褐色土　（ローム粒多含、黒色・赤色スコリア微含、粘性・しまりやや強）
5　褐色土　（ロームブロック多含、赤色・黒色スコリア含、粘性・しまりやや強）

Ⅲ-10図　SK198



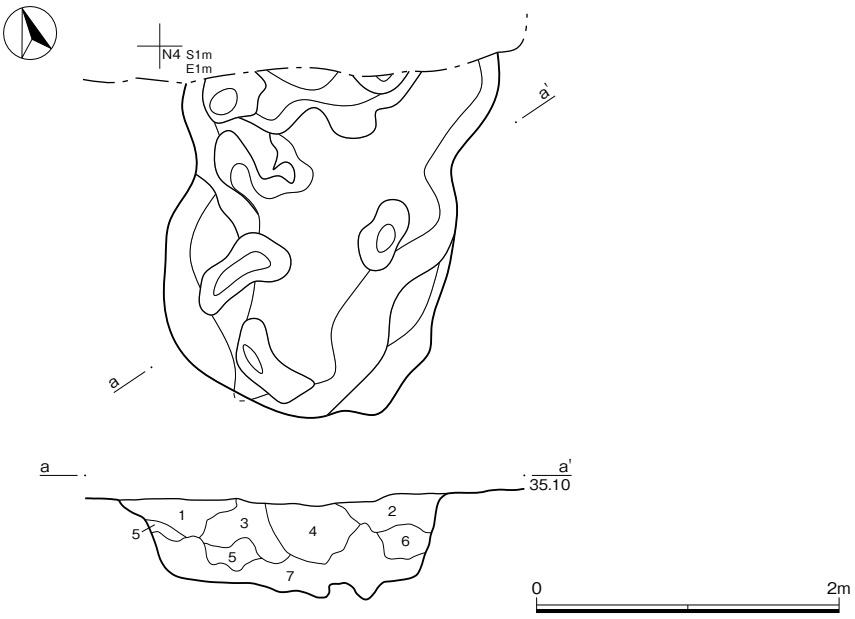
SX217
1　褐色土　（ロームブロック多含、黒色・赤色スコリア含、しまりやや強）
2　暗褐色土　（ローム粒含、ロームブロック・赤色スコリア少含
　　黒色スコリア微含、しまり・粘性やや強）
3　暗褐色土　（ローム粒少含、黒色・赤色スコリア微含、しまりやや強）
4　暗褐色土　（ロームブロック多含、黒色・赤色スコリア含、粘性やや強）
5　褐色土　（ロームブロック多含、黒色・赤色スコリアやや多含、しまり強）
6　褐色土　（ロームブロック多含、黒色・赤色スコリアやや多含、粘性やや強）
7　暗褐色土　（ロームブロック少含、黒色・赤色スコリア微含、粘性・しまりやや強）

Ⅲ-11図　SX217



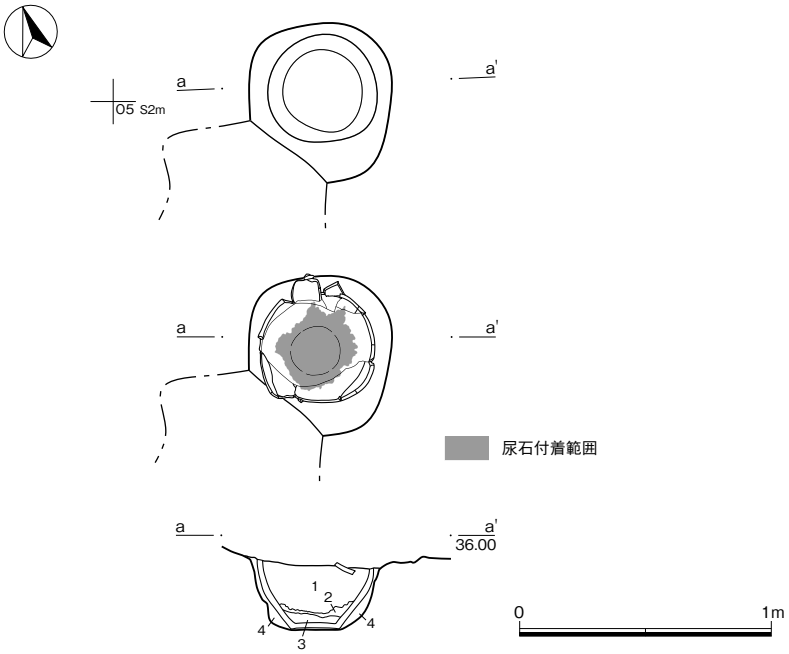
SX81
1 暗褐色土 （ローム粒少含、黒色スコリア微含）
2 褐色土 （ロームブロック・ローム粒少含）
3 褐色土 （ローム粒・黒色スコリア微含、しまりやや強）
4 褐色土 （ローム粒少含、ロームブロック微含、粘性・しまりやや強）
5 暗黄褐色土 （ローム粗粒極多含、ロームブロック多含、しまり弱）
6 暗黄褐色土 （ローム粒多含、ロームブロック・赤色スコリア少含、粘性やや強、しまり強）

Ⅲ-12図 SX81



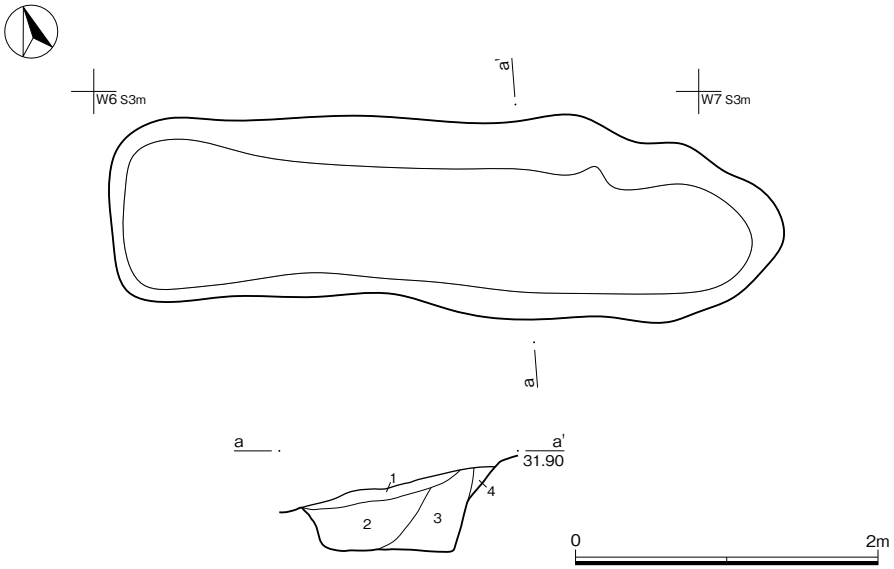
SX82
1 暗褐色土 （黄褐色土ブロック多含、しまり強）
2 褐色土 （ローム粒少含）
3 暗褐色土 （ローム粒微含、粘性やや強、しまり強）
4 暗黄褐色土 （ローム粒少含、赤色・黒色スコリア微含、しまりやや強）
5 暗黄褐色土 （ローム粗粒多含）
6 褐色土 （ローム粗粒少含、粘性やや強、しまりやや弱）
7 暗黄褐色土 （ロームブロック多含、粘性やや強、しまりやや弱）

Ⅲ-13図 SX82



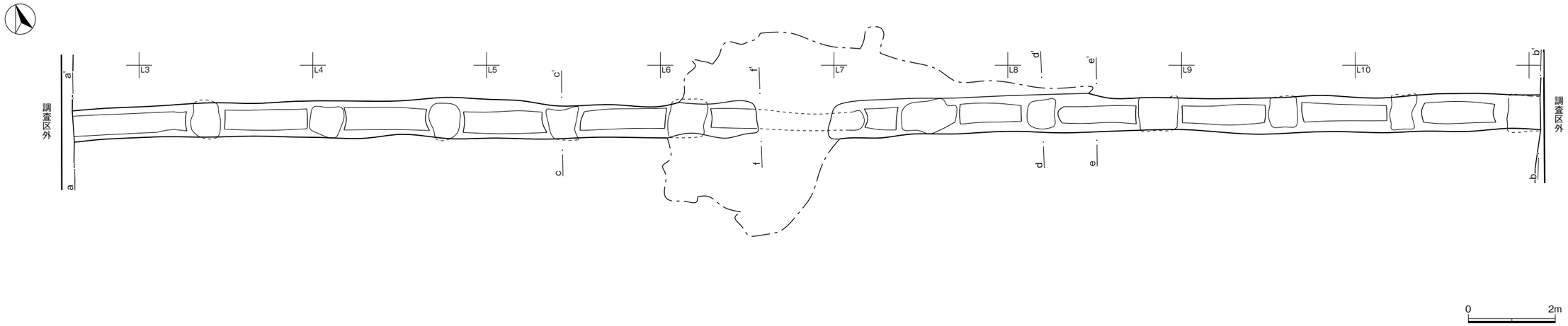
SL76
1　灰褐色土　（砂質粘土主体、暗黄褐色ブロック・炭化物含、粘性・しまり弱）
2　白灰色土　（尿石付着、円礫含）
3　灰褐色土　（砂質粘土主体、粘性・しまり弱）
4　暗褐色土　（ロームブロック含、粘性やや強、しまり弱）

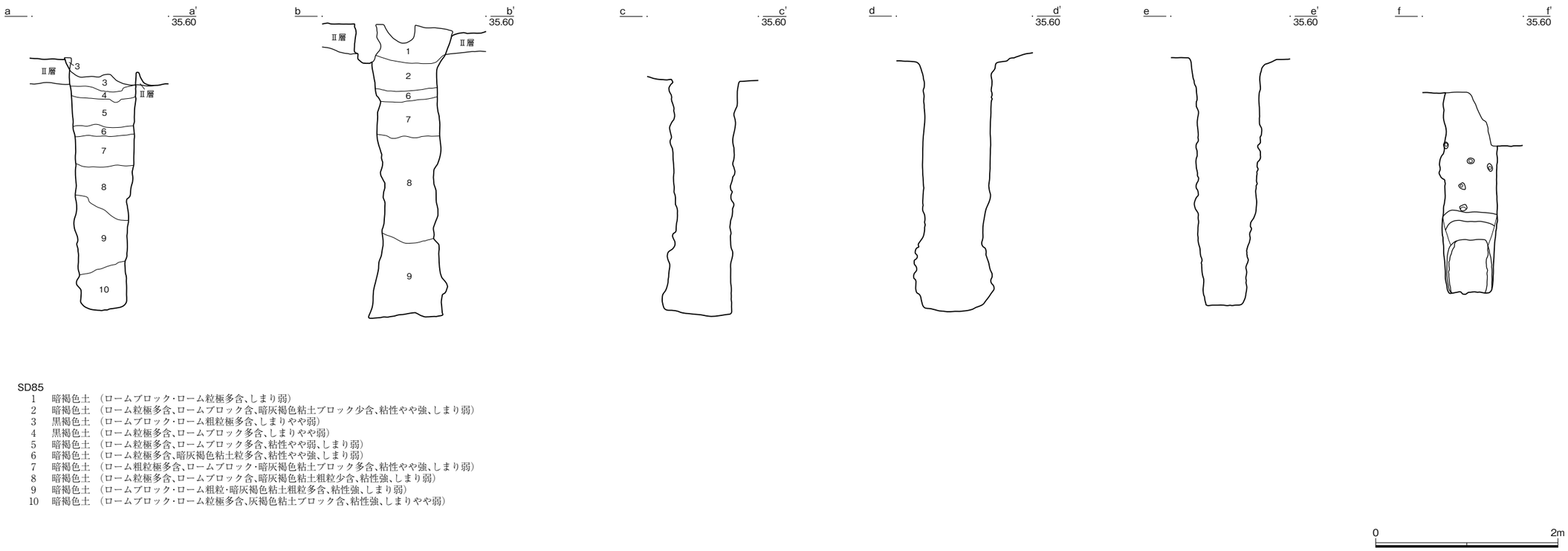
Ⅲ-14図　SL76



SK218
1　暗褐色土　（ロームブロック、ローム粗粒、黒色土粗粒多含、玉砂利含）
2　暗灰褐色土　（ローム粗粒極多含、玉砂利少含）
3　暗褐色土　（ローム粗粒多含、灰褐色粘土、砂粒少含、しまりやや弱）
4　黒褐色土　（ローム粒多含、遺物多含、粘性やや強、しまりやや弱）

Ⅲ-15図　SK218

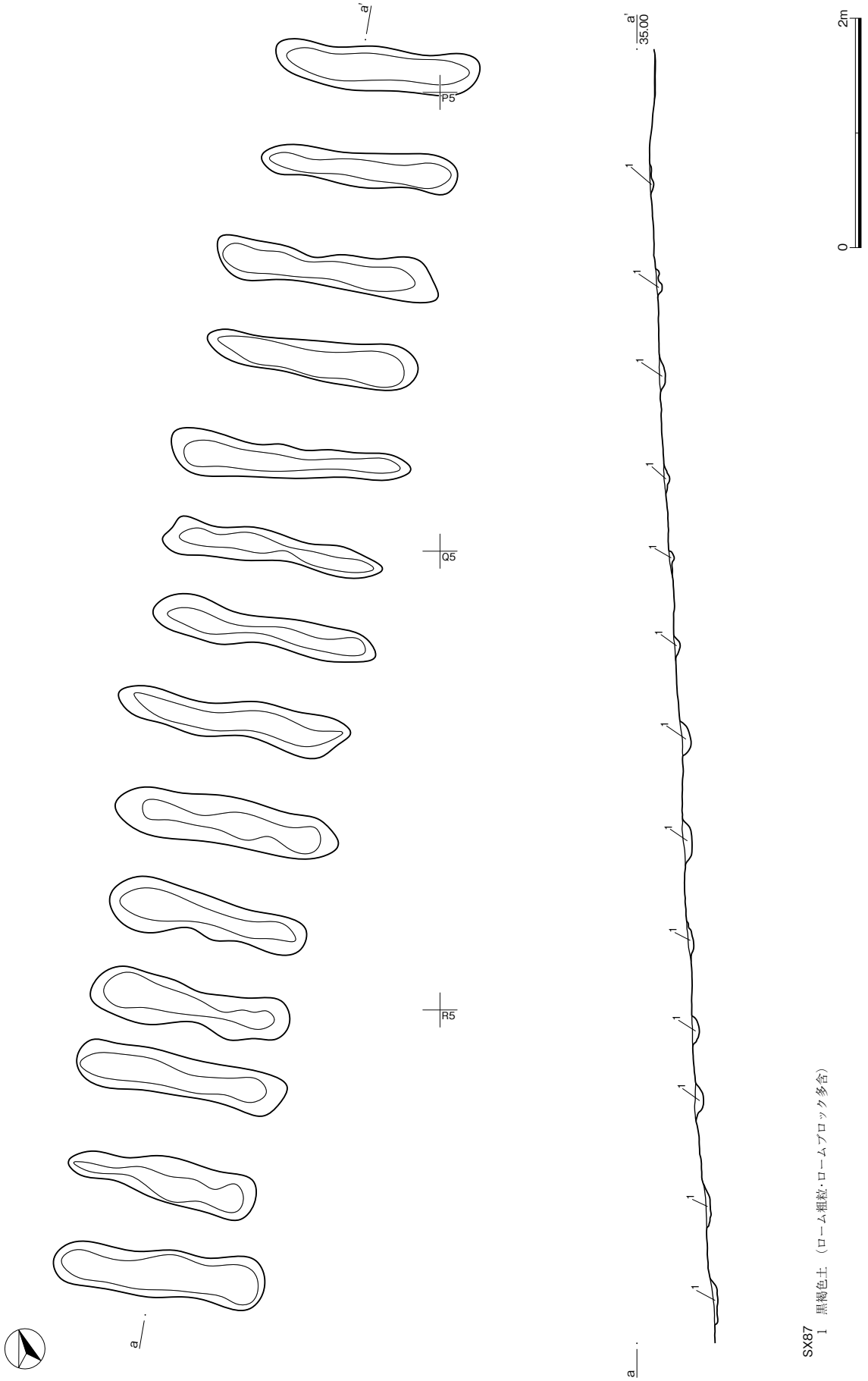




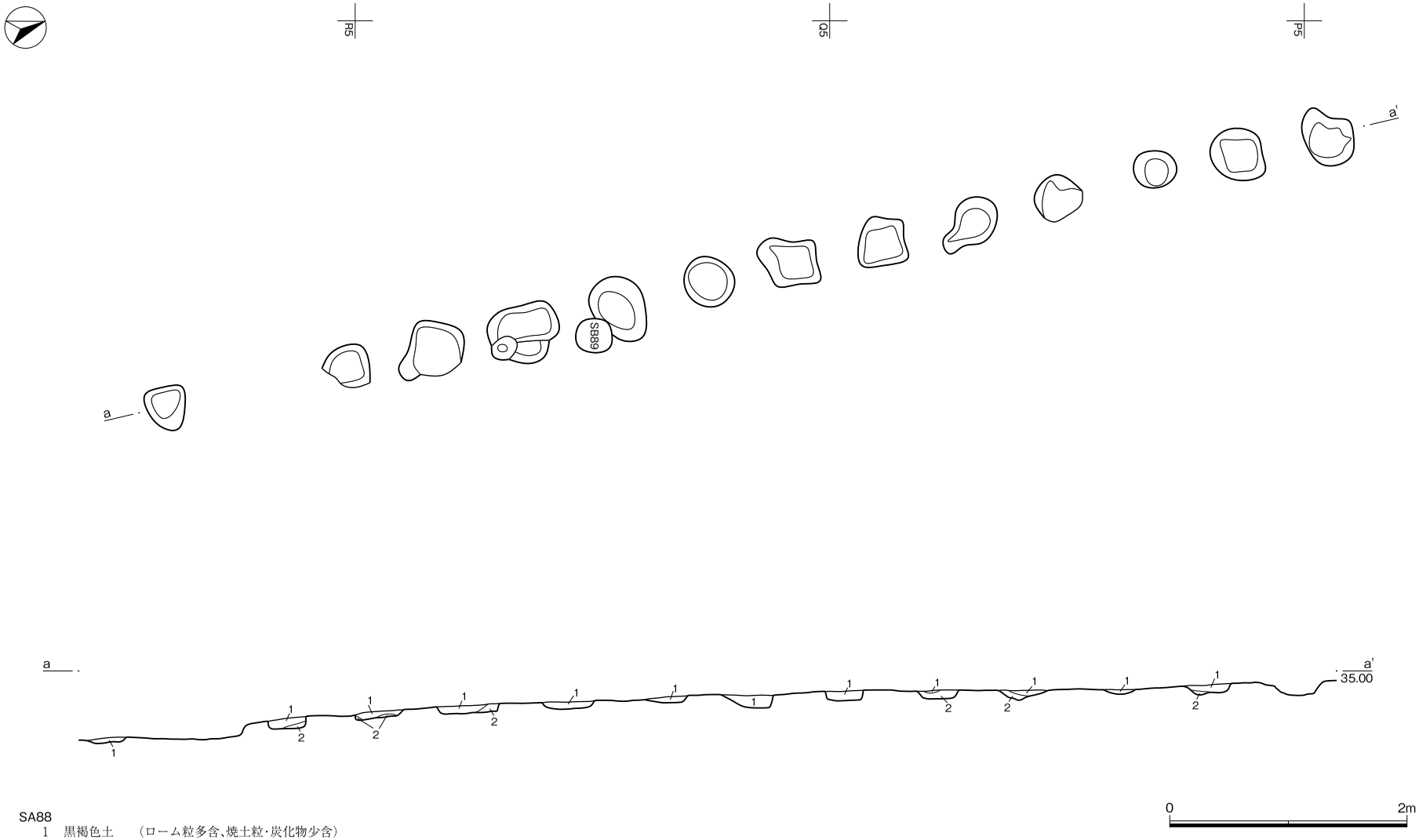
SD85

1　暗褐色土　（ロームブロック・ローム粒極多含、しまり弱）
2　暗褐色土　（ローム粒極多含、ロームブロック含、暗灰褐色粘土ブロック少含、粘性やや強、しまり弱）
3　黒褐色土　（ロームブロック・ローム粗粒極多含、しまりやや弱）
4　黒褐色土　（ローム粒極多含、ロームブロック多含、しまりやや弱）
5　暗褐色土　（ローム粒極多含、ロームブロック多含、粘性やや弱、しまり弱）
6　暗褐色土　（ローム粒極多含、暗灰褐色粘土粒多含、粘性やや強、しまり弱）
7　暗褐色土　（ローム粗粒極多含、ロームブロック・暗灰褐色粘土ブロック多含、粘性やや強、しまり弱）
8　暗褐色土　（ローム粒極多含、ロームブロック含、暗灰褐色粘土粗粒少含、粘性強、しまり弱）
9　暗褐色土　（ロームブロック・ローム粗粒・暗灰褐色粘土粗粒多含、粘性強、しまり弱）
10　暗褐色土　（ロームブロック・ローム粒極多含、灰褐色粘土ブロック含、粘性強、しまりやや弱）

Ⅲ-16図　SD85



Ⅲ-17図 SX87



SA88
1　黒褐色土　（ローム粒多含、焼土粒・炭化物少含）
2　暗黄褐色土　（ロームブロック・ローム粒主体、しまりやや弱）

Ⅲ-18図　SA88

第２節　遺物

（1）出土遺物の概要

本地点からはコンテナ総数約 11 箱（磁器・陶器・土器・その他）が出土している。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類（2)」（東京大学埋蔵文化財調査室 2014）によった。人形玩具の分類基準は「東京大学構内遺跡出土人形玩具の分類」（東京大学埋蔵文化財調査室 2012）によった。数量分析は様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。それを行うにあたっては一定以上の数量（調査室では推定個体数 100 個体以上に設定）を必要とする。本地点では遺物の出土点数が少ないため数量分析を行うことができなかった。そのため、個々の年代観に拠った。駒場地区において、第一高等学校（一高）の遺物や統制番号の付された遺物が出土しており興味深い。

SL76（Ⅲ－19 図）

１は常滑系陶器大甕で TG-15 に分類される。粘土紐を巻き上げて作られる紐造り技法である。内外面鉄泥。内面には指頭痕が顕著に残る。胴部下半には積み重ねの為の凹みが残る。上部欠損。胎土は橙褐色で白色粒子を含む。尿から生成された炭酸カルシウムが内面に付着している。

SD85（Ⅲ－19 図）

１は瀬戸・美濃系青磁皿である。口縁部は厚みを持っている。クロム青磁。２は瀬戸・美濃系陶器瓶である。外面には鉄で文字が書かれている。肩部より上部のみ。

３～５は瓦である。３、５は軒桟瓦。３は右側欠損。角は面取りされている。文様は中心飾り上部には列点が付き左右の唐草にはくびれを持つ。いわゆる東海系。文様帯の左脇に「∧」「本」の刻印が押されている。文様の中心飾りが大形化しており、18 世紀末以降の特徴を持つ。５の軒丸部は巴文と連珠の間に圏線が巡らない連珠三つ巴文。軒平部は中心飾りの中央に分割線があり脇は単線になっている。唐草の巻き込み先端が円盤状になっている。子葉は内側にくびれが 2 箇所みられ、上端が長く、下端は唐草の方に長く伸びる。４は桟瓦。小口に刻印。「□」の中に「十八」。

SK218（Ⅲ－20、21 図）

１～９は磁器。１～３は碗である。１は端反碗でゴム印と手描きによる文様。輪郭が縁取られ、ダミは手描きされている。高台内に統制番号あり。「岐阜」「366」。２は小丸碗。口縁部はやや丸みを帯びている。口縁部圏線。「東京大學教養學部」「大學」。昭和 25（1950）年学制の変更により第一高等学校から東京大学教養学部になった。３は小丸碗。「イチョウ」のマークの中に「大學」。口縁部は真っ直ぐに立ち上がり、高台はわずかに「ハ」の字に開いている。４は皿。型皿。厚く重い。中央には第一高等学校の校章がプリントされている。校章は「武」を表す「柏」の３葉と「文」を表す「橄欖」の３葉６実を組み合わせたものである。第一高等学校は昭和 10（1935）年に東京帝国大学農学部と用地を交換し、駒場に移転した。昭和 25（1950）年学制の変更により廃校。高台内に統制番号あり、「岐阜」「1065」。５、６は丼鉢の蓋と身である。第一高等学校の校章がプリントされている。高台内に統制番号あり、「岐阜」「1065」。４の皿と共に使用されたのであろう。７は第二次大戦中の非常食用缶詰の代用品として作られた「防衛食」の容器で蓋がつくものである。真空にして食料を保存した。同様の型のもので縦に「防衛食」と書かれているものが多く伝世されている。碁笥底。畳付けと口縁部のみ無釉。８は胴部断面菱形。高台内は無釉でゴム印で統制番号が押されている。「岐阜」「8□6」。ガラスの代用品として第二次大戦中に作られた瓶。化粧瓶おそらく男性用のトニックやリキッドの容器であろう。口部にはネジ山が螺旋状ではなく平行に切られている。本遺構より出土している同器種の製品には統制番号は付されていない。９は化粧品メーカーである平尾賛平商店から発売されていたレートクリームの瓶。ガラスの代用品として第二次大戦中に作られた。本遺構からは蓋は出土していないが中央に「LAIT」の文字が入る蓋が付くものと思われる。

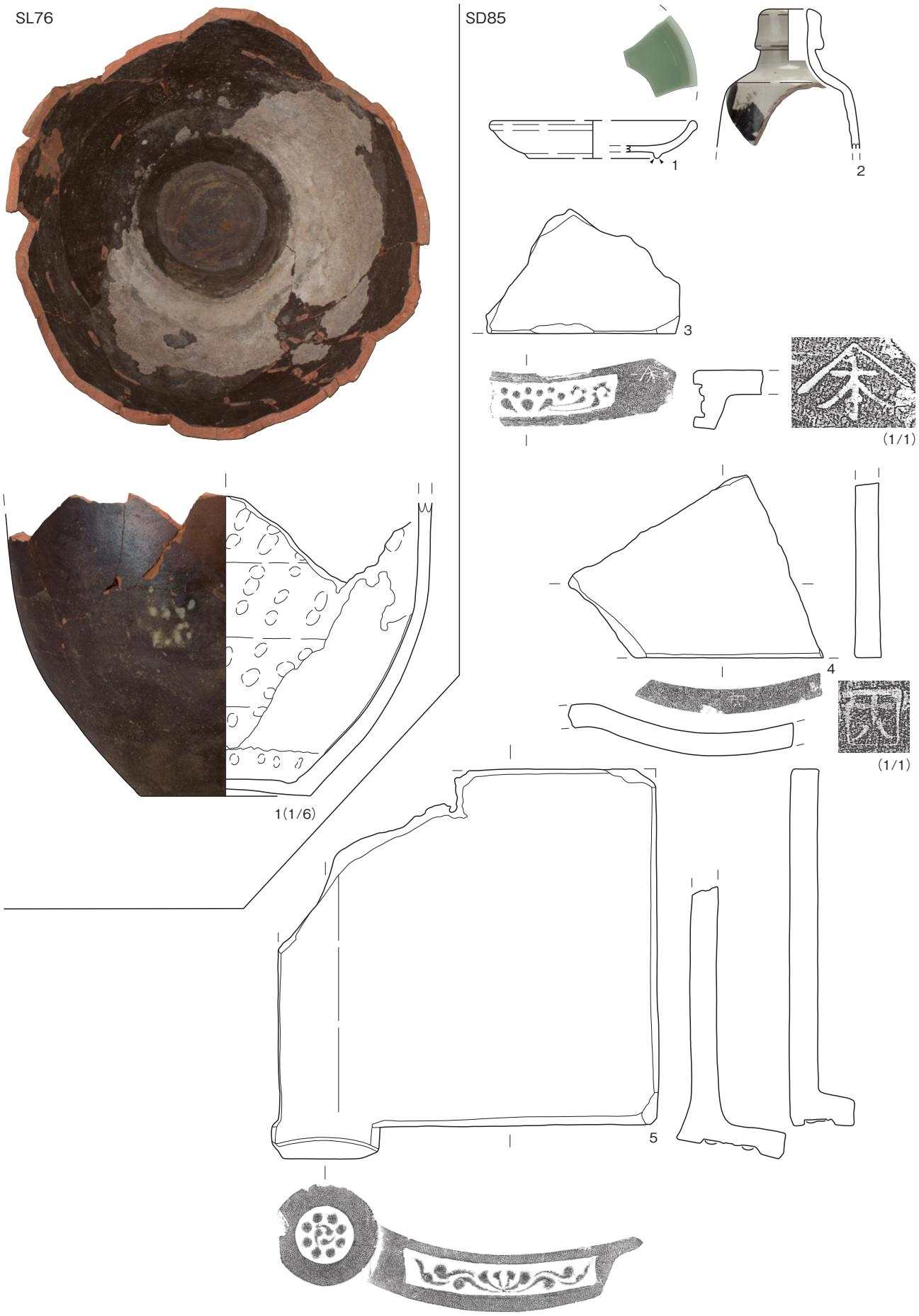
10 ～ 12 は人形・玩具である。10 は磁器。「プラハの幼子イエズス」の像。右手で慈悲を与え、左手に青い地球を持つ。型作り。中空。両脇にバリの痕が残る。背面は平らで、丸い穴が開く。壁などに掛けるためか。11 は土製品。型作り。中実。両脇にバリの痕が残る。首は後からはめ込まれている。黒・青・橙の顔料が塗布されており部分的に残る。左手に棒状のものを持ち、右手を挙げている。胎土は浅黄橙色。底部に小さな穴あり。明治期以降のものである。12 は土製品。型作り。中実。両脇にバリの痕が残る。おなかをふくらませる狸。胎土は灰色。橙の顔料が塗布されており部分的に残る。明治期以降のものである。

13 は骨角製品である。白碁石でハマグリ。縦に成長線が入る。径は 1.2cm。厚さ 0.5cm。

14 ～ 17 はガラス製品。14 は牛乳瓶。口に近い部分は歪んでおりはっきりしないが、王冠栓であろう。なで

肩。色はわずかに緑色がかった無色透明。「泡」や「筋」が見られる。エンボス加工で「消毒」「全乳」「百八十瓦」。「瓦」はグラム。ラベルを貼るための楕円形の高まりあり。次第に広口瓶に入れ替わるが、この形も第二次大戦頃まで残るようである。15 はリボンシトロン等のサイダー瓶。王冠栓。色は淡緑色半透明。エンボス加工で「大日本麥酒 株式會社製造」「BNK」底部には「10」「2」。大日本麥酒株式會社は明治 39（1906）年～昭和 24（1949）年に在った会社で、戦後にサッポロビールとアサヒビールに分割された。16 は篠崎インキ製造株式会社のインク瓶。ライトインキ。色は淡緑色半透明。エンボス加工で底部には「RIGHT　INK」「2OZ」「IN JAPAN」。被熱して歪んでいる。昭和 16（1941）年の広告には三十銭の記載がある。17 は目薬瓶。色は青色半透明。文字やマークは見られない。

18 は 株式会社資生堂の歯ブラシ。樹脂製品。「資生堂銀座歯刷子 No.1」。商標の「花椿」。三列植毛。



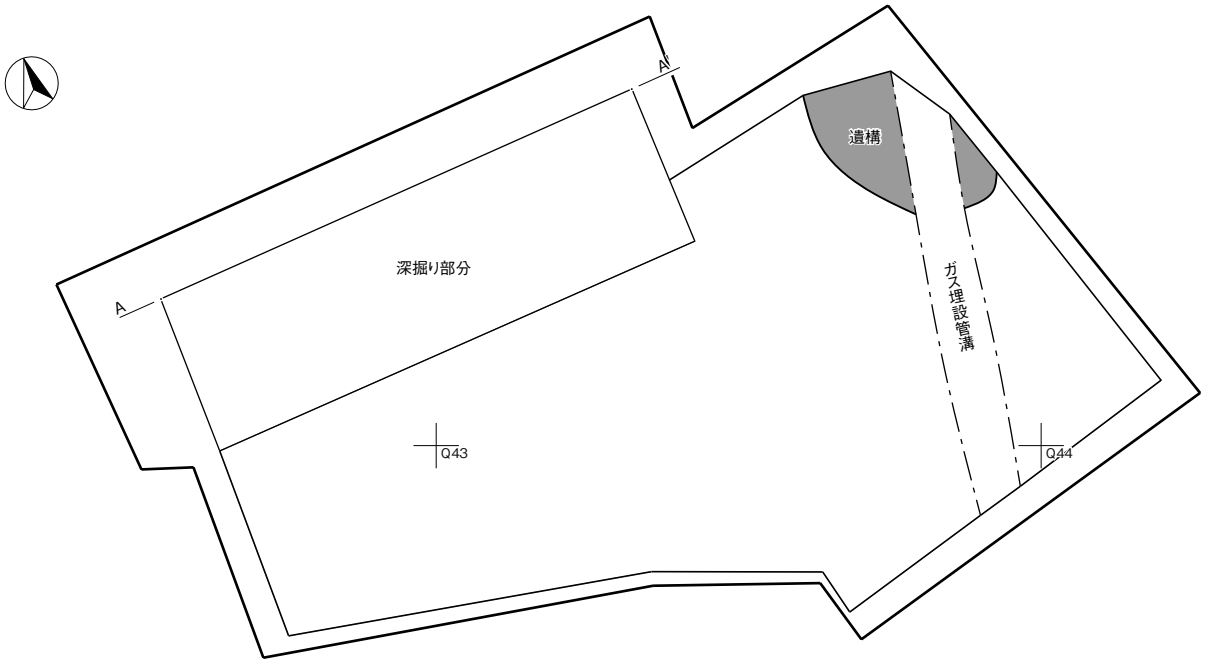
Ⅲ-19 図　SL76・SD85 出土遺物

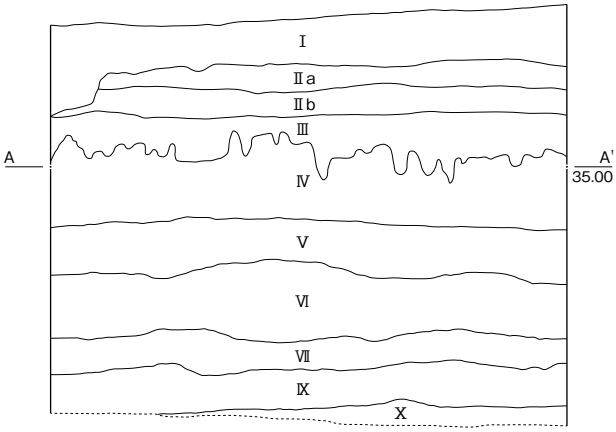
Ⅲ-20 図　SK218（1）出土遺物

Ⅲ-21 図　SK218（2）出土遺物

第Ⅳ章　ケヤキ移植地区の調査

南区内にあったケヤキを移植するため、移植先（P・Q42 ～ 43 グリッド）の調査を行った（Ⅳ－1 図）。当初予定していた区域から、使用中のガス埋設管が検出されたため、その西側を拡張した。埋設管の下に、形態から陥穴と推定される遺構が漸移層上面で検出されたが、上記の理由で形状確認に止めた。西側の拡張区からは遺構、遺物とも検出されなかった。また拡張区内北側にはローム層を削平する撹乱があり、撹乱内を深掘りし立川ローム堆積状況を調査・記録した。遺物は出土していない。





Ⅰ　層　表土
Ⅱa 層　暗褐色土　（φ10 ～ 30mm 大褐色～暗黄褐色塊斑状含、粘性、しまりやや強）
Ⅱb 層　暗黄褐色土　（赤色スコリア、ローム粒微量含）
Ⅲ　層　暗黄褐色土ローム層　（φ1mm 大黒色・赤色スコリア微量含、粘性、しまりやや強）
Ⅳ　層　黄褐色ローム層　（φ1 ～ 3mm 大黒色スコリア多量、φ1mm 大赤色スコリア含、粘性やや強、しまり強）
Ⅴ　層　褐色ローム層　（φ1mm 大黒色スコリア極多量、赤色スコリア多量、灰褐色スコリア微量含、粘性強、締まり極強）
Ⅵ　層　明褐色ローム層　（φ1mm 大黒色スコリア極多量、赤色スコリア・燈色パミス中量、灰褐色スコリア少量含、粘性強、しまり極強）
Ⅶ　層　暗黄褐色ローム層　（明褐色ローム斑状混入。φ1mm 大黒色スコリア多量、赤色スコリア少量、白色スコリア微量含、粘性強、しまり極強）
Ⅸ　層　暗褐色ローム層　（φ1mm 大黒色スコリア・黄色スコリア少量、赤色スコリア微量含、粘性、しまり極強）
Ⅹ　層　黄褐色ローム層　（φ1mm 大黒色スコリア、燈褐色スコリア少量、赤色パミス微量含、粘性、しまり極強）

Ⅳ-1図　ケヤキ移植地区

第Ⅴ章　一本梯子形遺構小考

はじめに

本調査地点北区北西部（C8・C9グリッド）より十字を連結させた形状の遺構が検出された。覆土中より丸釘や無文軒桟瓦が出土したことより、近代以降に帰属することが確認されている。

本遺構形態の類似例は、現在農学部などが置かれた東京大学本郷地区弥生構内・教育学部総合研究棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2011）、騎兵山遺跡（加藤建設 2006）、尾張徳川家下屋敷跡（東京都埋蔵文化財センター 2008）で報告され、報文からはいずれも近代遺構と位置づけられている。

本稿では、これらの形態、構造、付帯施設などの比較を通し、遺構としての共通性と、各々の遺構立地場所の検討から、本遺構の上部構造、性格を考察したい。また、本稿では、便宜上、通しとなる溝部を主幹部、それに直交する溝（長方形土坑）部を枝部と称し、十字を連結させた全体形状が、造園業で高木枝剪定などに用いられる一本梯子に類似していることから、一本梯子形遺構と称する。

1. 遺構各節

(1) 東京大学駒場構内の遺跡　駒場コミュニケーションプラザ地点 SX1（Ⅴ－1図）

報文中で触れた通り、本遺構は、主幹部に直交する3箇所の枝部が約200cm間隔で配置された形状を呈する。西側は調査区外に至り、全長及び直交する枝部数は不明であるが、調査区内での東西長は590cmを測る。南北方向枝部長辺はいずれも約300cmと等しい。壁面は垂直に立ち上がり、断面形は長方形を呈す。坑底幅は50～60cmとほぼ均一で、確認面からの深さは約90cm、標高は34.6～34.7mと全体的にほぼ水平に床付けされている。覆土は水平堆積をしているが、a－a'ラインでは坑底から間層を挟み、b－b'ラインでは坑底直上に幅20cm、厚さ10～15cmを測る角材痕が確認された。また確認面から角材痕上端までの最大深度は約70cmを測る。この角材痕の遺存状態は悪く木質はほとんど腐朽しているが、掘方形状に対応して坑底全域に認められ、本遺構がこの材を埋設するための布掘り状掘方であることが確認でき、角材を土台とした基礎遺構と考えられる。材付近には五寸サイズの丸釘が斜方向に打たれていた痕跡も確認され、覆土の状態からは把握できなかったが、土台上に上部基礎材が組み上げられていたことが推定される。

本遺構の位置は、北区北西端（C8・C9グリッド）に当たり（Ⅴ－2図）、現在の駒場Ⅰキャンパスと明治36年のキャンパス建物配置図の敷地境界線、構内主要道路を基準に調査区を対比させたところ、T字形状建物（ト：食堂）とその南のL字形状建物（ク：不明）に挟まれた空閑地に位置することが確認される（Ⅴ－3・4図）。周囲には賄所（チ）、機関室及び浴室（ヘ）、物置（ヨ）、寄宿舎（ニ）と、学生の寮生活関連建物が集住する区域であることが判る。（ク）L字状建物の用途については、しばらく凡例に記載がないが、大正6年の配置図から昭和11年の第一高等学校寄宿舎（いわゆる駒場寮）建設まで寄宿舎と示されていることから、当初より学生生活施設であったと考えられる。

この建物変遷から、遺構検出位置は農学部（農科大学）構内において、一貫して寄宿舎生生活区域として使用されていたことが確認され、本遺構は、学生の日常生活に関する施設であったことが想定される。

(2) 東京大学本郷構内の遺跡　教育学部総合研究棟地点 SD11（Ⅴ－5図）

本遺構は、本郷地区弥生構内・教育学部総合研究棟地点東区南端部より検出された。報文ではブリッジを挟んだ単一遺構として取り扱われているが、本稿では各々独立した遺構と考え、SD11西、SD11東として、以下に状況を述べる。SD11東は全長806cm、幅56～70cmの主幹部に、長さ260cm、幅52～67cmの枝部が200cm間隔で4箇所配置される。SD11西は、調査区外にかかり、全容は不明であるが、調査区内では200cm間隔で2箇所の枝部が検出された。約10m西方の西区には存在しないことから、枝部は最大でも6箇所に収まる（Ⅴ－6図）。深さは主幹部、枝部ともほぼ同じで、確認面からの深さは最大で40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底にはSD11西の枝部、SD11東の主幹部及び最西端枝部において幅30～40cm、深さ10～20cmを測る溝が作出されている。

遺物が出土していないため詳細な年代は不明であるが、関東大震災後に構築された硬化面にパックされていることから、それ以前の近代遺構と考えられる。近代以降関東大震災までの当該地は、東京府用地（明治4？～）→東京府癲狂院（明治14～19）→第一高等学校（明治

22～昭和10）と変遷している。報文では建物配置図の検討から第一高等学校の運動場に伴う施設の可能性を指摘している。Ⅴ－７図に現在の弥生構内での位置を示した。前節同様に敷地境界線を基準に関東大震災直前の第一高等学校建物配置図と対比を試みた所、敷地南東部の運動場南端部に位置することが確認された（Ⅴ－８図）。

（3）世田谷区　騎兵山遺跡 KT01・KT10（Ⅴ－９図）

本調査は、筑波大学附属駒場中・高校の南側に位置する財務省池尻住宅建て替えに伴う調査で、一本梯子形遺構は、Ａ～Ｆ区に分割された調査区のうち、調査区全域のほぼ中央にあたるＣ区南端（KT01）、Ｅ区西端（KT10）より検出された（Ⅴ－10図）。

KT01は、遺構西部が調査区外に伸びるため全容は不明であるが、東西方向に伸びる主幹部の西壁面を数箇所探針した所約33cmで地山に達したことから、本遺構主幹部全長は400cmを測り、全長230cmの枝部が２箇所付属する形態と推測されている。溝幅は共に約60cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。枝部間隔は245cm、坑底深度は確認面から最大140cmを測る。坑底直上には、幅20cm、厚さ12cmを測る角材が掘方に沿ってキの字状に配置され、角材直上には安山岩と緑色凝灰岩製の切石が２段積み上げられている状態で１箇所検出されている。また角材上面には約80cm間隔で長辺15cm、短辺5cmを測る長方形を呈する臍が穿たれている。主幹部に設置された臍のうち、枝部との交差部は垂直に穿たれているが、それを囲む四方の臍は交差部側側面が交差部に向けて斜方向に穿たれている。枝部の臍も同様に、交差部側側面は交差部に向けて斜方向に穿たれている。臍以外にも形状の異なる加工痕が数箇所認められ、転用材の可能性が指摘されている。

KT10は、KT01の東方約15mに位置し、ほぼ同一の主軸を呈す。主幹部両端には昇降用と推定されるテラスが設けられ、テラス内側での主幹部全長は470cm、枝部全長は200～212cm、確認面からの深さは最大138cmを測る。枝部間隔はKT01同様245cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦に整形されている。枝部両端坑底直上には長辺35cm、短辺25cm、厚さ2.8cmの板目材が置かれ、その上に角材が置かれている。角材は幅21～22cm、厚さ12cmを測り、上面には約80cm間隔で臍が穿たれている。臍はKT01同様の加工が施され、交差部を中心に四方に配されている。角材直上には緑色凝灰岩製の２段積み切石が２箇所で確認され、また東側枝部南端の臍には丸杭が立位の状態で検出されており、上部構造との関連性が指摘されている。

本調査地点は、江戸時代は幕府御用屋敷の添地に比定されるが、それに関連する遺構が検出されていないことから、本遺構は近代以降の所産と考えられ、明治24年～昭和20年まで存在した騎兵第一大隊（明治29年より騎兵第一連隊と改称）に関連する遺構と考えられている。

現状地形図に本遺構の位置を落とし（Ⅴ－11図）、敷地境界などを基準に明治40年の地形図に対比させたところ、ほぼ崖線に沿うように台地縁辺部に配置された建物の内側に隣接する位置に対比され、運動場周縁部に構築された施設であることが確認された（Ⅴ－12図）。

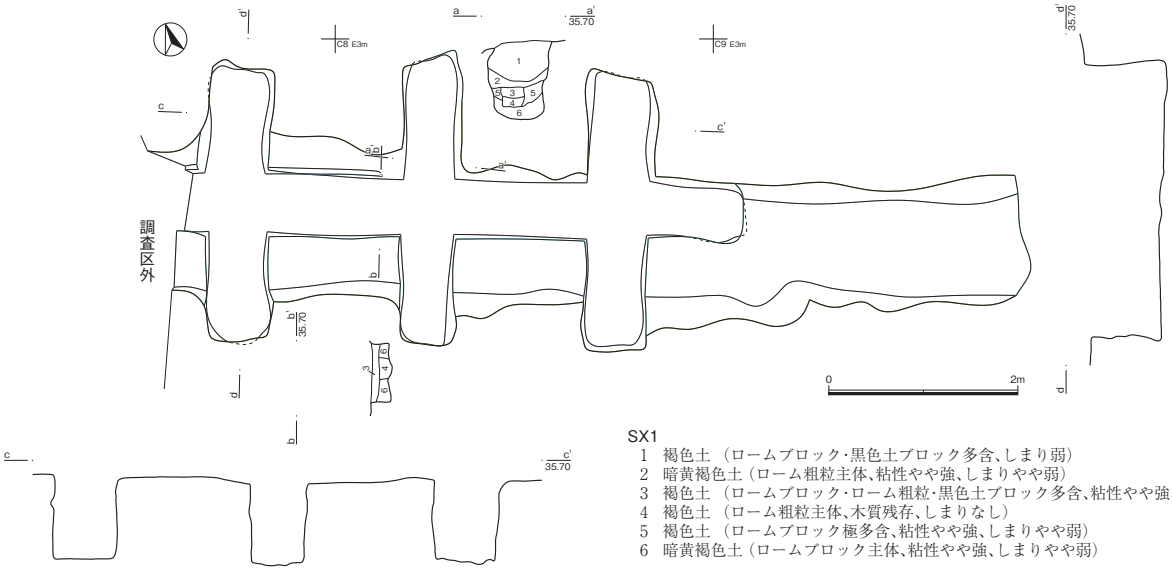
（4）新宿区　尾張徳川家下屋敷跡１区8-b・３区358号･362a号･963号（Ⅴ－13～16図）

本調査は、尾張徳川家下屋敷跡遺跡のうち第５次調査地区、国立国際医療センター新棟整備第Ⅰ期工事に伴う調査である。一本梯子形遺構は、調査区ほぼ中央に位置する３区358号・362a号・963号（Ⅴ－13図）、調査区東部に位置する１区8-bの４基が検出された（Ⅴ－15図）。

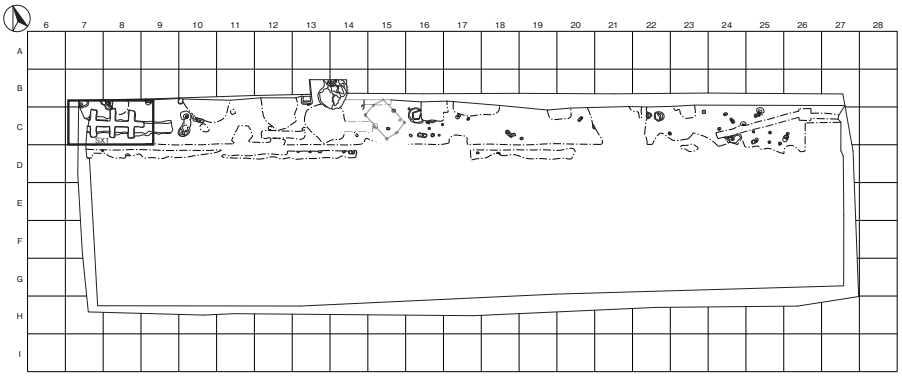
３区で検出された358号・362a号・963号は、撹乱を挟み一連の遺構と考えられている。報文によれば、掘方の幅（本稿でいう枝部長）は2.7m、３遺構の総延長は36m、確認面からの深さは86～115cmを測る（Ⅴ－14図）。中央には捨て石（根石）列が、358号と362a号は100cm間隔で東西に、963号は90cm間隔で東西に並ぶ。南北方向では、358号は100cm間隔、362a号は75～90cm間隔、963号は90cm間隔で並ぶ。その上には間層を挟みさらに円礫が置かれている。配置された円礫の様相や類似する十字形遺構の所見から、下部礫上に十字に組んだ角材を置き、上部礫でそれを固定し、十字角材は柱状の上部施設を支持する地中梁と推定されている。

枝部芯々間隔は、上段円礫芯々間で204cmを測り、報文中の根石列間隔とほぼ一致する。また報文によれば、358号のみ掘方に重複が認められ、改修が行われたことが指摘されており、重複痕跡が認められない362a号とは別遺構である可能性が考えられる。

調査地区は、江戸時代は尾張徳川家下屋敷に比定されるが、維新後の明治６年に陸軍兵学寮戸山出張所（明治７年に陸軍戸山学校と改称）が置かれ、士官・下士官の教育施設となった。昭和４年に調査地区を含む敷地南東部が東京衛戍第一病院となり終戦を迎える。報告によれば、一連の遺構は、東京衛戍第一病院関連遺構より古いとされることから、陸軍戸山学校に帰属する。



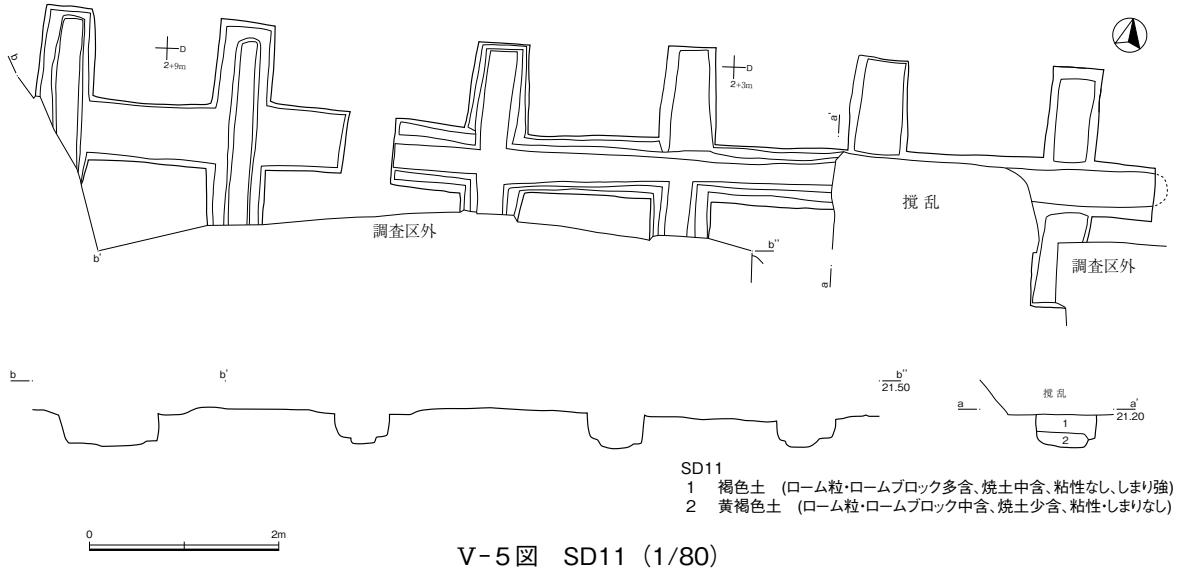
Ⅴ-１図　SX1



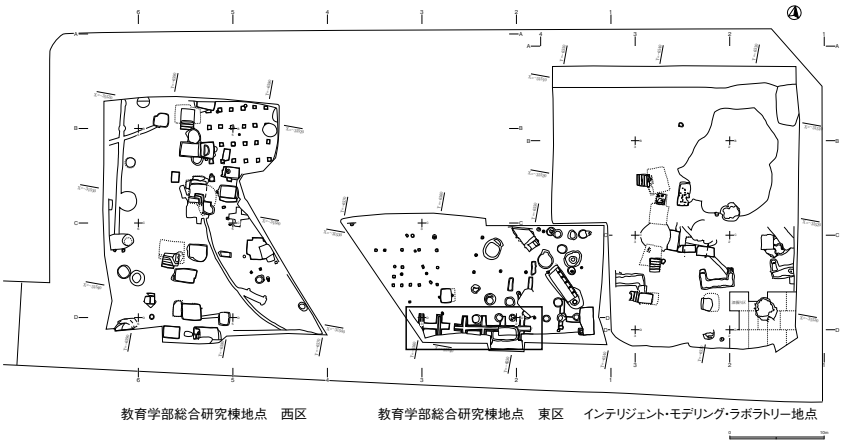
Ⅴ-２図　遺構配置図（1/800）

Ⅴ-3 図　現在のキャンパスと遺構位置（1/5000）

Ⅴ-４図　明治 36 年の農科大学建物配置図に対比させた遺構位置

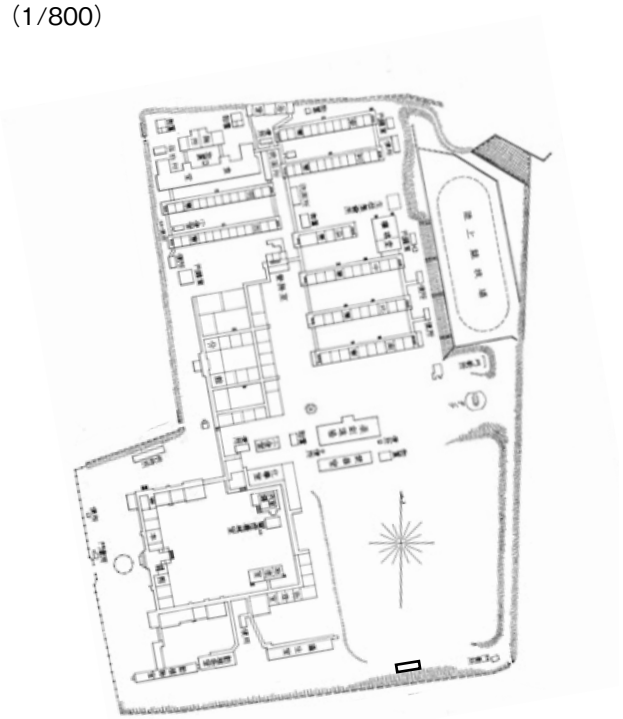


V－5図　SD11（1/80）

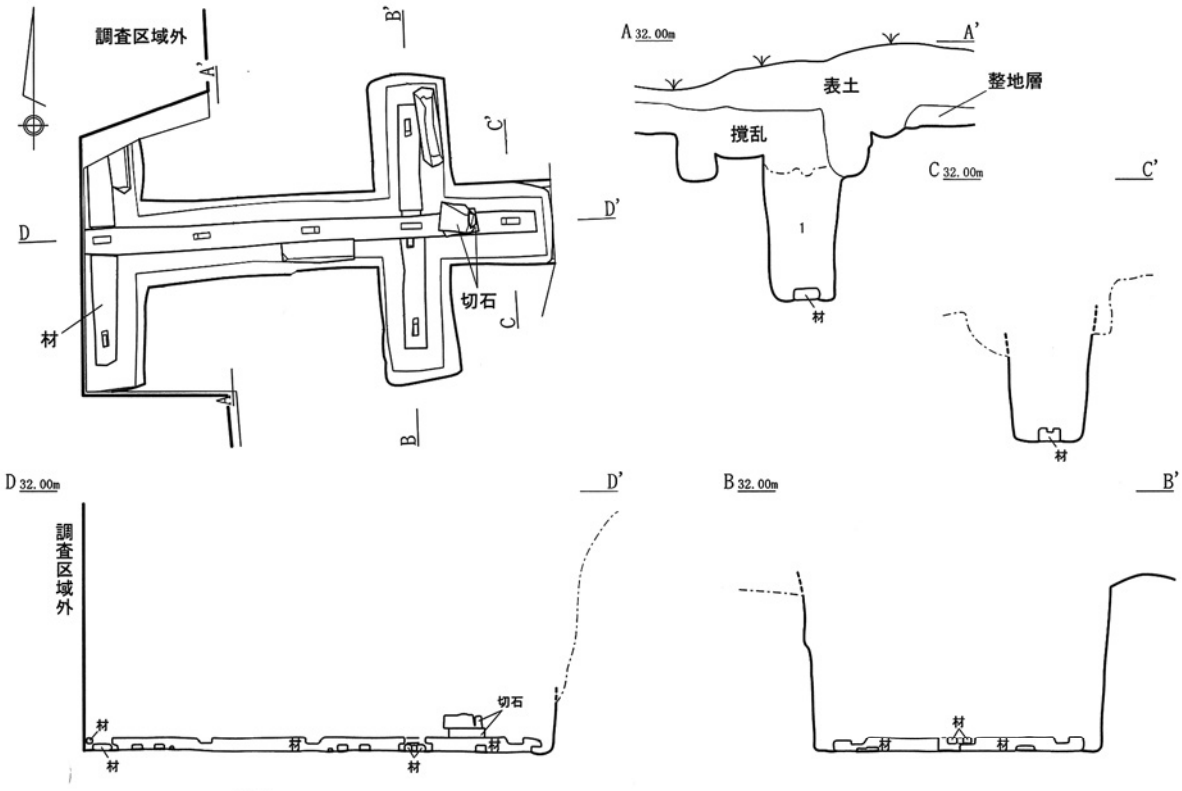


V－6図　遺構配置図（1/800）

V－7図　現在のキャンパス図と遺構位置（1/5000）

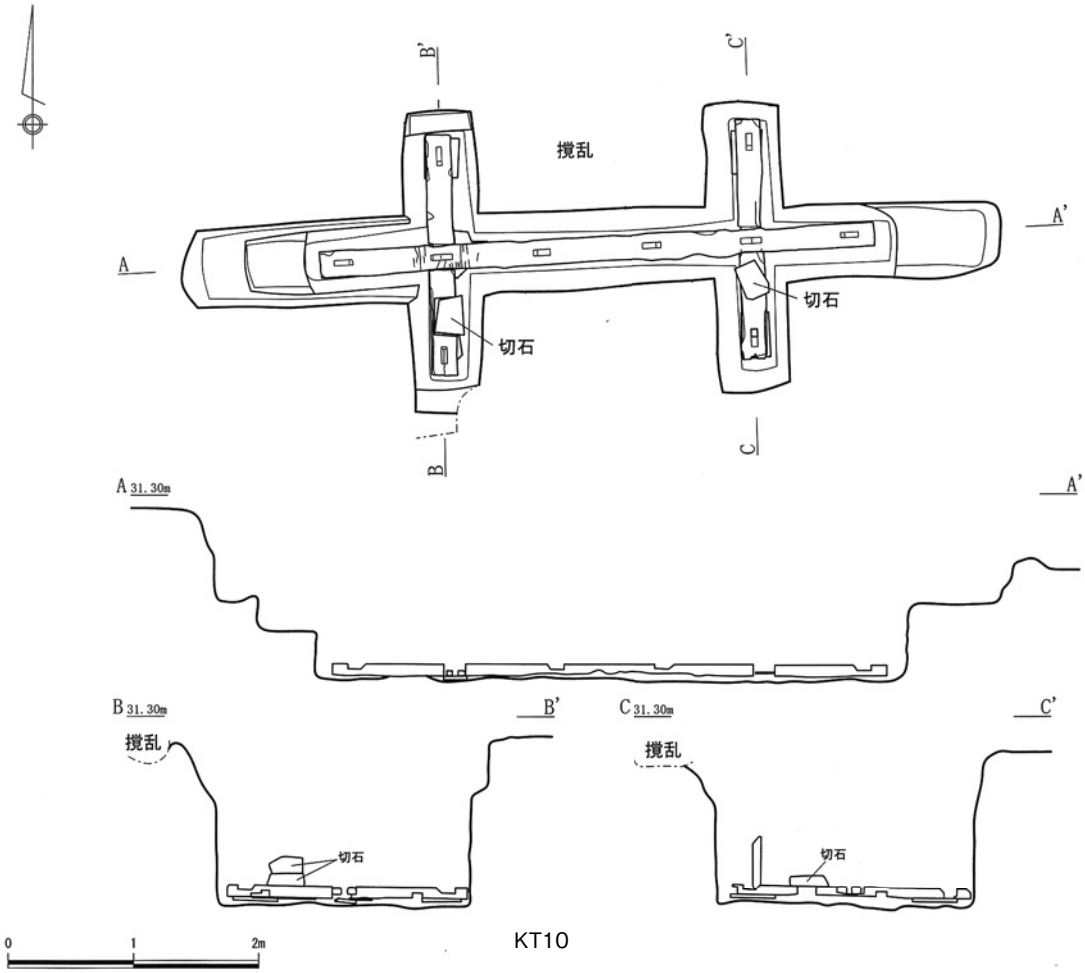


V－8図　大正 12 年の第一高等学校建物配置図に対比させた遺構位置



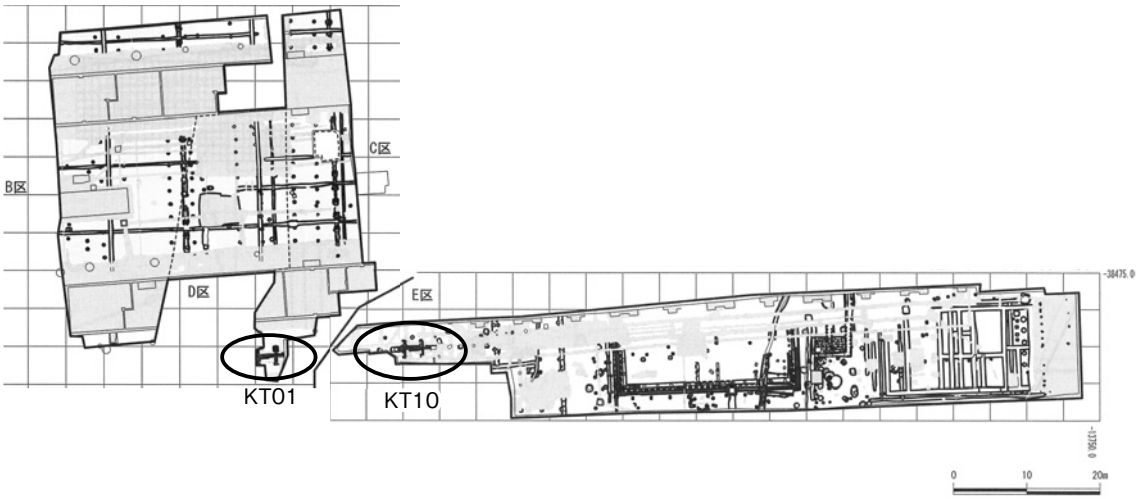
KT01
1 褐(10YR4/6) 粘性4, しまり3 ローム粒・ブロック(φ～100mm)主体層で、黒色土粒(φ～2mm)を微量含む

KT01

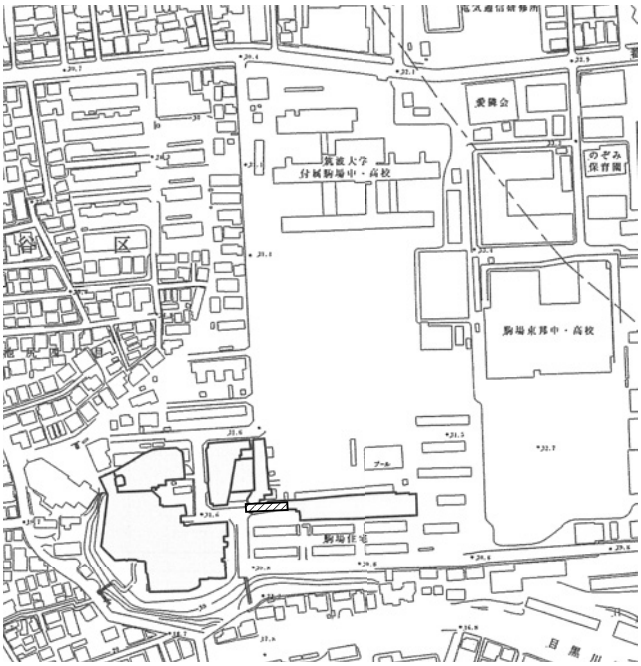


KT10

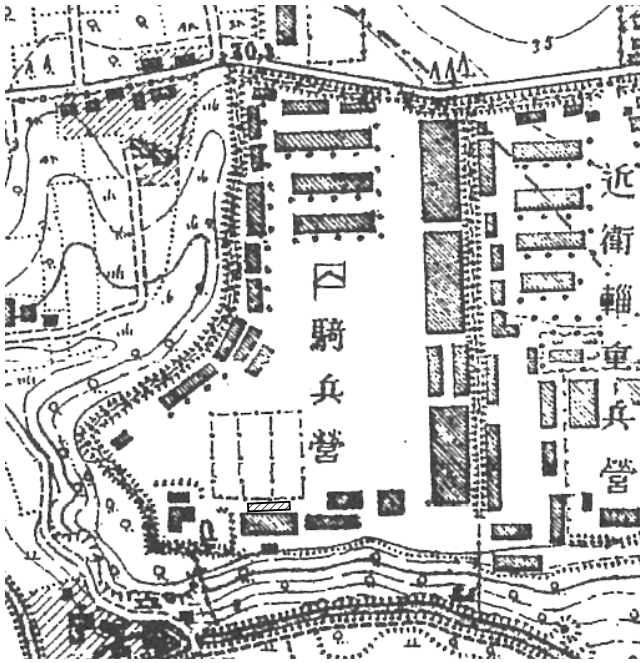
Ⅴ-9図　騎兵山遺跡　一本梯子形遺構



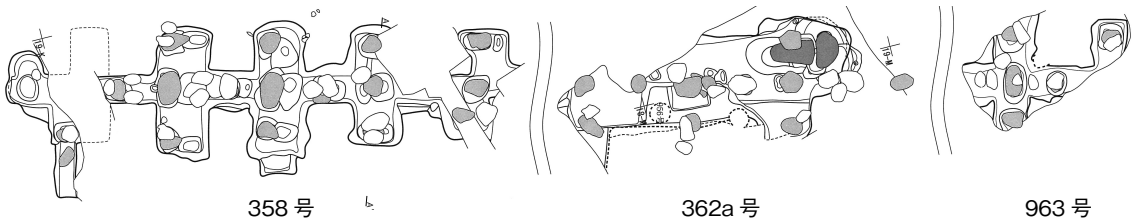
Ⅴ-10 図　騎兵山遺跡　遺構配置図



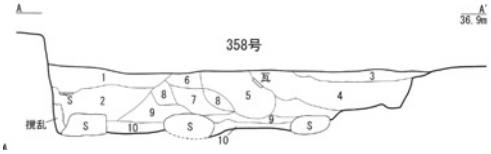
Ⅴ-11 図　現在の地形図と遺構位置
（斜線枠が遺構位置）



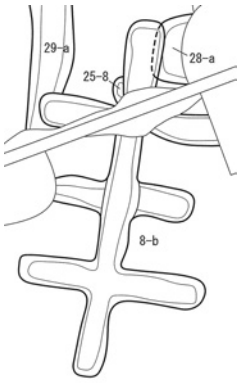
Ⅴ-12 図　明治 40 年の地形図に対比させた遺構位置
（斜線枠が遺構位置）



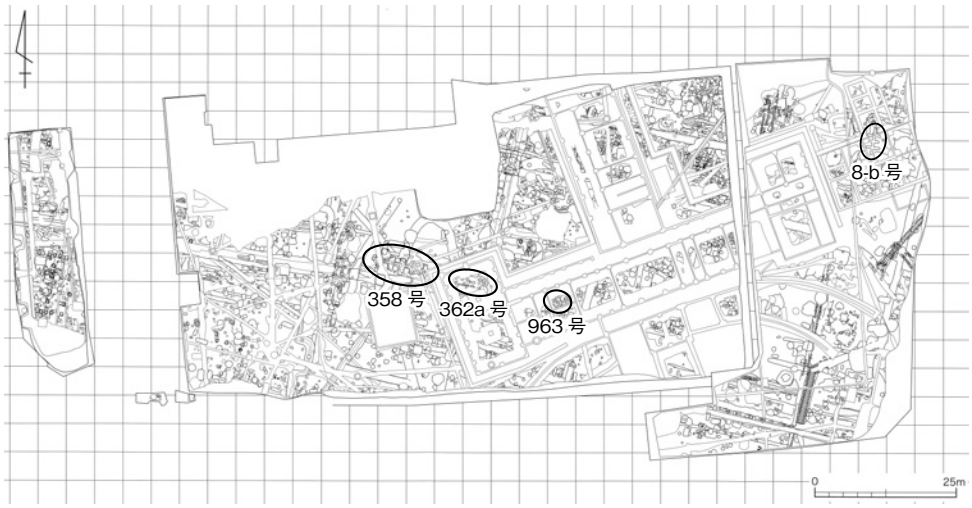
V-13 図　3 区 358・362a・963 号（1/150）



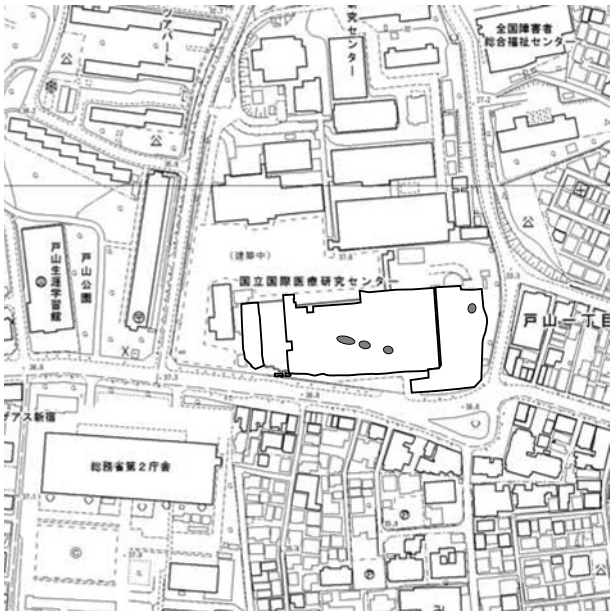
V-14 図　3 区 358 号断面図（1/60）



V-15 図　1 区 8-b（1/80）



V-16 図　調査区全体図にみる一本梯子形遺構（1/2000）



V-17 図　現況図と遺構位置（1/5000）
（網掛け楕円形部が遺構位置）

V-18 図　大正 12 年の地形に対比させた遺構位置
（網掛け楕円形部が遺構位置）

現状地形図に本遺構の位置を落とし（Ⅴ－17図）、敷地境界などを基準に大正12年の地形図に対比させたところ、敷地南東部に配置された建物群の内側に対比され、中庭状の空閑地に構築された施設であることが確認された（Ⅴ－18図）。

本遺構に関する記述は、「Ⅶ　個別遺構の特徴」に詳細にまとめられているが、単独十字形遺構も検出されていることから、「『十字』基礎類」とした枠組みを設定し、平面形・規模から、

1類：大形土坑の底面に「十」字形に礎石基礎を配する。（1号、3号）

2類：細長い溝で「十」字を三つ連続させる。（8b、8c、144～153号）

3類：「十」字を多数並べ連続長大化する。（3区358号、362a、963）

4類：「一」字状に土坑を掘り込む。（28号）

5類：その他の類似形態（26号）

に分類され、本稿で扱った、駒場コミュニケーションプラザ地点SX1、教育学部総合研究棟地点SD11、騎兵山遺跡KT01、KT10は、2、3類に該当する。

2，各遺構の構造比較

(1) 規模（以下、遺跡・地点名称は省略する）

枝部芯々間隔は、SX1が約200cm、SD11が約200cm、KT01･KT10が245cm、358号が約200cmを測り、KT01･KT10以外は、ほぼ200cm間隔を想定して構築されたと考えられる。

溝幅は、SX1、SD11、KT01・KT10が約60cm、尾張徳川家下屋敷では作り替えが指摘された358号では枝部溝幅が約100cmを測るが、主幹部溝幅及び963号枝部溝幅では60～70cmを測ることから、本来は60cm幅を意識して構築されたと考えられ、いずれの事例も60cm幅を想定して掘削されたと推定される。

主幹部中心線から枝部端までの長さは、SX1が約140～160cmでおおむね140cm、SD11が120～130cmで平均120cm、騎兵山遺跡が105～125cmでおおむね120cm、尾張徳川家下屋敷が110～130cmでおおむね120cmを意識している。

以上のように枝部に関しては、騎兵山遺跡事例が枝部芯々間隔約245cmと広い値を示した他は、ほぼ200cmと差異はなく、溝幅、主幹部中心線から枝部端までの長さもほぼ共通した値であることから、地上施設を支持する強度に類似性を求めることができる。

(2) 内部構造・付帯施設

次に坑底に設置された付帯施設について比較を試みる。

SX1は、埋積土層堆積状況から、坑底直上もしくは間層を挟み、幅約20cm、厚さ約10cmを測る角材痕が遺構全域で確認され、一本梯子形状の捨土台が坑底直上に設置されていたことが確認された。この木材痕上には斜方向に打たれた五寸釘が確認され、上部構造に斜方向の構造材が組まれていたことが考えられる。

SD11は、SD11西の枝部と、SD11東の主幹部、枝部西端、西から2本目枝部南側の坑底に幅20cm、深さ10～15cmの溝状の掘方を有する。その部分の覆土は、粘性・しまりがなく木材痕の可能性も考えられる。これ以外の礎石、柱痕などの施設情報は報告されていないが、掘方坑底直上に捨土台を埋設し、部分的に確認された溝状掘方は材の組合せのための高さ調整を目的としたと推定される。

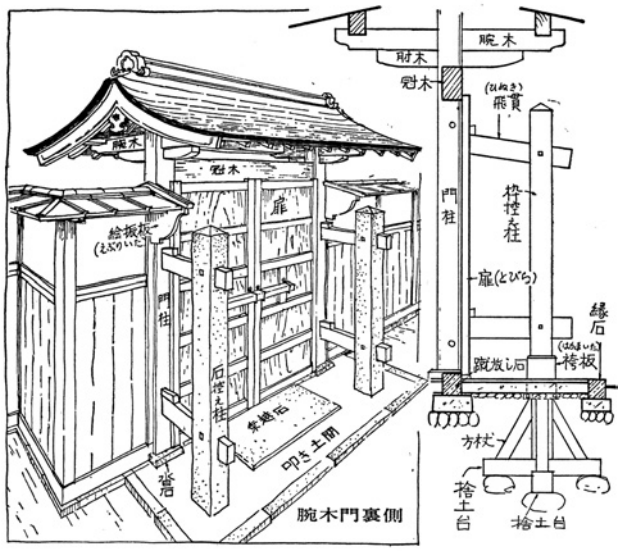
KT01・KT10は、枝部下坑底直上に長辺35cm、短辺25cm、厚さ2.8mmを平均とする板目板材を設置した上に、枝部を下に主幹部を上に幅21～22cm、厚さ12cmの角材を組み合わせて、連続十字状の土台を設置している。各々の材には長さ15cm、幅5cmの臍が80cm間隔で穿たれている。先述したように交差部の臍は四方とも垂直に穿たれているが、それ以外の臍の交差部側側面のみ交差部に向かい斜方向に穿たれている。その様相から交差部には垂直方向の支柱が建てられ、支柱を囲む4箇所の臍はそれを支持する方杖が組み合わせられていたと考えられる。

358号は、主幹部に100cm間隔で根石が配置され、枝部では主幹部との交差部を合わせ100cm間隔で配されている。その上には間層を挟みさらに円礫が置かれている。同類十字形遺構の状況から、下部礫上に十字に組んだ角材を置き、上部礫でそれを固定する構造で、十字角材は地中梁と考えられている。

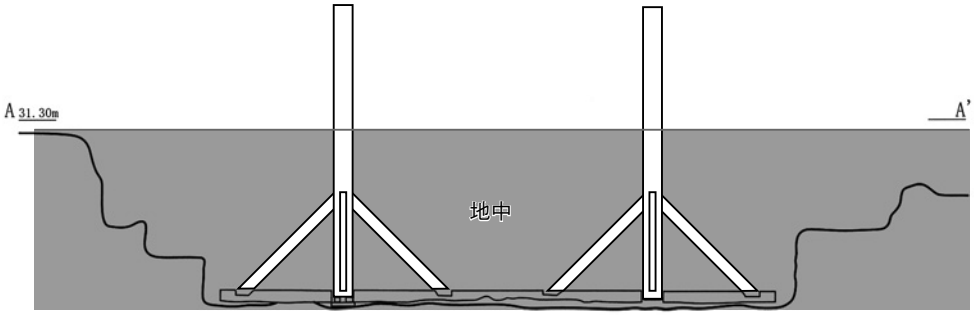
3. 一本梯子形遺構の機能

本稿で扱った事例は、坑底直上の土台構造に差は認められるが、一本梯子形に組まれた土台を埋設する点で共通する。残存事例から土台には幅約20cm、厚さ約10cmの角材が使用されたことが確認でき、掘方幅の共通性から、いずれの遺構も同規模の土台材が埋設され、土台の交差部間長、交差部－枝部端長の共通性から同規模、同構造を呈する基礎遺構と推定される。

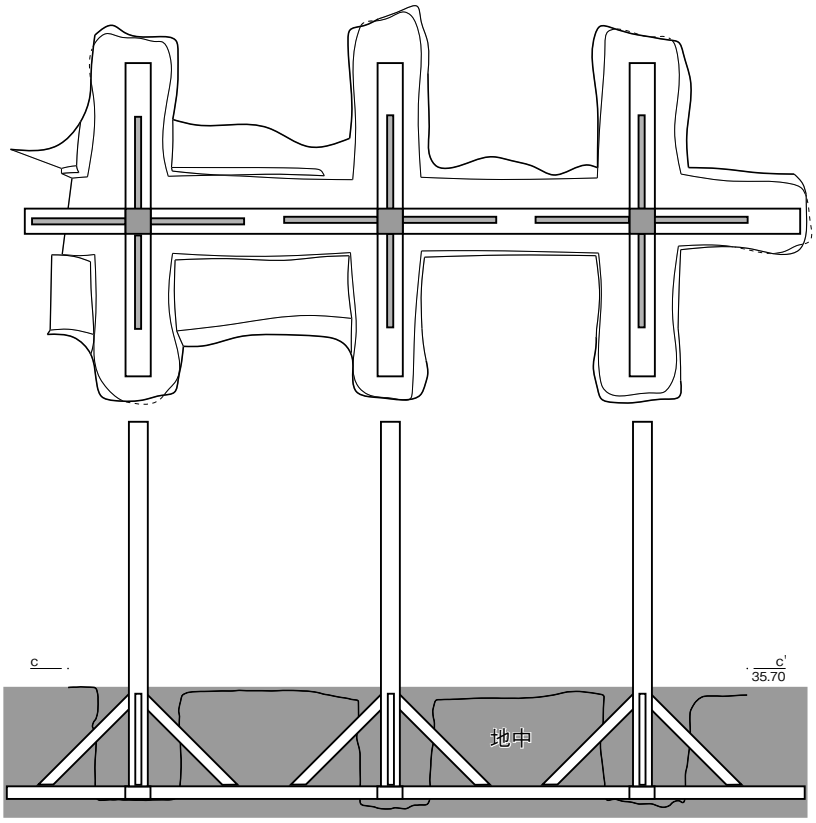
唯一土台木が遺存した騎兵山遺跡事例から方杖を組み合わせた土台構造の可能性を指摘した。方杖構造土台に



V-19 図　腕木門控え柱方杖構造
（渋谷・長尾 1959）



V-20 図　騎兵山遺跡 KT10 復元図



V-21 図　SX1 復元図

ついて『新版 日本建築 下巻』に腕木門控え柱の基礎構造事例として地中方杖土台が紹介されている（渋谷・長尾 1959）。挿図の腕木門は、礎石立ての門柱と掘立柱の枠控え柱が、上下２箇所の飛貫で接続された構造で、枠控え柱の柱穴には、捨て土台石上に十字に組んだ捨て土台木を設置し、その交差部から柱を立て、十字形捨て土台木と枠控え柱を４箇所の方杖で補強する構造を呈し、方杖は土間下に埋設されて設置されている（Ｖ－19 図）。方杖は地下、地上部に関わらず垂直材と水平材の補強材として取り付けられる。双方から等しい力作用を受ける 45°角を成す直角二等辺三角形が最も強度が高い構造といわれる。

KT01・KT10 の臍内側傾斜角に関して報告書に記載はなく詳細は不明であるが、45°を想定した場合、Ｖ－20 図に示したように、地中内に埋設した状態で、２本の柱が地上に直立する上部構造が復元される。

この復元をもとに、遺構確認面下約 90cm に坑底レベルを有す SX1 捨て土台木上に垂直材と連結する地中方杖を想定すると、騎兵山遺跡事例とほぼ同規模の交差部から 80cm を測る方杖構造となり、３本の柱が直線状に並ぶ地上施設が復元できる（Ｖ－21 図）。

十字形方杖基礎構造を主幹部を軸とした一本梯子形とすることによって、基礎の連続性が成立し、単独基礎に対して、柱を通した直線精度、直線耐久性が増強すると考えられる。この様相から、直線状に連続する柱が等間隔に並ぶ地上部構造が復元でき、各柱に方杖が設置されることから、柱の垂直性および自立性の強度を保つための構造であると考えられる。但し SD11 東の４連、KT10 の２連、１区 8-b の３連など、境界施設としての連続性が認められない事例が多く、数連規模を想定した遺構であると考えられる。

また空間の性格、構築位置について整理すると、駒場コミュニケーションプラザ SX1 は、明治 36 年の農科大学建物配置図との対比から、学生宿舎の中庭的空閑地、教育学部総合研究棟地点 SD11 は、大正 12 年の第一高等学校建物配置図との対比から、運動場脇の空閑地、騎兵山遺跡 KT01、KT10 は、明治 40 年の地形図との対比から、騎兵営の運動場と推定される広大な空閑地の脇で建物に隣接する空閑地、尾張徳川家下屋敷跡３区 358・362a・963 号は、大正 12 年の地形図との対比から、戸山学校の南東の一角で、建物群に隣接する空閑地に位置している。また明治 43 年地形図から周囲の建物が体操科であることが確認される。これらの情報から、本類型は、宿舎を含む学校施設や軍事教練（軍人教育）施設の運動場脇、建物脇などの屋外にあり、かつ空閑地の周縁部など居住者の日常導線に隣接した小スペースが選択され、教育、教練を目的とした場所に共通点が求められる。こうした設置場所の特性を前提に、約 200cm 間隔で連続する直線状の柱を有する近代施設としての構造、規模から本遺構は（高）鉄棒の基礎遺構であると考えたい。

おわりに

本稿で扱った基礎遺構は、遺構構造の検討に加え、遺構面、遺構の重複関係、出土遺物などの情報に、地形図、建物配置図にみる調査地の土地履歴を対比させ、おおむね明治末～大正期の鉄棒遺構と推定した。すなわち今から 100 ～ 120 年前に構築された構造物である。現在の鉄棒基礎設置工事は、低中鉄棒の場合、立方体形のコンクリート基礎を地中に設置し、その上に支柱を立てるのが一般的である。高鉄棒の場合、さらに支柱に掛かる斜方向の控え柱が設置されることもある。しかし大正期まで行われていた地中に十字形の土台を設置して、支柱に対して地中方杖を採る工法はすでになく、本工法がコンクリート基礎工法以前の主要な工法であったことが窺われる。大学内の施設は、基本的に毎年度更新される建物配置図によって知ることができるが、建物配置図は上屋を対象として描かれていることから、基礎構造は読み取れない。また建物以外の小施設の表記は限定的で、本遺構を確認することはできない。列島史的にはわずか 100 年前程度のことであるが、現実としてそれすら正確な記録が残っていないことを知る事例である。

近代以降の西洋技術の導入および改良による第二次産業技術は、比較的伝統技術上の系統性を基盤に有すことが多い第一次産業技術と異なり、驚異的なスピードで変化・発展を遂げ、近世以前から継承された伝統的技術とそれを基盤にした折衷仕様のほか、それまでの技術系統上にない新技術の開発・導入によるところが大きい。つい最近のことと思われていた明治後半から大正（もしくは昭和戦前期）の技術のうち“見えない”部分に関しては、記憶、記録もなくすでに忘れ去られてしまった多くの事例があるだろう。近世、近代、現代への技術変化や改革を正しく理解するためにも、“見えない”技術の保存、評価が重要であることを知らされた遺構事例である。

まとめ

これまで行われた駒場Ⅰ構内の調査成果より、構内の遺跡分布は、井の頭線沿いの台地上、すなわちキャンパス東縁部の「駒場池」を中心とする南へ開く谷とキャンパス南側を東流する目黒川の支流に囲まれた舌状台地の傾斜変換点付近に集中し、キャンパス中寄りから北側では確認されていない。本地点は数理科学研究科Ⅱ期棟地点が位置する井の頭線北側の舌状台地から池方向へ開く小支谷を挟んだ北側にあたる。図書館地点は本台地南斜面上に位置している。

今回の調査で確認された近世以前の遺構・遺物は、縄文時代早期の遺構・遺物包含層、旧石器時代遺物集中区である。

縄文時代早期の遺物は台頂部から北斜面への傾斜変換点付近で検出された。その分布状況より、調査区域の北側へ拡がっていることが予想される。検出された遺物は、撚糸文系土器を中心としており、南に位置する数理科学研究科Ⅱ期棟地点の様相とほぼ一致し、本台地において該期における活動の痕跡が追認された。

旧石器時代の遺物集中区は台頂部から南緩斜面にかけて検出され、立川ロームⅤ～Ⅵ層とⅦ～Ⅸ層の２枚の文化層を確認した。最も集中して検出されたG13～14グリッドではⅦ層下部からⅨ層にかけて集中域が認められた。全体的に谷の浸食が始まるⅥ層以前の層位に集中しており、人間行動と環境との関連が注目される。また、駒場Ⅰ構内において立川ロームⅥ層以下からの出土は国際学術交流棟地点以来２例目にあたり、今後同キャンパスの調査においては該期の調査も視野に入れて行う必要性がある。

近代以降では、農科大学（農学部）時代の三田用水から取水したと考えられる木樋溝、鉄棒基礎と推定した一本梯子形遺構。第一高等学校から教養学部時代の学生寮（駒場寮）に伴う昭和10年代から20年代にかけて使用された廃棄遺構など学校・教育施設に関する資料を得ることができ、当時の学生生活の一端を窺い知る資料と評価することができよう。

【引用・参考文献】

加藤建設株式会社　2006『騎兵山遺跡（世田谷区池尻四丁目8番における発掘調査記録』

渋谷五郎・長尾勝馬　1959『新版　日本建築　下巻』学芸出版社

諏訪間順・野口淳・島立桂　2010「第2章 旧石器文化の編年と地域性　4.関東地方南部」『講座 日本の考古学 1 旧石器時代 上』青木書店

東京大学百年史編纂委員会編　1984『東京大学百年史』通史1

東京大学百年史編纂委員会編　1985『東京大学百年史』通史2

東京大学百年史編纂委員会編　1986『東京大学百年史』通史3

東京大学埋蔵文化財調査室 1997「農学部総合研究棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1

東京大学埋蔵文化財調査室　1999「東京大学駒場構内遺跡　大学院数理科学研究科Ⅱ期棟地点　発掘調査報告書」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2

東京大学埋蔵文化財調査室　2002「総合研究棟（文･経･教･社研）地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』3

東京大学埋蔵文化財調査室　2004「国際学術交流棟地点略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5

東京大学埋蔵文化財調査室　2004「駒場コミュニケーションプラザ建設予定地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5

東京大学埋蔵文化財調査室　2008「情報学環･福武ホール地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6

東京大学埋蔵文化財調査室　2011「東京大学駒場構内の遺跡　駒場図書館地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7

東京大学埋蔵文化財調査室　2011「経済学研究科学術交流棟地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7

東京大学埋蔵文化財調査室　2011『東京大学本郷構内の遺跡　教育学部総合研究棟地点　インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2012「東京大学駒場構内の遺跡　駒場情報教育棟地点発掘調査報告書」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8

東京都埋蔵文化財センター　2008『新宿区　尾張徳川家下屋敷跡Ⅴ』

東京都立大学学術研究会編　1961『目黒区史』

原祐一・川口武彦・伊比博和・松崎浩之・春原陽子 2004「東京大学駒場構内遺跡　国際学術交流棟地点（東京都目黒区）」『第10回石器文化研究交流会－発表要旨－』石器文化研究会

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちょうさけんきゅうねんぽう
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報
副書名	
巻次	12
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	成瀬晃司（編）、香取祐一、大貫浩子、小池　聡
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153-8904　東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内　03-5452-5103
発行年月日	2019年12月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
駒場Ⅰ構内の遺跡 駒場コミュニケーションプラザ地点	東京都 目黒区 駒場3丁目 8番1号	13110	1	35° 39′ 37″	139° 41′ 12″	20050422～ 20050721	4327㎡	駒場コミュニケーションプラザ新営に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
駒場Ⅰ構内の遺跡 駒場コミュニケーションプラザ地点	包蔵地	旧石器 縄文早期 近現代	【旧石器時代】 石器ブロック3箇所 【縄文時代】 土坑21基、ピット122基、性格不明（倒木痕含）20基 【近代以降】 塀列1条、基礎遺構3基、上水道1条、溝2条、土坑5基、小穴35基、便槽1基、畝痕　1箇所、性格不明7基	【旧石器時代】 石核、剥片 【縄文時代】 土器、石器 【近代以降】 陶器、磁器、土器、瓦、ガラス製品、骨角製品	立川ロームⅦ～Ⅸ層で小規模石器ブロック2箇所を検出。 撚糸文系包含層とそれに伴う建物遺構を検出。 農科大学時代の三田用水支線、大学関連施設遺構を検出。

要約	【旧石器時代】 立川ロームⅤ～Ⅵ層で1箇所、Ⅶ～Ⅸ層で2箇所小規模石器ブロックを検出し、総計47点の剥片類が出土した。 【縄文時代】 撚糸文系土器包含層を確認し、それにパックされて建物遺構（柱穴群）が検出された。 【近代以降】 農科大学時代の諸施設（三田用水支線、便槽、鉄棒基礎？）と、第一高等学校から教養学部時代にかけての駒場寮に帰属する遺物廃棄遺構を検出した。

紀　要　編

東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 12

加賀藩龍口上屋敷の絵図について

増田晴夫

はじめに

加賀藩は、慶長期に大手前の龍口に屋敷地（現在の千代田区大手町１丁目）を拝領し、明暦３年（1657）の大火で焼失するまで江戸上屋敷としていた。これまで、その姿は「江戸図屏風」と「江戸天下祭図屏風」からしか伺い知ることはできなかった。今回、新たに前田育徳会尊敬閣文庫に龍口上屋敷の絵図が遺されていることが判明した。

明暦の大火以前の大名の江戸屋敷は、指図（平面図）を用いて検討が重ねられてきた[1]。しかし､それは元和･寛永期の御成御殿を中心とした研究に集中していて、大名屋敷全体を対象としたものではなかった。原因のひとつとして、指図に記載される文字情報が少ないことが挙げられる。新たに見出した加賀藩龍口上屋敷の指図は、詳細に書き込みがなされていて、同時期の大名の江戸屋敷との比較を行う際の指標となりうる。また、絵図には建地割図（断面図と立面図を合わせたもの）も含まれ、立体的に江戸屋敷を理解することができる。

本稿は、加賀藩龍口上屋敷の絵図を紹介し、その年代比定を行い、空間構成について若干の考察を行おうとするものである。

1. 龍口上屋敷の沿革

慶長４年（1599）閏３月に前田利家が亡くなると、徳川家康は強引に独裁体制を構築しはじめ、利家の跡をついだ初代利長にも圧力をかけるようになる。両者の関係は悪化するが、利長が実母芳春院を人質として江戸へ送ることで和解に至っている[2]。翌慶長５年５月に芳春院は江戸へ下向するが、まだ屋敷はなく、江戸城内に住まいを与えられていたものとみられる。慶長７年正月、異母弟の２代利常と２代将軍秀忠の長女珠姫の婚姻を謝すために、利長は江戸に赴くが、榊原康政邸に滞在している[3]。

慶長13年（1608）頃の「慶長江戸絵図」（図１）[4]で、大手前の神田橋を南進したところに「松平筑前守」を見出すことができるので、慶長13年前後には龍口上屋敷を拝領していたものとみられる。芳春院もこの頃まで江戸城内で起居している。慶長12年の東福門院（秀忠五女和子）の誕生に立ち会っているほか[5]、翌13年に自身が危篤に陥った際には、秀忠の典医が治療を行い、年寄衆の見舞いも受けている[6]。そして、上屋敷の殿舎が整備されると、芳春院は移徙している[7]。

図１　慶長江戸絵図（部分）

利常は、慶長16年（1611）に藩政の実質的権限を利長から委譲されると[8]、翌17年に新築なった龍口上屋敷への秀忠の御成を計画する[9]。しかし、すぐには実現せず、家康の喪があけた元和３年（1617）５月にようやく秀忠は訪れている。この御成は、秀忠が創始した伝統的な式正御成に茶事を組み込んだ式次第で行われている。

寛永９年（1632）12月13日、利常の嫡男３代光高と３代将軍家光の養女大姫（水戸藩主徳川頼房四女）の縁組が決まる。直後の同月29日、池田光政邸からの出火により、龍口上屋敷は焼失してしまう。幕府は再建費用を光高に下賜していることから[10]、この縁組を機に、光高・大姫夫妻が龍口上屋敷に居住し、利常は本郷下屋敷に移ることになったとみられる。下屋敷には、利常の実母寿福院や二男利次（富山藩初代藩主)･三男利治（大聖寺藩初代藩主）といった子供たちがすでに居住してお

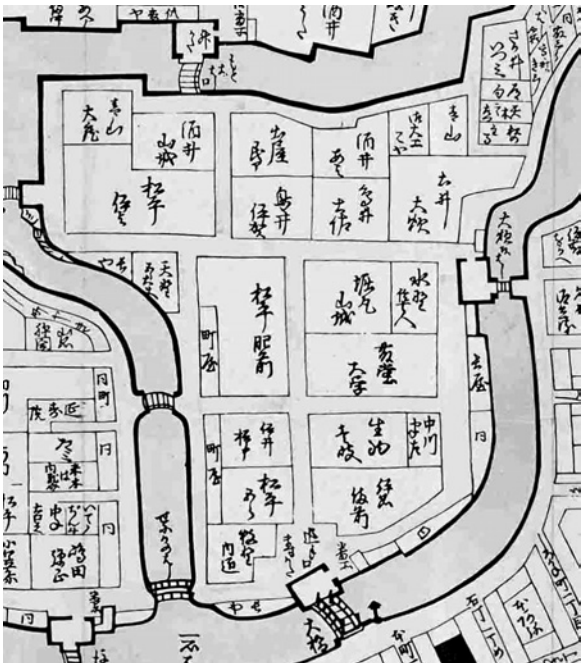


図２　武州豊嶋郡江戸庄図（部分）

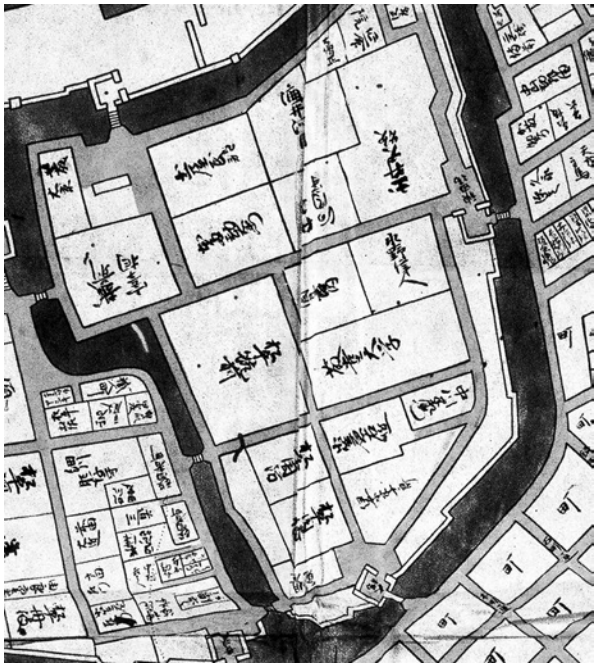


図３　寛永江戸全図（部分）

表１　龍口上屋敷絵図一覧

絵図	表題	景観年代	法量(cm)	図種	作図法	備考
a	江戸龍口御上屋鋪之指図	寛永10年(1633)(推定)	114.1×178.3	指図	貼絵図	ヘラ引き罫線・5分罫。「江戸御絵図」に収められる。
b	龍口御上屋敷絵図	寛永10年(1633)(推定)	72.0×115.8	指図	貼絵図	ヘラ引き罫線・3分罫。
c	辰之口御上屋敷指図	寛永20年(1643)(推定)	107.6×70.2	指図	貼絵図	ヘラ引き罫線・3分罫。
d	江戸龍之口御上屋敷玄関地割	寛永10年(1633)(推定)	195.7×132.0	建地割図	書絵図	「江戸御絵図」に収められる。
e	四脚御門之地割	寛永10年(1633)(推定)	145.3×133.4	建地割図	書絵図	「江戸御絵図」に収められる。
f	四脚御門平之地割	寛永10年(1633)(推定)	132.9×90.7	建地割図	書絵図	「江戸御絵図」に収められる。
g	御成厩之地割	寛永10年(1633)(推定)	136.5×91.9	建地割図	書絵図	「江戸御絵図」に収められる。
h	向屏重門之地割	寛永10年(1633)(推定)	83.6×76.4	建地割図	書絵図	「江戸御絵図」に収められる。
i	薬医門之地割	寛永10年(1633)(推定)	182.7×138.6	建地割図	書絵図	「江戸御絵図」に収められる。

り、さらに寛永６年には秀忠と家光の御成を迎え、殿舎は充実していた。

寛永10年（1633）正月より再建に着手し、２月には隣接する町家地を拝領している[11]。寛永９年頃の「武州豊嶋郡江戸庄図」（図２）[12]では、南側に町家地が隣接しているので、ここを拝領したのであろう。寛永19年頃の「寛永江戸全図」（図３）[13]では、町家地はなくなり、街区全体が上屋敷となっている。そして、寛永10年12月、落成したばかりの龍口上屋敷に大姫が輿入れをしている。

寛永20年（1640）11月に大姫は４代綱紀を出産する。しかし、正保２年（1642）４月に光高が急死してしまう。大姫は悲しみに暮れるも、翌５月に二男万菊丸を出産する。６月には綱紀が家督を継ぐが、幼少のため、祖父の利常が後見に任じられている。光高の死後も、大姫・綱紀・万菊丸の母子は龍口上屋敷で暮らしている[14]。

明暦３年（1657）正月18日から19日にかけて発生した一連の火災、いわゆる明暦の大火は、江戸城本丸をはじめ、江戸市街を焼き尽くす。龍口上屋敷も全焼してしまい、大火以前より進められていた武家地再編によって上地となる。同年５月、筋違橋外にその代替地が与えられた。

２．絵図の年代と伝来

加賀藩龍口上屋敷を描く絵図は、表１に掲げたように、指図３点（ａ～ｃ）と建地割図６点（ｄ～ｉ）が遺されている。このうち、ａとｄ～ｉは「江戸御絵図」に収まる一連の絵図で、ｄ～ｉは指図ａの門や玄関などの建地割を描いている。

９点の絵図には年代を示す注記がない。そのため、指図３点を比較することで、それぞれの前後関係と年代を比定する必要がある。

ａ～ｃ（図４～６）の平面構成はよく似ているので、火災などに罹災せず、同一建物を継続して使用していた時期を描いているものとみられる。３点とも南側に門を

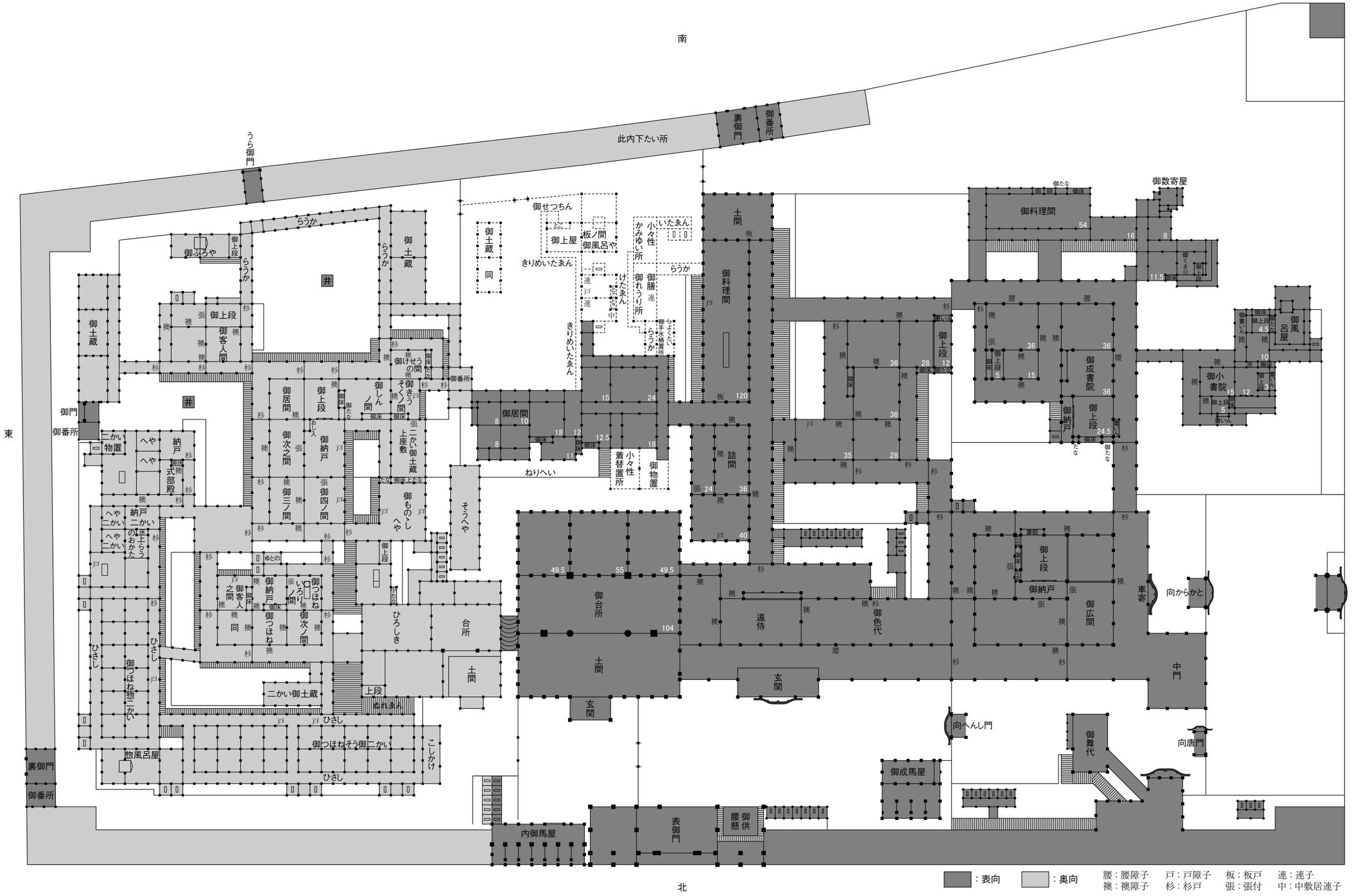


図4　江戸龍口御上屋鋪之指図(a)

図5　龍口御上屋敷絵図(b)

1. 御成御門
2. 車寄
3. 屏重門
4. 中門
5. 御広間
6. 御成書院
7. 御書院
8. 御書院
9. 御風呂屋
10. 御小書院
11. 御数寄屋
12. 御料理之間
13. 御舞台
14. 御料理之間
15. 御居間書院
16. 御居間
17. 御数寄屋
18. 御風呂屋
19. 御門
20. 御色代
21. 玄関
22. 大御台所
23. 唐門
24. 御門
25. 御門
26. 御主殿

図6　辰之口御上屋敷指図(c)

開いているが、これは寛永10年（1633）2月に南側の町家地を拝領したことで可能となった屋敷地の利用方法である。つまり、a～cはいずれも寛永10年以降の龍口上屋敷を描いていることがわかる。

以下、さらに詳しくa～cをみていくことにしたい。

２－１.「江戸龍口御上屋鋪之指図」（a）

「江戸御絵図」には「目録」が添えられ、絵図の内容と伝来の経緯を知ることができる。

覚

一、壱枚　江戸御城御本丸御家指図[15]
一、壱枚　江戸龍口御上屋鋪惣絵図御家指図共
一、壱枚　同所御玄関之地割
一、壱枚　四脚門妻之地割　但、御成御門之由
一、壱枚　同御門之平地割
一、壱枚　御成厩地割
一、壱枚　向塀重門地割
一、壱通　江戸御城御本丸様并三大納言様御舞台御見合被為成候寸尺之目録
一、壱枚　薬医門地割
　　但、此図右御屋鋪表御門ニ可被仰付由ニ而相調候へ共重而二階御門ニ相究申由
一、壱枚　越前宰相殿江戸龍口上屋鋪惣絵図家指図共

右、寛永年号之時分、御建家共之御指図、従微妙院様私親清水九左衛門ニ御渡置被為成候旨ニ而、所持仕候ニ付、若御用ニも可有御座哉と奉存、各様上之申候、以上
丑二月十七日　御大工清水庄左衛門
　長屋平左衛門殿
　富田四郎兵衛殿

右、目録之通之絵図・御舞台之目録、御大工清水庄左衛門方ニ所持仕ニ付、上之申候、以上
　　長屋平左衛門
　　富田四郎兵衛
　多賀新左衛門殿

「江戸御絵図」は、龍口上屋敷を描いた絵図7点のほかに、江戸城本丸指図や越前藩松平忠昌邸（龍口上屋敷）指図、さらに江戸城本丸と三大納言（駿府藩徳川忠長・尾張藩徳川義直・紀州藩徳川頼宣）の江戸屋敷にある舞台の寸法書も含んでいた。

寛永年間（1624～45）に利常（微妙院）が「江戸御絵図」を御大工清水九左衛門に与えている。利常は九左衛門を信頼し、重用している。寛永17年（1640）に隠居により小松城へ移ると、九左衛門も移住させ、小松城奥向や書院の御普請御用主附を命じている。また、参府にも必ず帯同させ、江戸の御普請御用主附にも任じている[16]。

その後、九左衛門の三男庄左衛門[17]が「江戸御絵図」を受け継ぎ、貞享2年（1685）2月には藩からの要請により、作事奉行の長屋平左衛門・富田四郎兵衛[18]に提出している。長屋と富田は綱紀の奥小将である多賀新左衛門[19]に渡している。

aは寛永10年（1633）以降のいつの時期の龍口上屋敷を描いているのだろうか。

「目録」では、「薬医門地割」について「此図右御屋鋪表御門ニ可被仰付由ニ而、相調候へ共、重而二階御門ニ相究申由」と記している。「薬医門」は表門として計画されるも、最終的に櫓門形式が採用されたため、実現には至らなかったという。つまり、「江戸御絵図」所収の龍口上屋敷の絵図は、表門の建設を伴う本格的な作事のために作成されたのである。寛永10年以降では、同10年の再建作事がこれに該当するであろう。

a（図4）の奥御殿に「上らうのおかた」「式部殿」「御つほね」と書き込まれている。寛永10年12月に光高と縁組をした大姫が再建なったばかりの龍口上屋敷に輿入れをしている。その際に、幕府年寄衆は大姫付用人の中川市右衛門に心得書を出している[20]。

一、女房衆上下共、一年二度之外宿へ出候事有へからす、其うへさきも不確所へ参間敷也、わかき衆の事は、上らう・式部・つほね、此三人ねんを入可被申事
一、万事三人の御衆ハ、中川市右衛門相談にて可被申付事

「上らう」「式部」「つほね」は、中川と共に奥向を差配することを求められ、上級の大姫付女中として龍口上屋敷に移っている[21]。この三人が記されていることから、aは大姫の入輿からそれほど経ていないものとみられる。

以上のように、aは、寛永9年の焼失後、同10年に再建された龍口上屋敷を描いていると考えて問題ないだろう。

作図方法について指摘しておきたい。aは貼絵図で、複数色の色紙を貼り交ぜている。その色分けは、表向に青色、奥向に黄色、板敷に茶色、変更箇所（図4の点線

部分）に無染色を用いている。表向と奥向の区分けは、御殿空間だけでなく、敷地境界に建つ表長屋にも及んでいる。表御殿の「御居間」周辺の間取りが変更されている。①居間の北隣りの２部屋、②「小々性着替置所」・「御物置」、③居間の南側、この３か所に加えられている[22]。

また、柱の形と大きさを描き分けている。基本的には角形で描いているが、表御殿の一部に丸形を用いている。これについては後で述べる。表御殿の柱は奥御殿よりも大きく描かれている。さらに表御殿のなかでも、居間より御成書院・広間・色代のほうが大きい。広間をみると、部屋の四隅の柱が他よりも大きく、張付壁に取り付く柱は半分に割ったように表している。おそらく、実際の柱太さをある程度反映しているものとみられる。

２－２.「龍口御上屋敷絵図」（ｂ）

ｂ（図５）が描く時期は、前述したａ（図４）の間取りの変更との関係によって明らかとなる。表御殿の居間周辺が変更されていたが、①居間の北隣りの２部屋と②小々性着替置所・物置の変更前の間取りがｂと一致する。すなわち、ｂはａに先行するのである。しかし、ｂも寛永10年（1633）以降を描いているので、ａより前に作成された再建案であったとみられる。両図の書き込みはほとんど一致し、畳数と建具を記載する点も共通することから、両図が同時期に作成されていた可能性は高い。

計画案であるｂは、なにを検討していたのだろうか。ａとｂで大きく異なるのは、奥御殿の殿舎配置と東側の屋敷地形状である。「おへや」（ａでは式部殿）のある殿舎が、ａではＬ字型に折れる長局の南端にあるが、ｂでは奥御殿の中心殿舎と長局を繋ぐように配されている。ｂの長局はより東に位置することになり、それに合わせて敷地も北東方向に拡張している。絵図上で敷地北辺の長さを計測してみると、ａは約114間、ｂは約124間となっている。ここで思い起こされるのは、「慶長江戸絵図」（図１）では龍口上屋敷の北辺を「百二十三間」と記していることである。記載される数値は信頼性に欠けるものの、ｂが近似値を示していることは指摘しておきたい。いずれにせよ、ｂとａの間に屋敷地が縮小したことは確かである。寛永10年２月に南側の町家地を拝領し、再建案としてｂを作成するが、屋敷地の東側の一部を返上することになり、ａへ計画の変更を余儀なくされたものとみられる。

ｂの裏に貼紙があり、この絵図の来歴を記している。

> 龍口御上屋敷絵図、御大工共又は御大工共子孫之内所持仕候は、可入御覧旨、元禄七年二月五日、於中屋敷以葛巻新蔵被仰出、御作事奉行改田儀兵衛江申渡之、御大工共手前承届候処、清水四郎右衛門親庄左衛門時分ゟ伝来之絵図、同六日儀兵衛差上候処、御表・御奥絵図二枚ニ成有之、一枚ニ写可差上旨被仰出、同八日写出来差上之

元禄７年（1694）２月５日、駒込中屋敷に滞在していた綱紀は、奥小将の葛巻新蔵[23]を介して、御大工家で龍口上屋敷の絵図を所持していないか、内作事奉行の改田儀兵衛[24]に探索を命じている。その結果、御大工清水四郎右衛門がｂを所持していることが判明する。四郎右衛門は「江戸御絵図」を藩に提出した庄左衛門の息子である[25]。もともとｂは表御殿と奥御殿が別々に描かれた２枚組の絵図であった。翌６日に綱紀に差し出すと、１枚にまとめるよう命じられ、８日にその写しを改めて提出している。

２－３.「辰之口御上屋敷指図」（ｃ）

ｃも元禄７年（1694）２月の探索によって見出された絵図である。同月22日、作事奉行の近藤三郎左衛門・林助太夫[26]は、内作事奉行の改田儀兵衛・服部与右衛門[27]にこの絵図を渡していて、発見に至った顛末を記した書状を添えている。

> 当月七日御紙面致拝見候、先年龍口御上屋敷御家廻り御絵図、其元御作事所并御大工共手前ニも有之候哉、可被指上旨、葛巻新蔵を以被仰出候ニ付、御尋候処、清水四郎右衛門手前ニ右御絵図在之、指上候処、御住居違申所も有之、其上御住居替被遊候所も在之ニ付、四郎右衛門指上申絵図、前後之品御尋被遊候へ共、何も覚不申ニ付、爰元御作事所并御大工共手前吟味仕、指上可申旨致承知、相尋候処、渡部故伊兵衛方ニ有之由ニテ、せかれ渡部左兵衛方ゟ出申ニ付、此絵図御住居替之以後之絵図ニ候哉と相尋候へ共、是も前後之儀存不申由申候、御作事所は勿論御大工共手前絵図は無之、御住居之御様子存知申者無御座候、右絵図今般上之申候、以上
>
> 二月廿二日　近藤三郎左衛門
>
> 　　林助太夫
>
> 改田儀兵衛様
>
> 服部与右衛門様

２月６日、綱紀は清水四郎右衛門所持の絵図（ｂ）を見たところ、自身が記憶する龍口上屋敷と異なる部分があるので、いつの時期を描いているのかと問いただすが、

四郎右衛門はなにも知らなかった。そこで、翌７日に作事奉行に作成時期の解明を命じている。

作事奉行内で検討をはじめると、御大工渡部左兵衛がｃを所持していることが明らかとなる。ただ、左兵衛もｃの作成時期を把握しておらず、作事奉行内でこのほかに絵図を所持する者や事情を知る者もいなかった。元禄７年当時、すでに龍口上屋敷に関する情報はかなり失われていたことがわかる。

ｃの作成時期について考えてみたい。所持していた渡部左兵衛の祖父伊右衛門も御大工をつとめ、次のような経歴をもつ[28]。

同（寛永：筆者注）二十年、江戸大書院・御居間御作事相勤

寛永20年（1643）に、伊右衛門は江戸で「大書院」「御居間」の作事に従事している。江戸とあるので、この作事は龍口上屋敷か本郷下屋敷のどちらかで行われたものであろう。

また、寛永20年６月11日に、江戸詰の今枝直恒が金沢の執政職（前田貞里・前田好広・奥村易英・奥村栄政・横山康玄・神谷長治）に光高の帰国予定を報告している[29]。

筑前守様、弥明十二日、江戸可被成御発足旨被仰出候、朝御新屋敷御出立之御振舞被仰付候、定而暮鴻巣へ可被成御着候、為御得以早飛脚申入候

翌12日に光高（筑前守）は江戸を出発するが、その朝に「御新屋敷」で出立の饗応を行い、夜には鴻巣に到着する予定であるという。光高は龍口上屋敷を居屋敷としていたので、新屋敷は龍口上屋敷を指しているとみられ、新たに建設行為があったことが窺える。

寛永20年に渡部伊右衛門が従事したのは、龍口上屋敷の新屋敷の作事ではないだろうか。伊右衛門が携わった大書院は儀礼や応接に用いられるとされ、このことは新屋敷で饗応が行われたことと符合する。

絵図においても、ａ（図４）とｃ（図６）は表御殿に違いがみられる。御成書院の南西に建ちならぶ、書院（ａでは小書院）・風呂・小書院・鎖の間[30]・数寄屋・料理之間は、間取りもそれぞれの繋がり方も変化している。また、ａの広間は舞台を設けているが、ｃは広間ではなく、御成書院の東隣りの書院に舞台を置いている。両舞台の関係は詳らかにできないが、広間前の舞台を書院前に移築した可能性も否定できない。さらに、ｃでは敷地西側の南寄りに新たに御成門を開き、御成書院がある区画に屋敷外から直接入ることができる。

伊右衛門は居間の作事にも関わったとされる。両図の居間まわりに大きな変化はみられないが、ｃでは居間書院から風呂につながる縁廊下に数寄屋が新設されている。

以上により、ｃは寛永20年（1643）の龍口上屋敷を描いたものとみられる。ａとの比較から、寛永20年には改築作事がおこなわれ、渡部伊右衛門がそこに従事していたため、渡部家にこの絵図が遺っていたのではなかろうか。

ｃの書き込みは２種類あり、料紙に直接記載したもの（図６のアラビア数字）と付箋を貼り付けたもの（図６のゴシック体）がある。付箋のなかに、「此所高山勘兵衛以下御広敷附之者共罷有候、委細ニは相知不申候」とある。高山勘兵衛元道は明暦２年（1656）まで大姫付役人をつとめている[31]。また、大台所の付箋には具体的な使用実態が記されている。付箋には龍口上屋敷に勤務する藩士から聞き取った情報が記されているとみられ、料紙の書き込みよりも後の情報と考えられる。

貞享２年（1685）と元禄７年（1694）に龍口上屋敷の絵図の探索が行われ、御大工の清水家と渡部家が所持していることが判明し、両家は絵図を藩に納めている。特に、元禄７年に綱紀が主体的に調べている様子が垣間見れた。綱紀は愛書家として知られ、学事業績の最たるものとして図書の収集が挙げられる[32]。良書を求めて、全国に書物調奉行を派遣し、和書・漢書・蘭書・絵巻物・古書翰などを数十万点収集している。龍口上屋敷の絵図も、この収集事業の対象の１つであったとみられる。

３．龍口上屋敷の空間構成

ここからは、寛永10年（1633）に再建された龍口上屋敷の空間構成について見ていきたい。ａとｄ～ｉを中心に言及していくが、ａに書き込みがない場合や、寛永20年（1643）に改築された部分に関してはｃを参照する。

北側に表門を、西側に御成門を開いている。また、南側と東側の表長屋には裏門を設けている。裏門と隣接する番所は表向に区分され、屋敷への出入りを表向が管理していることがわかる。さらにｃの北側の表長屋は「広敷方之門」を開いており、寛永20年には奥御殿用の門が新設されている。ａは備えていないので、寛永10年時は表門から奥御殿に入っていた可能性が考えられる。

敷地境界に表長屋が建ちならぶ。ただ、御成書院を中

心とした御成御殿に面している西側と南側の一部には塀が建つ。四隅は表長屋より奥行が深いが、これはｃに記載されるように隅櫓が建っていたのであろう。南側の表長屋に「此内下たい所」とあり、表長屋を下台所として使用している。下台所は御殿空間に設けるべき殿舎であるが、表長屋を用いざるをえない状況からは、屋敷地が手狭であることを物語っていよう。ｃの東側の表長屋にも「△是ゟ合紋之処迄長局」とあり、奥御殿の長局に収容しきれなかったのか、やはり表長屋を長局として使用している。

表門は敷地北辺のほぼ中央に位置している。「寛永江戸図」では名書きの頭が表門の位置を指しているとされるが、龍口上屋敷の「松平筑前」は北辺中央に頭を向けている（図３参照）。

最終的に表門には櫓門を採用するが、当初「薬医門」を検討していたことはすでに述べた。ｉ（図７）はこの「薬医門」の建地割を描いている。奥行の柱間が２間であるので、いわゆる薬医門形式ではない。また、ａの表門は間口７間・奥行３間であり、両図の奥行の柱間は一致していない。しかし、中央３間の柱列は維持され、両脇の室内に柱が独立して建つことから、間口７間・奥行２間が基本となる構造であり、その両脇に奥行１間分を付加したものと推測される。ｉの柱間は等間隔であるので、この基本構造である後側２間分を描いているとみられる。獅子の持送が付く桁の木口は、反対側の桁よりも成が高いので、道路に面する表側と考えられる。豊かな装飾が施されているが、出組組物を境に装飾文様のテーマが異なる。組物間の彫刻や、柱や梁などの錺金具には、牡丹唐草文様を用いている。一方、妻飾りや破風板には渦と波の文様を用いている。妻飾りはさらに雲龍や小鬼が彫刻され、破風板の拝に家紋の梅鉢紋を配している。

慶長13年（1608）頃に成立した木割書『匠明』「門記集」[33]は、様々な門の形式を採録している。ａの表門はその平面形から平棟門に分類することができる。また、平棟門は切妻造・出組組物・二重虹梁の妻飾りを用いるとしており、これらの特徴はｉとよく符合している。形と名称が一致しないものの[34]、この「薬医門」は平棟門を描いている。ちなみに、ｃの表門は「門記集」の櫓門と柱の並びがよく似ているので、最終的に採用された櫓門を描いているとみられる。

当該期の紀州藩竹橋上屋敷と越前藩龍口上屋敷の指図を見ると、表門は平棟門である。「大広間雛形并覚書」（以下「覚書」と略す）[35]は、元和・寛永期の大名の江戸屋敷について記していて、両藩に代表される御三家と譜代は表門に「大棟門」を、外様は「二階櫓門」を用いたという。「大棟門」が平棟門をさしている。寛永10年（1633）の再建時に、加賀藩は、外様が用いていた櫓門ではなく、御三家や譜代が用いていた平棟門を検討していたことがわかる。

敷地西辺の北寄りに御成門を開く。ｅ（図８）とｆ（図９）はその妻側と平側の建地割を描いている。御成門は、切妻造の四脚門で、前後に軒唐破風を付ける。ａの控柱は角形で描かれているが、ｅとｆでは粽をもつ丸柱である。柱上に台輪を渡し、その上に出組組物がのる。妻飾りは二重虹梁蟇股としている。頭貫・腰長押・冠木・控柱・唐破風の破風板に「あふきなし」とあるが、その意味するところは不明である。

御成門を入ると、折れ中門付きの広間がある。妻側の唐破風を付した車寄が御成門と正対する。両者は塀で隔てられ、その間に向唐門（「向からかと」）を開く。広間の上段は、床・棚・付書院・帳台構を備え、さらに２部屋が折れ曲がって続く。部屋境に複線が引かれているので、床の高さが一段ずつ低くなっていたとみられる。庭には舞台・橋懸・鏡の間を設け、鏡の間は軒唐破風を付ける。この庭は中門からのびる塀によって御成門前と隔てられている。ここに「向唐門」が開くが、妻側に唐破風が見えるように表現されているので、平唐門の誤りであろう。

御成書院は廊下を挟んで東西に上段を構える。西側の上段は、床・棚・付書院・帳台構が揃い、部屋も広いことから、御成書院の主室とみられる。

御成書院の周囲には、鎖の間（「御くさり」）・数寄屋・料理之間・風呂が置かれ、東隣りに書院（図６の７）がつづく。これら御成書院を中心とした殿舎はいずれも柱が丸形で描かれている。ただ、建具に襖や腰障子、杉戸といった遣戸を用いているので、角柱建ての殿舎とみられ、丸柱を表現したものではないだろう。

越前藩龍口上屋敷も、御成書院のほかに、黒書院を構えていて、その柱を丸形で描いている。内藤昌は面皮柱を用いた数寄屋造の様式を意味すると推測している[36]。ａにおいても、障壁画や蒔絵で煌びやかに飾られた広間[37]に対して、装飾性の抑えた殿舎を意味しているとみられる。

ｃでは、この書院の柱は角形で描かれ、その前に舞台が置かれ、「御上段」が「上段」に替わっていることから、書院の機能が変化したと考えられる。寛永10年（1633）の再建時には将軍御成に供される殿舎であったが、寛永20年の改築作事によって、加賀藩のための儀礼空間となったとみられる。渡部伊右衛門はこの作事に携わっていて、おそらくこの書院を「大書院」と呼んでいると思

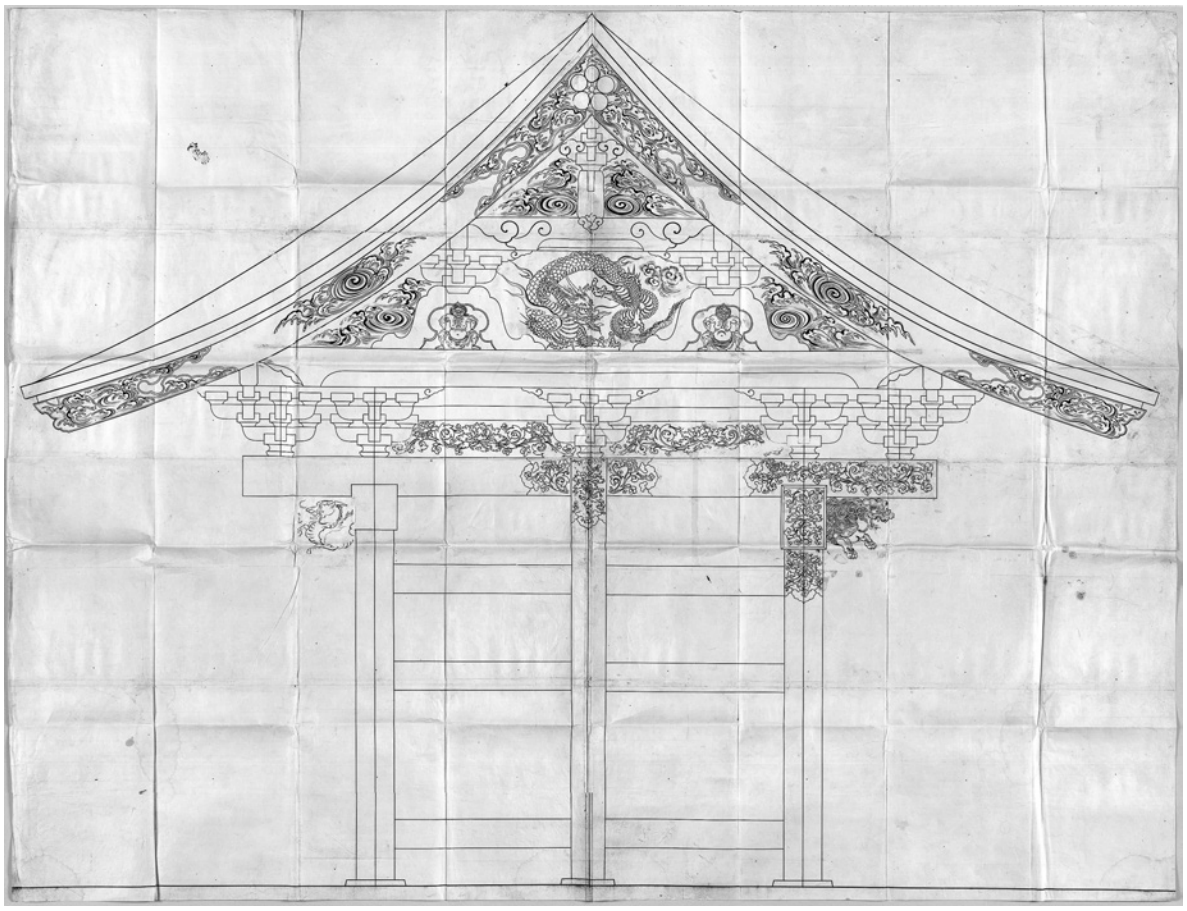


図７　薬医門之地割（ｉ）

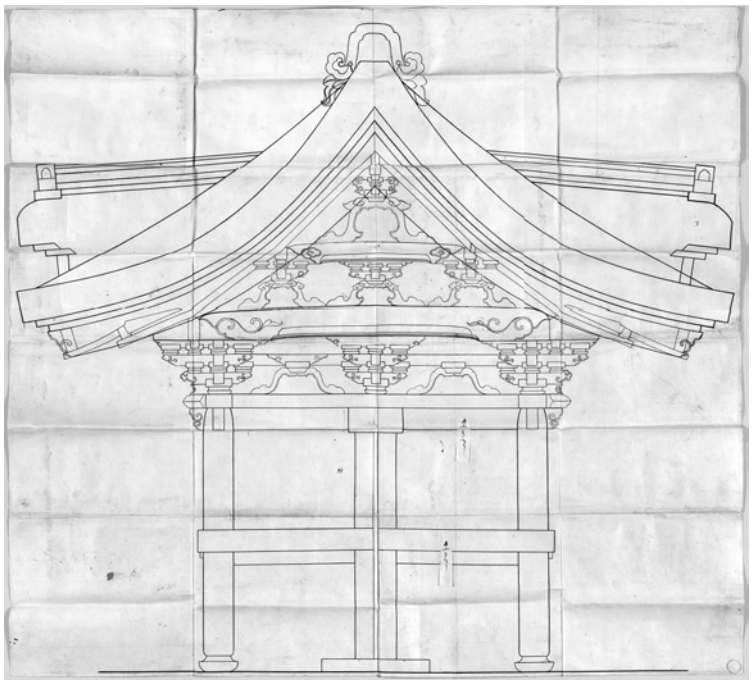


図８　四脚御門之地割（ｅ）

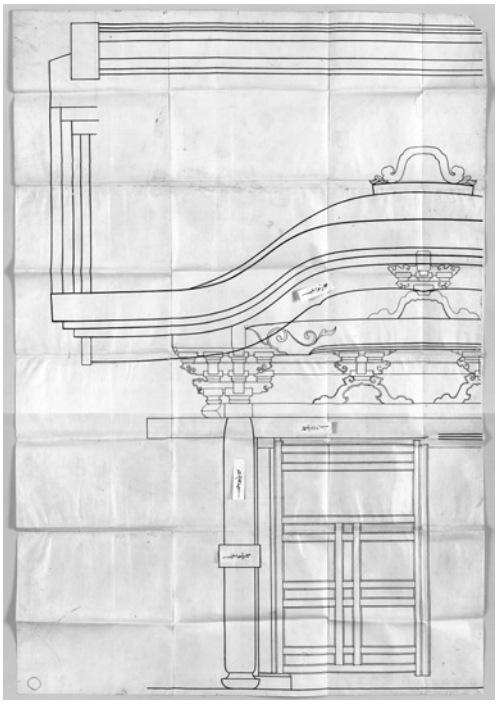


図９　四脚御門平之地割（ｆ）

われる。大書院と舞台を組み合わせた儀礼空間は17世紀後半には確立するが、その萌芽をみることができ、御成御殿の一部を転用する形で出現している。

居間書院（図６の15）と居間が光高の居所である。御成御殿には料理之間を２か所に設けるので[38]、居間書院の隣りの料理之間は御成関連の施設となるが、居間書院との間に御膳御料理所を置いているので、日常的に光高へも食事を提供していたと考えられる。

ｄ（図10）は式台と遠侍の玄関を描いている。玄関は、間口３間・奥行１間・入母屋造で、中央間に軒唐破風を付し、桟唐戸をたてる。柱はいずれも面取りがなされ、中央間は礎盤の上に建つが、両端は掘立柱となっている。組物は出三斗である。桟唐戸・楣上の小壁・唐破風・妻飾りは、松皮菱格子で飾られ、その格間に花菱を入れる。さらに楣上の小壁には屈輪文が、そのほかには三つ蝶紋が配されている。脇間は、頭貫上に牡丹唐草、下に菊唐草の彫刻が入る。

文字情報は樹種と色彩について記している。桟唐戸には「木色」「けや木、地板合、木色」「何も木いろ」とあり、欅の素木を用いている。楣上の小壁には「けや木ノ木地、はな有、但、両めん、かうしふち御座候」「木色」「はななし、けや木、こうしまつかわ如此候」とあり、欅の素木で作られた欄間が嵌め込まれている。ただ、花菱の有無については矛盾した記述となっている。脇間の小壁には「うらおもて木いろ、但、両面かうしふち有、くろぬり」とあり、彫刻は素木であるが、欄間縁は黒漆で塗られている。軒より下は素木を基調とし、木地が露出していることがわかる。

一方、妻飾りには「惣金とひ入も此ことく御座候、はなも如此」とあり、全体に金箔を押している。また、前包には「しんのかた地、ぬり物路色」とあり、蝋色の本堅地仕上げがなされている。妻飾りは金箔と黒漆のコントラストが鮮やかであっただろう。

表門の脇に御成厩がある。ｇ（図11）はその妻側を描いているが、柱間数がａと一致しない。御成厩は、間口５間・奥行５間（ａは４間）・切妻造で、組物に舟肘木を、妻飾りに叉首を用いている。南側２間は礎石建ちで床が張られ、北側３間は土台のまわる土間である。内法長押より上の小壁には「ほり物ニ可仕候」とあり、欄間彫刻を嵌め込む。また、眉を欠いた虹梁には「ほたんから草」とあり、牡丹唐草が彫り込まれている。破風板にも「梅はちから草」とあり、唐草に梅鉢紋を配した模様を彫り込んでいる。梅鉢紋の使用をここでも確認することができる。

玄関前は塀によって広間前から仕切られている。ｈ（図12）はその塀に開く向屏重門を描いている。本柱は角柱で面取りがなされ、掘立柱となっている。柱上に組物は置かず、唐破風造屋根がのる。

表御殿と奥御殿の台所を繋ぐ廊下には複数の曲線が引かれている。ｂ（図５）に「此下ニ通有」とあるので、おそらく湾曲した弓なり状の廊下で下を潜り抜けることができたものとみられる。

表御殿の居間から番所をはさんで、奥御殿の中心殿舎につづく。大姫の居所である。ｃはこの殿舎を「御主殿」と記している。将軍の息女が三位以上の大名と婚姻を結ぶと、その姫君や住まいを御守殿と称すようになる。これは、将軍の息女にふさわしい住居として武家建築の主殿を建て、その住居の主人を御守殿と敬称したことにはじまるとされている[39]。家光の養女である大姫の居所を「御主殿」と称していることは、まさにこの由来と軌を一にしており、御守殿という格式が成立する以前の段階であることがわかる。

奥御殿は玄関や式台を備えていない。そのため、台所の土間を入口としていたとみられる。前述の奥御殿用の門がこの近傍に新設されることからも確かであろう。台所の隣には男性役人が詰める広敷がある。

客間を２か所に設けている。１つは御局の居所の脇に（「御客人之間」）、もう１つは御主殿の廊下伝いに（「御客人間」）ある。奥の客間は、上段につづいているので、大姫との対面に用いられたとみられる。また、ｃはこの殿舎を「地震之間」としている。御主殿に近く、廊下に囲われて独立しており、非常時の避難所としての条件を満たしている[40]。

上級の御付女中である上臈・式部殿・御局の３人は、長局を居所とせず、個別に殿舎が与えられている。ｃでも、式部殿が「御介副」[41]に替わっているが、それぞれ殿舎を宛がわれていることがわかる。その間取りは、床を備える主室・囲炉裏間・次間・納戸を基本とし、上臈と式部殿にはさらに部屋が与えられている。ただし、上臈の居所は独立した殿舎ではない可能性がある。柱の並びが長局と共通しており、また２階建て部分も多いことから、長局の南端部とみることもできる。

奥御殿と明暦２年（1656）に建設された萩藩桜田上屋敷の裏御殿（図13）[42]を比較してみると、平面構成はよく似ていて、２つの客間を設けることや上級の御付女中が個別に居所を宛がわれることなどは共通している。龍口上屋敷の奥御殿は、大姫の居所を御主殿とするものの、基本的には大名の江戸屋敷の奥御殿といえる。一方、御守殿は、表門と表玄関を持ち、内部に表と奥を内包し、完結した一つの御殿として独立している[43]。両者の違

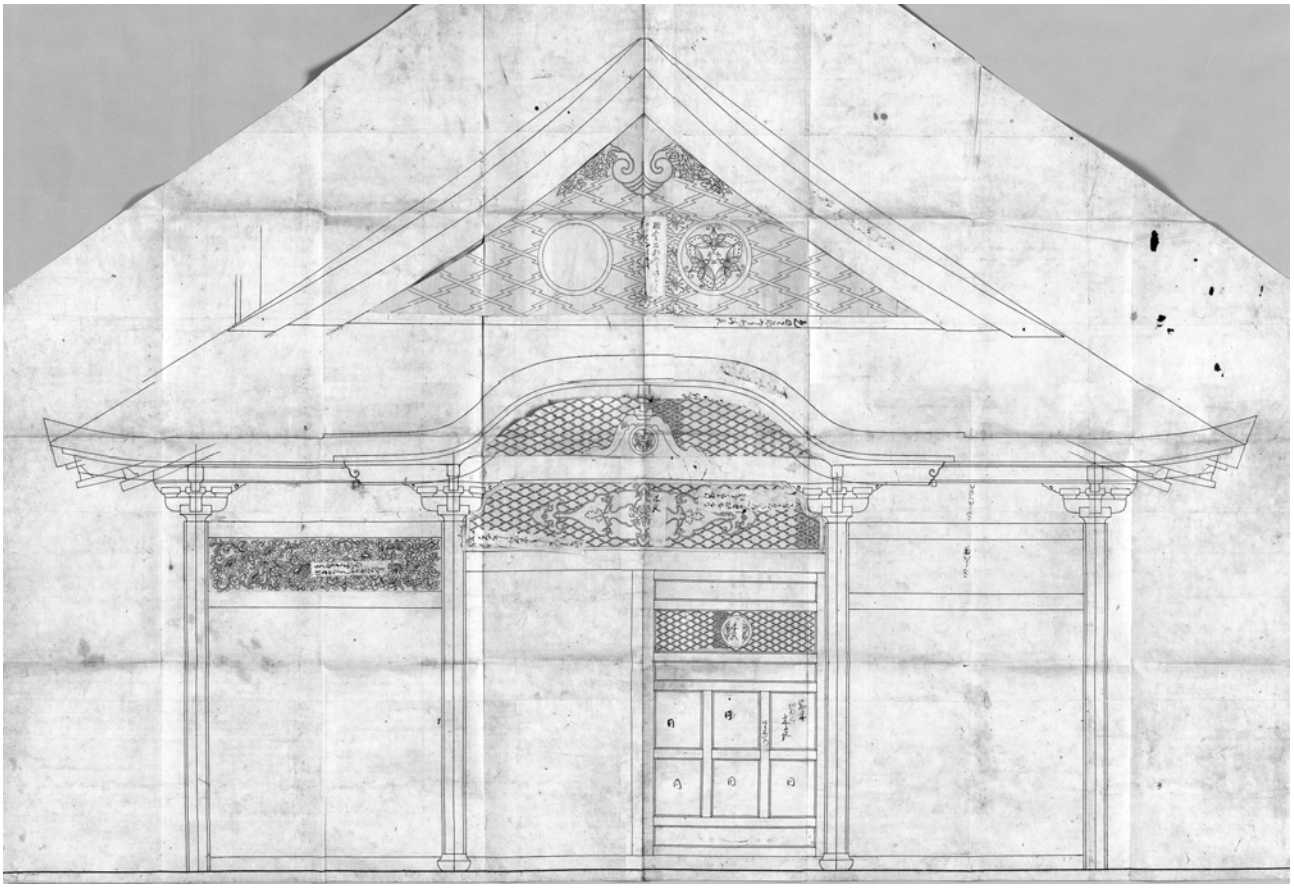


図 10　江戸龍之口御上屋敷玄関地割（d）

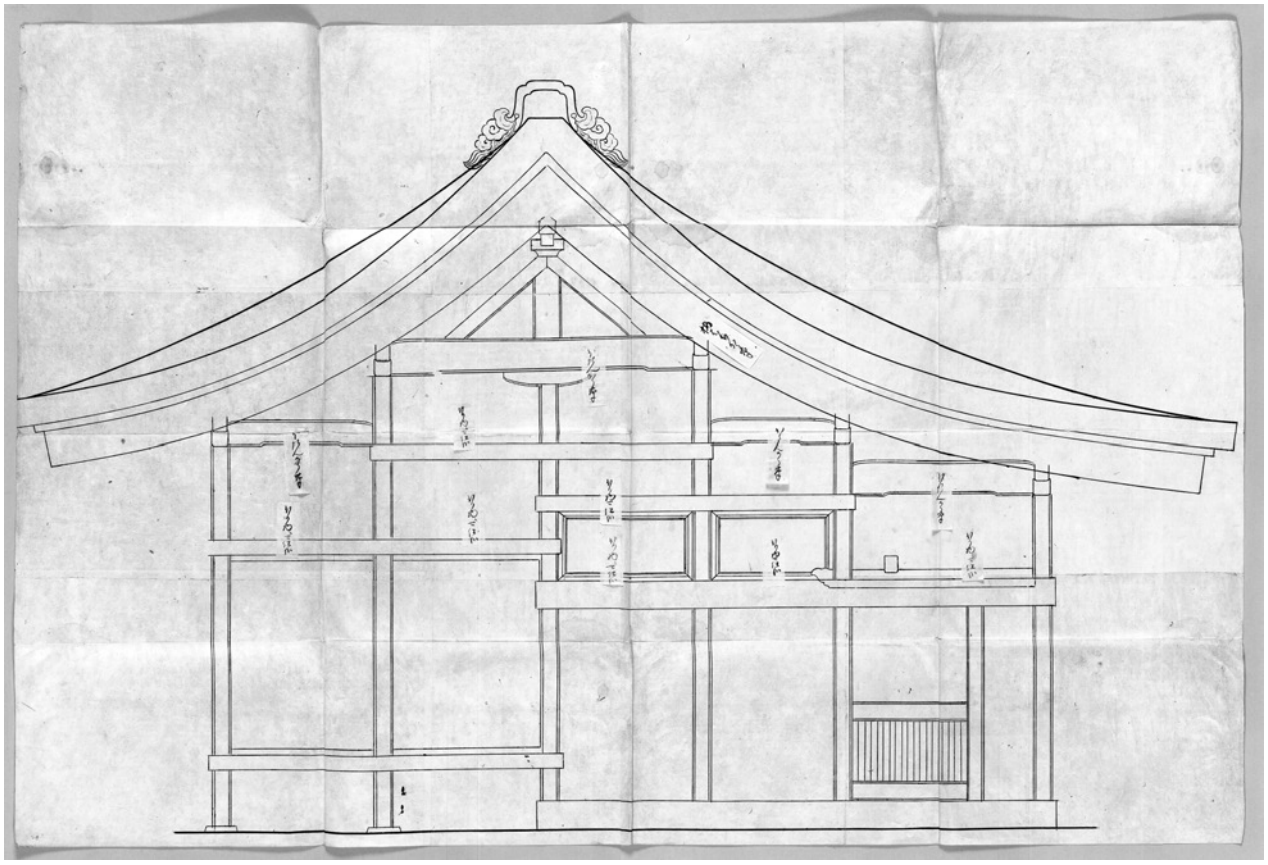


図 11　御成厩之地割（g）

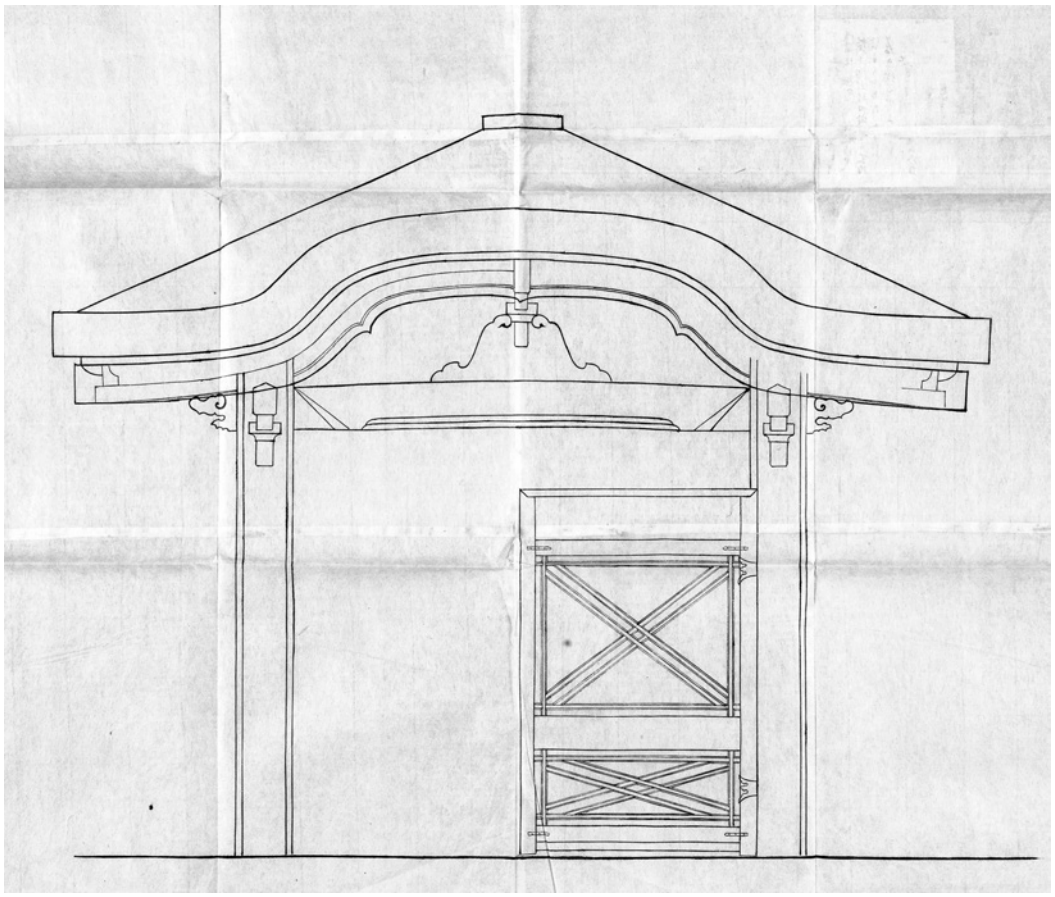


図 12　向屏重門之地割（h）

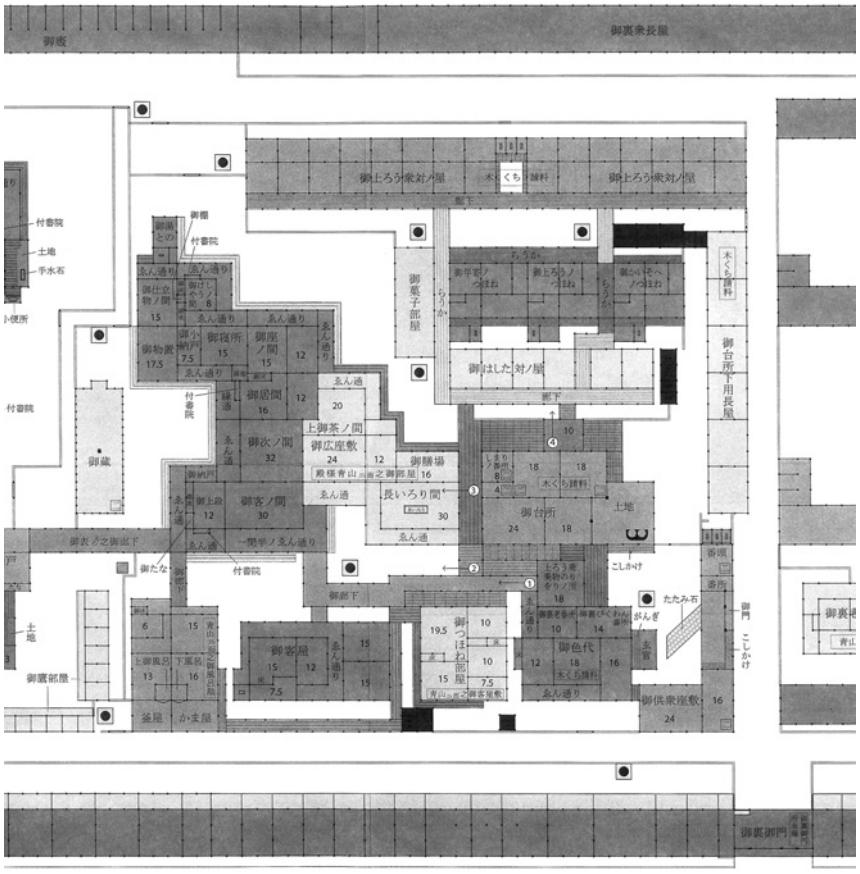


図 13　江戸上御屋敷極リ之惣指図（部分）

いは、入輿後の将軍息女の位置づけが変化したことに起因しているとみられる。大姫は前田家に属することが求められたのに対して、御守殿が格式として整備されると、将軍息女は入輿後も将軍家の人間として、大名家とは異なる立場に位置づけられた[44]。まさにこの違いが、建築として形に現れている。

おわりに

ここまで、前田育徳会尊敬閣文庫所蔵の加賀藩龍口上屋敷の絵図について検討してきた。絵図は寛永10年の再建作事と寛永20年の表御殿の改築作事で作成されたものであった。その後、加賀藩配下の大工家が絵図を保管していたが、貞享・元禄期に綱紀が収集したことで、藩に伝来することとなった。

寛永10年の再建作事では、表門を平棟門にする計画が持ち上がるが、最終的には従来通りの櫓門を採用し、隅櫓も建設している。表御殿には、将軍を迎えるための御成御殿があり、複数の書院を備えていた。再建の竣工にあわせて、家光の養女大姫が輿入れをしたため、奥御殿の中心殿舎を御主殿としたものの、基本的な構成は他大名家と共通している。

寛永20年には表御殿が改築され、御成御殿の一部を転用して、大書院と舞台という儀礼空間が出現している。17世紀後半から表御殿の儀式空間が画一化していくが、その萌芽を見ることができる。

加賀藩龍口上屋敷の絵図の基礎情報は整理できたので、今後に向けて２つの課題を設定したい。１つは、同時期の他藩の江戸屋敷との比較を通して、17世紀前半の江戸屋敷の全体像を把握していきたい。もう１つは、17世紀後半に表御殿の儀式空間を画一化させた要因について解明していきたい。

【註】

（１）紀州藩・越前藩・薩摩藩・萩藩・肥後藩の指図が確認されている。紀州藩は波多野純「「江戸天下祭図屏風」の建築と構想」（『国華』1237、1998）、越前藩は内藤昌『江戸の都市と建築』（『江戸図屏風』別巻、毎日新聞社、1972）、薩摩藩は藤川昌樹「寛永７年島津邸御成における御殿の構成と式次第」（『日本建築学会計画系論文集』539、255-261、2001）、萩藩は後藤久太郎「毛利家江戸上屋敷指図について」（『生活科学研究所研究報告』12、宮城学院女子大学生活科学研究所、1979）、肥後藩は内藤昌『江戸の都市と建築』と北野隆『熊本城』（至文堂、1993）がそれぞれ詳しい。

（２）大西泰正「総論織豊期前田氏権力の形成と展開」『前田利家・利長』（戎光祥出版、2016年）28-36頁。

（３）「象賢紀略」（『御夜話集』上編、石川県図書館協会、1933）82頁。「むすめを遣礼に御越候肥前殿を、寺などやどには、おもひもよらずと被仰候故、さかき原殿に御宿相さだまり候」。

（４）東京都立中央図書館所蔵（A11-1）。天が西である。

（５）瀬戸薫「江戸の芳春院まつ」（『石川自治と教育』石川県自治と教育研究会、2015）19頁。

（６）『増補改訂図録芳春院まつの書状』（前田土佐守家資料館、2017）113頁。

（７）註（６）40頁。

（８）大野充彦「前田利常政権の成立－慶長期加賀藩政の動向－」（『海南史学』高知海南史学会、1982）11頁。

（９）「本多家古文書等」二（金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫、特16.34-58）。『加賀藩史料』2巻（清文堂出版、1970）159頁参照。「来ねんゑとニてすきや御なり成共仕てよく候ハんや、ゑとたやあらたしき内ニと申事候、図書右衛門とたんかう候て、そとうかゝわれてたまわるへく候」。

（10）『加賀藩史料』2巻696頁。「去年十二月廿九日夜火事之節類焼之輩、一、銀子五百貫目、前田筑前守」。引用文は「天寛日記」。

（11）『加賀藩史料』2巻697頁。「松平肥前守父子御前江被為召出、肥前守屋敷並之町屋敷拝領之」。引用文は「天寛日記」。

（12）「武州豊嶋郡江戸庄図」東京都立中央図書館所蔵（A13-3）。黒田日出男『江戸図屏風の謎を解く』（角川学芸出版、2010）によれば、国会図書館所蔵（貴9-23）の絵図が原図とみられるが、当該部分が欠損しているため、原図に近い東京都立中央図書館所蔵（A13-3）を使用した。天が西である。

（13）「寛永江戸全図」臼杵市教育委員会所蔵。天が西である。

（14）「御歴代御書写」二（加越能文庫、特16.17-7）。（年未詳）12月10日付前田綱紀宛前田利常書状写「そこもと、せいたい院様、御無事ニ候や、そのほう、いよくけんこのよし、相聞候、よろこひ申事候、まんきくもそく才ニ成人いたし、はやくよくあるき申候よし、これ又まんそく申事候」。（年未詳）10月20日付前田綱紀宛前田利常書状写「上のやしきまてニ御入候てハ、きうくつニ候へく候間、天気よき折ふしハ、下のやしきへ御出」。

（15）付箋で「此一枚本朝地里図為之内江入之」とある。

（16）「清水家譜」（金沢市立玉川図書館近世史料館清水文庫、特18.6-100）。

（17）註（16）

（18）金沢市立玉川図書館近世史料館編『諸頭系譜』下巻（金沢市立玉川図書館近世史料館、2015）656頁。長屋平左衛門矩忠は延宝５年（1677）から元禄６年（1693）まで、富田四郎兵衛貞景は延宝８年（1680）から貞享４年（1687）まで、作事奉行を務めている。

（19）日置謙編『加能郷土辞彙』（金沢文化協会、1942）504頁。多賀新左衛門直方は寛文６年（1666）に綱紀の奥小将となり、貞享３年（1686）に若年寄に任ぜられている。

（20）「大姫君様并広嶋御前様御婚礼之節御定書之写」（加越能文庫、特16.16-71）。『加賀藩史料』2巻（清文堂出版、1970）722頁参照。

(21)「清泰院様御入輿記」(加越能文庫、特 16.16-73)。入輿時の乗物の順番が「七　御ち式部殿　御とき」「八　おさいの御方さま上臈」「九　御乳人」と記されている。

(22) ①は青色の、②は無染色の色紙を貼り重ねている。③には色紙をはがした糊跡があり、新たに無染色の色紙を貼っている。

(23)註(19)131 頁。葛巻新蔵は綱紀の奥小将で、宝永 7 年(1710)に大野木姓に改めている。

(24) 註（18）662 頁。改田儀兵衛は貞享 3 年（1686）から元禄 10 年（1697）まで内作事奉行である。

(25)「御大工知行帳」(清水文庫、特 18.6-76)。しかし、「清水家譜」は庄左衛門に子供はいなかったと記している。

(26) 註（18）656 頁。近藤三郎左衛門長継は元禄 3 年（1690）から 14 年まで、林助太夫定賢は元禄 6 年から 12 年まで作事奉行である。

(27) 註（18）662 頁。服部与右衛門は延宝 2 年（1674）から元禄 12 年（1699）まで内作事奉行である。

(28)「累代系図」(小松市所蔵渡部家文書、Ⅰ-1）は「惣兵衛」と記している。

(29)「万跡書帳」(加越能文庫、特 16.41-17)。

(30) c に記載はないが、a と同じ間取りであるので、同一の部屋と判断した。

(31)「先祖由緒并一類附帳」(加越能文庫、特 16.31-65、帙 291-5706)。

(32) 若林喜三郎『前田綱紀』(吉川弘文館、1986）145-152 頁。

(33) 伊藤要太郎校訂『匠明』(鹿島出版会、1971)。

(34) i は「門記集」の薬医門とも形が異なる。

(35) 波多野純『江戸城』(Ⅱ武家屋敷、城郭・侍屋敷古図集成、至文堂、1996）252-253 頁。

(36) 内藤昌『江戸の都市と建築』(『江戸図屏風』別巻、毎日新聞社、1972）82 頁。

(37)「清泰院様御入輿記」註（21）に「上屋敷之御作事、異国のきけんしやうハ余茂是ほとにハ有間敷かとの事ニ候、百間四方の御屋敷門・屏・多門屋くら、壱寸も明地なくほり物之金ニて光かゝやき申候、内ハ何も狩野兄弟、壱間四方を金子壱枚絵代ニて書申候、天上・こかへも絵と蒔絵とニて、かなかひハ皆印子ニて御座候事」とある。

(38) 藤川昌樹「寛永 7 年島津邸御成における御殿の構成と式次第」256 頁。註（1）。

(39) 村井益男「御守殿」(『国史大辞典』5 巻、吉川弘文館、1985）780 頁。

(40) 加藤秀幸「城郭殿舎建築における地震屋・地震之間・地震御殿の史的考察」(『歴史地震』13 号、歴史地震研究会、1977）192 頁。

(41) 宮崎勝美「紀尾井町遺跡における大名屋敷の様相とその変遷」(『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書』千代田区紀尾井町遺跡調査会、1988）702 頁。貞享 2 年（1685）に綱吉の長女鶴姫が紀州藩 3 代藩主徳川綱教に入輿している。その時の御付女中に介添という職制があり、上臈につぐ職位であった。

(42)「江戸上御屋敷極リ之惣指図」(『山口県史　史料編　近世 2』付録図 2、2005)。

(43) 氷室史子「大名藩邸における御守殿の構造と機能－綱吉養女松姫を中心に－」(『お茶の水史学』第 49 号、お茶の水女子大学史学科読史会、2005)

(44) 畑尚子『徳川政権下の大奥と奥女中』(岩波書店、2009）86 頁。

東京大学構内遺跡調査研究年報 12
2017・2018 年度

2019 年 12 月 20 日発行

編集・発行　東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場４－６－１
http://www.aru.u-tokyo.ac.jp
印　刷　能登印刷株式会社